二〇一四年「奥の細道」シンクロニティの記録　注

©藪野唯至

［やぶちゃん注：本作は本年（二〇一四年三月二十七日より十月二十五日まで私が自身のブログ「鬼火~日々の迷走」のカテゴリ「松尾芭蕉」で行った、松尾芭蕉の「奥の細道」（現在、正式には「おくのほそ道」と表記するのが正しい書名とされる）の共時的鑑賞の記録である。なお、私の持つＰＤＦ変換ソフトでは幾つかの環境依存文字及びそれに連なる文字列が横転しているが、これ、諧謔と思し召され、御寛恕願いたい。また、長い詞書の改行は私の読み易さという判断で行っている【二〇一四年十一月公開】。］

本日二〇一四年三月二十七日（当年の陰暦では二月二十七日）

　元禄二年二月　七日

はグレゴリオ暦では

　一六八九年三月二十七日

である（この大きなズレはこの年が閏年で一月が二回あったことによる）。

★注：今回より単純な現在の当日の陰暦換算の一致日ではなく、実際の芭蕉の生きたその時日の当該グレゴリオ暦との一致日にシンクロさせることとする。その方が、少なくとも季節の微妙な変化の共時性により正確に近づくことが可能だからと判断したためである。例えば、今年の陰暦二月七日はグレゴリオ暦三月七日で一六八九年三月二十七日とは二十日もズレてしまって、明らかに季節感が違ってくるからである。

　元禄二年仲春、嗒山旅店にて

かげろふの我が肩に立つ紙子哉

［やぶちゃん注：元禄二（一六八九）年、芭蕉四十六歳。同年二月七日の作。

「仲春」は陰暦二月の異名である。「嗒山」は「たふざん」と読む。新潮日本古典集成「芭

蕉句集」の今栄蔵氏の注によれば、大垣の俳人で大垣藩士であったかとし、『その江戸滞在中の旅亭で』曾良や此筋（しきん）らと『巻いた七吟歌仙の発句。真蹟歌仙巻二に「元禄二年仲春七日」と奥書がある。真蹟句切には「冬の紙子いまだ着がへず」と前書』がある、とする（傍線やぶちゃん）。脇句は曾良で、

かげろふの我が肩に立つ紙子哉

　水やはらかに走り行（ゆく）音

である（歌仙を巻いた連衆と脇句は山本健吉「芭蕉全発句」（講談社学術文庫二〇一二年刊行）に拠る）。

「紙子」は「かみこ」と読み（「紙衣」とも書く）、紙子紙（かみこがみ）（厚手の和紙に柿渋を引いて日に乾かしてよく揉み和らげた上で夜露に晒して臭みを抜いたもの）で作った衣服のこと。当初は律宗の僧が着用を始め、後に一般に使用されるようになった。軽くて保温性に優れ、胴着や袖無しの羽織に作ることが多かった。かみぎぬ。特に近世以降は安価ことから貧者の間で用いられた。現在は冬の季語とされるが、本句の場合無論、季詞は「かげろふ」（陽炎）であって春である。

芭蕉は凡そ二月前（六十六日前。冒頭に記した如く、この年は閏一月があった）の当年の歳旦吟として、やはり知られた、

元日は田ごとの日こそ戀しけれ

を詠んでおり、同じくその正月早々に去来に送ったともされる文（この確かな確証はないが）には、

おもしろや今年の春も旅の空

と記し、やはりこの時期に門人に名所の雑の句のあり方を説いた時に示したとされる句には（新潮日本古典集成所収。但し、この句、他では掲げぬものも多い）、

朝夜さを誰まつしまぞ片心

と詠んでもいるとされる（「片心」は片思いの意）。

本句を読んだ八日後の二月十五日附桐葉（熱田門人）宛書簡の中には、

拙者三月節句過早々、松島の朧月見にとおもひ立候。白川・塩竈の櫻、御浦やましかるべく候。

と綴ってもいる（「御浦やましかるべく候」は「お羨ましかるべく候」の意）。

――元日から前年秋の越人との木曽路の旅を思いやっては、その旅心のままに想像の、「田毎月」ならぬ「田毎の初日」の輝きを恋慕い、――去来には俳言もない子供染みた手放しの旅情を知らせ、――遂には掛詞で松島を詠み込んで、あからさまにそのそぞろ神に惹かれるおのが旅心の切ない恋情を歌っては彷徨の先をはっきりと詠み込んでいる。――そこにあるのは「片心」の狂おしいまでの旅に誘われる芭蕉の魂であり、それは遂に芭蕉の身からあくがれ出でて、自身の春立つ旅立ちの日の、その後ろ影に立つ陽炎さえも、幻視するに至るのである。――

……では御一緒に

……芭蕉とともに

……奥の細道の旅へ旅立たんと致そう……」

＊

本日二〇一四年四月二十二日（当年の陰暦では三月二十三日）

元禄二年三月　三日（桃の節句）

はグレゴリオ暦では

一六八九年四月二十二日

である。

★注：前回も述べたが、今回の「奥の細道」のシンクロニティの旅より、単純な現在の当日の陰暦換算の一致日ではなく、実際の芭蕉の生きたその時日の当該グレゴリオ暦との一致日にシンクロさせることとする。その方が、少なくとも季節の微妙な変化の共時性により正確に近づくことが可能だからと判断したためである。例えば、今年の陰暦三月三日はグレゴリオ暦四月二日で陰暦の元禄二年三月三日の桃の節句（＝一六八九年四月二十二日）とは二十日もズレてしまって、明らかに季節感覚が異なってくると考えたからである。――この元禄二年三月三日の桃の節句は恐らく、桃の花どころか桜の花も散った暖かな春の陽に包まれたものであったのであり、それを心のスクリーンの映像に反映してみて初めて、我々は「奥の細道」に旅立つ前の、あの冒頭の漂泊者たる芭蕉の、虚実皮膜の世界に遊ぶことが出来るといえるのではなかろうか――

なお以下、後掲する「奥の細道」の原文は岩波書店一九七七年刊の「芭蕉自筆　奥の細道」（所謂、一九九六年発見された中尾本、芭蕉真筆とされる野坡本）の影印を底本とし、正字を原則とし（略字と正字の判断に迷ったものは正字を採った）、影印に従って改行を行った。踊り字は「ヽ」（現在は片仮名の繰り返し記号）の形の箇所が見られるが「ゝ」で統一した。新発見版であるから、現在知られている素龍木本の本文とは微妙に異なるので注意されたい（その主な異同は後掲した）。これを採用したのは、ただどこにでも転がっている「奥の細道」のテクストを附けるのは私のテクストらしくないというただそれだけの理由からである。なお、私はここでは「奥の細道」の本文評釈をする意図は全く持っていない。どうせ、そんな注釈は腐るほどあるからである。がしかし、人の言っていないしかし

全くオリジナルに言いたいことは、それなりに言い添えておこうとは思う。

＊　＊　＊

草の戸も住替る代ぞひなの家

草の戸も住みかはる世や雛の家

草の戸も住かはる代ぞ雛の家

草の戸も住かはる代は雛の家

［やぶちゃん注：一句目は一般的な「奥の細道」、二句目は「笈日記」、三句目は「蕉翁文集」の句形。四句目は永機本の「奥の細道」に載るものを二ヶ所の「ハ」を平仮名「は」に代えて示した。なお、二句目の句形は前書に、

むすめ持たる人に草庵をゆづりて

という前書を持った真蹟短冊が現存すると、以上の句の基本底本とした中村俊定校注「芭蕉俳句集」（一九七〇年岩波書店刊）注にある。

また山本健吉「芭蕉全句」（講談社学術文庫二〇一二年刊）によれば、「俳諧一葉集」（仏兮／湖中編・文政一〇（一八二七）年刊）には、

日頃住ける庵を相しれる人に譲りて出ぬ。此人なん妻を具しむすめ孫など持（もて）る人なりければ

とあるとし、その前書の出典が詳らかでないことを注記しつつも、『この句の解釈の参考になる』とする。また、今栄蔵校注「芭蕉句集」（新潮日本古典集成昭和五七（一九八二）年刊）には「俳諧世中百韻」（松籟庵麦阿著・元文二（一七三七）年刊）には（一部を恣意的に正字化した）、

遙けき旅の空思ひやるにも、いささかも心に障らん、ものむつかしければ、日頃住みなれける庵を相知れる人に譲りて出でぬ。この人なん、妻を具し娘・孫など持てる人なりければ

という前書があると記された上、『譲受人は平右衛門といった』と譲渡者の名前まで掲げてある。

問題は――通行するこの句の評釈――である。

諸家の一致点は総て『虚構』の一致点にある。

例えば、かの凡評を辛口で掃討する安東次男でさえ、かの「芭蕉」（中央公論社昭和五四（一九七九）年）でこの句を六度以上引きながら、その実、あの他の評釈に見られるようなの快刀乱麻の斬り口が何故か今一つ認められない（と私は思う。但し、流石に人とは違う安東独特の切り口は後掲する）。

そうして諸家は口を揃えて「奥の細道」の「面八句を書て庵の柱に懸置」という叙述を虚構とし、そんな連句は存在しないとする。安東は、この「奥の細道」自体が壮大な架空の百韻の「表八句」ならざる「面八句」の、幻想の発句であった、という。

安東のそれはそれで大いに肯んずる見解ではある。

肯んじはする――がしかし――この句を一つの感懐として確かに読み解いているという風には私には読めないのである。仮定された連句世界の構造主義的位置付けは分かっても、

決して『個』としての本句の独立した核心を突いてはいない――と私は思うのである。

諸家の釈を試みに引いてみよう。まずは新潮の今栄蔵氏のものである（傍線やぶちゃん）。

《引用開始》

人生有為転変、こんな取るに足らぬ庵にも主の住み替る時は来るものだ。新たに住む人は世捨人同然の自分と違って妻子があり、近く来る雛祭には雛壇なぞ飾られて、花やいだ家に変わるだろう。

《引用終了》

とする。同じ新潮古典集成の富山奏校注「芭蕉文集」（昭和五三（一九七八）年刊）で富山氏は、

《引用開始》

こんなささやかな草庵も流転の相から逃れることなく住人が変って、隠者のごとき私の出たあとは、雛人形を飾る娘たちの住居となることであろうよ。

《引用終了》

という『流転の浮生に対する自覚自戒の心が主題の吟』と評し、また、山本健吉は前掲「芭蕉全句」で、

《引用開始》

女気のなかったこの草庵に新しく移り住んだ人は、桃の節句も近いので、雛壇など飾り、にわかに花やかな住居になることだろう

《引用終了》

として、『ささやかなこの草庵にも、人の世の移り変りが認められるとの感慨である』と記す。……

……如何か？

私は――これに類した凡百の解釈を――高校教師時代に数多の評釈書で読んで実は――飽き飽きしている――

のである。

それはこれらの

――これみよがしに「方丈記」や「徒然草」に通底させた辛気臭い如何にもな無常観をこてこてに張り付けた退屈な解釈

が

――この句から生ずる私の心のスクリーンの映像とは全く異なるもの

だからである。

流石にちょっと違ってディグしているなぁと感ずるのは、やっぱり偏屈孤高の屈原みたような安東次男のそれではある（中央公論社一九八九年刊「芭蕉百五十句」。但し、御想像の通り、通釈ではない。やや長いが他者との比較のためにその全文を引く。問題があれば抜粋形式に変更するが、末尾で私のシンクロニティ前提をも偶然にも支持して呉れる形になったそれなれば、故安東氏も許して下さるものとは存ずる。踊り字「ヘ」は正字化した）。

《引用開始》

桃の節供を上巳と呼ぶのは、陰暦三月の初の巳の日、転じて三月三日を、節日とする祓の考が古くから行われてきたからで、曲水もそれを現した宴遊の思付だ。雛まつりは、初は幼児の守り札から起った平安貴族の人形遊が、この上巳の人形流しと習合した民間行事である。三月三日を当てるようになったのは室町時代の末、『増山の井』（寛文三年成）には「天正以後のことか」と云っている。布着せの内裏雛が作られたのは元禄前後、調度がそろえられるのは江戸も中期以後に下る。

句は『ほそ道』の冒頭に「…住る方は人に譲り、杉風が別墅に移るに」から続けて記し、この「人」は「妻を具し、娘、孫など持てる人」（『世中百韻』元文二年刊）だったようだ。華やかな内裏雛がまだ物珍しかったころの句だ、というところが一つの見所になる。

右の由来からもわかるように、雛まつりには流し離・古雛という傍題がある。芭蕉は流浪の門出を、自ら古雛に見立てたらしい。旅の予定を伊賀上野へしらせた手紙に「ことしのたびはやつしやつして、こもかぶるべき心がけにて御坐候」（元禄二年閏正月乃至二月初、猿雖宛）と云っているのも、新居の人の形代となってけがれを持去ってやる覚悟があって

のことだが、『源氏物語』の須磨の巻には、源氏が上巳の祓をさせて「しらざりし大海の原に流れきてひとかた（人形、一方）にやは物は悲しき」と詠むくだりが出てくる。「草の戸も」の句に続く『ほそ道』の書きぶりから見て、これは芭蕉の念頭にあったに違ない。漂泊の旅に出るならまず流し雛になってやろう、流し雛になるなら光源氏の心意気でゆこう、というのが句の云いたいことだ。

芭蕉が、小名木（おなぎ）川をはさんで南側の元木場平野町にあった杉風別宅へ移ったのは、元禄二年二月中か。旅立は三月二十七日である。たまたまこの年は一月に閏が重ったから、三月三日は陽暦に直せば四月二十二日である。

《引用終了》

この評釈は流石に凄い。

雛人形は実は流し雛であり、それが芭蕉自身だ

という誰も言わない真相である。……

……ではあるが、やっぱり私は不服なのである。

……何が不服か？

……それは誰もが

——説教臭い無常観の推量表現や典故の敷衍的有職的故実的分析で満足してそこで立ち去ってしまっているから

——如何にもな凡夫の無常にして所詮は惨めでしかないそうした『知』の遊びでくちくなって読み捨てるばかりだから

である。

ではお前にとってはどうなのか？　と問われれば、

——私にとっては

――この「雛の家」は

――芭蕉の見た（幻視した）確かな景

――虚構的（幻像的）実景

（というトンデモない謂い方が許されるなら）であるということに尽きるのである。

それは中学二年時分（私が教科書で尾崎放哉に出逢って自由律俳句の『層雲』に属したのもその頃ではある）に「奥の細道」を初めて読んで以来、一貫している私の確信である。

即ち――**私がこれを何故、陰暦元禄二年三月三日の桃の節句、グレゴリオ暦一六八九年四月二十二日に合わせて今日、二〇一四年四月二十二日に公開したか**――ということとも強く関わってくることなのである。

それは――「奥の細道」にあるような、これを発句として「面八句を書て庵の柱に懸置」（以下、引用は後掲する自筆本に則る。以下、この注は略す）いたという実景（というものの、これも虚構であることは間違いない。安東も拘っているように、この句を発句とした連句などはどこにも全く残ってなどいないからである。そして私も、そんな連句はもともと存在などしないのだと思っている）などはあり得ず、従ってこの句の時制が万が一どころか劫が一にも陰暦元禄二年三月三日の桃の節句であったことなど、あり得たはずがないという唯物主義的な凡百の批判――などは無論、承知の上での話である。――但し、「承知」というのは私の中の愚直下劣な唯物的で退屈な知性にとってに過ぎない――という謂いである。

即ち私はただ

――**芭蕉は確かにこの句の中で雛人形を見ている**

――**元禄二年三月三日の桃の節句のその日に**

――**最早自らの庵ではなくなったそこに**

――**美しい雛人形が飾られているさまを**

――**現に見ている**

と言いたいのである。

——芭蕉は確かに見ている
——彼の孤独な草庵がみるみる変容して
——そこに雛人形が飾られているのを

——そしてそこに
——透明になった芭蕉は
——誰にも読まれることのない
——この
——草の戸も住替る代ぞ雛の家
——という句を発句とした
——幻しの「面八句」を掛け置いて
——立ち去る

のである。……それは例えば——アンドレイ・タルコフスキイばりのカメラ・ワーク——とでも言えば、少しは分かって戴けるであろうか?……カメラ・ワーク?

いや、エイゼンシュタインやタルコフスキイが強く俳句に惹かれたのは故なしとしない。寧ろ、連句や発句や「奥の細道」といった優れた俳諧紀行の構成はとりもなおさず三百年以上も前に既にして映画理論やその手法を先取りしたものだったからである。

映画はまさに複数のスタッフやキャストによる近代に初めて誕生した稀有の総合芸術とされるのであるが、世にも稀な文芸と言われ、連衆の文学と称される俳諧連歌や連句こそ、まさに複数の作者による創作という総合芸術であった。そうしてその連綿と続いてきた俳諧の構造理論や個別的手法のいちいちは皆——写真の組写真から、かつてはよく実験的に行われた全く異なる複数の監督らによるオムニバス作品、さまざまなエイゼンシュタインのモンタージュ理論、それに反駁してタルコフスキイの立てた「Sculpting in Time」と

いった映画哲学とその詩想――に於いて、全く同一である、と私は思うのである。

優れた俳諧師の感性の生み出した発句や付句が映し出すイメージは、映画の真に鬼才と呼べる人々がスクリーンに映し出した稀有の奇跡のイコンと相同なのである――

最後に言おう。

現実とは厳然たる現象であり、悲哀とも歓喜とも無縁である。

そうして「文学」とはそうした現象としての事実を虚構した幻像である。

そうしてそれは「それ以下」でも「それ以上」でも――ない――。

牛の涎のような感懐にお付き合い戴きありがとう。では以下に「奥の細道」の冒頭を示して終わりと致す。

＊

月日は百代の過客にして行かふ
年も又旅人也舟の上に生涯
をうかへ馬の口とらえて老をむ
かふるものは日々旅にして
旅を栖とす古人も多く旅に
死せるありいつれの年よりか
片雲の風にさそはれて漂泊
のおもひやます海濱にさすらへ
て去年の秋江上の破屋に
蜘の古巣をはらひてやゝ
年も暮春改れは霞の空に
白川の関こえむとそゝろかみ
の物につきてこゝろをくるはせ

道岨神のまねきにあひて取
もの手につかすもゝ引の破を
つゝり、笠の緒付かえて三里に
灸すゆるより松島の月先心
もとなし住る方は人に譲りて
杉風か別墅に移るに
　草の戸も住替る代ぞ雛の家
面八句を書て庵の柱に懸置

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文で、一部に歴史的仮名遣で読みを附した）

○いづれの年よりか　→　●予もいづれの年よりか
○海濱にさすらへて　→　●海濱にさすらへ
○春改（あらたむ）れば霞の空に　→　●春立てる霞の空に
○松島の月先づ心もとなし　→　●松島の月先づ心にかかりて
○面八句を書て庵の柱に懸置　→　●表八句を庵の柱に掛けおく

　決定稿は意味よりも、まず韻律が実にいいことが（表記上のなめらかさを含め）音読するとよく分かる。

■やぶちゃんの呟き

・「江上の破屋」この芭蕉庵は二軒目（新芭蕉庵・第二次芭蕉庵）のもので、下里知足の「知足斎日々記」によれば、住所は『深川元番所、森田惣左衛門屋敷』であった。元番所とは

幕府の船番所のことで一般町民が住めるような場所では実はない。これを探っていったところ、ここに至って小説家鏡川伊一郎氏のブログ「小説の孵化場」の「芭蕉庵の真実」に出逢った。まさにそこ（同「3」）には、この第二次芭蕉庵は先に示した「俳諧一葉集」前書に『日頃住ける庵を相しれる人に譲りて出ぬ。此人なん妻を具しむすめ孫など持る人なりければ』とあるように、『なんと三世代が住める家なのである。三月三日の雛祭りの日に、譲った芭蕉庵の様子を見に行ったら雛飾りがあって華やかであったというのだ』と記しておられるのである（アラビア数字を漢数字に変えさせて戴いた）。ここで鏡川氏は私の解釈にとって頼もしくも、まさに実景として本句をとっておられる、それを実証されておられる点に着目されたい。さらに鏡川氏はこの時の芭蕉庵について二代目市川團十郎の日記「老の楽」から引用して、『深川のばせを庵 竈（へっつい） 二つありて、台所の柱に瓢（ふくべ）を懸けてあり。二升四合ほども入るべき米入也』『翁の佛壇は壁を丸く掘り抜き、内に砂利を敷き、出山の釈迦の像を安置せられし由、まのあたりに見たりと笠翁物がたり』とあるとされ（「老の楽」については引用に際して一部表記を変更して恣意的に正字化した）、以下解説されて、『「出山の釈迦像」というのは難行を終えて山を出る釈迦の像という意味で、その像は門人の文鱗からの贈り物だった。私が注目するのは、それをおさめる造り付けの仏壇のことである』。『壁をくりぬいて作っているわけだが、それほどの厚い壁のある構造物が茅舎のたぐいであるわけがない』という実に目から鱗の解説をなさっておられるのである。そこに今度は飾られてあった雛人形なのである！　その他にも鏡川氏の論（全五回）は芭蕉と芭蕉庵に纏わる意外な真相を語って呉れていて、すこぶる面白い。必読である。

・「道岨神」の「岨」はママ。しかし、いいね、この用字は。「道祖神」なんていう辛気臭い字よりずっといい。「岨」は音「ソ」・訓「そは」「そば」「そばだつ」で「稜（そば）」と同語源の、岩石の積み重なった山、幾重にも岩が重なりあって行く手を阻むさま、山の切り立った嶮しい所・崖・絶壁の謂いである。

・「そゝろかみの物につきてこゝろをくるはせ」の「そぞろ神」だ。不思議な神名だ。諸注、何となく何心なく人の心を旅へと誘う神として芭蕉の造語とする。そうであろう。しかし

如何にも美事な神名ではないか！　ウィトゲンシュタインも言っている。――「神は名指すことは出来るが、示すことは出来ない。」――「そぞろ神」とはまさに、そうした神の名としてコズミックでエターナルな魅力に満ちている！

・「杉風か別墅」仙台堀の海辺橋直近にあった杉山杉風の別邸採茶庵。ここは旧芭蕉庵から直線でたった六百四十メートルほどしか離れていない。即ち、芭蕉庵を明け渡した後、ふらっと桃の節句に訪ねることはいとも容易なことであったのである。

この元禄二年三月三日から二十四日後の元禄二年三月二十七日（グレゴリオ暦一六八九年五月十六日）に芭蕉は奥の細道へと旅立つのである。では――次回は五月十六日に――またお逢い致そう……これよりは芭蕉と曾良の後ろ影を見つめながら……三人目の影として……私はこの旅に出ようと存ずる次第である……」

＊

本日二〇一四年五月　十六日（当年の陰暦では四月十八日）

元禄二年三月二十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月　十六日

である。三百二十五年前のこの日、芭蕉は「奥の細道」の旅に旅立ったのである。

千じゆといふところにて舟をあがれば、前途三千里のおもひ、むねにふさがりて、

幻のちまたに離別のなみだをそゝく

行はるや鳥啼うをの目は泪

行春や鳥啼魚の目は泪

行くはるや鳥は啼うをの目は泪

常陸下向に江戸を出る時、送りの人に

鮎の子の白魚送る別かな

［やぶちゃん注：第一句目は「鳥之道集」（玄梅編・元禄一〇（一六九七）年序）で「奥の細道」「泊船」と相同句形。第二句目は後掲する自筆本「奥の細道」の表記。第三句目は永機本「奥の細道」の句形である。

第四句目は「俳諧　伊達衣」（等躬編・元禄十二年自序）に載る句で、この句は「続猿蓑」「泊船」では、

留別

と前書し、また「赤冊子草稿」（土芳自筆・宝永五（一七〇八）、六年頃）には、

此句松嶋旅立の比送りける人に云出侍れども、位あしく仕かえ侍ると、直に聞えし句也

と記す（「位あしく仕かえ」は、品格が悪くて旅立ちの発句としては釣り合わず差し支えがある、といった謂いであろう）。現在、芭蕉は「旅立ち」の句として作句したこの発句を捨てて、「行はるや」の句に仕立て直したものと考えられている。即ち、知られた「行はるや」の推敲上の原型句と考えてよいものである。

高校生になってすっかり漢詩に入れ込んでしまっていた私は、古文でいざ初めて「奥の細道」のこの句に出逢った際にも――これは陶淵明の「歸田園居」（田園の居に歸る）五首の「其一」の「羈鳥戀舊林　池魚思故淵」（羈鳥　舊林を戀ひ　／　池魚　故淵を思ふ）や、杜甫の「春望」の頷聯「感時花濺涙　恨別鳥驚心」（時に感じては花にも涙を濺ぎ　／　別れを恨んでは鳥にも心を驚かす）の、如何にも出来の悪いインスパイアじゃあないか――ぐらいにしか感じなかったことを思い出す。その頃の私には、どこか滑稽を確信犯とする俳味というものに対して強い反発感があって、それは素朴でしみじみとした感懐をことさらに歪曲したものに過ぎず、おぞましいインポテンツに陥った老醜の猟奇的変態性欲だといったトンデモない印象をさえ持っていたように思われるのである。既に中学二年生で自由律の尾崎放哉に傾倒して『層雲』にも入って、愚にもつかぬ呟きみたようなものを俳句などと思い込んで作っては一人悦に入っていたのだが、それ故にこそ芭蕉を、伝統定型俳句の淵源に厳然として屹立する権化元凶みたようなものとでも錯覚していたのかも知れない（なお、当時、私が典拠と感じたものは今栄蔵氏の「新潮日本古典集成　芭蕉句集」（昭和五七（一九八二）年の本句の注でも発想の典拠として全く同じ二種が掲げられてあって、それを後に知ってちょっと嬉しかった記憶がある）。今はどうかと問われれば、例によって鬼才安東次男が「同時代ライブラリー　古典を読む　おくのほそ道」で解析したように、既に本文で「上野谷中の花の梢」に「花」を示した上は花鳥の取り合わせを避けて、しかも『魚が泣いたというところまで言葉が走』らせられれば、流石に事大主義的な今生の別れという『心の詰りが急にほぐ』されて小気味よい（これは私が既に芭蕉の享年を七つも越してしまった老いの心境にあればこそ留別のあからさまな交感の感懐を嫌うようになっ

たということでもあろう）。特に安東の『「も」ではなく「は」と遣ったところに、句走りと留別の』しみじみと微妙に抑制したところの『留別の俳諧がある』と――今は素直に――感じている。また、安東が指摘するように、「春望」のこの頷聯が古くは「花」「鳥」を主語として読んでいた（これは高校時代の恩師蟹谷先生から授業で教わったのを覚えている。だからこそインスパイアと読めたのである）こと、謡曲「俊寛」にも、

＊

時を感じては。花も涙をそゝぎ。別を恨みては。鳥も心を動かせり。もとよりも此島は。鬼界が島と聞くなれ鬼界が島と聞くなれば。鬼ある処にて今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと此あはれなどか知らざらん。天地を動かし鬼神も感をなすなるも人のあはれなるものを。此島の鳥獣も鳴くは我をとふやらん。

＊

と『裁入れているから、芭蕉もそう呼んだかもしれぬ』とされるのも大いに腑に落ちるのであった。

なお、私は「春望」が安禄山の乱をテーマとし、この「奥の細道」のコーダが「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」であることについて、ある一つの仮説を持っている。それは「奥の細道」が一方で白居易の「長恨歌」の構成に見立てられているのではあるまいかという漠然とした推理なのだが、未だ細部の検証に至っていない。それはそれ、孰れまた。……

最後に初案・原形句である「鮎の子の白魚送る別（わかれ）かな」について述べておくと、今栄蔵氏は前掲書で、『「鮎の子」は旧暦三月ごろ海から産卵のために遡る若鮎。「白魚」はそれより早い二～三月ごろ産卵のために遡る白魚の成魚で、芭蕉自身の老いの姿をなぞらえた謙辞』と注しておられる。

白魚＝シラウオは条鰭綱新鰭亜綱原棘鰭上目キュウリウオ目シラウオ科 Salangidae に分類される魚の総称で、狭義にはその中の一種 *Salangichthys microdon* の和名。時にスズキ目ハゼ亜目ハゼ科ゴビオネルス亜科シロウオ *Leucopsarion petersii* と混同されるので注意が必要（シロウオは正しくは漢字表記で「素魚」と表記し、シラウオ「白魚」とは

区別されるが素人は文字通り、素も白もいっしょくたにしてしまう)。孰れも死ぬと白く濁った体色になって見分けがつきにくくなるが、生体の場合はシロウオ *Leucopsarion petersii* の方には体にわずかに黒い色素細胞があり、幾分、薄い黄味がかかる。主に参照したウイキの「シラウオ」の記載と、シロウオ漁で知られる和歌山県湯浅市公式サイトの「シロウオとシラウオ」のページが分かり易い。その図を見ても判然とするように、シラウオの口は尖っていて、体型が楔形をしていて鋭角的な印象であるのに対し、シロウオやそれに比較して全体が丸味を帯びること、シラウオの浮き袋や内臓がシロウオの内臓ほどにははっきりとは見えないこと、また形態的な大きな違いとして、シラウオには背鰭の後ろに脂びれ(背鰭の後ろにある小さな丸い鰭。この存在によってシラウオガアユ・シシャモ・ワカサギ(総てキュウリウオ目 Osmeriformes)などと近縁であることが分かる)があることが挙げられる。

ともかくも、如何にも拙劣な比喩表現で、実質上の覚悟の旅立ちの句としては芭蕉が言うように「位あしく仕かえ」たる句で、これはまさに芭蕉が「奥の細道」のためにはどうしても存在自体を捨てねばならなかった忌まわしい句という気さえしてくる。凡そ私も個人的には見たくも知りたくもなかった句ではある。こうしたものさえも掘り起こされてしまうことはまさに詩人の不幸とも言うべきものであろう。

以下、「奥の細道」の「旅立ち」の段を見ておこう(取り消し線は抹消を示す)。

弥生も末の七日元祿二とせにや
明ほのゝ空朧々として月は有
あけにて光おさまれる物から富
士の峯かすかに見えて上野谷
中の花の梢又いつかはと心ほそし
むつましきかきりは宵よりつとひて
舟に乗て送る千しゆと云處

にて舟をあかれば前途三
千里のおもひ胸にふさかりて
幻のちまたに離別の涙をそゝく
　行春や鳥啼魚の目は泪
これを矢立の初として猶行道
なをすゝます人々は途中に立
ならひて後かけの見ゆるまてはと
見送なるへし
此のたひ奥羽長途の行脚たゝ
かりそめにおもひたちて呉天に
白髪の恨を重ぬといへとも
耳にふれていまた目に見ぬ境
若生て歸らはと定なき賴
の末を樂て其日漸早加と
云宿にたとりて過ゆ
の肩にかゝれる物先くるしむ
唯身すからにと拵出立侍るを昏子
一衣は夜ル臥爲と云ゆかた雨
具墨筆のたくひあるはさ
りかたき花むけなとしたるは
さすかに打捨かたく日々路頭の
煩となれるこそわりなけれ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文で、一部に歴史的仮名遣で読みを附した）

○弥生も末の七日元祿二とせにや　→　●弥生も末の七日

○此のたひ　→　●ことし元祿二年（ふたとせ）にや

○定なき頼の末を樂て　→　●定めなき頼みの末をかけ

○早加と云宿にたとりて　→　●草加といふ宿にたどり着きにけり。

○唯身すからにと拵出立侍るを　→　●ただ身すがらにと出で立ち侍るを

○帋子一衣は夜ル臥爲と云　→　●紙子一衣（いちえ）は夜（よる）の防ぎ、

○さすかに打捨かたく　→　●さすがにうち捨てがたくて

○日々路頭の　→　●路次（ろし）の

■やぶちゃんの呟き

現在の研究では、この「舟に乗て送る」の部分までは実は曾良は同行していない（このことはよく知られていることとは思われない）。「おくのほそ道　総合データベース　俳聖松尾芭蕉・みちのくの足跡」の「出立日についての論議」によれば（同サイトは非常に優れたものであるがリンクした場合の告知要請をしているので一切リンクしない。以下、この注は略す）、理由は不明ながら、曽良だけが先に三月二十日に深川を立って千住に一週間逗留して芭蕉を待ち、芭蕉は本文通りに同二十七日に杉風の別邸採茶庵を出立、千住で曾良と合流し、そこで同日中に初めて連れ立って旅立ったのであった。……一週間は如何にも怪しい。これは何だ？……」

＊

本日二〇一四年五月　十八日（当年の陰暦では四月二十日）

元禄二年三月二十九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月　十八日

である。「奥の細道」の旅ではこの日、室の屋島へ辿りついている。

室八島（むろのやしま）

糸遊（いとゆふ）に結（むすび）つきたる煙哉

入（いり）かゝる糸ゆふの名殘かな

入かゝる日も程々に春のくれ

鐘つかぬ里は何をか春の暮

入逢（いりあひ）の鐘もきこえず春の暮

［やぶちゃん注：第一句目は曾良自筆の「随行日記」中の「俳諧書留」の句（なお、そこには三月二十九日という日附が附されてある。最終推敲形としての本句の成立が十一日後のことであったことを指すか。因みに三月二十九日には芭蕉は日光の手前の鹿沼に着いている）。第二句目は同じく「随行日記」中の「俳諧書留」の句で、この句を見せ消ちにして第三句目が改稿として示されてある。第四句及び第五句も同じく「随行日記」中の「俳諧書留」の句で、第五句には真蹟懐紙があり、そこには、

田家にはるのくれをわぶ

という前書があるという。句の底本としている中村俊定校注の岩波文庫版「芭蕉俳句集」では第四句目の脚注に、前の「入かゝる」の句の別案かとしており、私もこれら第二句以降の四句総てを第一句目の初期稿と見、ここに並べた。但し、安東次男は「古典を読む　おくのほそ道」ではこの第二句以降の四句を総て次の鹿沼までの途中吟と断じている。

「室八島」は栃木県栃木市惣社町にある大神神社で、名の由来は境内にある池の八つの島を指すということになっているが、これはこじつけっぽい（後述）。

「糸遊」は陽炎のこと。語源は未詳で歴史的仮名遣を「いとゆふ」とするのは平安時代以来の慣用であってその正当か否かは不明である。「糸遊」という漢字表記も、はもともとあった陽炎を意味する和語としての「いとゆふ」若しくは「いとゆう」に、「陽炎」の意の漢語である「遊糸」という熟語を転倒させて当て字にした表記に過ぎない。晩秋の晴天の日、蜘蛛の子が糸を吐きながら空中を飛び、その糸が光に輝いてゆらゆらとゆれて見える現象が原義であって、漢詩に出る漢語の「遊糸」もそれを指すという、と「大辞泉」にはあるが、語の成立史を見る限りでは私は必ずしも肯んずることが出来ない。

第一句や第二句の心象は、

……古人は多く歌枕として詠む際、水気の「煙」とともに「室の八島に立つ煙」と詠じたものだが、いまその実景に接してみると、その煙は、今まさに、暮れゆく春の野に燃える陽炎と縺れ合っては、天に立ち昇って、消え行かんとしているかのように見える……

というニュアンスであろう。この「煙」というのが分かり難いが、安東次男の「古典を読む　おくのほそ道」の「室の八島に話す。同行曾良が曰」の注に、

《引用開始》

下野国の歌枕。栃木市惣社にある大神神社。「いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは」（詞花集・恋、藤原実方）を初見として、勅撰集が二十二首。かなり通俗な

名所である。社前の八島ノ池に立つ水雲を釜（やしま）の煙に豊て、コノハナサクヤビメ伝説に付会したものらしいが、芭蕉たちが尋ねたときの社殿は天和二年（七年前）の再建で（天正十二年に戦火で全焼している）、池の面影なども無かったようだ。

曾良がこの旅に用意した手控（てびかえ）に、「煙カト室ノヤシマヲ見シホドニヤガテモ空ノカスミヌルカナ」「五月雨ニ室ノヤシマヲ見渡セバ煙ハ波ノ上ヨリゾタツ」の二首（共に千載集）を書抜き、脇に「名ノミ也ケリトモ、跡モナキトモ」と注記がある。「人を思ふおもひを何にたとへまし室の八島も名のみなりけり」（続後拾遺集）「跡もなき室の八島の夕けぶり靡くと見しや迷なるらむ」（新拾遺集）後からの書入でなければ、景勝には初からあまり期待を寄せていなかったか。

それにしても旅の最初の歌枕で、俳諧師が句の一つもしるさず、予め知っていたか、もしくは行けば自（おの）ずと知れた程度の縁起ばなしを、わざわざ他人の口から語らせて責塞（せめふさぎ）とした書きぶりは気になる。とりあえず同行（どうぎょう）の人柄の一端を見せて楽みは後日にとっておく紹介の手には違ないが、句を詠む興がなかったわけではない。［やぶちゃん注：後略。］

《引用終了》

として、この後の二句を示しているのが、十分条件を満たす注とは言える。それでも何故、室の八島と「煙」がペアになるかは、今一つ判然としない憾みがあるから、水垣久氏のサイト「やまとうた」の「歌枕紀行　室の八島」から引用しておく。「室の八島」というのは『歌枕の本などをみると、もともと下野国とは何の関係もなく、宮中大炊寮（おおいづかさ）の竈（かまど）のことを言ったらしい。「むろのやしまとは、竈をいふなり。かまをぬりこめたるを室といふ。（中略）釜をばやしまといふなり」（色葉和難集）。つまり、竈＝塗り込めた釜、を宮中の隠語（？）で「室の八島」と謂い、これがいつしか下野の国の八島に付会された、ということである。そうして、この辺りを流れる清水から発する蒸気が「室の八島のけぶり」と見なされた。これを、恋に身を燃やす「けぶり」に喩えて、多くの歌が詠まれたのである』とある。しかし「清水から発する蒸気」なんて当たり前には想起出来ない。さればこの「煙」も、そしてまた芭蕉の句の陽炎と絡む「煙」も、想像上の「煙り」と採った方が無難であ

る。また、以下に掲げた「奥の細道」の同段の記載もその淵源を匂わせてくれている。即ち、大神神社は大物主命を主祭神とするが、配祭神が木花咲耶姫命（このはなさくやひめのみこと）であり、彼女についてはウィキの「コノハナノサクヤビメ」によれば、『日向に降臨した天照大神の孫・ニニギノミコトと、笠沙の岬（宮崎県・鹿児島県内に伝説地）で出逢い求婚される。父のオオヤマツミはそれを喜んで、姉のイワナガヒメと共に差し出したが、ニニギノミコトは醜いイワナガヒメを送り返し、美しいコノハナノサクヤビメとだけ結婚した。オオヤマツミはこれを怒り「私が娘二人を一緒に差し上げたのはイワナガヒメを妻にすれば天津神の御子（ニニギノミコト）の命は岩のように永遠のものとなり、コノハナノサクヤビメを妻にすれば木の花が咲くように繁栄するだろうと誓約を立てたからである。コノハナノサクヤビメだけと結婚すれば、天津神の御子の命は木の花のようにはかなくなるだろう」と告げた。それでその子孫の天皇の寿命も神々ほどは長くないのである』とし、『コノハナノサクヤビメは一夜で身篭るが、ニニギは国津神の子ではないかと疑った。疑いを晴らすため、誓約をして産屋に入り、「天津神であるニニギの本当の子なら何があっても無事に産めるはず」と、産屋に火を放ってその中でホデリ（もしくはホアカリ）・ホスセリ・ホオリ（山幸彦、山稜は宮崎市村角町の高屋神社）の三柱の子を産』み、その『ホオリの孫が初代天皇の神武天皇である』とあること、またよく知られるように永遠に煙を登らせ続ける富士山の本宮浅間大社は彼女を主祭神としているから、まさに火煙（ひけむり）とは縁が深いからである。

第三句・第四句の「春の暮」は入相の鐘の鳴るはずの日暮れである以上に行く春、暮春を意味し、しみじみとした入相の鐘、それを撞かぬ里、それが聴こえぬこの鄙にあって、一体、何を惜春のよすがとすればよいのか、というのであるが、やや陳腐で底が浅い印象は免れない。因みに山本健吉は、「芭蕉全句」で、この二句は「新古今和歌集」の能因法師の和歌、

山里の春のゆふぐれ來てみれば入相の鐘に花ぞ散りける

を踏まえるという説があると紹介、『意識にはあったであろう』と述べている。

にしても、第一句・第二句は古歌歌枕に付会させたものの、実景が今一つ見えてこず、句としてのドゥエンデも私には全く感じられない。安東氏や角川文庫版の頴原退蔵・尾形仂両氏の評釈にある通り、日光への道程をわざわざ三里（約十一・八キロメートル）も遠回りして折角訪れた歌枕であったが、その実際の景観は残念ながら芭蕉が想像していたものとは大きく異なり、期待は美事に裏切られてしまったというのが真相であったように思われる。既にお分かりのことと思うが、芭蕉はこの句を「奥の細道」には採っていない。既に前の「行く春や」の句で惜春の情を詠じた芭蕉にしてみれば、句格も下がる季重ねは不要と判断したものではあろう。

以下、「奥の細道」の「室の屋島」の段を見ておこう。

*

室の八嶋に詣ス曽良か曰此神は
木の花さくや姫の神と申て冨士一
躰也無戸（ウツ）室に入て焼たまふ
ちかひのみ中に火火出見のみこと
うまれ給ひしより室の八嶋と申又煙を
讀習し侍るもこの謂也將このしろと云魚を禁す
縁記の旨世に伝ふ事も侍し

*

■異同

（異同は〇が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文で、一部に歴史的仮名遣で読みを附した）

〇曽良　→　●同行（どうぎやう）曾良

■やぶちゃんの呟き

「將このしろと云魚を禁す」「はた、このしろといふうをきんず」と読む。「將」は、また。「このしろ」は条鰭綱新鰭亜綱ニシン上目ニシン目ニシン亜目ニシン科ドロクイ亜科コノシロ *Konosirus punctatus*。寿司でお馴染みのコハダの成魚である。ここに示された本種の食の禁忌について、私は既に寺島良安の「和漢三才圖會　巻第四十九　魚類　江海有鱗魚」の「𩸽（つなし）」（コノシロ *Konosirus punctatus*）の項で詳述注をものしているので参照されたい（ここに引用するにはあまりに膨大なので省略するが、この「室の八島」のことにも言及しているので是非ともお読み戴きたい）。また、安永七（一七七八）年に刊行された高橋蓑笠庵梨一の「奥の細道」注釈書である「奥細道菅菰抄（おくのほそみちすがごもしょう）」には以下のような「このしろ伝説」が記されてある（「おくのほそ道　総合データベース　俳聖　松尾芭蕉・みちのくの足跡」の「大神神社（室の八島）について」に引用されてあるものを参考に恣意的に正字化した）。

＊

むかし此處に住けるもの、いつくしき娘をもてりけり。國の守これを聞給ひて、此むすめを召に、娘いなみて行ず。父はゝも亦たゞひとりの子なりけるゆへに奉る事をねがはず。とかくするうちに、めしの使數重なり、國の守の怒つよきときこえければ、せむかたなくて、娘は死たりといつはり、鱸魚（ろぎょ）を多く棺に入て、これを燒きぬ。鱸魚を燒く香は、人を燒に似たるゆへなり。それよりして此うをゝ、このしろと名付侍るとぞ。歌に、あづま路のむろの八島にたつけぶりたが子のしろにつなじやくらん。此事十訓抄にか見え侍ると覺ゆ。このしろは、子の代にて、子のかはりと云事也。此魚上つかたにては、つなじと云。

＊

なお、文中の「鱸魚」は条鰭綱棘鰭上目スズキ目スズキ亜目スズキ科スズキ *Lateolabrax japonicas* で全く種が異なり、生物学的には誤った記述である。また、寺島良安の「和漢三才圖會　巻第四十九　魚類　江海有鱗魚」の「𩸽（つなし）」でも述べたが、ここに出るのと同じような各地の伝説に於いてコノシロを焼くと人を焼く臭いがするとするが、全くの誤りである。これは秦の始皇帝の故事を起源とし、始皇帝が真夏の巡行先で死去するも、権力奪取

を画策した宰相李斯（りし）と宦官趙高がそれを秘匿、龍馭の中で腐りゆく始皇帝の遺骸の死臭を誤魔化すために大量の魚を積んだ車を並走させたが、その際に一説にコノシロが用いられたとする、それに基づいた誤伝承である。コノシロ（子の代）と祀るコノハナノサクヤビメの伝説及び「コノ」の類音による共感呪術的禁忌のように私には思われる。

この「奥の細道」の「室の八島」の段は句もなく、特に芭蕉の感懐も記されていないのであるが、ここはまさに「同行」と後から添える、本旅の道連れである門弟河合曾良を紹介し、その碩学ぶりを称揚するためのものであったのだと考えてよい（角川文庫版の潁原・尾形氏の評釈にもそうある）。曽良は、慶安二（一六四九）年に信濃上諏訪生まれで、芭蕉より五歳年下で元禄二（一六八九）年当時は四十歳）二十の頃に伊勢長島に赴き、岩波庄右衛門のと名乗って藩主松平良尚に仕え、その後、伊勢長島藩を出て江戸移り、神主となるため、後に幕府神道方となる吉川惟足（きっかわこれたる）に就いて学び、広汎な国学の知識や各地方の地誌を身につけていたのであった。

ともかくもこの「室の八島」の段自体、「奥の細道」の最初の訪問地であるにも拘わらず発句を示しておらず、まただからこそこの中途半端な博物学的俳文も、作中、極めて例外的に、著しく精彩を欠いているように私には見えるということを最後に述べおく。」

＊

本日二〇一四年五月　十九日（当年の陰暦では四月二十一日）

元禄二年四月　一日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月　十九日

である。「奥の細道」の旅ではこの日、日光へ辿りついた。

あらたうと青葉若葉の日の光

あなたふと木（こ）の下闇（したやみ）も日の光

日光山にて

たふとさや青葉若葉の日のひかり

日光山登臨之時

あらたふと若葉青葉の日の光

日光に詣（けいす）

あらたふと木の下闇も日の光

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」。仮名遣としては、正しくは、

あらたふと青葉若葉の日の光

である。

第二句目は「随行日記」中の「俳諧書留」の、第三句目は「初蟬」（風国編・元禄九（一

六九六）年刊）の、第四句目は「蠟燭（さびかがみ）」（舎羅編・正徳三（一七一三）年刊）の、第五句目は「茂々代草（ももよぐさ）」（其流等編・寛政九（一七九七）年刊）の句形で、この第五句は真蹟が伝存する。

但し、第二句目の「随行日記」中の「俳諧書留」のそれは「室八島」と題して、

糸遊（いとゆふ）に結（むすび）つきたる煙哉
あなたふと木の下闇（こしたやみ）も日の光
入かゝる糸ゆふの名殘かな

［やぶちゃん注：「糸ゆふの名殘かな」を見せ消ちにして次句。］

入かゝる日も程々に春のくれ
鐘つかぬ里は何をか春の暮
入逢（いりあひ）の鐘もきこえず春の暮

と載る。即ち、実は**現在、日光山での名吟として知られる本「あらたうと青葉若葉の日の光」という句の原形は日光ではなく、室の八島で創作されたもの**なのである。これについて安東次男は「古典を読む　おくのほそ道」で、

《引用開始》

「あなたふと木の下闇も日の光」は、通説、日光参詣の句（「青葉若葉」）の初案だとされているが、室の八島で出来たと考えるしかあるまい。木花咲耶姫の弥生尽日（花じまい）なら木下闇だとしゃれている。安産の神様よりも糸遊の方に結びつきたがる風情の「煙」の句と合せて読むと、新しい社の前でいささか出鼻をくじかれた俳諧師の春の限が、なかなか面白く現れる。この祭神とこの日に限って「木下闇」という季語をとくべつに許したくなる句だろう。とはいうものの、これを室の八島の段にしるすほど、大胆には流石（さすが）なれなかったか。上・下句をそのまま、中七文字に出闇の工夫をほどこして、このあとの日光の段に移している。つれて「糸遊（煙）」の句は紀行から捨てられた。書留の残三句は室の

八島ではないということもあったろうが、先に惜春に寄せた留別吟（「行春や」）がある以上、重出になる。

結局、室の八島に筆を尽すことなど、どこから考えても無理があったようだ。「同行曾良が曰」の内容は「…謂也」までと読むべきだろうが、以下の記述も含めてこの段には芭蕉自身の興はまったくしるされていない。『ほそ道』中、異例のことである。

《引用終了》

と述べている。私は先の「室の八島」の最後で、そ『の段自体、「奥の細道」の最初の訪問地であるにも拘わらず発句を示しておらず、まただからこそこの中途半端な博物学的俳文も、作中、極めて例外的に、著しく精彩を欠いているように私には見える』と批判したことに些か内心忸怩たるものを感じていたが、この安東の評を読んで少し安心した。

初案の「木の下闇」では木蔭の闇にさえも神君家康公の恩沢が余すところなく射し入ってあるという寓意があからさまであったものが、決定稿ではその理窟が字背に後退し、鮮やかな緑にハレーションする陽射しという自然の美が美事に浮き出て来て、まことに美しく、しかも素直な神々しさへの感慨が心地よい（但し、あくまで「自然」に対してであって、「日光東照宮」という建物に対してではない。後述）。

以下、「奥の細道」の「日光」の段を手前で宿した（虚構。後述）仏五左衛門の章から「裏見の瀧」の手前までを示しておく。

＊

卅日日光山の麓に泊るあるしの
云けるやう我名を佛五左衛門と云
萬正直を旨とする故に人かくは
申侍まゝ一夜の草の枕も打と
けて休み給へと云いかなる佛の
濁世塵土に示現してかゝる
桑門の乞食順礼こときの人を

たすけ給ふにやとあるぢのなす事に心をとゝめて見るに唯無智無分別にして正直偏固のもの也剛毅木納の仁にちかきたくひ痴愚の淸質尤尊ふへし

卯月朔日御山に詣拜す往昔此御山を二荒山と書しを空海大師開記の時日光と改たまふ千歳未來をさとり給ふにや今此御光一天にかゝやきて恩澤八荒にあふれ四民安堵の栖穩也猶憚多くて筆を指置ぬ

あなたふと青葉若葉の日の光

黑髪山は霞かゝりて雪いまた白し

剃捨て黑髪山に衣更　曽良

同行曽良は河合氏にして惣五郎と云芭蕉の下葉に軒をならへて予か薪水の労をたすく此たひ松嶋象潟の眺共にせむ事をよろこひ且は羈旅の難をいたはり旅立暁髪を剃て墨染にさまをかへて惣五を改て宗悟とす仍て黑髪山の句有衣更の二字力有て

きこゆ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文で、一部に歴史的仮名遣で読みを附した）

○順礼　→　●巡礼
○朴納　→　●朴訥
○智愚　→　●氣稟（きひん）
○あなたふと青葉若葉の日の光　→　●あらたふと青葉若葉の日の光
○同行曾良　→　●曽良
○と云　→　●といへり
○いたはり　→　●いたはらんと
○さまをかへて　→　●さまをかへ

■やぶちゃんの呟き

「卅日」は虚構。元禄二（一六八九）年三月は小の月で二十九日で終わりで、「卅日」はなかった。但し、これについては潁原・尾形の角川文庫の評釈に、『実際は二十九日であっても「卅日」の字を宛てた例は他にもある』とあり、この日附自体は大きなフィクションとは言えない。しかし問題は他にある。事実は彼らがこの「佛五左衞門」なる人物の宿に泊まったのは曾良の随行日記によって四月一日の夜で、しかも実はそれはその後に書かれている日光参拝と同日であり、芭蕉は時系列を恣意的に入れ替えているのである。

私は若い時からずっと、この「佛五左衞門」の章が気になっていた。潁原・尾形（その他の諸家も）は角川文庫の評釈で、

《引用開始》

その前夜の記事の中で、「いかなる仏の濁世塵土に示現して」といっているのは、仏五左

衛門の名に興じ、かれを前ジテの里人、自身を諸国一見のワキ僧に比した、夢幻能の擬態にもとづく〝俳諧〟にほかならない。

「ただ無智無分別にして」云々（うんぬん）という文言の中にも、後ジテの仏の示現への期待が破れ、一介の愚直ないなか者を見いだした失望軽侮の微苦笑と、その世間智に汚れぬ一徹な正直さをたたえる愛情とが、表裏二様に複雑にからみあった形で含まれ、隠微な笑いをかもしている。

仏の示現を期待した能のワキ僧の姿勢は、右の諧謔（かいぎゃく）のスタイルより謹直のスタイルへと筆づかいを改めた東照宮参詣の条にまで響いていって、「あらたふと」という神威賛仰（さんごう）の声調に結晶する。日光山は皇家鎮護・国土安寧を祈願して開かれた山で、東照権現は江戸時代人にとって、天照大神に次ぐ絶対神格だった。

《引用終了》

と述べている。複式夢幻のパロディというのは、それはそれで面白い。恣意的に時系列を転倒させたのも、確かにそれを狙ったものに違いない。違いないが、それにしても、かの「神」君家康公を祀る日光の前に『佛五左衛門』『濁世塵土』『桑門の乞食巡礼』『唯だ無智無分別』『偏固』『朴訥』『痴愚』という強烈な表現の羅列はどうか？　それ以上に私は素直に納得は出来ないことがあるのである。それはまさに、**『猶ほ憚り多くて筆を指し置きぬ』**と芭蕉が記すところに、である。もしも諸家が評するように「佛五左衛門」のエピソードが、その後の日光山の神威への夢幻能を洒落た対称的呼び水として機能しているのであるのならば、この、**「これ以上は、とてものことに、神威、これ、畏れ多御座るによって筆を措く」なんどと如何にもな弁解を述べ添えた上に、かの名吟を、はたして芭蕉が配するであろうか？**　という素朴な疑問なのである。どうも私はこの『憚り多くて』という語が好きではないのである。芭蕉にして、ここにその語を使わざるを得ない、何か、内的なアンビバレントな感懐が潜んでいるように思われてならなかったのである。

今回、このプロジェクトで、永年、積ん読（どく）で放置した数多の芭蕉関連書を、今更ながら斜め読みする機会を得たが、その中の一冊に、まさにこの私の積年の疑問を氷解させて呉

れる（納得させて呉れる）ものを見出した。山本※（「亻」＋「胥」。さとし。以下、「胥」で示す）「奥の細道事典」（講談社一九九四年刊）の第二章「未知との出会い」の『「筆をさし置ぬ」の真意』一節であった。非常に長くなるが、私にとって眼から鱗の論なればお許し戴きたく思う。山本氏はまず、先に示した日附の問題を確信犯の虚構と検証した上で、

《引用開始》

［やぶちゃん注：前略。］『奥の細道』をかなりあとでしたためたとはいえ、芭蕉の思い違いとはどうしても考えられない。さらに、ある種の感動をもって東照宮に接し、その晩五左衛門の家に泊まっているのに、五左衛門宅に泊まった翌日、東照宮に参拝した、と勘違いするはずはない。それにもかかわらず、虚構の三十日をつくり上げ、『奥の細道』全体の構想からすると、とくに必要とは思えない仏五左衛門の話にかなりの量の筆を残したということに意味がある。

芭蕉が日光を訪ねたのは、紹介状をたずさえたことからしても、前もって日程に組み込んであったはずである。それにもかかわらず、日光についての記載は、空海大師（実は天平神護二年、勝道上人の開基）が名づけた地名の由来の後、「猶博多くて筆をさし置ぬ」と、直接の描写は一言ももらしていない。芭蕉は俳諧を業とする。目や心に映った事象を言葉に託し、他人に訴えるのが職業と解してよい。『奥の細道』をまとめたのも、自分の体験を通して得たものを、人々に知らせたかったからに他ならない。その芭蕉が、「筆をさし置ぬ」と書くのは、「自己否定」にもなりかねない。その危険をあえておかしてまでこう書き残したのは、それを通して、自分の日光に対する気持ちを、読者に読み取ってもらいたかったからに違いない。

「猶憚多くして」という表現は、対象物を悪しざまに言いたい気持ちを伏せるときに用いることが多い。「今此御光、天にかゝやき」と芭蕉がいう「御光」をおおかたの解説書は東照権現の威光と説明している。私もこれまでそう信じていた。ところが再三読み返すうちに、すぐ前にあげている、「日光と改給ふ」た空海ととるのがもっとも妥当である、と考えるようになった。この「御光」を東照権現とする根拠は、「卯月朔日、御山に詣拝す」

と書きはじめた「御山」を、東照宮と解するからである。ところが芭蕉は、「むかし御山を二荒山と書いていたが、空海大師開基のときに日光と改めた」と述べている。だから芭蕉が詣拝した御山は、東照宮ではなく、「日光」そのものの自然だった、と読み取れる。

日光東照宮は、日本人の感覚からすると、異例としかいいようがないほど華美にかざりたてた社である。こういう造作は、どう考えても芭蕉好みとは思えない。

さらに、仏五左衛門について「気稟の清質尤尊ぶべし」と述べた直後、日光の記載に移ったのが気にかかる。「気実の清質」とはうらはらの気持ちを東照宮に対していだいた、と言いたかったのである。そうすれば、わざわざ虚構の期日を付してまで記した仏五左衛門の話を、ここに取り上げた理由ものみ込める。「筆をさし置ぬ」と空白にした、真の東照宮像を読者に伝えるため、と考えてもおかしくない。俳諧は、短い言葉に万感をこめて表現するので、あいまいさが残るものである。」

（ふ）

あらたうと青葉若葉の日の光

この句は室ノ八嶋で詠んだ「あらたふと木の下暗も日の光」を、『奥の細道』執筆のとき手直しした、ということは前に述べた。木の葉越しに、日の光が糸のように降りそそぐ室ノ八嶋は、この句にぴったりのところといえる。この句の「日の光」は、やはり太陽の光でなくてはいけない。自然の光と解釈したほうがわかりよい。木もれ陽を詠んだ句を、わざわざここに持ってきた理由は、「猶憚多くて筆をさし置ぬ」の気持ちの延長線上にあるのではなかろうか。「日の光」を「東照権現」とするのは誤りで、自然をそこなう権力の象徴としか思えない東照宮の日光にも、仏五左衛門のような「日の光」もいる、というように解釈することもできる。いかさま芸術を照らし出す自然の光、と解釈してもよい。

それにしても、日光描写の前後に、わざわざ仏と墨染という仏教に関係ある人間像をはさんだのも、わけがありそうである。神の名を借りた虚構の偶像を、無智無分別かもしれ

ないが、清質の人間像ではさみ打ちしたつもりかもしれない。

もしそうだとすれば、芭蕉はしたたかな反権力主義者とも思えてくる。日光東照宮を通りいっぺんの造型物と見たのではなく、権力の象徴ととらえたのだろう。だから、配される側の代表として、仏五左衛門をすぐ前に演出した。すると、「唯無智無分別」という、ふつうなら悪しぎまにいう文字の重みがずっしりと響いてくる。さらに、「濁世塵土」「正直偏固」「剛毅朴訥」と、権力への対抗語が、これでもか、これでもかと言わんばかりに並んでいる。空海大師の「千歳未来をさとり給ふにや」というくだりも、こういう事態を見越しての言葉で、芭蕉自身の主観が少なからず含まれている。

芭蕉が、故郷の上野（三重県）を後に江戸へ出てきた当時、江戸幕府は町づくりの最中だった。芭蕉は水道工事などに従事しながら糊口をしのいでいる。苦学しながら、どうにか俳諧を身のよすぎにできた人間だから、今様にいうと、れっきとした労働詩人である。

よきにつけ、悪しきにつけ、徳川幕府が後世に残した唯一の遺産は、東照宮だといわれる。しかし私は、この杉並木をおいてないと考えている。芭蕉が辿ったころは、まだ樹齢三十〜五十年くらいで、歴史の重みは感じられなかっただろうが、現在、樹齢約三百四十年の巨大な杉が三七キロメートルにわたり一万五〇〇〇本を数える。もし、芭蕉が現在これを見たとすれば、日光についての感興も異なったのではないか。東照宮をしのぐ建築物なら、他に数多いが、これだけの並木道は世界中どこをさがしてもないし、いくら近代文明を駆使しようが、今後つくることは不可能に近い。

日光に着いた芭蕉は、まず、江戸から持参した江北山清水寺からの紹介状をもって、養源院を訪ねた。清水寺と深い関係にあった養源院は、水戸頼房）の養母の妹おろくの冥福を祈って建てられた寺院で、日光山の衆徒でもあった。寺そのものは現存しないが、東照宮社務所の裏手を登ったところに、その跡が見られる。

芭蕉は、養源院の使僧とともに御別所を訪ね、東照宮拝観を願い出た。どうやら日光を訪ねたのは、東照宮拝観が目的で、そのためにわざわざ江戸からの紹介状も準備した。ところが先客があったため、かなりの時間待たされた末、ようやく東照宮を拝観したが、そ

れについて芭蕉は口をとざして語らない。その夜は上鉢石町の五左衛門方に泊まった。『曾良日記』には、その個所に「壱五弐四」と書き込んであるが、おそらく宿賃なのだろう。仏五左衛門は、誇張があるにしろ、芭蕉にとって感じのよい人物だったようだ。芭蕉は、快晴の翌日、さっさと裏見ノ滝を見物に出かけた。

廿余丁山を登つて滝有。岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て、滝の裏よりみれば、うらみの滝と申伝え侍る也。

暫時は滝に籠るや夏の初

滝の多い日光のうちでも、裏見）ノ滝は、華厳、霧降とともに日光三名瀑と呼ばれてきた。流れをまたいで降り、そそぐ滝の裏手へ近づけるので、裏見ノ滝と名づけられた。明治三十五（一九〇二）年の大風で、滝の上部がくずれたが、芭蕉の訪れたころはいまよりかなり迫力のある滝だったはずである。芭蕉は、「暫時は滝に籠るや夏の初」と涼しげな句を残しているが、「碧潭」と書き留めた流れの青さが目にしみるようだった。

芭蕉は、裏見ノ滝で日光の自然を代表させているが、『曾良日記』によると、そのあと含満ケ淵を訪ねている。岩や岸を噛む急流である。「弘法の投筆」と呼ばれる絶壁にきざまれた梵字は、ここを開いて寺を建てた晃海が、修学院山順の書した「憾満」の字をきざませたもので、コウカイがクウカイに転じたものと思われる。芭蕉よりいくらか前の時代の話で、芭蕉が日光を訪れたころ、この含満ケ淵は人のうわさに上るようになっていた。

あたりには、晃海の弟子がきざんだ地蔵が列をつくるが、いくら数えても、そのたびごとに数が異なることから、化け地蔵とも呼ばれる。

《引用終了》

――まさにこれである！　私は山本氏の主張に激しく賛同する。それ以外にはない。この見解のみが、永年の間、私の心に巣食っていたどうしようもないと思っていた曇りを鮮やかに払拭して呉れるものだからである！　どうか、氏の著作をお読み戴きたい。実際に「奥

の細道」を踏破された方にのみ見えてくる、とても素晴らしい作品である。」

＊

本日二〇一四年五月　二十日（当年の陰暦では四月二十二日）

元禄二年四月　二日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月　二十日

である。日光の続き。東照宮参拝の翌朝の午前八時頃に上鉢石町五左衛門方を出でて裏見の滝へ向かった。

うらみの瀧にて

しばらくは瀧に籠るや夏の始（はじめ）

日光山に上り、うらみの瀧にて

郭公（ほととぎす）うらみの瀧のうらおもて

うら見せて涼しき瀧の心哉

［やぶちゃん注：第一句は「島之道集」（玄梅編・元禄一〇（一六九七）年序）の前書と表記。「奥の細道」では、

暫時は瀧に籠るや夏の初

という表記である。第二句目は「やどりの松」（助給（雲鼓）編・宝永二（一七〇五）年刊か）、第三句は「宗祇戻（そうぎもどし）」（風光編・宝暦三（一七五三）年刊）。

「裏見の瀧」は栃木県日光市清滝丹勢町（たんぜまち）にある瀧。現在は瀧の上部にあった岩が崩落して裏から見ることが出来なくなっている。日光からは西へ約六キロほど離れた峻嶮の地であるが、二人はその日ここを往復し、早くも正午過ぎには鉢石を立っている。

知られた第一句の「夏」は夏安居で、元来はインドの僧伽に於いて雨季の間は行脚托鉢を休んで専ら阿蘭若（寺。院）の内に籠って座禅修学することを言った。本邦では雨季の有無に拘わらず行われ、多くは四月十五日から七月十五日までの九十日を当てる。これを「一夏九旬」と称して各教団や大寺院では種々の安居行事がある。安居の開始は結夏といい，終了は解夏というが、解夏の日は多くの供養が行われて僧侶は満腹するまで食べることが出来る。雨安居とも単に安居ともいう（平凡社「世界大百科事典」の記載をもとにした）。ここは瀧の裏手の岩窟に入って涼んだのを、夏安居の初めと洒落たものである。僧体の芭蕉曾良であればこそ奥羽行脚という夏安居（修行）の始まりにも擬え得るであろう。「奥の細道」では前に曾良の「剃捨て黒髪山に衣更」の句もあって如何にも相応しく響き合う。

第二句の「うらおもて」について私は、山のあちこちで囀る不如帰の鳴き声が、入った瀧の裏にあっても聴こえ、それが微妙に木霊し合い、まさに瀧音と相俟って、何が「うら」であり、何が「おもて」であるのかという、虚実皮膜も反転するような不可思議にして爽快な思いを抱いたと、芭蕉はいいたいのだと読む。瀧の裏に回ったことがある人にはこれはすこぶる実感としてある。少なくともアイスランドの Seljalandsfoss（セリャラントスフォス）で私はそれを実感したのである（リンク先は私の撮った同瀧の写真。前後に数枚ある）。

第三句の「うら」は擬人化された瀧の「裏」「内」「心」である。なお、この後の須賀川で書かれた杉風宛書簡（四月二十六日附書簡）には曾良の書簡が添付されていてそこにこの句が載るが、そこでは、

日光うら見の瀧

ほとゝぎすへだつか瀧の裏表　翁

うら見せて涼しき瀧の心哉　曽良

何と第二句目の異形句が載り、しかもこの「うら見せて」は芭蕉の句ではなく、曾良の句

としてあるという（これは「おくのほそ道 総合データベース　俳聖　松尾芭蕉・みちのくの足跡」の「おくのほそ道 六　日光山の章段」の注のデータを参照した）。

以下、「奥の細道」の当該部。

＊

廿余丁山を登(ノボ)ツて瀧有岩洞
の頂より飛流して百尺千岩の
碧潭に落岩窟に身をひそ
め入て瀧の裏よりみれはうら
みの瀧と申伝え侍る也

　暫時は瀧にこもるや夏の初

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文で、一部に歴史的仮名遣で読みを附した。今回は自筆本に送り仮名を附した）

○碧潭に落つ　→　●碧潭に落ちたり」

＊

本日二〇一四年五月二十一日（当年の陰暦では四月二十三日）

元禄二年四月　三日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月二十一日

である。「曾良随行日記」によればこの前日四月二日は裏見の滝を見た後、上鉢石町五左衛門方を出立、現在の栃木県日光市の（旧今市市）瀬尾及び同市川室から同市大渡を経由して、現在の栃木県塩谷郡塩谷村内船入（鬼怒川の渡し場。船生）へ着き、そこから同村内の玉入へ、雷雨の中を午後一時半着、宿が劣悪だったために無理を頼んで名主の家に泊している。この三日は朝から快晴、午前七時半に玉入を出立、鷹内・矢板・沢村（現在は孰れも栃木県矢板市内）から大田原市内を抜け、栃木県北東部の黒羽（旧黒羽町。現在、大田原市黒羽）へと辿り着いた。「曾良随行日記」によれば、とりあえずこの句は四月三日の句と推定出来る。

陸奥にくだらむとして、下野國まで旅立けるに、
那須の黒羽と云所に翠桃何某の住けるを尋て、
深き野を分入る程、道もまがふばかり草ふかければ
秣負ふ人を枝折の夏野哉

那須にて
馬草苅人を枝折の夏野哉

［やぶちゃん注：第一句目は「陸奥衞」（桃隣編・元禄一〇（一六九七）年跋）で、句は「曾良書留」にもこの句形で載り、そこでは前書に、

那須余瀬、翠桃を尋ねて

とする（「那須余瀬」は旧黒羽町の西方の地名）。第二句は「蕉翁句集」（『蕉翁文集第一冊「風一」』・土芳編・宝永五（一七〇八）～六年頃）の句形。後者が実景のように読め、これが初期形であるが如何にも絵葉書のように平面的で、効果的なパースペクティヴを見せる前者が遙かによい。しかし芭蕉は「奥の細道」ではこの自作を切り捨てて、以下に示す掬すべき掌編をものしたのであった。

「翠桃」江戸で旧知であった蕉門鹿子畑豊明（かのこばたけとよあきら）の俳号。彼の実兄は黒羽大関藩館代（留守居役）浄法寺（じょうぼうじ）図書高勝（ずしょたかかつ）で、彼も俳句をものして桃雪と号し、兄弟ともに芭蕉を手厚く接待し、芭蕉はここ黒羽で「奥の細道」の旅で最も長い、十三泊（十六出立）という異例の逗留をしている。本句はその挨拶句である。なお、当時二十八、兄は年子で二十九の若さであった。

「枝折」道標べ。目印。

「陸奥衝」所収のものは、この第一句を発句とするその折りに巻かれた七吟歌仙で（但しこれは後にかなりの推敲が施されたものらしく、そこからも第二句が初案であったと私は見る）、脇句は、

青き覆盆子（いちご）をこぼす椎の葉　翠桃

と主の翠桃が付けている。「覆盆子」は木苺。

以下、「奥の細道」の今日の当該旅程箇所を示す。

＊

那すの黒はねと云處に知人あれは
これより野越にかゝりて直道を
ゆかむとす遙に一村を見かけて
行に雨降り日暮るゝ農夫の

家に一夜をかりて明れは又

野中を行そこに野飼の
馬あり草刈おのこになけきよれは
野夫といへ共さすかに情しらぬには
あらすいかゝすへきやされ共此野は東
西縦横にわかれてうゐうゐ敷旅人の
道ふみたかへむあやしう侍れは
この馬のとゝまる處にて馬を返し
給へとかし侍ぬちいさきものふたり馬の跡し
たひてはしるひとりは小娘にて
名をかさねと云聞なれぬ名のやさし
かりけれは　　曽良
　かさねとは八重撫子の名成へし
頓て人里に至れはあたひを鞍つほに
結付て馬を返しぬ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文。なお、「うゐうゐ」の後半は原本では踊り字「〳〵」）

○東西縦横　　↓　●縦横
○ひとりは小娘にて　↓　●ひとりは小姫にて

■やぶちゃんの呟き

私は十六の時、古典の授業でこのシークエンスを習って以来、「奥の細道」中、同じ折りに読んだ「象潟」に次いで、忘れ難い印象的な章段である。

角川文庫版の頴原・尾形氏の評釈（この文庫のカバー画はまさにこのシーンである）によれば、本章段は、

《引用開始》

「草刈る男に嘆きよれば」云云の叙述の背後には、陸奥（みちのく）を舞台とした謡曲『錦木（にしきぎ）』の「けふの細道分け暮らして、錦塚はいづくぞ、かの岡に草刈るをのこ心して、人の通ひ路明らかに教へよや」の文言が二重写し的に焼きつけられていよう。その「草刈るをのこ」と、古雅の名を持った「小姫」、それに『蒙求』にも収められて著聞する「管仲随ㇾ馬」［やぶちゃん注：底本には片仮名送り仮名があり、読み下せば「管仲馬に随ふ」。］（『韓非子』説林）の話を思わせる「野飼ひの馬」という、この世ならぬ道具立てによって織りなされた夢幻劇は、渺々（びょうびょう）たる那須野の旅の幻想的な風趣を伝えて余蘊（よううん）がない。

《引用終了》

とあり、新潮古典集成の「芭蕉文集」の富山奏氏の注には、「馬のとどまるところにて馬を返したまへ」の部分に「蒙求」のそれと並べて、「奥の細道」でやはりこの後の素材となる謡曲「遊行柳」の「老いたる馬にはあらねども、道しるべ申すなり」などを趣向とした旨の記載がある。安東次男氏は「古典を読む」版ではこの「撫子」は「大和撫子（河原撫子）」（ナデシコ目ナデシコ科ナデシコ属カワラナデシコ *Dianthus superbus* var. *longicalycinus*）であるが花は単弁で、八重咲のそれはセキチク（ナデシコ目ナデシコ科ナデシコ属セキチク *Dianthus chinensis*）の改良種（天然種ではない）であって（分類と学名は私が附したもの）、この曾良の句は『野の撫子に八重はないはずでだが、はて、「かさね」とはよほど慈んで育てているのか、と読んでよい。丹精すればいずれは八重に咲く、という余情もある。セキチクの改良種の実際を知っていないとこういう句は出てこない。大和撫子を女童の愛称に執成（とりなし）した例は、『源氏物語』にも出てくる』とし、「帚木」「常夏」の帖の証左を掲げてさえある（なお、個人的にはこの安東の語釈は興味本位の解釈として知的には面白いのであろうが、私はやや生理的不快感を感じることを申し添えておく）。

しかし乍ら、私にとってこうした典拠詮索は、この章段にいらない。

芭蕉の「奥の細道」には虚構が多いとされる。それを私も嘗て教師時代に鬼の首を取ったように述べては、荻原井泉水はこれを、現実的事実と文学的真実は違うと言っている、などと分かったようなことを偉そうに語っていた。しかし、私は芭蕉はやはりリアリズムの人であったと今は思うのである。無論、その実体験での感懐をより効果的に示すために、事実や時制に改変は加えられていることは確かな事実であっても（厳密な意味での虚偽記載事実の認定）、一つの創作物である「奥の細道」の中の、印象的なシークエンスには必ず、芭蕉が実際に見聴きし体験した事実という裏打ちがあり、そこでの感懐の核心に於いては何らの虚偽はない、というのが私の今の「奥の細道」への思いなのである（それを「文学的真実」などと呼ぶ必要は実はない。客観的事実とは観察者・測定者によって全く異なるという「事実」は既に原子物理学者らによって認められている科学的「事実」だからである）。

　であるからして私は典拠なんどより何より、この芭蕉と少女「かさね」の出逢いが確かな事実であり、馬を追いながらついてくる彼女、そして「かさね」よりもっと小さな少年である弟の情景が、ありありと見えること、感じることこそが、本文を鑑賞する上で最も、否、唯一、大切なことなのだと信じて疑わないのである。

　これは研究者の間では比較的知られたことであるが、この「かさね」との邂逅は確かな事実であることが、芭蕉のこの「奥の細道」が終わった翌年の以下の文章によって証明されるのである。それは芭蕉が知人から、生まれた女児の名付け親を頼まれた際に（この事実そのものが我々の芭蕉のイメージからはやや意外である）、「重（かさね）」という名を授けたことを述べた文章である（引用は山本胥氏の「奥の細道事典」に載るものを参考に原本の脱字・衍字を補正し、正字化して示した）。

みちのく行脚の時、いづれの里にかあらむ、賤（しづ）がこむすめの六つばかりとおぼしきが、いとさゝやかに、えもいはずをかしかりけるを、名をいかにいふとゝへば、かさねとこたふ。いと興有る名なり。都の方にてはまれにもきゝ侍ざりしに、いかに傳て何をかさねといふ

にやあらん。我子あらば、此名を得させんと、道連れなる人にたはぶれ侍しを思ひ出でゝ、此たび思はざる縁（ゑにし）に引かれて名付親となり

賀レ重

いく春をかさねがさねの花ごろも
皺（しは）よるまでの老（おい）もみるべく

「賀レ重」は「かさねをがす」と読む。

山本胥氏はこの後に、この『「かさね」を、私は旅の恋と感じたが、フランスの詩人ボンヌフォアは、『奥の細道論』の中で、「詩の世界の妖精（ようせい）と考えている」と述べている。言葉こそ違うが、当を得た解釈である』と述べておられるが、私は今回、このボンヌフォアの評言に深く感動した。

「かさね」はまさしく、私が求め続けている、私の中の永遠の少女であることを気づかせてくれたからである――」

＊

本日二〇一四年五月二十二日（当年の陰暦では四月二十四日）

元禄二年四月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月二十二日

である。

秋鴉（しうあ）主人の佳景に對す

山も庭にうごきいるゝるや夏ざしき

秋鴉主人の佳景に對す

山も庭もうごき入（いる）るや夏坐敷

［やぶちゃん注：第一句は曾良の「俳諧書留」。第二句は「雪まろげ」（正しくは「雪滿呂氣」・曾良編・周徳校訂・天明三（一七八三）年刊・河合曾良（慶安二（一六四九）年～宝永七（一七一〇）年）没後六十七年後の刊行）のものであるが、今栄蔵氏は新潮古典集成の注で「庭も」は誤記と推定されている。「曾良随行日記」によれば、これは四月四日の句である（以下、注参照）。

「秋鴉主人」黒羽大関藩館代浄法寺図書桃雪高勝の別号。芭蕉はこの四日に余瀬の彼高勝の実弟の鹿子畑翠桃忠治の屋敷から彼の屋敷に招かれ、十一日まで滞在し、十五日にも訪れ、翌十六日に余瀬へ戻って、現在の栃木県那須郡那須町大字高久へと出立した。この句は、恐らくは最初に高勝邸を訪れた今日の挨拶句である。この秋鴉亭について曾良は「俳諧書留」に、

浄法寺圖書何がしは那須の郡黒羽のみたちをものし預り侍りて、其私の住ける方もつきづきしうしいやしからず。地は山の頂にさゝへて、亭は東南にむかひて立り。奇峯亂山かたち

をあらそひ、一髪寸碧繪にかきたるやうになん。水の音鳥の聲、松杉のみどりもこまやかに、美景たくみを盡す。造化の功のおほひなる事、またたのしからずや。

と記している（引用は山本健吉「芭蕉全発句」に載るものを参考に、一部原本誤字と思われる箇所を補正、正字化して示した）。今氏によれば、この句の「山」はこの秋鴉亭の庭の借景としての遠景にある山を指し、「伊勢物語」七十七段『「山もさらに堂の前に動き出でたるやう」という面白い表現をふまえて趣向した』ものとされる。

今氏は第二句を誤字とされるが、寧ろ、私は第二句目のダイナミズムの方が吹っ切れて面白い。自動詞・他動詞の五月蠅い国語学的指摘は不要で、ここはまさに――借景の翠なす山々も風雅清涼なる庭も渾然一体となって座敷の中の壺中天となる――と私は読みたい。本句は「奥の細道」には出ない。「黒羽」の段を以下に示す。光明寺の「夏山に足駄をおかむ首途哉」の句は実は時系列では後の句で、そこで再度示して注するので、ここでは本文のみを示して、注はしない。

＊

黒羽の舘代浄坊寺何某の方ニ音信ル

おもひかけぬあるしのよろこひ日夜語
つゝけて其弟桃翠なと云か朝夕勤
とふらひ自の家にも伴ひて親属の
方にもまねかれ日をふるまゝに
ひとひ郊外に逍遙して犬追ものゝ跡
を一見し那すの篠原をわけて玉藻の
前の古墳をとふそれより八幡宮に詣
与市宗高扇の的を射し時別ては我
国氏神正八まんとちかひしも此神社
にて侍ときけは感應殊しきりに覚らる

暮れは桃翠宅に歸る
修驗光明寺と云有そこにまねかれて
行者堂を拜す
　夏山に足駄をおかむ首途哉
　＊
■異同
（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）
○与市宗高扇の的を射し時　→　●與市扇の的を射し時

■やぶちゃんの呟き
「犬追物の跡」：後掲される殺生石所縁の妖狐九尾狐の化身である玉藻の前を捕らえるため、犬を騎射する「犬追物（いぬおふもの）」の弓術技を練習した跡とも、狐は犬に似ていることからこの九尾狐退治自体を犬追物と称したとも伝える。
「那須の篠原」これは那須野一円の通称であるが、ここでは現在の大田原市の篠原地区にある玉藻の前の神霊を祭った玉藻稲荷神社がある。歌枕としても知られ、源実朝の、
　もののふの矢並つくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原
辺りの和歌がイメージされていたのかも知れない。
「古墳」は先の妖狐玉藻の前の狐塚で、同稲荷神社の一キロメートルほど北東にあったが、現在は原形を留めておらず、塚跡の標柱のみが残っている。
「八幡宮」大田原市南金丸にある応神天皇を祀る那須総社金丸八幡宮那須神社（略して那須神社と呼称している）。但し、「平家物語」で、この地の出身とされる那須与一宗隆が屋島合戦で義経に命ぜられて扇の的を射る際に祈願したとされるのは、ここではなく、那須湯本にある温泉大明神（ゆぜんだいみょうじん）であるともされる。
　なお、こことこの後の「雲巖寺」の段は実際の訪問の順列をかなり入れ替えて圧縮してある。頴原・尾形両氏は角川文庫版評釈で、この部分の創作的再構成について以下のよう

に高く評価されている。

《引用開始》

この半月近い滞在記事の整理ぶりは、まことにあざやかで、四日の雲巌寺訪問の一条を翠桃兄弟を中心とする記事から切り離すとともに、犬追物の跡・玉藻の前の古墳などを巡覧した十二日の篠原逍遙と、十三日の金丸八幡参拝とを、一日の記事にまとめあげ、九日の光明寺参詣をその後へ回してある。桃雪・翠桃かたの往返は、その前にまとめて掲出しているが、主語が次々と転換するテンポの早い叙述が、交歓のよろこびを伝えて効果的だ。

光明寺参詣を最後に回したのは、「夏山に」の句を配する関係からで、ここを陸奥への第二の出発点として旅に勇む芭蕉の心おどりが、軽快に響いてくる。

《引用終了》

旧蹟も玉藻の前と弓術の那須与一という連関をスラーのように続けて美しい。事実、「奥の細道」を読む者は、まさか奥羽へのトバロでしかない、しかも句も示されていないこの黒羽で」半月にもなんなんとする滞留を続けていたとは実は思わない（但し、「日夜語り續けて」「桃翠など云ふが朝夕勤(てうせき)めとぶらひ」「自らの家にも伴ひて親屬の方にも招かれ」「日を經るまゝに」という畳みかけにそれは匂わされてあり、しかもそれが何か、芭蕉のからすれば実は有難迷惑だったという陰のニュアンスさえも私には感じられるのは深読みであろうか）。」

＊

本日二〇一四年五月二十三日（当年の陰暦では四月二十五日）

元禄二年四月　五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月二十三日

である。

木啄（きつゝき）も庵（いほ）はやぶらず夏木立

木啄も庵はくらはず夏木立

［やぶちゃん注：第一句「奥の細道」。「曾良書留」には、

四月五日　奈須雲岩寺ニ詣て、佛頂和尚舊庵を尋

とある。「曾良随行日記」に、

一　五日　雲岩寺見物。朝曇。両日共ニ天氣吉（よし）。

と記す。「小文庫」「泊船」ともに、

佛頂禪師の庵をたゝく

と前書する。第二句目は曾良本「奥の細道」の見せ消ちで、底本は第一句同様に中七を「庵はやぶらず」と改めている。

「奈須雲岩寺」栃木県大田原市雲岩寺にある臨済宗妙心寺派の東山雲厳寺（とうざんうんがん）。大治年間（一

一二六年～一一三一年）に叟元によって開基され、弘安六（一二八三）年に執権北条時宗を大檀那として梨勝願法印の寄進により仏国国師によって開山されたと伝える。

「佛頂和尚」（寛永一九（一六四二）年～正徳五（一七一五）年）は常陸国鹿島生で元は鹿島の瑞甕山根本寺（茨城県鹿嶋市宮中在）住職、当時は宝光山大儀寺（茨城県鉾田市在。根本寺の北北西約十六キロ）中興開山であった臨済僧。根本寺は直近にある鹿島神宮と領地争いがあってその訴訟のために根本寺末寺で江戸深川にあった臨川庵（後に臨川寺）に長く滞在、天和二（一六八二）年頃、近くに住んでいた芭蕉は彼を師として禅修業をしたと推測され、これより前、貞享四（一六八七）年八月十四日出立の、弟子の曾良と宗波を伴って仲秋の月を見に出かけた「鹿島詣」では、弟子に譲った根本寺に泊めて貰って師と再会している（月見は生憎の雨で果たせず句を作っている）。この仏頂はしばしばこの雲巌寺に山居して修業していた。芭蕉が非常に尊敬し、二歳年長であるとともに、「舊庵」「山居の跡」などとあるが、芭蕉よりも二十一年も長生きした（芭蕉は元禄七（一六九四）年満五十歳で没している）人物（遷化の地はここ雲巌寺ではあったが）であるので注意されたい。

第一句の「やぶらず」に軍配。「くらはず」は禅味に欠く。

問題は「奥の細道」では実は時系列が入れ替えられて、これより後の行程で創作された「夏山に足駄を拝む首途哉」が「黒羽」の段の始まりの直後に配されてある。そのため、ここでも前に示した「黒羽」の段と次に続く「雲巌寺」の段の異同その他を示し、「黒羽」の段についても今一度次の「夏山に」の句の注で煩を厭わず全文を附しておくこととする。それが「奥の細道」への礼儀ともなろうと考えるからである。

＊

黒羽の舘代浄坊寺何某の方ニ音信ル

おもひかけぬあるしのよろこひ日夜語

つゝけて其弟桃翠なと云か朝夕勤

とふらひ自の家にも伴ひて親属の

方にもまねかれ日をふるまゝに

ひとひ郊外に逍遙して犬追ものゝ跡を一見し那すの篠原をわけて玉藻の前の古墳をとふそれより八幡宮に詣与市宗高扇の的を射し時別ては我國氏神正八まんとちかひしも此神社にて侍ときけは感應殊しきりに覚らる暮れは桃翠宅に歸る

修驗光明寺と云有そこにまねかれて行者堂を拜す

夏山に足駄をおかむ首途哉

當國雲岸寺のおくに佛頂和尚山居の跡有

竪横の五尺にたらぬ草の庵

むすふもくやし雨なかりせは

と松の炭して岩に書付侍りといつそやきこへ給ふ其跡みむと雲岸寺に杖を曳は人々すゝむて共にいさなひ若き人おほく道の程打さはきておほえす彼麓に至る山はおくあるけしきにて谷道はるかに松杉くろく苔したゝりて卯月の天今猶寒し

十景盡る所橋をわたつて山門に入

さてかの跡はいつくの程にやと後の山ニかけのほれは石上の小庵岩窟ニ

むすひかけたり妙禪師の死

關　法雲法師の石室を見るか
ことし

　木啄も庵はくらはす夏木立
ととりあへぬ一句を柱に殘侍し

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○与市宗高扇の的を射し時　→　●與市扇の的を射し時

○佛頂和尚山山居の跡　→　●佛頂和尚山居の跡［やぶちゃん注：衍字と思われる。］

○後の山ニかけのほれは　→　●後の山によぢのぼれば

■やぶちゃんの呟き

「竪横の五尺にたらぬ草の庵／むすふもくやし雨なかりせは」……縦横が五尺（約一・五メートル）にも足らぬ庵ともいえぬ言えぬ庵であるが、そんな小庵を結ぶことさえも私には忸怩たる思いで一杯だ――あぁ！　雨さえ降らなかったなら、こんなものはいらぬのになぁ！……

「十景」雲巖寺には寺内に名勝十景（海岩閣・竹林・十梅林・雲龍洞・玉几峯・鉢盂峯（ぼうほう）・水分石・千丈岩・飛雪亭・玲瓏岩）があった。但し、実際には海岩閣・竹林・十梅林の三つは山門内にある。

「橋」雲巖寺五橋（獨木橋・瑞雲橋・瓜※橋［やぶちゃん注：「※」＝「瓜」＋「失」。］・涅槃橋・梅船橋）の一つ、瓜※橋（かてつきょう）。ここは角川文庫版本文脚注に拠った。

「石上」は「せきしゃう」と清音で読む。

「妙禪師の死關」「妙禪師」は南宋の臨済僧高峰原妙（一二三八年～一三九五年）。十五年間に渡って隠棲し杭州西天目山（現在の浙江省杭州市）にあった洞窟張公洞師子岩に「死

關」という扁額を掲げて門外不出一五年にして五十七歳でそこで遷化したと伝える。

「法雲法師」幾つかの注は南朝梁の高僧法雲（四六七年～五二九年）で、境内の大岩の上を居所とし、終日談論したという人物を当てるが、顕原・尾形注はそれを誤りとし、「続伝燈録」に大寂巌という岩窟（？）に座禅したと伝える宗代の法雲派の禅僧大通善本かとする。前者であるとするなら、順列がすこぶるおかしい気はする。

「石室」石でできた岩窟。

「とりあへぬ一句」即興の一句。

顕原・尾形両氏は角川文庫版評釈には（引用内引用の分での補正した文字の傍点「・」を省略し、漢文の送り仮名を排し、ここのみ古文・漢文引用部分を総て恣意的に正字化した）、

《引用開始》

実際には黒羽滞在の三日目にあたる四月五日の雲巌寺訪問の記事を、「夏山に」の句のあとに別掲したのは、芭蕉がこの郊外引杖に、黒羽における交歓・観光とは別の意義を認めていたからである。前作『笈の小文』には、旅について述べた一節に、「山野海濱の美景に造化の功を見、あるは無依の道者の跡をしたひ、風情の人の實をうかがふ。（中略）もしわづかに風雅ある人に出合ひたる、悦びかぎりなし」云々という文言が見えるが、前章を「風雅ある人に出合ひたる」交歓のよろこびをつづったものとすれば、これは「無依の道者の跡」を慕っての参堂の記ということができる。無依の道者とは、万境に接するも少しも心のとらわれることのない道人をいう。捨身行脚）をめざした芭蕉にとって、第二の門出に際し、親しく教えを受けた尊敬する師家の、万境を放下した山居修行の跡を尋ねることの意義は小さくなかった。

本文の運びもまた、最初に仏頂の道歌を掲げ、次いで引杖の次第、禅徒澄心の場の幽邃な風景、石上の草庵の形状に及び、「妙禪師の死關」「法雲法師の石室」という対句を置いて、仏頂の道歌に和した「木啄も」の一句をもって結ぶという、さながら「遊二雲巌寺一次二老師韵一并序」［やぶちゃん注：「雲巌寺に遊び老師の韵を次ぐ并びに序」と読む。「韵」は韻を

踏んだ台詞であるから、先の道歌を指す。」とでも題すべき、五山禅林の文学を思わせる趣致をたたえている。

《引用終了》

と評してある。私は寧ろ、「奥の細道」の旅に死出の覚悟をさえ持って出た芭蕉が、内心忸怩たる思いの中で過ごしたこの長逗留の通人の懶惰な一時を自発的に斬り捨てて、再度、覚悟の旅の始まりとして認識した禅機こそがここに「在る」のだと思われてならない。」

＊

本日二〇一四年五月二十五日（当年の陰暦では四月二十七日）

元禄二年四月　七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月二十五日

である。

しら河の關やいづことおもふにも、先秋（まづ）風の心にうごきて、

苗みどりにむぎあからみて、粒々（りふりふ）にからきめをする賤がしわざもめにちかく、

すべて春秋のあはれ、月雪のながめより、この時はやゝ卯月のはじめになん侍れば、

百景一ツをだに見（みる）ことあたはず。たゞ聲をのみて、默して筆を捨（すつ）るのみなりけらし

田や麥や中にも夏の時鳥（ほととぎす）

元祿二孟夏七日

麥や田や中にも夏はほとゝぎす

［やぶちゃん注：第一句目は「曾良書留」を諸本の引用と解説により、推定し得る原型に近い状態で再現したが、「曾良書留」は下五が「夏時鳥」であるので、諸本の相似句から「の」を補った。また底本は「麦」とするが正字化した。なお、下五を、

田や麥や中にも夏のほとゝぎす

とした形で「雪まろげ」にも載る。第二句は「茂々代草（もゝよぐさ）」（其流／楚舟／秋花編・寛政九（一七九七）年跋・真蹟を模刻したものとする）所収の句形で、句の後に、

右は淨法寺桃雪亭にての吟也

と付記するとあり、更に底本注によれば「安達太郎根（あだたらね）」（渭北編・宝永元（一七〇四）年成立）には、この句の真蹟が浄法寺にあるとしるす、とある。とすればこれが初案であろう。

「曾良書留」の前書によって初めてこの句が知られた白河の関を詠んだ能因法師の和歌、

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關

をベースにした句で、これから越える白河の関の景観に思いを馳せつつ吟じた句ことが分かる。能因の秋の景と今の初夏のそれとの様変わった自然を視覚と聴覚で際立たせた句であるが、事大主義的な長々しい前書なしにはその重層性が読み切れない。山本健吉氏も『表現が未熟で、この句だけでは充分に意味が汲み取れない』と評されておられる。無論、「奥の細道」には不載。」

＊

本日二〇一四年五月二十七日（当年の陰暦では四月二十九日）

元禄二年四月　九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年五月二十七日

である。

夏山に足駄(あしだ)を拝む首途(かどで)哉

黒羽光明寺行者堂

夏山や首途を拝む高あしだ

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」。「曾良随行日記」に、

一　六日ヨリ九日迄、雨不止(やまず)。九日、光明寺へ被招(まねかる)。晝ヨリ夜五ツ過迄ニシテ歸ル。

とあるから、四月九日の吟である（「夜五ツ過」午後八時過ぎ）。第二句目は「曾良書留」。「光明寺」余瀬の天台宗修験寺光明寺。文治二（一一八六）年に那須与一が阿弥陀仏を勧請して建立、その後は廃れて永正年間（一五〇四年～一五二一年）に津田源弘によって修験堂として再興されたが、明治の廃仏毀釈によって廃絶、現存しない。芭蕉が訪れた当時の修験堂先達は第七代権大僧都津田源光(つだもとみつ)法印の妻は浄法寺図書桃雪高勝の妹であった。余瀬の翠桃宅に近かった。

「行者堂」修験道開祖役行者を祀る。一本歯の高下駄が安置されてあった。

本句と別にもう一句、曾良の「俳諧書留」には、

同

汗の香に衣ふるハん行者堂

とが載るが、これ、「雪まろげ」には、

光明寺行者堂　汗の香に衣ふるハな行者堂　曾良

とあるので採らない。句柄としても「夏山や」の並べるに格が堕ち過ぎる気がする。但し、芭蕉はしばしば捨てた句を曾良に与えた形跡があるように私には思われ、これがそうでないとは言い切れぬとは思うが、曾良作の誤伝とするのが現在の主流のようではある。

「奥の細道」では前に述べた通り、記載の時系列操作が行われている。煩を厭わず、既に掲げた「黒羽」の段を再掲しておく。

＊

黒羽の舘代浄坊寺何某の方ニ音信ル

おもひかけぬあるしのよろこひ日夜語

つゝけて其弟桃翠なと云か朝夕勤

とふらひ自の家にも伴ひて親属の

方にもまねかれ日をふるまゝに

ひとひ郊外に逍遙して犬追ものゝ跡

を一見し那すの篠原をわけて玉藻の

前の古墳をとふそれより八幡宮に詣

与市宗高扇の的を射し時別ては我

国氏神正八まんとちかひしも此神社

にて侍ときけは感應殊しきりに覚らる

暮れは桃翠宅に歸る

修驗光明寺と云有そこにまねかれて

行者堂を拝す

夏山に足駄をおかむ首途哉

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○与市宗高扇の的を射し時　→　●與市扇の的を射し時」

＊

本日二〇一四年六月　二日（当年の陰暦では五月五日）

元禄二年四月十五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　二日

である。この日、芭蕉は余瀬の鹿子畑翠桃豊明宅から彼の兄浄法寺図書桃雪高勝の屋敷を訪問、最後の黒羽の一夜をここで過ごした（曾良は持病のため同道していない）。翌日、翠桃宅へ戻り、昼頃、高久へ向けて旅立った。十三泊十四日という異例の黒羽逗留の最後の泊りが今日であった。

はせをに鶴繪がけるに

鶴鳴(なく)や其(その)聲に芭蕉やれぬべし

鶴の繪贊

鶴鳴や其聲芭蕉やれぬべし

［やぶちゃん注：第一句は「曾良書留」。頭書に『贊』とある。第二句は「奥細道拾遺」（莎青編・延享元（一七四四）年）の句形。但し、この第二句目は曾良の「雪まろげ」では、「鶴の贊」として曾良の作として載る。

山本健吉氏は「芭蕉全発句」で、浄法寺図書桃雪高勝の屋敷秋鴉亭で桃雪の描いた鶴の絵に芭蕉が讃した句と推測、『秋鴉の風雅を鶴に見立て、その清澄さに芭蕉自身の及びがたいという謙遜の気持を述べたものであろう。この「芭蕉」には芭蕉自身を寓していると見るべきだろう。だが』、『表現不足で真意をはかりがたい句である』と述べておられる。長逗留の別れに臨んでの形見とした贈答句ではあろうが、どうも見え透いた象徴言辞で寧ろ、厭味な感じもする。それはまたもしかすると芭蕉独特の隠された棘を含んだ、意識した確信犯ででもあったのかも知れない。ともかくも芭蕉は明らかに「奥の細道」の入り口で如

何にもな足止めを食らった。それを芭蕉はそうした隠れた焦燥感を明らかに「奥の細道」やこれらの句群に忍び込ませているように私には思われるのである。」

＊

本日二〇一四年六月　三日（当年の陰暦では五月六日）

元禄二年四月十六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　三日

である。この日、芭蕉と曾良は十三泊に及んだ黒羽余瀬を出て、野間まで馬で送られ、現在の栃木県那須郡那須町大字高久へと向かい、浄法寺図書桃雪高勝の紹介によって黒羽領三十六ヶ村の大名主高久覚左衛門宅に二泊している。

野を横に馬牽(ひき)むけよほとゝぎす

みちのく一見の桑門同行二人、那須の篠原をたづねて、

猶殺生石みむと急ぎ侍る程に、あめ降出(ふりいで)ければ、

先此(まづこの)ところにとゝまり候

落くるやたかくの宿(しゆく)の郭公(ほとゝぎす)

下野國高久角右衛門が宅にて

落て來る高久の里のほとゝぎす

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」、第二句目は真蹟詠草より（高久家に現存するらしい）、第三句は「石見かんこどり塚」（百草園編・安永元年）。「角右衛門」はママ。

第一句。時鳥の声のＳＥが素早く落ちくるのに合わせ、カメラは垂直に急速にティルト・ダウン、同時に馬上の武将（次の段の殺生石へと九尾狐を退治に向かう武士然(もののふ)とした諧謔をも添えているように私には思われる）に自らを擬えた芭蕉の心内の、馬の口取り足軽に喩えた野夫(やぶ)への引き向けの命令によって、今度はカメラは水平に右へ急速にパンする、という軍記物の浄瑠璃仕立てとなっている（と私は思う）。

山本健吉氏は「芭蕉全発句」でこの句について、

《引用開始》

この句は古くから「いくさ仕立て」の句だという評があるが、この句の響きをよく汲み取っている。芭蕉は黒羽に滞在中、郊外に昔の犬追物の跡をしのび、実朝の歌で名高い那須の篠原を分け入って、玉藻の前の古墳を訪ねたり、八幡宮に詣でて、那須の与一の扇の的の昔語りを思い出したりした。那須野で、昔の鎌倉武士たちのイメージで頭を一杯にしたことがこの句の勢いに乗りうつったかのようだ。この時芭蕉は那須野の矢叫びの声を心の耳で聞いているのだ。たわむれに馬上の大将を気取ったような身ぶりがこの句にある。

《引用終了》

という、実に私にはすこぶる附きで腑に落ちる鑑賞をなさっておられる。

第二・三句目は「高く」に主人の名「高久」を詠み込んだ、一見、如何にもな挨拶吟のように見えるが、私は寧ろ、この前書と発句こそが実は次の訪問地殺生石を踏まえた、芭蕉自身の旅の劇化のバラシであるように思われる。謡曲「殺生石」の冒頭は、

ワキ〽心を誘ふ雲水の　心を誘ふ雲水の　浮世の旅に出でうよ

ワキ〽これは玄翁と云へる道人なり　われ知識の床を立ち去らず　一大事を歎き一見所を開き　終に拂子を打ち振つて世上に眼をさらす　この程は奥州に候ひしが　都に上り冬夏をも結ばばやと思ひ候

ワキ〽雲水の　身はいづくとも定めなき　身はいづくとも定めなき　浮世の旅に迷ひ行く心の奥を白河の　結び籠めたる下野や　那須野の原に着きにけり　那須野の原に着きにけり

ワキ「いかに沙彌はくたびれてあるか」

アイ「さん候」

ワキ「あれに由ありげなる大石の候」

アイ「あれあれあれ」

ワキ「汝はなにごとを申すぞ　これは物に狂ひ候ふか」
アイ「あれなる大石の上を飛びかけり候鳥　石の邊（ほとり）へ落ちて申し候」
ワキ「なにとあれなる石の邊へ諸鳥が落つると申すか」
アイ「さん候（ぞおろお）」
ワキ「まことに不思議なることにて候　立ち越え見うずるにて候」

と始まるからである（新潮古典集成「謡曲　中」を参考にしながら、漢字を正字化、音声部分は平仮名で示した）。

以下、「奥の細道」。

＊

これより殺生石に行舘代より馬にて
送らる此口付のおのこ短尺得させ
よと乞やさしき事を望侍るもの
かなと

野をよこに馬挽むけよ郭公

＊

■やぶちゃんの呟き

まさに毒気の漂う魔界殺生石へ向かわんとする武者振りの諧謔である。」

＊

本日二〇一四年六月　六日（当年の陰暦では五月九日）

元禄二年四月十九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　六日

である。

【その一】この前日、芭蕉と曾良は高久から那須湯本へ到着していた。この十九日の午前十一時半頃から正午にかけて、湯本の岡の上にある温泉大明神に登り、参詣している。

那須温泉

湯をむすぶちかひもおなじ岩清水

温泉大明神ノ相殿ニ八幡宮ヲ移シ奉テ、両神一方ニ拝レサセ玉フヲ

湯をむすぶ誓も同じ石清水

むすぶより早歯にひゞく泉かな

［やぶちゃん注：第一句は「陸奥衮」（桃隣編・万延元（一八六〇）年跋）の、第二句は「曾良随行日記」所収の句形。但し、前書の「両神」は「雨神」とあるのを誤字として訂した（前書と句意は、この温泉大明神には京の石清水八幡宮が合祀されており、ここ一つを参拝することで二神を拝ませて下さる、という謂いであることに拠る）。第三句は「都曲」（言水編・元禄三（一六九〇）年）所収の句であるが、これより以前の句ともされ、那須での作かどうかも不明である。「むすぶ」「泉」で、一応ここに配したが（参考底本としている岩波版中村俊定校注「芭蕉俳句集」でも前の二句に続いて配されてある）、この泉は温泉ではなく、「歯にひゞく」ほど清冽にして冷たいというのだから、前の二句とは全くシチュエーションが異なる別な句であるが、「曾良随行日記」のこの句の前に、那須温泉の温泉六ヶ

所の湧出箇所とその温度についての叙述がある。当日の叙述の初めから以下に示しておく（穎原・尾形訳注角川文庫版「おくのほそ道」所収のものを底本としたが、恣意的に正字化した）。

一　一九日　快晴。予、鉢ニ出ル。朝飯後、圖書家來角左衛門ヲ黒羽へ戻ス。午ノ上尅、温泉へ參詣。神主越中出合、寳物ヲ拜。與一扇ノ的躬殘ノカブラ壱本・征矢十本・蟇目ノカブラ壱本・檜扇子壱本、金ノ繪也。正一位ノ宣旨・縁起等拜ム。夫ヨリ殺生石ヲ見ル。宿五左衛門案内。以上湯數六ケ所。上ハ出ル事不定。次ハ冷、ソノ次ハ温冷兼、御橋ノ下也。ソノ次ハ不出。ソノ次温湯アツシ。ソノ次、湯也ノ由、所ノ云也。

「鉢」は托鉢。「午ノ上尅」は午前十一時半頃。「與一」那須与一。屋島合戦の折りの扇の的の一件の際、成就を祈願したのが本明神であった。「躬殘」は「射殘」の誤記。「御橋」温泉大明神に向かう間にある神橋。「所ノ云也」は「所ノ者云也」の脱字か（以上は一部を底本の注に拠った）。

前の二句は「岩清水」「石清水」に一般名詞石清水八幡宮を掛け、「湯をむすぶ」（湯や清水を両手ですくう・掬する）と、「ちかひ」「誓」を結ぶ（願を掛ける）の意を掛ける。「湯」「むすぶ」「清水」は縁語で、しかも「むすぶ」という語は謡曲「殺生石」（前記事参照）の冒頭で「冬夏をも結ばばやと思ひ候」「浮世の旅に迷ひ行く　心の奥を白河の　結び籠めたる下野や」を念頭においているに違いなく、特に後者は「白河」「下野」（の川水を掬ぶ／下野国那須野の原に露が結び籠める）でこの「奥の細道」のシークエンスのジョイントにもなる。但し、祝祭句とはいえ、修辞技巧や故実が見えてくると底なし沼のような感じを与える句で却って息苦しい結果となっているようにも見える。寧ろ、作句データ不詳の第三句目のリアリズムの諧謔の方が詠む者の心に爽やかに沁みてくる感じがする。」

＊

本日二〇一四年六月　六日（当年の陰暦では五月九日）

元禄二年四月十九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　六日

である。

【その二】同日、温泉（ゆぜん）大明神に参詣した後の午後、同明神下の岡の中腹にある殺生石を見ている。

殺生石

石の香（か）や夏草赤く露あつし

［やぶちゃん注：「曾良随行日記」四月十九日の条の最後に載り、直後に『正一位ノ神位被加ノ事、貞享四年黒羽ノ舘主信濃守増榮被寄進之由。祭禮、九月廿九日。』と記されてある。貞享四年は西暦一六八七年でこの二年前であるから、社殿は新装の美しいものであったと考えられる。

以下、「奥の細道」の殺生石の段。句は採られてない。

＊

殺生石は温泉の出る山陰に
あり石の毒氣いまた
ほろひす蜂蝶のたくひ眞砂
の色の見えぬほとかさなり死す

＊

■やぶちゃんの呟き

言わずもがな乍ら、「蜂蝶のたぐひ、眞砂の色の見えぬほど、かさなり死す」というのは実景ではない。

シテ「のうのあれなるおん僧　その石のほとりへな立ち寄らせ給ひそ」
ワキ「そもこの右のほとりへ寄るまじき謂はれの候ふか」
シテ「それは那須野の殺生石とて　人間（にんげん）は申すに及ばず　鳥類畜類までも觸はるに命なし。かく恐ろしき殺生石とも　知ろしめされでお僧たちは　求め給へる命かな」

「蜂蝶のたぐひ、眞砂の色の見えぬほど、かさなり死す」こそが芭蕉の真の句心であったのだ――まさしくこの時、芭蕉は自身を謡曲の「殺生石」の舞台の中に置いていた――そしてその能舞台はフェイド・アウトからフェイド・インしてそのまま次の段の演目「遊行柳」へと転じてゆくのである。――」

＊

本日二〇一四年六月　七日（当年の陰暦では五月十日）

元禄二年四月二十日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　七日

である。この日の朝は霧雨が降っていたが、午前八時頃には晴れ、八時半には二泊した那須湯本を出立、蘆野（現在の栃木県那須町芦野）の西行所縁で、また謡曲ともなった「遊行柳」に、私の推定では恐らく昼過ぎには辿りついたものと思われる。

田一枚植(うゑ)て立(たち)去る柳かな

［やぶちゃん注：「奥の細道」。但し、この句は「曾良随行日記」や「俳諧書留」などにも載らず、安東次男によれば、芭蕉『生前の集にも見当たらない。後年の作かも知れぬ』（「古典を読む　おくのほそ道」）とする。但し、角川文庫版潁原・尾形訳注「おくのほそ道」の発句評釈によれば、支考の『俳諧古今抄』（享保一五（一七三〇）年跋）にこの句についての詳しい記載があるとし、

《引用開始》

なお、支考の『古今抄』によれば、芭蕉の当時の吟は、中七が「植ゑて立ちよる」であったという。それは奥の須賀川の人から、当時支考への文通中に伝えたところだというから、あるいは実際初案の形であったのかも知れぬ。そうして支考はかえってこの「立ちよる」の方をよしとし、諸注にもこれに対する論があるが、『説叢大全』に、「立ちよる」は最初の念、「立ち去る」は後の姿であって、その最初の念は本文に譲って「立ちよりはべりつれ」といったから、句は「立ち去る」とすべきだと説いているのは、再案に至るまでの過程をまことに巧みに説明したものということができよう。

《引用終了》

と解説する。これから考えればやはり、今日にシンクロするアップ・トゥ・デイトな嘱目

吟としてまず問題ない。取り敢えず、ここで初案形とされるものも、ここに掲げておくこととはする。

田一枚植て立寄る柳かな

しかし言っておくと、私には引用の素丸の「蕉翁発句説叢大全」（安永二（一七七三）年跋）も言っているように、とても「奥の細道」の前書（後掲）と合わせることが出来ず（直前とのダブりが如何にもである）、だいたいからしてこれでは句柄としても、安っぽく、何か妙に下卑て婀娜な掛け軸みたようで、全くの駄句にしか見えない。

さて、この句はまず、西行がここで詠んだと伝承される「新古今和歌集」の二六三番歌、

道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ

をまず受けて、あまりの心地良さにすっかり長居して憩うたうちに、すでに早や、早乙女は田一枚を植え終えてしまった――さあ、私も――慕う西行法師のように「立ちどま」ってしまった「ここ」から「立ち去る」ことと致そう――と転じているのである。

古来、この句では、「植ゑ」る主語と「立ち去る」主語の問題が喧しい。先に掲げた頴原・尾形の評釈では、

《引用開始》

句は本文に述べている通り、西行の歌に名高い柳を訪ねての吟である。「今日この柳のかげにこそ立ちよりはべりつれ」といった文句には、日ごろの本懐をとげた嬉（うれ）しさが溢（あふ）れている。さて句意は、『句解』に「しばしとてこそやすらひつれ、はや田一枚植ゑけるよと、おどろき立ち去りたる旅情なり」といっているので尽きており、諸注も多くこれに従っている。ただ「植ゑて立ち去る」とつづいた二つの動詞において、おのおのその主語を異に

するのは、いかに文法上の破格を許し得べき特殊の詩形にせよ、はなはだ無理な措辞といわねばならぬ。だから『師走嚢』に「この句、早乙女（さをとめ）を誉（ほ）めたる句なり。たをやかなる柳腰の女どもが田一枚を植ゑて各たちさりしなり」と解しているのも、語法上からいえばまことにもっともである。しかしそれでは肝心の柳が、まったく比喩にすぎないものとなってしまう。また、その柳の下から早乙女たちが立ち去ると解しても、芭蕉が日ごろの本懐をとげた嬉しさや、柳に対する愛着の情などは生じてこない。本文のつづきから解すれば、どうしても『句解』の説の外に出ることはできない。こう解して初めて芭蕉が柳の木の下を立ち去りかね、最初はしばしと思って立ち寄ったのに、早くも田一枚を植え終わったことに驚き、見返りがちにそこを去って行く情が生ずるのである。しかし何といっても、この句における措辞の不備は、重大な欠点といわざるを得ぬ。従って句として成功の作ということはできないであろう。

《引用終了》

と述べているのだが、果たしてそうだろうか？『句解』は大島蓼太撰「芭蕉句解」（宝暦九（一七五九）年刊。『師走嚢』は正月堂撰「俳諧師走嚢（しわすぶくろ）」（明和元（一七六四）年跋）の俳諧注釈書）。

そもそも修辞法とは文芸の創作の中で生じたものである。例えば知られた「徒然草」で兼好が「かげろふの夕べを待ち、夏の蟲の春秋を知らぬもあるぞかし」と綴った時、対偶中止法などという呼称は当然なく、このような手法（連用形で中止することで後の同形態の構文の否定形が前の同形態部にも同義の意味を及ぼす）が一般に認知されていた（若しくはされつつあった）という「だけ」のことだ。この文は音韻上でも「かげろふの夕べを待たず、夏の蟲の春秋を知らぬもあるぞかし」とするのに比較して格段に優れて、しかも文法的に全く以って正しい、と言い得るかといえば文法嫌いの私などは明らかに留保したくなるのである。退屈な国文法を学んで、そこで認知されているから正しいなどという本末転倒の理解は私には意味を持たない。しかし私は、あの「あだし野の露」のその部分は「重大な欠点といわざるを得」ず、「従って句として成功の作ということはできない」、な

どとは口が裂けても言わない。そういう謂い方をする輩は、やはり芸術の創造者ではないと私は思う。国文学者というのは所詮、創作者ではなく、必ず鼻持ちならない錆びたインクの臭いをどこかでさせているものだ。芭蕉のそれは物理的達意を目的とした文字列ではない。一個の発句という創作である。私は「奥の細道」の名吟を挙げよと言われれば、恐らく十句の内にはこれを入れる。本句は「奥の細道」の中にあって実に成功している句であると私は信じて疑わない。

ではどこがそんなに素晴らしいのか。

私はまず、凡そ**若き早乙女が苗を植える鮮やかな映像を配さずには、この句を映像化し得ない**ということから始めたい（但し、それが「柳腰」だなどとは思ったことは金輪際ない。そういう解自体、噴飯物の存在すべきでない誤「解」である）。それは映像のリアリズムというよりも、この後に続く須賀川の段の、

風流の初やおくの田植うた

と、信夫の里の段の、

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

の二句から、自然、フィード・バックされるものだからである。そうしてしかもその**早乙女は、私にとってはまさに田植えに際して田の神を祭ったところの古代の巫女としての早乙女を面影としている**と言ってよい。その**早乙女こそが柳の精なる一老人をここに現出させる**のである。

「田一枚植ゑて」は寧ろ、植える動作の描出ではなく、その「田一枚」を「植ゑ」るための有意な時間の経過を示すためのものである。即ち、「柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ」と感じた、ほっと一息ついた西行としての何か不思議に長閑で夢幻的な時間経過の

それである。

さて、その西行の和歌を素材として室町時代に観世信光が謡曲「遊行柳」を創作し、これによってこの柳は広く世に知られることとなり、歌枕の地ともなった。そうして**この句の眼目はまさに、その能「遊行柳」にこそある**のであって、私のこの句の心象風景の中に浮かぶ、西行も、隠された農家の若き早乙女も、そして芭蕉も、これ皆、真の私の「田一枚植ゑて立ち去る柳かな」というイマージュ・ポエトの映像の主役では——ないのである。

謡曲「遊行柳」は以下のように始まる（例によって新潮古典集成を参考に自由に正字化、加工した）。

ワキ・ワキツレ〽歸るさ知らぬ旅衣　歸るさ知らぬ旅衣　法（のり）に心や急ぐらん

ワキ「これは諸國遊行の聖にて候　われ一遍上人の教へを受け　遊行の利益を六十餘州に弘め　六十万人決定往生の御札（みふだ）を　普く衆生にあたへ候　このほどは上總の國に候ひしがこれより奥へと志し候」

ワキ・ワキツレ〽秋津州の　國々めぐる法の道　國々めぐる法の道　迷はぬ月も光添ふ心の奥を白河の　關路と聞けば秋風も　立つ夕霧のいづくにか　今宵は宿をかりごろも日も夕暮になりにけり　日も夕暮になりにけり

ワキ「急ぎ候ふ程に　音にきゝし白河の關をも過ぎぬ　またこれに數多の道の見えて候廣き方へゆかばやと思ひ候」

このワキとワキツレはまさに芭蕉と曾良に他ならない。「奥の細道」の旅は芭蕉にとって『歸るさ知らぬ旅』であり、風狂『諸國遊行』の旅であり、そうしてまさにこれより今日、『白河の』関所を越えて、『心の奥をしら』ざる「奥の細道」の未知なる結界（又は魔界）の奥へと深く入いり行こうとしているのである。

ここに前シテの翁が登場する。

シテ「のうのう遊行上人の御供の人に申すべき事の候」

ワキ「遊行の聖とは札の御所望にて候ふか　老足なりともいま少し急ぎたまへ」

シテ「有難や御札をも賜はり候ふべし　まづ先年遊行の御下向の時も　古道（ふるみち）とて昔の街道を御通り候ひしなり　されば昔の道を教へ申さんとて　はるばるこれまで参りたり」

ワキ「不思議やさては先の遊行も　此道ならぬ古道を　通りし事の有りしよのう」

シテ「昔はこの道なくして　あれに見えたる一叢（ひとむら）の　森のこなたの川岸を　御通りありし街道なり　その上朽木（くちき）の柳とて名木あり。かかる尊（たっと）き上人の。御法の聲は草木までも。成佛の縁ある結縁たり」

地「こなたへいらせたまへとて　老いたる馬にはあらねども　道しるべ申すなり　いそがせたまへ旅人

私はこの劇中のシテの台詞である「老いたる馬にはあらねども　道しるべ申すなり　いそがせたまへ旅人」の主客を転倒させたインスパイアこそが実は、先の殺生石の手前で詠んだ「野を横に馬牽きむけよほととぎす」だったのではあるまいか？　そこで既に柳の精霊は、野夫に変じて芭蕉を遙かにここへと誘ったのである。

地「げにさぞな處から　げにさぞな處から　人跡絶えて荒れはつる　葎蓬生刈萱（むぐらよもぎうかるかや）も　亂れあひたる淺茅（あさぢう）生や　袖に朽ちにし秋の霜　露分け衣來て見れば　昔を殘す古塚に　朽木の柳枝寂びて　影踏む道は末もなく　風のみ渡る氣色かな風のみ渡るけしきかな

シテ「これこそ昔の街道にて候へ　又これなる古塚の上なるこそ朽木の柳にて候　よくよく御覧候へ」

とあって、以下、翁が簡単な西行の事蹟を述べて詠歌が以下のように詠唱されつつ、聖の数珠を受けて翁は柳に寄るように見せて消え失せる。

地〻道のべに　清水流るる柳蔭　清水流るる柳蔭　しばしとてこそ立ち止まり　すずみとる言の葉の　末の世々までも　残る老木はなつかしや　かくて老人上人の　御十念（おんじうねん）を給はり　御前を立つと見えつるが　朽木の柳の古塚に寄るかと見えて失せにけり　寄るかと見えて失せにけり

ここで中入。この間にアイの土地の男が登場、西行の事蹟と柳の精の謂われを仔細に語る（そこでは正しく西行の和歌が出るが、この長々しい台詞は屋上屋でしかも夢幻能の真相をここで完全にバラしてしまうという構成が実は私には今一つ気に入らない）。

夜になって一行が念仏を手向けていると、烏帽子狩衣を着した後シテ老柳の精が登場する。

ワキ「不思議やさては朽木の柳の　われに詞をかはしけるよと」

ワキ・ワキツレ「おもひのたまの数かずに　念ひ（おも）の珠（たま）の数かずに　御法をなして稱名（しようみやう）の聲打ち添ふる初夜の鐘　月も曇らぬ夜もすがら　露をかたしく袂かな　露をかたしく袂かな」

私は、芭蕉はこの聖らの、称名を唱え、念誦の数を数えるさまを、早乙女が田植え唄を歌い、数えながら田を植え終わるシークエンスにダブらせたのではないかと感じている。

老柳の精は念仏の功徳によって救われることとなったことを謝し、「すなはち彼岸に到らんこと　一葉（いちよう）の舟の力ならずや」、その舟は「柳」の一葉の上の蜘蛛が糸を引いて川を渉るさまに始まったと柳の故事を起こし、玄宗皇帝の宮廷の名木であった柳、本邦の清水寺の楊柳観音、宮中の蹴鞠の場庭の式の木としての柳、「源氏物語」の柏木の恋もその蹴鞠がきっかけであったと、如何にも永く生きてきてしまった柳尽し木尽しの懐古をする（この故実の畳み掛けと連想による台詞が私は好きである）。

……シテ「柳櫻をこきまぜて」

地「錦をかざる諸人の　やかなるや小簾（こす）の隙（ひま）　洩りくる風の匂より　手飼の虎の引綱も
ながき思にならの葉の　其柏木の及びなき　戀路もよしなしや　これは老いたる柳色（や
なぎいろ）の　狩衣も風折（かざおり）も　風に漂ふ足もとの　弱きもよしや老木の柳　氣力なうして
弱々と　立ち舞ふも夢人（ゆめびと）を　現（うつつ）と見るぞはかなき

「風折」は風折烏帽子。立烏帽子（たてえぼし）の頂きが風に吹き折られたような形の烏帽子。狩衣着用の際に左折りにして被った（右折りは上皇の式とする）。以下、序ノ舞へと向かう。聖らへの報恩を込めて旧懐の舞いを老精はゆったりと舞い始める。

シテ〽報謝の舞も　これまでなりと　名殘の涙の
地〽玉にも貫（ぬ）ける　春の柳の
シテ〽いとま申さんと　いふつけの鳥も鳴き
地〽別れの曲（きょく）には
シテ〽柳條を綰（わがん）ぬ
地〽手折（たお）るは青柳の
シテ〽姿もたをやかに
地〽結ぶは老木（おいき）の
シテ〽枝も少なく
地〽今年ばかりの　風や厭はんと　漂うふ足もとも　よろよろ弱々と　倒れ伏し柳　仮寝の床の　草の枕の　一夜（ひとよ）の契りも　他生の縁ある　上人の御法　西吹く秋の　風うち払ひ露も木の葉も　散りぢりに　露も木の葉も　散りぢりになり果てて　殘る朽木と　なりにけり

即ち、**この句で「立ち去る」のは、現実の「前ジテ芭蕉演じる翁」なのではなく、実は自らが前段から自己劇化してきたところの、複式夢幻能のアーキタイプに基づく、かの早乙女**

にシンボライズされた巫女が呼び出した「遊行柳」の枯木の柳の精霊たる、「芭蕉自身の扮する後シテ」なのである。そうして彼こそが今、「ここ」――この夢幻世界、否、儚き宿りに過ぎぬこの世――をまさに「立ち去る」のだと――私は信じて疑わないのである。

しかもここにはもう一つの仕掛けがある。それは『別れの曲には柳條を綰(わがん)ぬ』である。「綰ぬ」とは古来、中国に於いて人と別れるに際し、柳の枝を折って環としたものを作って、それを旅立つ人の袂に入れて見送る（再び還れの意を込める）ことをいう。私は健康的な鄙の若き早乙女の植える手振りに、芭蕉はその「柳條を綰ぬ」様を擬えたのではあるまいかと踏んでいる。「遊行柳」の精は最後に柳に絡めて恋の思い出をとうとうと謡うのである。かの精を送るのはどうしても若き女でなくてはならない（それはまさに能には詳しくない私でも「恋重荷」や「綾鼓」に通ずるものとして認識されてある）。さればこそ私には**ここにうら若き早乙女の姿が絶対に必要**なのである。――凡そこれは私の妄想の類い――とどこか自己卑下する気持ちもあったのであるが、実は今回、安東次男の「古典を読む　おくのほそ道」（岩波書店一九九六年刊）をつまびらいたところ、『芭蕉は、河辺で青柳の枝の輪をつくるかわりに、湧清水のちいさな田に苗を植える手ぶりを取出している。植えたばかりの早緑の小山田こそ、朽木柳に贈る別れのしるしにふさわしいと見ているのだ。こういうしゃれたイメージの踏替(ふみかえ)は、日ごろ、漢詩文や謡曲の一つも俳諧に奪ってみたい、と狙っていなければ生まれるものではない』と述べておられるのに出喰わし、驚きとともに快哉を叫んだことを附記しておきたい。それが正しいかどうかよりも孤高の鬼才安東次男の感覚と、かくも繋がり得たことは（但し、安東は田なんかすでに植え終わっていてもいい、実際に植えるのは早乙女とは限らない、あたかも婆あかむくつけき野夫でも何でもいいんだと言いそうな、例のけんもほろろな謂いをしている部分には実は失望したのだが）どこか非常に嬉しくはあるのである。

もう一つ、私が気になっていることが「遊行柳」にはある。

前半、シテ「有難や御札をも賜はり候ふべし　まづ先年遊行の御下向の時も　古道(ふるみち)とて昔の街道を御通り候ひしなり　されば昔の道を教へ申さんとて　はるばるこれまで参りた

り」ワキ「不思議やさては先の遊行も　此道ならぬ古道を　通りし事の有りしよのう」シテ「昔はこの道なくして　あれに見えたる一叢（ひとむら）の　森のこなたの川岸を　御通りありし街道なり」とあり、またその後も、「影踏む道は末もなく」（地）とあってすぐ、シテ「これこそ昔の街道にて候へ　又これなる古塚の上なるこそ朽木の柳にて候　よくよく御覧候へ」ともある（傍線やぶちゃん）。――ここでは執拗に人の行かなくなった「古道」がクロース・アップされる。

実はこの遊行柳を「立ち去」った後、芭蕉は関の明神を通って白坂から「奥の細道」のランドマークたる白河の新関及び旧関跡を通って、その日は旗宿に泊まっている（実にこの日は踏破距離が三日目の間々田から鹿沼の距離と同じ約四十一キロメートルに及んだ特異日であった）のだが、そのルートは如何にも迂遠なコースを辿っていることが分かる。それは白河の新関から旧関を求めた歩いた結果の、一見、労多くして益なき旅だったようにも見受けられるのであるが（山本「奥の細道事典」ではこのルートに「半端なコース選び」という標題を掲げられるなど、この日の白河の関跡訪問は芭蕉痛恨の失策であったという判断を下されている）、実は私は芭蕉は意識的に、最早定かでなくなった古道をわざと迷い歩いたのではなかったか、と思っているのである。そしてそれはまさにこの「遊行柳」の執拗（しゅうね）き古道を経ることによってのみ「奥の細道」には分け入ることが可能であるという心的気分を求めたからだと思うのである。――これは無論、全くプラグマティクではない馬鹿げた行動ではある。しかし私は、芭蕉なら敢えてそれをする――旅の初めに黒羽に於いて、のんべんだらりと過ごしてしまった自身に対する強い自責の念からも、そうしたに違いない――と感ずるのである。

長くなった。最後に「奥の細道」の遊行柳の段を示す。

＊

又清水流るゝの柳は芦野の
里にありて田の畔に殘る此所の郡守故
戸部某の此柳みせはやななと折々に

の給ひきこえ給ふをいつくのほとにやとおもひしを今日この柳のかけにこそ立寄侍つれ

田一枚植て立去ル柳かな

＊

■異同

（異同は〇が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

〇故戸部某の　→　●戸部某（こほうなにがし）の

〇此柳みせはやななと　→　●「この柳見せばや」など

■やぶちゃんの呟き

・「郡守故戸部某」下野国蘆野藩（三千石）第十九代藩主で旗本の蘆野民部資俊（寛永一四（一六三七）年～元禄五（一六九二）年六月二十六日）。創作としての人物の隴化が行われている。「郡守」は実際の藩主（領主）を漢代の官名に、また「戸部」は民政・財政を司った唐代の官名に擬してある。問題は初稿に近いと考えられている上記自筆本には「故」とあることに着目せねばならぬ。再掲示するが、芭蕉がこの遊行柳を訪れたのは元禄二年四月二十日（グレゴリオ暦一六八九年六月七日）であった。従ってこの時、この蘆野資俊はまだ存命だった。ところが上に見る通り、「奥の細道」自筆本では「此所の郡守故戸部某」と書いているのである。これによって芭蕉が現在我々が知る「奥の細道」の原形を執筆したのは早くとも、実際の旅（元禄二年九月六日の大垣で終わり）から三年後の元禄五年六月二十七日よりも後であったということが分かるのである。因みに現在、この「奥の細道」自筆本は元禄六～七年成立と推定されている。」

＊

本日二〇一四年六月　七日（当年の陰暦では五月十日）

元禄二年四月二十日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　七日

である。【その二】先に述べた通り、遊行柳を「立ち去」った後、芭蕉は午後一杯をかけて関の明神を通って白坂から一つのランドマークである白河関所跡（三世紀半ばには廃絶していたと推定されている）に向かった（この日は旗宿に泊まっているが（午後八時頃着）、この旗宿自体が関跡と伝えられてもいた。実にこの日は踏破距離が三日目の間々田から鹿沼の距離と同じ約四十一キロメートルに及んだ特異日であった）。芭蕉はこの記念すべき奥州の入り口で何故か、句をものしていない。以下、「奥の細道」の白河の段を引く。

＊

心もとなき日数重るまゝに白河の
關にかゝりて旅心定りぬ
いかてみやこへと便もとめしも
斷りなり中にも此關は三關の
一にして風※の人こゝろをとゝむ
秋風を耳に殘しもみちを俤
にして青葉の梢猶あはれ也
卯の花の白妙に茨の花の咲そひて
雪にもこゆるこゝちそする
古人冠をたゝし衣裝を改
し事なと清輔の筆にもとゞめ
置れしとそ

曽良

卯の花をかさしに關の晴着（キ）哉

＊

［やぶちゃん注：

■字注

「※」＝「馬」＋（「燥」―「火」）。

■やぶちゃんの呟き

この白河関跡への奇妙な行程については、前の遊行柳の段の私の注を参照されたい。

「心もとなき日数重（かさぬ）るまゝに白河の關にかゝりて旅心定りぬ」「日數」を詠み込んだ白河関の古歌には、

都いでし日數は冬になりにけりしぐれてさむき白河の關（藤原秀茂「続古今和歌集」九〇三）

白河の關までゆかぬ東路も日數へぬれば秋かぜぞ吹く（津守国助「続拾遺和歌集」六七三）

かぎりあればけふ白河の關こえて行けば行かるる日數をぞしる（源兼氏「続後拾遺和歌集」五九七）

がある（和歌の表記は安東次男「古典を読む　おくのほそ道」の注を参考にした）。

「いかでみやこへと便りもとめし」は、

たよりあらばいかで都へ告げやらむけふ白河の關は越えぬと（平兼盛「拾遺和歌集」三三九）

を指す。

「三關」ここ磐城（いわき）の白河（現在の福島県白河市旗宿一帯に比定）、常陸（ひたち）の勿来（なこそ）（所在地不詳で実在を疑う向きもある。概ね現在の福島県いわき市に比定し、吉田松陰は「東北遊日記抄」で現在のいわき市勿来町関田字関山付近を比定しているが、ウィキの「勿来関」によれば、実はここに「勿来」の地名が古来からあったわけではないと否定的である）、羽前（うぜん）の鼠（ねず）が関（現在の山形県鶴岡市大字鼠ヶ関）の奥羽三関。

「風※」「※」＝「馬」＋（「燥」―「火」）であるが不詳。「風騒」の誤字か。「風騒」は「風」

が「詩経」の「国風」を、「騒」が「楚辞」の「離騒」を指し、ともに詩文の模範とされたことから詩歌をつくること及び自然や詩歌に親しむ風流の謂いとなった。

「秋風を耳に殘し」「後拾遺和歌集」の能因法師の五一七番歌、

陸奥國（みちのくに）にまかり下りけるに、白河の關にてよみ侍りける
都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關

を踏まえる。能因の初めての陸奥行脚の作とするが、下向の事実を疑い、また虚構とする古注も多い。

「もみぢを俤にして青葉の梢猶あはれ也」「千載和歌集」の源頼政の三六五番歌、

嘉應二年法住寺殿の殿上歌合に、關路　落葉といへる心をよみ侍りける
都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河の關

を踏まえる。「嘉應二年」は西暦一一七〇年。「青葉の梢」は容易に本作で先行する日光の段の「あらたふと青葉若葉の日の光」を想起させる。安東次男氏は「古典を読む　おくのほそ道」の注で、日光の句が『四月一日（五月十九日）相当、この段の「青葉の梢猶あはれ」が四月二十一日（六月八日）相当。ひとしお秋風の興ある関を、夏に越すなら、頼政の歌を杖にたのもうという思付がうまい』と述べておられる。言い得て妙とはこのことをいう。こういう注こそが価値ある達意の注である。

「卯の花の白妙に」は、「千載和歌集」の藤原季通の一四二番歌、

白河院鳥羽殿におはしましける時、をのこども歌合し侍りけるに、卯花をよめる
みてすぐる人しなければ卯のはなのさけるかきねや白河の關

や、「夫木和歌抄」の定家の二〇四四番歌、

夕づく夜入りぬる影もとまりけり卯の花咲ける白河の關

などを踏まえるものと思われる。

「茨の花の咲きそひて」安東次男氏によれば、「茨」を読み合わせた作例は見当たらないとあり、そこが芭蕉の眼目であった。新潮古典集成の「芭蕉文集」で校注者富山奏氏はこの超弩級の歌枕である白河の関越えに際し、芭蕉の『叙述には古歌が氾濫』、まさに『古来の風雅に』芭蕉は『陶酔しているが、そうした中で「いばらの花」は「青葉のこずゑ」と共に非和歌的眼前の実景で、伝統的風雅に根ざしつつ斬新な詩境開拓へと意欲する彼の姿勢が見られる』と述べておられる。

「雪にもこゆるこゝちぞする」安東氏は、「夫木和歌抄」の久我通光の五九八番歌、

白河の關の秋とは聞きしかど初雪分くる山のべの道

及び、「続後拾遺和歌集」の大江貞重の四九二番歌、

別れにし都の秋の日數さへつもれは雪の白河の關

を挙げつつ、『「(雪にも)こゆる」は、越えてゆきと解するのが尋常だろうが』[やぶちゃん補注:雪の中を越えてゆくのより、「青葉の梢」「卯の花の白妙に茨の花の咲そひ」た中を越えてゆく方が。]、『勝るという情の含みがあるようだ』と述べておられ、まことに共感するものである。

「古人冠をたゞし衣装を改し事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ」藤原清輔(長治元(一一〇四)年～治承元(一一七七)年)は、平安末の公家・歌人で平安時代の歌学の大

成者として知られる。ここは彼の代表的な歌学書である「袋草紙」の上巻に載る以下の記事を指す（底本は岩波新古典文学大系版を用いたが、恣意的に正字化し一部の記号を変更した）。

竹田大夫國行と云ふ者、陸奥に下向の時、白河の關過ぐる日は殊に装束(さうぞ)きて、みづびんかくと云々。人問ひて云はく、「何等の故ぞや」。答へて云はく、「古曾部入道の『秋風ぞ吹く白河の關』とよまれたる所をば、いかでかけなりにては過ぎん」と云々。殊勝の事なり。

●「竹田大夫國行」藤原国行（生没年未詳）。従五位下。諸陵頭（陵墓管理の諸陵寮に長官）。「後拾遺和歌集」以下に六首入集されている。この話は「俊頼髄脳」にも載る。「愚秘抄」（伝定家撰とする歌学書）ではそれより前の受領歌人橘為仲とする。

●「みづびんかく」「水鬢掻く」で、急場の身だしなみのために鬢の毛を水で撫でつけて整えることを指す。

●「古曾部入道」能因法師。高槻の古曽部（現在の大阪府高槻市古曽部町）に住居を構えて、かく称した。

●「けなり」「褻形」である。普段着。「晴れ」と「褻(け)」の「け」である。

「卯の花」バラ亜綱バラ目アジサイ科ウツギ *Deutzia crenata* 。和名は「空木」で茎が中空であることに由来する。「卯の花」の名は空木の花の意又は卯月（旧暦四月）に咲く花の意ともされる。個人サイト「木々@岸和田」の「ウツギ」に、出雲大社で火を熾す際に用いる「火燧杵(ひきりきね)」には、一部にこのウツギが用いられており、『邪気を払う力があるとされる』とあり、さらに『水田に水を入れる際に卯の花を飾るということもあったようである』ともある。後者はまさにこの田植えの時期にぴったり符合する。曾良は神道家でこうした伝承に詳しかったと思われ、また、もしかするとそうした習俗がこの地方には当時しっかりと残っていて、芭蕉や曾良はそれを嘱目したのかも知れない——と考えると、実に「奥の

細道」の旅が初夏の爽やかさを伝えているように私には思われるのである。」

＊

本日二〇一四年六月　八日（当年の陰暦では五月十一日）

元禄二年四月二十一日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　八日

である。この日、前夜泊まった旗宿で、なおも白河古関跡の探索に拘って旗宿の明神などを訪ね、その後に矢吹（現在の福島県西白河郡矢吹町（まち）へと向かった（因みに旗宿は後の百十一年後の寛政一二（一八〇〇）年に当時の白河藩主松平定信の文献考証によって古関跡と認証された。ウイキの「白河の関」によれば、一九六〇年代の旗宿での発掘調査の結果、土塁や空堀を設け、それに柵木（さくぼく）をめぐらせた古代の防禦施設が検出されたことから、昭和四一（一九六六）年に「白河関跡」として国の史跡に指定されたとある。芭蕉が探しあぐんでから実に二百七十七年後のことであった）。

奥州今のしら河に出る

早苗（さなへ）にもわがいろ黒き日數哉

みちのくの名所名所こゝろにおもひこめて、先せき屋の跡なつかしきまゝに、

ふる道にかゝり、いまの白河もきこえぬ

早苗にも我色黒き日數哉

しら河の關をこゆるとて、ふるみちをたどるまゝに

西か東か先（まづ）早苗にも風の音

［やぶちゃん注：第一句は「泊船集」（風国編・元禄十一年）、第二句は「曾良書留」に載る句形。第三句は「曾良書留」に載るもので、

我色黒きと句をかく被直候。

と後書する句（この「我色黒きと句を」の「と」は「の」の誤記であろう）。後に白河に住んでいた俳人で、会う機会を失してしまった白河藩士何云（かうん）宛に福島須賀川から送った芭蕉の書簡に、

白河の風雅聞もらしたり。いと殘多かりければ、須か川の旅店より申つかはし侍る

　關守の宿を水鶏にとはふもの　はせを

又、白河愚句、色黒きといふ句、乍單より申参候よし、かく申直し候

　西か東か先早苗にも風の音

と記す（「關守の」の句は後に掲げる）。この「白河の風雅聞きもらしたり」とは風流人士何云を訪ねることが出来なかったことをお洒落に述べた謂い。「乍單」は乍單齋（さたんさい）で「奥の細道」で後に出る須賀川住の俳人相良等躬（さがらとうきゅう）の別号。これによって前の二句の改作であることが分かる。

前二句は「古今著聞集」の「巻第五　和歌」の「三　能因法師の祈雨の歌と白河關の歌の事」の後半に載る後世の作話と見られる滑稽譚に基づく。以下に引用する（底本は新潮古典集成をもととしつつ、恣意的に正字化した）。

能因は、いたれるすきものにてありければ、

　都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の關

とよめりけるを、都にありながらこの歌をいださむこと念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠り居て、色をくろく、日にあたりなして後、「みちのくにのかたへ修行のついでによみたり」とぞ披露し侍りける。

芭蕉自身が駄句というのもさもありなん、ではある。

しかしこの一見、別な句に見える第三句も実は能因のあの和歌を踏まえており、同じ早苗を素材としたという点では確かに改作なのである。

植えられた早苗を見、そして耳を欹てれば、秋風ではないにしても、そのそよぐ風が西風か東風かと聴き取ることがそれなりに出来ることだ、という諧謔なのである。山本健吉氏は「芭蕉全句」で、この「西か東か」は風向きを言うと『同時に芭蕉の漂泊の思いが籠められていよう。やや大げさな表現だが「先早苗にも風の音」は心の籠った詞句で、「わがいろ黒き」に勝ること数等である』と評しておられる。しかし乍ら、この風の音はやはり軽い、軽過ぎると私は思う。されば結局、芭蕉は捨てるのであった。」

＊

本日二〇一四年六月　九日（当年の陰暦では五月十二日）

元禄二年四月二十二日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　九日

である。この日は矢吹を立って、須賀川本町の相楽伊佐衛門等躬宅（「相楽」は「相良」とも書く）に着き、この日の夜、芭蕉・等躬・曽良の三吟にてこの句を発句とする歌仙が巻かれた。

風流の初やおくの田植うた

［やぶちゃん注：「奥の細道」。「曾良書留」には歌仙が総て示されてあり、この発句の前に、

奥州岩瀬郡之内、須か川、相樂伊左衛門ニテ

と前書する。主人への挨拶句であると同時にこの主人が奥州第一歩の初めに逢った正真正銘の風雅人であるという讃頌から、さらにはこれより分け入らんとする奥羽の持つそれ自体の風雅への讃歌でもある。私はこの郡の農民の民俗を「風流の初め」と措定したこの句が何とも言えず好きである。

「相樂伊左衛門」等躬という人物は須賀川の駅吏だったとも言われる土地の名士で俳人。江戸の貞門の石田未得（天正一五（一五八七）年～寛文九（一六六九）年）の門で宗匠未得没後の同門の重鎮でもあったから、芭蕉から見ると、門系の異なる先輩格に当たり、年齢も五十二歳で芭蕉（四十六）より六つ年上であった。芭蕉は彼の家でこの二十二日から七泊滞在、二十九日に郡山に向かって旅立った。

因みにこの折りの歌仙の脇は等躬が、第三は曾良が、

風流の初やおくの田植歌　　芭蕉

覆盆子を折て我まうけ草　　等躬

水せきて晝寝の石やなをすらん　　曾良

と付けている。

等躬の脇は「覆盆子を折て我まうけ草」と読み、「覆盆子」は苺・木苺のこと。「まうけ草」は恐らく造語で、「まうけ」は客を饗応するための食い物、「草」は「種」で類い――風流一興の初めが田植え唄とならば、木苺を折り取って私の粗末な馳走の膳とでも致しましょう――といった感じであろう。

曾良の第三はちょっと凝った作りで、木苺を折り取るのは一転、石を枕に、しかもそれで渓流の流れを堰きとめて、頭を涼しくして昼寝をしようとしている風流人の仕草にとりなしもの。漱石枕流をパロってもある。

芭蕉は恐らく、この歌仙を巻いた折りの思い出が余程楽しかったのであろう、以下に見るように「奥の細道」ではわざわざこの脇と第三のことが、句を示さずに語られてある。

＊

兎角して越行まゝにあふくま川
をわたる左りに会津根高く右に
岩城相馬箕春の庄常陸下野の地をさかひて
山つらなるかけ沼と云所を行にけふは空
曇りて物ゝ影うつらす須か川の
駅に等窮といふものをたつねて
四五日とゝめらる先白河の關いかに
こえつるやと問長途のくるしみ身-心
つかれ且は風景に魂うはゝれ懐旧
に腸を斷て、はかはかしうおもひ

めくらさす

　風流の初やおくの田植うた

無下にこえむもさすかにと語れは

脇第三とつゝけて一巻となし

ぬ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○けふは空曇りて物ゝ影うつらす　→　●今日は空曇りて物影うつらず

［やぶちゃん注：「物ゝ影うつらす」は「物の影うつらず」と読む。］

○脇第三とつゝけて一巻となしぬ　→　●脇、第三とつづけて三巻となしぬ

■やぶちゃんの呟き

「会津根」会津磐梯山。標高一八一六・二九メートル。

「右に岩城相馬箕春の庄常陸下野の地をさかひて山つらなる」は「右に岩城（いはき）・相馬（さうま）・三春（みはる）の庄（しやう）、常陸（ひたち）・下野（しもつけ）の地を隔（さか）ひて山連なる」の謂い。須賀川から北（奥羽の方向）に向かって見ると南から順に磐城・三春・相馬は総て身の右側に位置しており、江戸の外縁である常陸（現在の茨城県）や下野（現在の栃木県）とは峨峨たる山によって完全に隔てられてある、というのである。芭蕉の向かわんとする正面にまさにそれ以外に退路なき覚悟の「奥の細道」がただ一筋続いているのである。

「かげ沼」影沼。当時は蜃気楼（陽炎）の立つことで有名であった。一説に現在の福島県岩瀬郡鏡石町付近にあった沼とも、この一帯の地名であったともされ、正確な場所は確定されていない（鏡石町にある小さな沼で鎌倉時代の泉親衡の乱に纏わる悲劇伝承を持つ「鏡沼」がこの芭蕉の史跡「かげ沼」として一応認定されてはいる）。

「等窮」等躬。字が違うのはやはり確信犯の文学的虚構の一つか。

「四五日とゝめらる」既に示した通り、七泊八日の長逗留であったから、明白な虚偽であ

る。奥州に分け入ったばかりである。半分に減らしたのは、創作として都合が悪いからであり、芭蕉自身の秘かな忸怩たる思いからでもあったろう。

「先(まづ)白河の關いかにこえつるや……」以下の部分はやはり全部嘘である。既に示した通り、事実は芭蕉は白河越えで「早苗にもわがいろ黒き日數哉」のトンデモ句を作っており、芭蕉はその句を実際に等躬に示し与えており、それを等躬が即座に芭蕉が逢えなかった白河藩士の何云(かうん)に手紙で送り示してしまったことをここ須賀川で滞在中に知って、慌てて、「西か東か先早苗にも風の音」と改作したものを手紙で書き送っているからである。しかもその手紙でははっきりと「又、白河愚句、色黒きといふ句、乍單(さたん)より申參候よし、かく申直し候」（傍線やぶちゃん）と述べているのである（「乍單」は等躬の別号乍單齋）。

「脇第三とつゝけて一巻となしぬ」実際には歌仙一巻しか巻いていない。「三巻」は興が尽きなかったことを示すための虚構である。かく手放しで悦ぶ描写を見ても、実際のこの夜の連句の席の愉しげな雰囲気がよく伝わってくる。」

＊

本日二〇一四年六月　十一日（当年の陰暦では五月十四日）

元禄二年四月二十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　十一日

である。須賀川での吟。

世の人の見付(つけ)ぬ花や軒の栗

桑門可伸(かしん)は栗の木のもとに庵(いほり)をむすべり。

傳聞(つたへきく)、行基菩薩の古(いにしへ)は西に縁(ゆかり)ある木なりと、枝にも柱にも用ひ給ひけるとかや。

幽栖(いうせい)心ある分野(ありさま)にて、彌陀の誓ひもいとたのもし

かくれ家(が)や目だゝぬ花を軒の栗

桑門可伸のぬしは栗の木の下に庵をむすべり。

傳聞、行基菩薩の古、西に縁ある木成と、杖にも柱にも用させ給ふとかや。

隠栖も心有さまに覺て、弥陀の誓もいとたのもし

隠家やめにたゝぬ花を軒の栗

［やぶちゃん注：第一句は「奥の細道」の、第二句は「俳諧　伊達衣」（等躬編・元禄一二（一六九九）年自序）の、第三句は「曾良俳諧書留」の句形。第二句については「金蘭集」（浣花井甘井(かんかんせいかんい)編・文化三（一八〇六）年序）に、

元祿二年卯月廿四日簗井彌三郎宅にて

と前書し、真蹟懐紙写しにも同様の前書があるとする。「曾良随行日記」には、

廿四日　主の田植。晝過ヨリ可伸庵ニテ會有。會席、そば切。祐碩賞之。雷雨、暮方止。

とある。「主」は等躬。「可伸」は前書や以下の「奥の細道」本文にもある通り、遁世僧の法名。俗名を矢内弥三郎とし（角川文庫版「おくのほそ道」に拠る表記）、俳号が栗齋（りっさい）であった（諸本はそれ以上の情報を載せないが、遁世の僧なればこそ「それ」でこそ句が引き立つというものか）。ここで栗の木を前書や句に置き詠んだのはこの彼の俳号を通わせる挨拶句だからである。

この日、可伸の庵に於いてこの句を発句として芭蕉・栗斎・等躬・曾良・等雲・深竿・素蘭による七吟歌仙が興行された（「曾良俳諧書留」に所収。即ち第三句が初案である）。

可伸栗齋は脇を、

隠家やめにたゝぬ花を軒の栗　　翁

稀に螢のとまる露艸（つゆくさ）　　栗齋

と付けている。

「随行日記」の「祐碩賞之」（祐碩、之を賞す）は吉田祐碩（俳号が等雲）が主設（あるじもう）け、饗応役となったという意。彼は当地の医師であった。

以下、「奥の細道」。

＊

この宿の傍に大きな成栗の木陰をたのみて

世をいとふ僧有橡ひろふ太山もかく

やと閒に覺られてものに書付侍る

其詞

栗といふ文字は西の木と

書て西方淨土に便ありと

行基菩薩の一生杖にも
柱にも此木を用給ふとかや
世の人の見付ぬ花や軒の栗

＊

「この宿の傍に」山本健吉氏の「芭蕉全句」によれば、彼は等躬の邸内にこの庵を結んでいたとある。邸内であっては遁世の雰囲気が出ない。以下、西行引き出しつつ（後注参照）、うまく作為したものである。伊藤洋氏のサイト内にある同氏の新聞コラムに、法外の句を得、しかも庵はすっかり土地の名所となって後に恐縮してしまう（というより隠棲者としては有り難迷惑でもあったであろう）僧可伸の話が載る。「伊達衣」に記したずっと後の可伸自身の弁解と、句が載り、とても面白い。そこだけ引用しておく（恣意的に正字化した）。

＊

予が軒の栗は、更に行基のよすがにもあらず、唯實をとりて喰のみなりしを、いにし夏、芭蕉翁のみちのく行脚の折から、一句を殘せしより、人々愛る事と成侍りぬ。

梅が香に今朝はかすらん軒の栗　須賀川栗齋可伸

＊

「橡ひろふ太山もかくと」「太山」「みやま」と読み、深山と同義。伊藤洋氏はその「芭蕉Q&A」で、『こういう用語の使い方は芭蕉独特のものと言っていいと思います。「太山〈みやま〉」は「深山〈みやま〉」のことですが、同時に「太山〈たいざん〉」にもつながり、そこから中国の「泰山」につながります。大好きな漢詩の中国文学と、尊敬してやまない西行とを介在して芭蕉の心の中で「深山」が「泰山」・「太山」へと変質していったのでしょう』と述べておられる。安東次男氏は「古典を読む　おくのほそ道」で、「山家集」から、

山深み岩にしただる水尋（と）めむつがつ落つる橡拾ふほど

世をいとふ名をだにもさは留(とど)めおきて數ならぬみの思出にせむ

を引いて参考歌とする。まさにこの前書からして、翌元禄三年の膳所での歳旦吟、

薦を着て誰人います花の春

に通う理想的な遁世の風狂人を、芭蕉は西行をオーバー・ラップして創り上げた可伸像に見立てているのだ、と私は思うのである。

「閒に」は「しづかに」と訓ずる。」

＊

本日二〇一四年六月　十四日（当年の陰暦では五月十七日）

元禄二年四月二十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　十四日

である。【その一】以下の句は以前に出た白河で会う機会を失した白河藩士何云（かうん）に宛てて福島須賀川から送った芭蕉の書簡に出るもので、書簡自体は四月下旬のものと考えられている。今日に配しておく。何云は須賀川で滞在させて貰っている等躬とは昵懇の中であったらしい（だからあのトンデモ「早苗にもわが色黒き日數哉」が即座に送られてしまった）。

關守の宿を水鶏（くひな）にとはふもの

關守の宿をくゐなに問ふもの

［やぶちゃん注：第一句は書簡に出る句であるが、「とはふもの」は「とはうもの」が正しい歴史的仮名遣である。正しい形で再掲しておく。

關守の宿を水鶏（くひな）にとはふもの

二句目は曾良「雪まるげ」所収の句形であるが、やはりこれも歴史的仮名遣に誤りがあり、「くゐな」は「くひな」である。やはり正しい形で再掲しておく。

關守の宿をくひなに問ふもの

「とはうもの」は「問はうもの」で、「う」は平安後期に発生した推量・意志の助動詞「む」の転じた助動詞「う」（活用は（う）／〇／う／う／う／〇／〇）の連体形でこれは仮定の意を

現わし、それを受ける「もの」はこの場合は順接の詠嘆の終助詞（形式名詞「もの」から派生若しくは終助詞「ものを」を略したものとも）である。逐語的には「白河の関の番人の宿所を水鶏に訪ねればよかったなあ」の意（以下、語注参照）。以下、当該書簡総てを出す（伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」のものを参考にさせて頂いた）。

＊

白河の風雅聞きもらしたり。いと殘多かりければ、須か川の旅店より申つかはし侍る。

關守の宿を水鶏にとはふもの　　はせを

又、白河愚句、色黑きといふ句、乍單より申參候よし、かく申直し候。

西か東か先早苗にも風の音

何云雅丈

＊

句以外を訳しておく。

＊

白河では風雅の人である貴君とお逢いする機会を持てず、残念なことでした。そのことがたいそう心残りでしたので、須賀川の滞在先、御知己の乍単斎等躬殿の方よりお便り申し上げます、ご挨拶の一句まで。

関守の宿を水鶏にとはふもの　　はせを

また、白河での小生の愚句、「色黒き」という句ですが、何とまあ、乍単斎殿が貴君へ申し遣わした文に記された由なれど、あのとんでもない句は、かく詠み直しました。御笑覧のほど。

西か東か先早苗にも風の音

何云御元へ

＊

「白河の風雅聞きもらしたり」という書き出しは既に何云からの来簡があり、そこで芭蕉に逢えなかったことを惜しむ内容が書かれていたことへの返礼とも思われる。

「雅丈」は芭蕉がしばしば用いる脇付。函丈（かんじょう）を洒落れてひねったものか。函丈は「礼記」曲礼上の「席の間丈を函（い）る」に由来し、師から一丈も離れて座る意。通常は師又は目上の人に出す書状の脇付である。彼が目上であるかどうかは不詳。藩士である彼に敬意を示したものと思われる（尤も芭蕉は年下の門人で俳諧師であった去来などにもこの脇付を用いている）。

「關守」何云を歌枕たる旧関の白河の関守に擬えた。

「水鶏」その関守の宿をクイナに尋ねればよかったというのである。これはツル目クイナ科クイナ *Rallus aquaticus* ではなく、古くは単に「水鶏（くひな）」と呼ばれたクイナ科ヒメクイナ属ヒクイナ *Porzana fusca* と思われる。このヒクイナはその鳴き声が連続して戸を叩くようにも聞こえる独特のものであることから、古くから「水鶏たたく」と言いならわされてきた雅語で、古典文学にもしばしば登場する。家の戸を叩いて訪ね歩いているように聞えることから、ここではだから――水鶏は住まい・宿について詳しかろうから――と擬人化して洒落たものである。参照したウィキの「ヒクイナ」には「古典文学とヒクイナ」の項が設けられ（以下、引用はそのままではなく正字化してある）、

> くひなのうちたたきたるは、誰が門さしてとあはれにおぼゆ。（「源氏物語」「明石」）
>
> たたくとも誰かくひなの暮れぬるに山路を深く尋ねては來む（「更級日記」）
>
> 五月、菖蒲ふく頃、早苗とる頃、水鶏の叩くなど、心ぼそからぬかは。（「徒然草」）

といった古典が示された後、芭蕉の推定元禄七（一六九四）年の大津の吟（年代には疑義もある）、

> 此宿は水鶏も知らぬ扉かな

が引かれて、『「扉」は「敲く」ものであることから「水鶏」の縁語になっている』と注されてある（同句は「笈日記」に「おなじ津なりける湖仙亭に行て」の前書を持つもので、湖仙は高橋瓢千のことで三井寺に近い琵琶湖畔に人を避けて隠棲していた（だから「水鶏も知らぬ」）その庵を訪ねた折りの句とする）。

どんな声か？ montyjapan 氏の鳴き声及び Owattyan 氏の鳴き声の動画で確認出来る（後者は最後に姿を少し見せる）。

ヒクイナは湿原・「河」川・水田などに棲息する湿地性の水鳥で、芭蕉が歩いた一帯は豊かな緑と水に囲まれ、阿武隈川の源として那須山系が蓄えた清冽な水が豊富な土地柄であったからヒクイナ（クイナとは当時は区別されていなかったからクイナでも問題ないが、実際には古典の「水鶏（くひな）」はヒクイナを指していることが多い、とウィキの「クイナ」の方の記載にあるのである）が実際にそこここで見られ鳴いていたに違いない。そしてこれはそもそもが白「河」の縁語としても引き出せる。

またこのヒクイナとは「緋水鶏」で、リンク先の「形態」の項にも、『上面の羽衣は褐色や暗緑褐色』『胸部や体側面の羽衣は赤褐色』、『腹部の羽衣は汚白色』なものの、『淡褐色の縞模様が入』り、『虹彩は濃赤色』で『嘴の色彩は緑褐色で、下嘴先端が黄色』、『後肢は赤橙色や赤褐色』を呈するとあって、まさに色彩としても「白」河の景に微かな紅一点を加えるイメージであることにも着目出来るように私には思われる（yyyokoa 氏の実際のヒクイナの動画）。

最後に。現在、ヒクイナ *Porzana fusca* は環境省レッドリストの準絶滅危惧種である。」

＊

本日二〇一四年六月　十四日（当年の陰暦では五月十七日）

元禄二年四月二十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　十四日

である。【その二】「曾良随行日記」によれば、この四月二十九日に芭蕉は石川の滝を見物に出かけている。以下の句はその滝見が、一度、五月雨の増水で河が増水しているから取り止めとなった際の一句であるから、二日ほど前に設定して公開することとする。これはしかし、いい加減に設定したものではない。「曾良随行日記」には二十四日の饗応を受けた午後は『雷雨。暮方止』で、二十五日は『主物忌（ものいみ）』で食事を別にしたとあり（そんな日にへらへら滝見物なんぞに行こうはずもない）、二十六日は『小雨』とあって、二十七日は『曇』で連句を催した後、『芹澤ノ滝へ行』くとある（この滝は角川文庫注によれば現存しないので位置は不明）。そして次の二十八日は実はこの須賀川を発つ予定であったことが『發足ノ筈（はず）定ル』も芭蕉を訪ねてきた知人がいたために『延引ス』とあるのである。結果、須賀川発は二十九日、実際の石川の滝を見物がてらとなったのである）……梅雨の降りの中、徒然なるままに何云宛書簡をものして「水鶏」の句を吟じた、その日の午後のこと、雨は上がったものの、未だ川の水かさは高く、今暫く待たれたがよろしいでしょうと言われて（実際の案内を申し出たのは主である等躬ではなく、先の饗応役をした等雲であった。以下、私の注を参照）、取り敢えず渡渉をせずに見られる「芹澤の滝」を代わりに見に行って本句をものして「見れなかった」石川の滝の形見とした（その時は形見としたつもりだったが、翌日、思いがけぬ来訪者によって旅立ちが延び、幸せにも旅立ちのその日に石川の滝を実見出来た、ということになるのであるが）……というシチュエーションは如何か？私は結構、ありそうな話だし、気に入った設定なのである。

須賀川の驛より東二里ばかりに石河の滝といふ有るよし。

行（ゆき）てみん事を思ひ催し侍れど、このごろの雨にみかさりて

河を渡る事かなはずといひて止みければ

五月雨（さみだれ）は滝降（ふり）うづむみかさ哉

［やぶちゃん注：「俳諧葱摺（しのぶずり）」（等躬編・元禄二年）。「曾良俳諧書留」では、同じ前書があって、以下のように表記違いの相同句と後書がある。

さみだれは瀧降りうづむみかさ哉　　翁

案内せんといはれし等雲と云人のかたへ

かきやられし。藥師也。

等雲は前に注したように「藥師」、医師であった。「雪まろげ」には、

阿武隈川の水源にて

とあるのは、後年の曾良がこの句を後日に実景として見たことに合わせて作文したものであろう。

「石川の滝」須賀川の南東へ約五・九キロメートル（曾良随行日記『一里半』の実測による）の現在の須賀川市前田川にあり、現在は「乙字（おつじ）ケ滝（たき）」と呼ばれ、福島県須賀川市と石川郡玉川村の間を流れる阿武隈川にある滝である。ウィキの「乙字ケ滝」によると、落差六メートル、幅百メートルで、この『滝周辺では阿武隈川が「Z」もしくは「乙」の字に大きく屈曲して流れている。滝幅の広さから「小ナイアガラ」とも呼ばれている』とある。

二十九日の「曾良随行日記」を引く。【　】は右傍注。

＊

一　廿九日　快晴。巳中尅、發足。石河瀧見ニ行。【此間、さゝ川ト云宿ヨリあさか郡。】須か川ヨリ辰巳ノ方壹里半計有。瀧ヨリ十餘丁下ヲ渡リ、上へ登ル。歩（かち）ニテ行バ瀧ノ上渡

レバ餘程近由。阿武隈川也。川ハヾ百二、三十間も有之。瀧ハ筋かへニ百五、六十間も可有。高サ二丈、壹丈五、六尺、所ニヨリ壹丈計ノ所も有之。

＊

「さゝ川」現在の郡山市安積町笹川（この滝からだと北北西へ直線距離で十二キロメートルの位置にある）。「十餘丁」一キロ強。「百二、三十間」約二一九～二三七メートル。「百五、六十間」二七三～二九一メートル、「高サ二丈、壹丈五、六尺、所ニヨリ壹丈」滝の落差は大きいところで六メートル、四・六～四・九メートル、場所によって三メートルとあるから、滝の落差は変わらないものの、当時の滝の幅（氾濫原）はかなり広かったことが分かる。

この句意は、

――五月雨は何と！　壮大な瀑布をも阿武隈川に降り沈めてしまった！　その水嵩（みずかさ）の恐るべきことよ！――

で、想像の諧謔を込めつつ、増水によって行けなかったことを残念に思っている当の慫慂してくれた等雲への慰藉を込めたものであることに気付かねばならぬ。曾良が「雪まろげ」で実景として採ったのは、実はいかにも無粋であったということである。」

＊

本日二〇一四年六月　十八日（当年の陰暦では五月二十一日）

元禄二年五月　二日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　十八日

である。【その一】四月二十九日に乙字ヶ滝を見た芭蕉は、そのまま等躬の誂えた馬で小作田を経由して磐城街道の守山宿へ着き、そこで問屋善兵衛の饗応を受け、同所の神宮寺大元明王及び善法寺に参詣の後、また善兵衛の用意した馬に乗って、その日のうちに岩城街道を北へ向かい、阿武隈川を舟で渡って、日の入り前に郡山の旅宿に到着しているが、「曾良随行日記」は最後に『宿ムサカリシ』と記している。翌五月一日（同年の四月は小の月）日の出とともに出立、歌枕の安積の里を経、かの安達が原の黒塚を見た。その日の宿である福島には日の入りより少し前に到着している。「曾良随行日記」は前日と対称的に最後に『宿キレイ也』と記す（この二つの宿評の間に安達ヶ原が入っているのは私には興味深い。「キレイ」な宿こそ実は鬼婆の宿りの表の様子であり、「ムサ」き部屋こそカニバルの魔の空間だから。芭蕉はこの逆の体験に却ってせっかくの幻想を萎ませてしまったのかもしれないなどと勝手に夢想もするのである）。この五月一日の実動距離は実に四十九キロメートルに及んでいる（ここまでで最長）。翌二日、快晴の中を出立、すぐに信夫の里（現在の福島市北東部の山口地区。旧信夫郡岡山村山口）の文知摺観音境内にある信夫文知摺の石を見たものと思われる。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

忍ぶもぢ摺の石は、陸奥福島の驛にありて、

往來の人の麥草を取て、この石を試みけるを、

里人ども心憂く思ひて、此谷に轉し落しぬ。

石の面は下様に伏したれば、今はさするわざする事もなく、

風雅の昔に替はれるを嘆きて

早苗つかむ手もとやむかししのぶ摺

しのぶの郡しのぶ摺の石は、茅(ちがや)の下に埋れ果て、いまは其(その)わざもなかりければ、風流のむかしにおとろふる事ほいなくて

五月乙女(さをとめ)にしかた望(のぞま)んしのぶ摺

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は「卯辰集」（楚常編・北枝補・元禄四年奥書）の、第三句目は「曾良俳諧書留」の句形。第三句目には、

加衛門加之ニ遣ス

とある。これは「奥の細道」にも出る、この句を作った後日に就いた仙台宮城野で知り合った画工北野加右衛門で俳号を和風軒加之(かし)といった。その出逢った後にこの既に作った句を彼に送った、それを曾良が書き留めておいたのであろう。それ故に「俳諧書留」では俳句の順列の齟齬が生じているように見えるのである。

本句はまずは、百人一首で知られる河原左大臣源融の、

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに

に代表される信夫の里の面影である。「しのぶもぢずり」は、福島県伊達郡川俣町字寺前の「本田絹」本田　語氏のサイト「絹の工場」の「しのぶ　もちづり」をご覧戴くに若くはない。何故ならここでは実際に石を用いた古式の「文知摺染の再現」のところでその行程と出来上がった染物が写真で一目瞭然だからである。その解説によれば、『「しのぶもちずり」とは、山繭をつむいで織り、天然染料で後染めする絹織物』で、『奈良時代からの養蚕

と絹織物の産地であったこの地方で、自然の石（綾形石）を利用した摺り染めの絹織物が、「信夫絹」・「しのぶもちずり」として宮中に献上され、おおいに好評を博し、その「みだれ染め」といわれる紋様から、「乱れ心」を意味する枕詞』さえ生まれたとする。この何か不思議な響きを持つ名については『綾形石の自然の石紋と菱形、しのぶ草の草の葉形を摺り込んだ風雅な模様が、信夫もちずり絹と言う説。また一説には、「もじ」とは真っ直ぐでなく、もじゃもじゃしたという意味らしく、いろいろな色彩が入り乱れて染められ、その乱れた模様がなんとも優雅であったという説』が伝わっているとある。以下、「石の伝説」の部分の「信夫文知摺保勝会」の掲示板より転記したものを掲げさせて頂くと（一部記号を追加・除去し、空欄を詰めた）、

《引用開始》

貞観年中（九世紀半ば）の頃、陸奥国按察使（巡察官）源融公が、このあたりで道に迷い、この里（山口村）の長者と出会う。その娘虎女と恋仲になるが、都からの使いにより、公は再会を約して都に戻ることになった。

再会を待ちわびた虎女は、「もちずり観音」に百日詣りの願をかけ、満願の日に、観音様のお告げをいただく。文知摺石を磨きあげると、愛しい人が現れるとのこと。毎日、心と祈りを込めて磨いていると、公の面影が浮かんで見えた、しかしそれは一瞬のことで、思慕の情は益々つのり、嘆き、悲しんだ虎女は、ついに病の床につくことになってしまった。病がいよいよ重くなり、明日をも知れずという時に、都から公の虎女にあてた歌が届けられた。

みちのくの　忍ぶもちずり　誰ゆえに　みだれそめにし　我ならなくに

この悲恋を伝え聞いた近々の子女たちが、自分の恋しい殿方の面影に出逢う為に、競って文知摺石を磨きに押し寄せたため、田畑を荒らされる農民が、怒って山から石を落としたために、現在の位置に鎮座したとされている。またこの石を「鏡石」と別名で呼ばれるのは、このことがあってからだそうである。

《引用終了》

このサイトだけで私は国文学的な先行作の諸引用をする必要を感じていない。何より『あらかじめ湿した羽二重を敷き、藍の生葉を摺り込む』及び『水洗いした紅花を摺り込む』とある画像の仕草を見て頂きたい。これはまるで田植えの手つきとそっくりだと私は思うのである。

既に述べてきたように、一句を感ずるためには私は何よりも実際の想起出来る映像へのヒントこそが必ずや必要条件なのであって、故実や古歌といった文芸作品の飽き飽きした堆積は十分条件（それもやや退屈な）でしかないと考える口なのである（事実、この句がインスパイアしたと思しい和歌は諸本が出す参考歌には全く見当たらない）。そうして芭蕉のこの句の魂も、私は実は、それに尽きると心得ているのである。

芭蕉は――稲霊（いなだま）を招ずるところの巫女の末裔である早乙女たちの幽かに艶っぽい、その、苗代用の田の苗を取って実際の本当の田に植え替える（恐らくは後者の田植えにそれを代表させているとしてよい）仕草に、古代染めをした古えの神聖な織姫たちの「しのぶ摺り」の手捌きを重ね合わせて、遙かに古き代の神女の面影を「偲んで」いるのである。初案と思われる第三句は早乙女を出してそれをあからさまにあつらえ望む形で（ここにはしかし恋の色に染めておくれという、芭蕉の早乙女への恋句の雰囲気が濃厚にあるように私には思われる）、あまりに如何にもであると感じたに違いなく、早乙女を字背に送ったものの、「つかむ」では艶やか感じが出ず、また字余りが野暮な野夫の腕のようなごっつさを呼んでしまい、何より下五「しのぶ摺」の「する」の連想動作とも微妙に食い違う。自ずと選ばれたのが「とる」であったと考えると、私は実に腑に落ちるのである。そうして**その見えない早乙女こそが、遙かに前の影の早乙女の登場たる「田一植ゑて立ち去る柳かな」と美しい額縁をなし、その額の中には「風流の初めやおくの田植うた」という一枚の絵、否、一曲の艶やかな早乙女たちの田植え唄が美しく嵌め込まれている**のである。

以下、「奥の細道」を引く。

＊

等窮か宅を出て五里計檜皮

の宿を離れてあさか山有道より
近し此あたり沼多しかつみ刈比
もやゝちかふなれはいつれの草を花
かつみとは云そと人々に尋侍れとも
更知人なし沼を尋人にとひかつみ
かつみと尋ありきて日は山の端にかゝりぬ
二本松より右にきれて黒塚の岩屋
一見し　福嶋に泊るあくれはしの
ふもと摺りの石を尋て忍ふのさとに行
はるか山陰の小里に石の半土に埋てあり
里の童への來りてをしへけるむかしは
この山の上に侍しを往來の人の麥艸を
あらしてこの石を試侍をにくみて
この谷につき落せは石のおもて下
さまにふしたりと云さもあるへき事もや

早苗とる手もとやむかししのふ摺

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○福嶋に泊る　　↓　●福島に宿る

○さもあるへき事もや　↓　●さもあるべきことにや

■やぶちゃんの呟き

「五里計」「ごりばかり」と読む。凡そ一九・六キロメートル。

「檜皮の宿」「ひはだのしゆく（ひわだのしゅく）」と読む。現在の福島県郡山市日和田町。

「あさか山」現行流布本では「淺香山」とする。安積（あさか）山。現在の郡山市日和田町字安積の

安積山公園がある小さな丘に同定されている。歌枕。

「此あたり沼多し」古歌で「安積（あつみ）の沼」は次の故事に基づく歌枕。

「かつみ」本文にもあるように、すでに正体不詳の花の名である。藤原実方の故事に基づく。「無名抄」等によれば、長徳元（九九五）年に一条天皇の面前で藤原行成と歌について口論となって怒った藤原実方が、行成の冠を奪って投げ捨てて天子の怒りを買い、歌枕を見て参れと命ぜられ、陸奥守に左遷された（実際には清少納言との三角関係によるスキャンダルが喧嘩の原因という説もある）。彼はこの地で端午の節句（芭蕉がここを過ぎたのもまさに直近の五月一日であった）を迎えたが、人々が節句にもかかわらず菖蒲（しょうぶ）を葺かないのを見、国府の役人に質すと、そのような習慣はなく、この地にはその菖蒲なるものがないと答えたことから、その代わりとして「安積の沼」に咲く花「かつみ」という花を刈り取って軒に葺かせるようにした、とする。この「かつみ」は真菰（まこも）とも菖蒲（あやめ）とも蘆（あし）の花とも言われるものの、現在でも正体不明である。なお、郡山市では単子葉植物綱キジカクシ目アヤメ科アヤメ属ヒメシャガ *Iris gracilipes* をこの「カツミ」として「市の花」としているが、沼で刈るという表現から考えると、ヒメシャガではないと私は思う。この異様に長々しい部分――**「かつみ刈るころもやや近」いからと、どの花を「花がつみ」というのかと逢う人ごとに狂人のように訊ねるが、「さらに知る人もな」い。それでも遂には自ら沼を訪れ、またしても人に問い、ついには「かつみかつみ」と狂ったようにつぶやきつつ、可憐な幻の花「かつみ」を探し求める老いたる芭蕉の異常なる姿**――は非常に気になる。それを綴ったのも大いに気になるのである。則ち、これに基づく「新古今和歌集」の「恋四」のよみ人しらずの六七七番歌、

みちのくのあさかの沼の花かつみかつ見る人に戀ひやわたらむ

を念頭においていることを考えれば、この和歌が――時々わずかに垣間見るだけ、だからこそ、こうしていつまでもその人への恋しい気持ちが、永遠に続いてしまうのであろうか

――という微妙な恋句であることから、この時、芭蕉はまさに私が先に挙げた**謡曲「恋重荷」や「綾鼓」の、老いらくの恋に身を焦がして遂にはそれを命と引き換える主人公と自身を重ねている**のではないか？　そうしてその恋の相手はずっと以前に登場していた。――**「かつみかつみ」と「かつみ」を「かさね」ねるそれは実は「かさねかさね」の謂い**ではなかったか？……**早乙女のエロチシズムが芭蕉の永遠の少女への恋に再び火を熾した**といってもよい……さてさてこれも……私の勝手な妄想ではあるが……

「二本松」現在の福島県二本松市。日和田の約十キロメートル北に位置する。

「黒塚の岩屋」現在の二本松市安達ヶ原にある観世寺境内にある。サイト「巨石巡礼」の「安達ヶ原・観世寺」が解説もあって、何よりモノクロームの写真が秀抜である。それにしても芭蕉は何故、黒塚で句をものさなかったのか？　芭蕉が謡曲「黒塚」をどう料理したかと想像するだけでもわくわくするのであるが、以上のように「奥の細道」本文では何故か異様にそっけない（「かつみかつみ」がファナティクに長いのに）。これは恐らく「黒塚」の持つ強烈な猟奇性を、結局は連句的で流暢な構成を志向する「奥の細道」に遂に投げ込み得なかったからだと私は推理している。芭蕉はここで「恋」を選ぶためにあえて「鬼趣」を捨てたのである。存外、鬼趣を好んだ芭蕉が「奥の細道」では敢えてそれを意識的に避けている感じがする。これはまたどこかで再説してみたい。

「石半土に埋てあり」「いし、なかば、つちにうずもれてあり」と読む。

「さもあるべき事もや」「さもあるべきことにや」孰れも、本当にそんなことがあるものだろうか？　いや、そんな酷いことは決してあるまい。という歌枕の衝撃的な無風流でプラグマティクな理由による衰亡に対する、芭蕉のそうした酷い原因の否定を含んだ反語的疑問文であると私はとる。原案の係助詞「も」だと、土地の人々が田畑を荒らされることに業を煮やし、遂には伝説の石を突き落とした、という破廉恥極まりない行いに対して、いや、そんな残酷なことも世にはあろうかも知れぬ（もしかすると芭蕉はここで僅かに斬り捨てたこの直近の黒塚の鬼婆の余香（残臭）を利かせたものかも知れない）というニュアンスを私は強く感じる。寧ろ、そんなこと、あろうはずはない、というのが決定稿ではな

いか。芭蕉は「奥の細道」で意に反した深い失望や刺すような批難は決して表現していないからである。そんな口を尖らしたような指弾が孕んでいたら、何より、直後の句の拭い難い疵がつくからである。」

＊

本日二〇一四年六月　十八日（当年の陰暦では五月二十一日）

元禄二年五月　二日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　十八日

である。【その二】この日の午前中に信夫文知摺の石を見た後、午後は芭蕉の愛する義経所縁の瑠璃光山医王寺を訪ね、そこで一句をものした。「奥の細道」では日を「五月朔日也」と虚構している。虚構の意図に就いては後に注する。

笈（おひ）も太刀（たち）も五月（さつき）にかざれ紙幟（かみのぼり）

弁慶が笈をもかざれ紙幟

［やぶちゃん注：第一句は「奥の細道」の、第二句は曾良本「奥の細道」の句形でこれが初案と思われる。

この「かざれ」という命令形には、実は一見、過去の伝承を無条件に受け入れているかに見える芭蕉の古跡故実遺蹟に対する、ある種の強いリアリスティックな反発感が読み取れるように思われる。「曾良随行日記」を見ると以下のようにあるからである。やや長いが、彼等の実行程を知るためにも引く。

＊

一　二日　快晴。福嶋ヲ出ル。町ハヅレ十町程過テ、カメアセイガラベ村ハヅレニ川有。川ヲ不越、右ノ方ヘ七八丁行テ、アブクマ川ヲ船ニテ越ス。岡部ノ渡リト云。ソレヨリ十七八丁、山ノ方ヘ行テ谷アヒニモジズリ石アリ。柵フリテ有。草ノ觀音堂有。杉檜六七本有。虎が清水ト云小ク淺キ水有。福嶋ヨリ東ノ方也。其邊ヲ山口村ト云、ソレヨリ瀬ノウエヘ出ルニハ月ノ輪ノ渡リト云テ、岡部渡ヨリ下也。ソレヲ渡レバ四五丁ニテ瀬ノウエ也。山口村ヨリ瀬ノ上ヘ貳里程也。

一　瀬ノ上ヨリ佐場野へ行。佐藤庄司ノ寺有。寺ノ門へ不入。西ノ方へ行。堂有。堂ノ後ノ方ニ庄司夫婦ノ石塔有。堂ノ北ノワキニ兄弟ノ石塔有。ソノワキニ兄弟ノハタザホヲサシタレバはた出シト云竹有。毎年、貳本づゝ同ジ様ニ生ズ。寺ニハ判官殿笈・弁慶書シ經ナド有由。系圖モ有由。福嶋ヨリ貳里。こほりヨリモ貳里。瀬ノウヱヨリ一リ半也。川ヲ越、十町程東ニ飯坂ト云所有。湯有。村ノ上ニ庄司館跡有。福嶋ヨリ貳里。こほりヨリモ貳里。瀬ノウヱヨリ一リ半也。川ヲ越、十町程東ニ飯坂ト云所有。湯有。村ノ上ニ庄司館跡有。下リニハ福嶋ヨリ佐波野・飯坂・桑折ト可行。上リニハ桑折・飯坂・佐場野・福嶋ト出タル由。晝ヨリ曇、夕方ヨリ雨降、夜ニ入、強。飯坂ニ宿。湯ニ入。

＊

ここで実は芭蕉は「寺ニハ判官殿笈・弁慶書シ經ナド有由。系圖モ有由」、則ち、「由」であって、芭蕉は義経の笈と「称する」ものも、弁慶の書写したと「称する」経も系図と「称する」ものも見ていないのである。これは勿論、後の金色堂と同様に寺僧や堂守がおらず、物理的に見られなかったのかも知れない。見たいと言ったにも拘わらず見られなかったのかも知れない（後述）。少なくとも「見なかったという事実」は「随行日記」の発見を待たずして、否、少なくとも「奥の細道」を初めて私が読んだ時に私はそう感じた。

則ち、私は以下のように初読時に感じたのである。

彼はそう「称せられた」物どもが芭蕉には、ある種下らぬ贋物として認識されていたからではないのか、と。「爰に義經の太刀弁慶が笈をとゞめて什物とす」というそっけない言いはまさにそれを証左するものではあるまいか？

義経の北方逃避行伝説は実際にはずっと後世になって作られたものだが、そこでは平泉以北、北海道に至る点々としたルートが辿れ、そこここに史実上はあり得べからざる義経や弁慶の置いて行ったと「称する」「笈」なんぞがあることを私は知っている。ともかくも、芭蕉はこの当時、既に生じていたであろう判官贔屓、義経生存説の噂話に対しては、一線を画していたと考えるものである。そもそも本当に悲劇の貴種を愛する者は、その人物が実は死なずにどこかでこれこれこうした、こうしようとした、が、残念なことに失敗した、

なんどという最下劣な、貴種流離の疵にしかならぬ江戸浄瑠璃の世界のようなトンデモ伝説としての流言飛語には、実は極めて冷淡であったはずだと思うからである（但し、私は個人的には実は私は義経の大陸逃避行説を可能性としてはあり得たと考えている。但し、ジンギスカン＝義経説という近代のファナティックな軍人によるでっち上げのそれとは全く別なものとしてである）。されば、芭蕉がこの句で「かざれ」と強い口調で言い放つ意図が見えてくる気がする。そもそも秘かに北へ逃避行する義経主従の誰彼が「太刀」を何らかの礼として気軽に置いて行ったのでは悲劇の武士の面目はそれこそ丸潰れであるし、そんな太刀などあろうはずもないのだ。だからこそ芭蕉はありがちな「笈」の後に、仰天の「太刀」を配したのだ（「奥の細道」の前文では確信犯で）。

――私が愛する義経主従の、その怪しげな笈だろうが、最も噴飯物に価する太刀だろうが、何もかも――ええぃ！　皆、什物なんぞとして祭り上げるのはやめにして、いっそ、頑是ない今の子らの節句の飾り物にするがいい！　それだったら、きっと義経・弁慶主従のまことの供養に、そして貧しい子らの育ちを願うに相応しいものとなろうぞ！――

と禅僧の如く一喝している、というのが私の読みなのである。

なお、山本胥氏は「奥の細道事典」で、私とは全く異なった解釈をなさっておられる。即ち、「不入」を「入らず」ではなく、「入れず」と読み、結構、苦労して探し当てた医王寺では実際には、寺僧が芭蕉が見たかった義経弁慶所縁のそれらの拝観を断ったのだとされ、「奥の細道」の本文がその行間で訴えている真相は『「寺に入て茶を乞へば、（すげなく門前ばらいをくう。）爰に義経の太刀・弁慶が笈をとゞめて什物とす（るが、それを見せてくれない。）」だから、すぐあとにつけた「笈も太刀も」の句は、五月だから、鯉のぼりのように自慢たらしく誰にでも見せるようにすればよいのに、と非難をこめてよんだとも受けとれる』（ルビは省略した）とし、実は芭蕉はこの医王寺で受けた仕儀を恨んでここを綴ったのだとされる。だから、その不快感が尾を引いて、続く飯坂温泉の段にある、『遙なる

行末をかゝえて、斯る病覚束なしといへど、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路にしなん』というブルージーな感懐を援用、遂にこうした旅程の不備（それは多分に先達者たる曾良の責任ということになろう）と医王寺の仕打ちに対してキレた芭蕉が『一歩も動きたくなくな』って、『道路に寝ころび、手足をばたばたさせてダダをこねる幼児に返』ったような憤りこそがこの前後の字背に潜むのだとされる。非常に面白い（特に芭蕉が一歩も動きたくなくなったというところは確かにリアルではある）。面白いが、であれば、実は笈も弁慶の遺墨も見れなかったことをこそ書かねばなるまい。それでなくては読者へそうしたプラグマティックな怒りは伝わらない。山本氏の読解は近代になって「曾良随行日記」が見つかって「不入」を見てしまった我々だからこそ辿りつける『真相』『真意』であって、「奥の細道」を精読しても出てくる解ではないと私は思うのである（言っておくが、私の解釈は「不入」を示してはいるが、句の解釈上は、それを必要条件とするものではない）。

因みに「紙幟」とは、山本健吉氏の「芭蕉全句」によれば、『寛永ごろから民間で武者絵や鍾馗（しょうき）などを紙に刷ったのぼり』（当然これはそれほど高価なものとは思われないし、所詮、彩色したややきらびやかな上製品としても、所詮、雨が降ればだらだらばらばらになるところの紙絵に過ぎぬ）『で、端午の節句に立てる。折しも五月であるから、義経主従の笈も太刀も節句の飾り物とせよ、と言った』のだとされ、『そこらには紙のぼりや鯉のぼりなどが五月の空にひるがえる景色が目についたのである』と評しておられる。私に言わせれば、この寺に什物としてあるそれらは所詮、そうした勇ましい武者絵の、しかしたかが「紙幟」の類いと全く同じだ！　だったらいっそのこと、一緒にこの五月の節句にこそ「かざれ」！　それこそ真実だ！　と珍しく、**芭蕉は実は句の背後で珍しく憤っているのではないか**、と読むのである。なお、安東次男氏は「古典を読む　おくのほそ道」のこの「紙幟」の注にさりげなく、貝原益軒の「日本歳時記」を引いているが、そこには五月『朔日より五日まで、兒童の弄事とす』とあるとして、わざわざ「朔日より」に傍点を打っておられる。安東さんらしい。これこそ――「まさにその通りにせよ！　だから私は嘘をついて「五月朔日」とわざわざしたのだ！」――という芭蕉の心の叫びが、怒りが聴こえると私は思うのであ

る。安東さん、やっぱ、大好きだわ！

大方の御批判を俟つものではある。

以下、「奥の細道」（漢字の踊り字「〱」は「々」に代え、平仮名の「ヘ」は正字化した）。

＊

月の輪のわたしを越て瀬の上と云宿に

出ッ佐藤庄司か旧跡はひたりの山際一

里半計に有飯塚の里鯖野と聞

て尋々行に丸山と云に尋あたる

是庄司か旧館也麓に大手の跡な

と人の教をしゆるにまかせて泪を落シ又

かたはらの古寺に一家の石碑を殘ス

中にも二人の嫁かしるし先あはれなり

をんななれ共かひかひ敷名の世に聞へ

つるもの哉と袂をぬらしぬ堕涙

の石碑も遠きにあらす寺に入て

ちやを乞へは爰に義經の太刀弁慶か

笈をとゝめて什物とす

弁慶か笈をもかされ昏幟

五月朔日の事也其夜飯塚にとまる

出湯あれは湯に入て宿をかるに

土坐に筵を敷てあやしき貧家也

ともし火もなけれはゆるりの火かけに

寐所をまうけてふす夜に入て雷

鳴雨しきりに降てふしたる上に

雨もり蚤蚊にせゝられて眠らす

持病さへおこりて消入許になん短

夜の空もやうやう明れは又旅立ぬ猶

夜の名殘心すゝます馬かりて桑折

の驛に出ゞはるかなる行末をかゝえ

てかゝる病覺束なしといへと羈旅

邊土の行脚捨身無常

の觀念道路にしなんこれ

天の命なりと氣力聊とり直し

道縦横に踏て伊達の大木戸を

こす［やぶちゃん注：以下、改行字空けなしで次の武隈の段に続く。］

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○弁慶か笈をもかされ帋幟　→　●笈も太刀も五月にかざれ帋幟

○出湯あれは湯に入て　→　●温泉（いでゆ）あれば湯に入て

［やぶちゃん注：表記通り、読みは同じであるが、一応、示しておいた。］

○ゆるりの火かけ　→　●ゐろりの火かげ

［やぶちゃん注：「ゆるり」は「いろり」に同じい。］

○ふしたる上に雨もり　→　●臥せる上より漏り

○桑折の驛に出ス　→　●桑折の驛に出づる

［やぶちゃん注：「出ス」は「出づ」の誤記であろう。流布本は連体中止法。］

■やぶちゃんの呟き

私のこれは「注」ではなく、「呟き」である。しかも私のプロジェクトはあくまで句をシンクロニティで味わうことが主眼で、高校の古典の授業の再現をしようというのではない。だから特に興味のない地誌及び故実語注を語る気はさらさらない。ここではそれを特に我

儘に出そうと思う。意味の分からぬ向きには有象無象の注釈書やネット上の「おくのほそ道」の美事な紙幟の如きサイトがまさに氾濫して翻っている。そちらをどうぞご覧あれかし。

「佐藤庄司」佐藤元治（基治）（生没年不詳）。鎌倉初期の陸奥の豪族で、後に出る「二人の嫁」の「二人」、義経の忠臣佐藤継信及び忠信兄弟（後述）の父。信夫及び伊達郡の管理者として信夫庄庄司或いは湯庄司と号した。妻は藤原秀衡の娘（ウィキの「佐藤基治」では秀衡の父『基衡の弟清綱（亘理権十郎）の娘で秀衡のいとこに当たる乙和子姫』とする）であったともされ、文治五（一一八九）年の奥州合戦の際、信夫庄に於いて頼朝率いる鎌倉軍に抵抗して捕らえられたが、後に赦免されて本領安堵されたとも伝えられると「朝日日本歴史人物事典」にはある。ウィキの「佐藤基治」では奥州藤原氏との関係について、さらに突っ込んで書かれていて、『乙和子姫には、継信・忠信・藤の江・浪の江などの子があったが、その藤の江を秀衡の三男忠衡に娶わせ岳父として同盟関係を築いた』とし、『歴史学者の角田文衛によると、当時としては珍しい佐藤一族の義経に対する熾烈とも見える忠節は、君臣の関係だけでは説明がつきにくく、義経が平泉時代に迎えた妻は、佐藤基治の娘でなかったかとする説を唱えている。飯坂の佐藤氏系図のひとつに基治女・浪の戸（源義経側室）とある』と記す。また奥州合戦での事蹟についても、文治五（一一八九）年八月、『源頼朝が奥州討伐のため奥大道（奥州街道）を北上してきた際、一族の伊賀良目七郎らと石那坂（現在の福島市平石）に陣を』張って防戦、「吾妻鏡」文治五年八月八日条によると、『この合戦で基治は鎌倉方の常陸入道念西子息である伊佐為宗らと戦って敗れ、晒し首にされたとある』一方で（私の電子テクスト「北條九代記　頼朝卿奥入付泰衡滅亡　パート3〈阿津樫山攻防戦Ⅱ〉」の注に全文引用があるの参照されたい）、同じ「吾妻鏡」同年十月二日条『によると、赦免されて本領に戻った』とある（「吾妻鏡」の同条には『二日、戊子（つちのえね）、囚人佐藤庄司・名取郡司・熊野別當等、厚免を蒙りて各々本所へ歸ると云々』とある）。『福島県白河市表郷中野庄司戻には、基治に由来する「庄司戻しの桜」がある。伝承によると、義経に従い鎌倉に赴く二人の子どもを見送り、別れる際に「二人の子どもがそ

の忠節を全うするなら根付け。そうでなければ枯れよ」といって地面に杖を挿したが、立派に成長し見事な桜が咲いたという（現在は案内板のみ残る）』。『石那坂で戦死したとする資料が多いが、『信達一統誌』では生け捕りの後赦免され、後「大鳥城」で卒去したとあり、『大木戸合戦記』にも捕虜となり、宇都宮の本陣に送られたとある』と記す（最後の注を参照されたい）。

「一家」「いつけ」と読む。佐藤一族。

「二人の嫁がしるし」佐藤継信・忠信の妻の墓碑（現存しない）。伝承や古浄瑠璃「八島」などでは、二人は夫たちが義経に忠義を尽くして死んだと知った際（兄継信は義経郎党として平家追討軍に加わったが屋島の戦いで討死にしたというのが事実。「平家物語」では平教経が義経に放った矢を身代わりとなって受けて戦死したとされるが、射手である教経自身が実際には一ノ谷の合戦で討死している。弟忠信は都を落ちる義経に同行するも宇治の辺りで義経と別れて都に潜伏、文治二（一一八六）年九月に人妻であるかつての恋人に手紙を送った事から、その夫によって鎌倉から派遣されていた御家人糟屋有季に居所を密告されて潜伏していた中御門東洞院で襲撃され、奮戦の末、自害して果てた。以上はそれぞれウィキの「佐藤継信」及び「佐藤忠信」に拠った）、彼女ら自らが鎧甲を着して、恰も両兄弟が生きて凱旋したかのような形（なり）に身を包んで、兄弟の病床にあった老父母を慰めたとすることを踏まえ、「をんななれ共かひかひ敷名の世に聞へつるもの哉と袂をぬらしぬ」と感慨したのである。この芭蕉のテンションの高まり方は特異点と言える。

「堕涙の石碑」「堕涙」は「だるゐ（だるい）」で、見れば涙を流ずにはおれない石碑の謂い。「晉書」の「羊祜伝」に載る故事。晉の襄陽の名将であった大守羊祜（ようこ）の没後、その遺徳を慕った民が生前に彼がその景観を愛した峴山（けんさん）に建てたという羊公碑。その銘文を読めば誰もが清廉な羊祜を惜しんで泣いたという、孟浩然や李白も詠んだ名跡である。

「義經の太刀弁慶が笈」前に記した通り、虚構。実際には義経の笈と弁慶書写の経。

「持病」芭蕉は慢性的な胃腸疾患と胆石、痔疾などを持病としていたといわれている。「旅に病んで夢は枯野をかけ　る」で既に注したが、彼の死因は潰瘍性大腸炎が疑われ、この

痔というのも実はそれであったのかも知れない。

「五月朔日の事也」前に述べた通り、虚構。事実は五月二日。

「道縦横に踏で伊達の大木戸を越す」この「伊達の大木戸」、現在の福島県国見町にあった伊達藩領内に入るための関所は、古の義経に忠義を尽くした佐藤兄弟の父佐藤庄司が奮戦の末に敗退し、頼朝軍の捕虜となった古戦場であった（前注参照）。まさにこの最後の「道縦横に踏（ふん）で伊達の大木戸を越す」という大袈裟な表現は、かつての**老兵佐藤基治が最後の死を賭して大童となって奮闘した、その荒武者振りの様を芭蕉自らに擬えたもの**として理解出来るのである。実は**そうした役作りのためにも、この直前の異様にブルージーな荒涼たるプレ画面が必要だったのではないか？　この延々続く異様な「五月朔日」の光景は、まさにそうした演出**なのだと私は思うのである（実際、「曾良随行日記」にも持病の悪化は記されておらず、この後の旅程を見ても芭蕉の歩みには結滞が全く見られない）。なお、この「縦横に踏で」については、山本胥氏の「奥の細道事典」に昭和二二（一九四七）年に志田延義氏が『俳句研究』に発表した「六方（法）説」を紹介されている。これには個人的には非常に興味をそそられはした。則ち、寛文年間（一六六一～一六七三年）には歌舞伎に取り入れられていた、当時の町奴（まちやっこ）風の例の大袈裟な手振り足振りのあれである。確かに現在の歌舞伎では「勧進帳」の弁慶の飛び六方、「義経千本桜」「鳥居前の段」の佐藤忠信（実は源九郎狐）の狐六方と義経・弁慶絡みで強烈な親和性が窺われるものではある。何より私自身が個人的に、文楽の「勧進帳」や、何より、黒沢明の映画作品の中で最も好きな「虎の尾を踏む男達」の愛するエノケンの六方のパロディを即、想起してしまってジーンとくるからではある。しかし、どうも違う。元禄の芭蕉が、たかだか二十年ばかり前にアクロバティックな歌舞伎に取り入れられたばかりの、事大主義的なヤンヤ喝采型のオーバー・アクトに好感を持っていたようには、私は実は思えないからである。志田氏のそれは心情的にはどこかシンパシーを感ずるものの、私には最終的に、現代の我々の眼前に堆積した文芸作品の一部の、心霊写真のようなシミュラクラに過ぎないものにしか思われないのである。」

＊

本日二〇一四年六月　二十日（当年の陰暦では五月二十三日）

元禄二年五月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　二十日

である。【その一】前日の三日は飯坂から白石へ向かいそこで宿泊、この四日の午前八時頃に出た芭蕉は、まず阿武隈川の河口北岸に位置する岩沼の、竹駒明神の別当寺裏にある竹垣をした、陸奥の数多い歌枕の中でも藤原実方・橘季通・西行・能因など詠歌の多さでは屈指の名松「武隈の松」を見ている。「奥の細道」では笠島の段と恣意的に入れ替えられているが、ここでは実際の時系列に従って示す。岩沼宿は古くは「武隈（たけくま）」と呼ばれ、奥州街道と陸前浜街道の分岐点の宿場として栄え、多賀城へ下向する官人のための旅館（武隈館）が置かれて、承和九（八四二）年には伏見稲荷を勧請したこの竹駒神社が創建されるなど古くから重要な宿駅であった（ここは主にウィキの「岩沼市」に拠った）。

武隈（たけくま）の松みせ申せ遅桜（おそざくら）と、擧白（きよはく）と云ものゝ餞別したりければ

櫻より松は二木（ふたき）を三月越（みつきご）シ

むさし野は櫻のうちにうかれ出（いで）て、武隈はあやめふく比（ころ）になりぬ。

かの松みせ申せ遅櫻と云けむ擧白何がしの名殘も思ひ出て、なつかしきまゝに

散うせぬ松や二木を三月ごし

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目はまさに挙白編「四季千句」（元禄二年奥書）の句形で初案。

「擧白」蕉門門人草壁挙白。奥州出身（恐らくはこの武隈の近辺か）であったらしい。「武隈の松みせ申せ遅櫻」は江戸出立の際の芭蕉への彼の餞別句で、かの芭蕉旅立ちの頃、まだ残っていた遅咲きの桜があった。それを……師が奥州へお入りになる頃にはそれすらも

散っていましょうほどに――せめても古歌に知られ、私にとっても懐かしい二木の銘木武隈の松なりとも、天然の自然よ、師へと美事に、それをお見せ申せ……という謂いであろう。挙白の肉声が伝わる。

「二木」土の際から二つに分かれていることをいう。以下の「奥の細道」で芭蕉の言うように、後に何度も植え替えられたものであるが、現存するそれも二股に分かれてある。これは、「後拾遺和歌集」の橘季通の一〇四一番歌、

則光朝臣のもとに陸奥に下りて武隈の松をよみ侍りけり
武隈の松はふた木を都人いかがと問はばみきとこたへむ

を踏まえつつ、「櫻より」の上五は江戸出立から今までの「三月」（千住を発った三月二十七日からだと三十六日であるが、「草の戸も住替る代ぞひなの家」の桃の節句からだと、六十日、正しく「三月」になるのである）の「みつき」に「見」を掛けて、さらに季通の古歌の「見き」へと通わせ、中七は同じく季通の歌をそのままに裁ち入れながら「松」には三月も「待つ」に掛けて、しなやかな武隈の松を実見し得た悦びを、挙白の餞別への三月振りの返礼の挨拶としたものである。諸本は初案（「散りうせぬ松」で松落葉を利かせて夏の句）や決定稿（芭蕉がいう名所の雑の句）の季を云々するが、問題にならぬ。芭蕉自らが述懐するように、一句の中にあって季の詞ならぬものはない、というのが私の支持するところである。諸家は多く、この句を評価しないようであるが（句自体は確かに技巧を凝らしながらも面白い句ではない）、私はこの「武隈の松」の段全体が「奥の細道」の旅に於ける芭蕉の大切な通過点としてあったのだと感じている。だからこそ、道順を時系列で前の笠島と入れ替えて示したのだと私には思われるのである。武隈の松という大切な陸奥の祝祭的「細道」に出逢うためにはどうしても、難渋し、歌枕を諦め、「ぬかり道」を抜けてくる必要があったのだ。

＊

［やぶちゃん注：この前に「笠島の段」が入る。【その二】で煩を厭わず、「笠島」から「武隈の松」までの全文を示すこととする。］

武隈の松にこそ目覺る心地はすれ
根は土際より二木にわかれてむかしの
姿うしなはすとしらる先能因法師おもひ
出往昔むつのかみにて下りし人此
木を伐て名取川の橋杭にせられたる
事なとあれはにや松は此たひ跡もなしとは
よみたり代々あるはきりあるひは植次
なとせしと聞に今將千歳の
かたちとゝのほひてめてたき松のけしきに
なん侍し

　たけくまの松みせ申せ遲櫻
と擧白と云ものゝ餞別したり
けれは

　櫻より松は二木を三月越シ

＊

■やぶちゃんの呟き

「武隈の松にこそ目覺る心地はすれ」角川文庫版「おくのほそ道」は「徒然草」の十五段、いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目さむる心地すれ。を引くが、ここはまさにそのような古典籍による飾りなどではなく、まさに奥の細道の入口の三里塚の如く、新鮮な自然実景への感動としての芭蕉のメルクマールとしてのランドスケープとして感じられたのだと私は信じて疑わない。

「往昔（そのかみ）むつのかみにて下りし人此木を伐て名取川の橋杭にせられたる」昔、陸奥守となって赴任した藤原孝義なる者がこの松を切って橋に使用したことが顕昭「袖中抄」や藤原清

輔「奥義抄」に載るが、名取川のそれとしたという記事は見当たらない、と安東次男氏の注にある。

「松はこのたび跡もなし」前の伝承を受け、「後拾遺和歌集」の能因法師の一〇四二番歌、

みちの國にふたたび下りて後のたびたけくまの松も侍らざりければよみ侍りける

武隈の松はこのたび跡もなし千歳を經てやわれは來つらむ

を踏まえた謂い。」

＊

本日二〇一四年六月　二十日（当年の陰暦では五月二十三日）

元禄二年五月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月　二十日

である。【その二】「曾良随行日記」を見ると、

四日　雨少止。辰の尅、白石を立。折々日の光見る。岩沼入口の左の方に竹駒明神と云有。その別當の寺の後に武隈の松有。竹がきをして有。その辺、侍やしき也。古市源七殿住所也

○笠島（名取郡之内）、岩沼・増田之間、左の方一里計有、三の輪・笠島と村並て有由、行過て不レ見。

○名取川、中田出口に有。大橋・小橋二つ有。左より右へ流也。

○若林川、長町の出口也。此川一つ隔て仙臺町入口也。

夕方仙臺に着。其夜、宿國分町大崎庄左衞門。

とある。【その一】で述べたように、順列が入れ替えられ、しかも以下に示す通り、「奥の細道」では泊まっていない岩沼に泊まったと虚構しているのである。しかもこの日は白石を午前七時半頃に発って、今までの「奥の細道」の旅の最長不倒距離である五十キロを踏破して、午後六時半頃に仙台に到着しているのである。まさに勘違いのしようのない、ハードな一日であったのである。

笠島はいづこさ月のぬかり道

奥州名取の郡に入て、中將實方の塚はいづくにやと尋侍れば、道より一里半ばかり左リの方、笠島といふ處に有とをしゆ。ふりつゞきたる五月雨、いとわりなくなく打過るに

笠島やいづこ五月のぬかり道

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は「猿蓑」の句形で「曾良書留」には（【　】は右傍注）、

泉や甚兵へニ遣スの發句・前書。【册尺一枚、前ノ句。】中將實方の塚の薄も、道より一里ばかり左りの方にといへど、雨ふり、日も暮に及侍れば、わりなく見過しけるに、笠島といふ所にといづるも、五月雨の折にふれければ

笠嶋やいづこ五月のぬかり道　　翁

と出る。初案である。

貴種流離の典型ともいうべき藤原実方については既に注したが、実方は長徳四（九九九）年十二月、任国であったここで馬に乗ったまま笠島道祖神前を通った際、乗っていた馬が突然倒れて下敷きになって馬もろともに没し、そのままこの地に埋葬されたという。これは「源平盛衰記」や謡曲「実方」で広く知られていた。芭蕉の「笈の小文」に帰郷の際に杖突坂で落馬した話が載り、「かちならば杖つき坂を落馬哉」の句が載る。もしかすると芭蕉は歌人実方よりも、稀代の伊達男で困ったちゃんであった破滅型アウトロー・ヒーロー実方にこそ、言い知れぬ魅力を感じていたのやも知れぬ。それだけに、この泥だらけの遥拝回向という仕儀もまたよしと芭蕉に思わせたのではなかったか？　芭蕉に隠された悪童性にこそ私は実は惹かれているのである。

「奥の細道」を「武隈の段」を含めて一気に示す。

＊

［やぶちゃん注：前の「伊達の大木戸をこす」から改行せずに続く。最初の空欄二字は、「こす」。］

あふみ摺白石の城を過て
笠しまの郡に入れは藤中

將實方の塚はいつくの程ならんと
人にとへは
これより遙右に見ゆる山際の里を
みのわ笠嶋と云道祖神の社かたみ
の薄今に侍りとをしゆ此比の五月雨に
道いとあしく身つかれ侍れはよそなから
なかめやりて過るにみのは笠島も

五月雨の折にふれ
たりと

笠島はいつこさ月のぬかり道

岩沼宿

武隈の松にこそ目覺る心地はすれ
根は土際より二木にわかれてむかしの
姿うしなはすとしらる先能因法師おもひ
出往昔むつのかみにて下りし人此
木を伐て名取川の橋杭にせられたる
事なとあれはにや松は此たひ跡もなしとは
よみたり代々あるはきりあるひは植次
なとせしと聞に今將千歳の
かたちとゝのほひてめてたき松のけしきに
なん侍し

たけくまの松みせ申せ遲櫻
と擧白と云ものゝ餞別したり

けれは
櫻より松は二木を三月越シ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○あふみ摺白石の城を過て　→　●鐙摺白石の城を過ぎ

○道祖神の社かたみの薄今に侍り　→　●道祖神の社・かたみの薄、今にあり

○岩沼宿　→　●岩沼に宿る。

［やぶちゃん注：表記通り、ただ字下げで「岩沼宿」と出る。ここは貼り紙による補正がされている箇所で、前の行の「みのは」以下も窮屈に字が詰めてあって、相当な推敲がなされていることが分かる。］

「みのは笠島も五月雨の折（をり）にふれたりと」「みのは」は現在の名取市高館川上にある箕輪で、その南隣りに名取市愛島笠島（旧名取郡笠島村）があり、孰れも当地の地名。それらに「箕（蓑）」「笠」という折からの五月雨の縁語が含まれているという風流から、の謂い。］

＊

本日二〇一四年六月二十四日（当年の陰暦では五月二十七日）

元禄二年五月　八日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月二十四日

である。【その一】先に述べた通り、芭蕉は五月四日に白石を午前七時半頃に発って、最長不倒距離である五十キロを踏破して、午後六時半頃、仙台に到着している。ところが、紹介状によって予定していた宿所を頼みとしていた仙台藩士には断られ、ここにいると思っていた旧知の俳人大淀三千風もとうにこの地を出ていたなどして、仙台での滞在には予想外の困難が待っていた。そうしたプラグマティクな理由もあるか、現存する発句はこの八日（実際の句作は餞別を貰った前夜であろうが、そうするのは却って無粋というものである）までない。それでも画工の嘉右衛門というよき友人にも出逢え、仙台の名所歌枕など、いろいろなところを案内して呉れた。この句は仙台を発つその時の餞別句である。

仙臺に入（いり）て、あやめふく日也。

旅宿に趣（おもむ）き、畫工嘉右衛門（かゑもん）と云（いふ）もの、紺の染緒付（そめをつけ）たる草鞋（わらぢ）二足餞（はなむけ）す。

さればこそ風流のしれもの、爰にいたりて其實をあらはす

あやめ草足にむすばん草鞋の緒

あやめ草紐にむすばん草鞋の緒

［やぶちゃん注：第一句は「鳥之道集（とりのみちしゅう）」（玄梅編・元禄十年序）の前書で句形は「奥の細道」と同じ、第二句は「泊船集」の句形。

「曾良随行日記」はこの間の事情を以下のように記す。

五日　橋本善衛門殿へ之状、翁持參。山口與次衛門丈ニ而宿へ斷有。須か川吾妻五良七ヨ

リ之状、私持參、大町貳丁目、泉屋彦兵へ内、甚兵衛方へ届 。甚兵衛留主。其後、此方へ見 、逢也。三千風尋ルニ不ゝ知。其後、北野や加衛門（國分町ヨリ立町へ入、左ノ角ノ家ノ内）ニ逢、委知ル。

六日　天氣能。龜ガ岡八幡へ詣。城ノ追手ヨリ入。俄ニ雨降ル。茶室へ入、止テ歸ル。

七日　快晴。加衛門（北野加之）同道ニ而權現宮ヲ拜。玉田・横野ヲ見、つゝじが岡ノ天神へ詣、木の下へ行。藥師堂、古へ國分尼寺之蹟也。歸リ曇。夜ニ入、加衛門・甚兵へ入來 。冊尺幷横物一幅づゝ翁書給。ほし飯一袋、わらぢ二足、加衛門持參。翌朝、のり壹包持參。夜ニ降。

八日　朝之内小雨す。巳の尅より晴る。仙臺を立。十符菅・壷碑を見る。未の尅、塩竈に着、湯漬など喰。末の松山・興井・野田玉川・おもはくの橋・浮嶋等を見 り歸。出初に鹽竈のかまを見る。宿、治兵へ。法蓮寺門前、加衛門狀添。錢湯有に入。

とある。小雨が上がって晴れた清々しい気の中、嘉右衛門の餞別である、足が摺れぬようにと紺の染緒のついた草鞋を履いた芭蕉と曾良、芭蕉は――このあなたの心の籠った染緒に、私は未だに差し置かれてある邪気を払う軒菖蒲を引き抜き、あなたの心配りに敬意を表して、これからの旅の安全のためにそれを一緒にこの緒にひき結んで、旅立ちまする――というのである。

＊

名取川をわたつて仙台に入あやめふく日也旅宿をもとめて四五日逗留す

爰に畫工加右衛門と云ものあり聊心ある者と聞て知る人になるこのもの年比さたかならぬ名ところを考置侍れはとて一日案内す宮城野の萩茂りあひて秋のけしきおもひ

やらる玉田よこ野つゝしかおかはあせひ
咲比也日かけもゝらぬ松の林に
入て爰を木の下と云とそむかしも
かく露ふかけれはこそみさふらひみ
かさとはよみたれ藥師堂天神の
御社なとおかみて其日はくれぬ
猶松嶋塩かまの所々畫にかきて
送る且紺の染緒つけたる草鞋
二足はなむけすされはこそ
風流のしれもの爰に至りて
其實を顯す
　あやめ草足に結ん草鞋の緒
彼畫圖にまかせてたとり行はおくの細道
の山際に十符の菅有今も年々十符の
菅菰を調て国守に獻すと云り

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）
○秋のけしきおもひやらる　→　●秋の氣色思ひやらるる。
［やぶちゃん注：流布本は連体中止法。］

■やぶちゃんの呟き

「あやめふく日」菖蒲葺く日で五月五日端午の節句。実際の仙台滞在二日目がこの日であった。飯塚の「五月朔日」から「岩沼に宿る」で、ど素人でも本文の虚構がバレるように出来ている。芭蕉は虚構を隠そうとしていないことがこれで判明する。一部の芭蕉密偵説が「奥の細道」の虚構を隠密行動の隠蔽のためとする説には私は全く従えない。が、この

伊達藩内での芭蕉の動静や「曾良随行日記」に見えるところの、偶然の一致とは思われぬ、立て続けのトラブルというのは、やはり気になる。藩士橋本善衛門が宿所を断りながら、その代替の宿舎をさえ紹介していないのには、藩内の芭蕉個人に対する警戒心が作用しているようにさえ思われ、この後の松島を発った五月十日の「日記」の、喉の渇きに水を求めんとした二人に対し、『家毎に湯乞共不レ與』という村人の反応はとりもなおさず、伊達藩が公に触れた、部外者との接触を禁じたものであったに違いないと読むからである。因みに実は私は芭蕉の密偵説を多少信じている部分がある。それはやはり、芭蕉が本書の冒頭で「まづ心にかか」ったと述懐したところの松島で、何故、名吟を作り得なかったのかというありがちな素朴な疑問と、こうした奇妙な不都合の山積から弾き出されてくる奇妙な暗合なのである。実際、この後も「奥の細道」には発句が平泉まで全く登場せず、現存する全句集でも後掲する松島での句とされるピンとこない凡庸な「島々や千々にくだけて夏の海」一句が残るのみである。彼は実は何かに忙しくて、松島で名吟を作り得なかったのではなく、そうした心のゆとりをさえ持てない状態にあったのではなかったか？　という推理である。これは必ずしも私のトンデモ説でも何でもないようで、例えば金谷信之氏の「情報千一夜物語」の「奥の細道はスパイ行（情報収集）」には『最近の研究によると、芭蕉の目的は仙台伊達藩の動静を探ることにあったと云われている。当時、幕府は伊達藩に日光東照宮の修繕を命令したが、莫大な出費を強いられることから、伊達藩が不穏な動きを示す可能性があったためと云う。そして、彼はこの探索を水戸藩を通じて命ぜられたと云う。事実、彼の旅程を詳さに検討すると、伊達藩領内については、何かと異常と思われる節が多く見られるのである』とあるのにはちょっとほっとした（芭蕉の前半生には不明の部分が多いが、近年の研究によって水戸藩邸の防火用水に神田川を分水する工事に相応な事務職として関与していたことが分かっている）。

「畫工加右衛門」芭蕉が仙台で訪ねようとした（というより、宿泊のための有力第二候補としていた）大淀三千風の高弟で俳諧書林を営んでいた北野屋嘉右衛門。俳号は和風軒加之（かし）。

先の「早苗とる手もとや昔しのぶ摺」をも参照されたい。

「年比さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて」永年私は、場所の定かならざる歌枕につき、いろいろと調べては考証なんどをして御座いますればとて、の意。

「宮城野」仙台市東方の郊外一帯。著名な歌枕。

「玉田・よこ野」古い歌枕で摂津や河内説もあるが、この前に大淀三千風やこの嘉右衛門らによって仙台の歌枕と比定されていたやはり仙台市東方の郊外の地。

「つゝじがおかはあせひ咲比也」榴ヶ岡（つつじがおか）。現在の仙台市若林区木（き）の下で、これは前の二つの歌枕とセットで源俊頼の「散木奇歌集」の第一五六番歌、

　取りつなげ玉田横野の放れ駒つつじが岡にあせみ咲くなり

を踏まえる（「あせみ」は「あせび」。馬酔木。）。この馬酔木の花は無論、歌からの引用であって、とあるその頃が美しいであろうという謂いである。

『昔もかく露ふかければこそ、「みさぶらひみかさ」とはよみたれ』は「古今和歌集」巻第二十「大歌所御歌」の「東歌」、一〇九一番歌、

　みさぶらひみかさと申せ宮城野の木（こ）の下露（したつゆ）は雨にまされり

を踏まえたもの。――古えもかくも露が深かったからこそ古歌に於いて「御侍（貴人の御家来衆）よ、ご主人に『御笠を召し下さいませ』と申し上げなさいませ、この宮城野の木（こ）の下に落ちて参ります露は雨にもまさっておりまするから。」とは詠んでおるのである、という意である。

「薬師堂」木の下にある陸奥国分寺跡。伊達正宗により再興されたもの。

「天神の御社」榴ヶ岡にある天神社。四代伊達綱村が建立したもの。

「風流のしれもの」風流の痴れ者。芭蕉と心を一にする風狂人という絶賛この上なき褒賞の言辞である。

「おくの細道」固有名詞。本書と同名にも拘わらず諸注、菅、否、すげない。僅かに新潮古典集成の「芭蕉文集」で富山奏氏が、『仙台市より多賀城市への同注の岩切（いわきり）附近。三千風

ら』『によって名所と定められたが、芭蕉がこれを紀行の題名としたのは、辺土の旅に新しい風雨がを想像する意欲を込めたものである』と記すのみ。私はこの見解に強く賛同する。本書「奥の細道」はここに、芭蕉の意識の中で当時のモダンな新歌枕を謀らんとする目論見として起動していると私は思うのである。

「十符の菅(とふのすげ)有り。今も年々十符の菅薦(すがこも)を調(ととのへ)て国守に獻ず」顕原・尾形校注角川文庫版注に、『編み目十筋をもって幅広く編んだ菰の料としての菅。古歌に陸奥の名産とされ、当時、岩切付近で栽培されていた』もので、『伊達綱村の郷土の名産保護奨励策による』とある。」

＊

本日二〇一四年六月二十四日（当年の陰暦では五月二十七日）

元禄二年五月　八日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月二十四日

である。【その二】岩切で「奥の細道」に踏み入って、「十符の菅」を見物した後、芭蕉は塩釜へと向かうが、その途中、市川村の多賀城跡（現在の宮城県多賀城市市川字城前周辺）で「壺（つぼ）の碑（いしぶみ）」と当時された碑を、芭蕉も無論そのものと信じて親しく実見、以下の通り、非常に深く感動したのであった。しかし実はこれは「壺の碑」ではなかった（後注参照）。「奥の細道」の「壺の碑」の段を示す。発句はない。

＊

壷碑　市川村多賀城ニ有

つほの石ふみは高さ六尺餘横三尺計歟苔を
穿て文字幽也四維国界之數里を印ス此城
神亀元年按察使鎭守苻將軍大野
朝臣東人之所里也天平宝字六年
參議東海東山節度使同將軍惠
美朝臣※修造而十二月一日と有

［やぶちゃん注：「※」＝「蔦」―「葛」＋「萬」。］

聖武皇帝の御時に当れりむかし
よりよみ置る歌枕多く語傳ふ
といへとも山崩川流て道あらたま
り石は埋て土にかくれ木は
老て若木にかはれは時移り

代變して其跡たしかならぬ
事のみを爰至りてうたかひなき
千歳の記念今眼前に古人の心
を閲す行脚の一徳存命の悦
羇旅の勞をわすれて泪も落る
はかり也

＊

■やぶちゃんの呟き

「壷碑」これは征夷大将軍坂上田村麻呂（天平宝字二（七五八）年～弘仁二（八一一）年）が巨石の表面に矢の矢尻で文字を書いたと伝承されていた碑を指す。ウィキの「つぼのいしぶみ」によれば、十二世紀末に編纂された「袖中抄」十九巻に「みちのくの奥につものいしぶみあり、日本のはてといへり。但、田村將軍征夷の時、弓のはずにて、石の面に日本の中央のよしをかきつけたれば、石文といふといへり。信家の侍従の申しは、石面ながさ四五丈計なるに文をゑり付けたり。其所をつぼと云也」とあるもので、後に歌枕として西行・藤原清輔・源頼朝ら多くの和歌に詠まれ文章にも綴られたが、永く当該比定の決定的な碑は見つかっていなかったそれらの後世の和歌では孰れも『「遠くにあること」や「どこにあるか分からない」ということを』この歌枕の特異的属性として使用している。実は現在も比定不能である。詳しくは当該ウィキを参照されたいが、この多賀城碑壺碑説（これは三千風や嘉右衛門ら民間の風流人士による歌枕比定の地方文芸活動とは別に、公的にも伊達藩自体が藩内に古えの歌枕を強引に比定しようとする謂わば文芸的ナショナリズムのようなものが当時存在したことがリンク先や諸本に見える）の他に、青森県東北町の坪（つぼ）村の千曳（ちびき）神社に、ある石碑を千人で曳いて社の地下に埋めたとする伝承があり、昭和二四（一九四九）年になって千曳集落と石文（いしぶみ）集落の間にある谷底に落下していた巨石を発掘したところが「日本中央」という文字の彫られた碑が発見され、これが壺の碑であるとする説がある（但し、この地までは田村麻呂が到達していないことと、発見時の保全が杜撰であっ

たために真贋の鑑定は不能となった)。

ところが、伊達綱村の代に、ここ多賀城跡より一つの碑が発掘され、それが当時、その「壺の碑」であると比定され、芭蕉もこれを真の「壺の碑」として対面したのであった。事実は養老八・神亀元(七二四)年の多賀城創建と天平宝字六(七六二)年の多賀城改築を伝える記念碑であったことが現在、明確となっている。ウィキの「多賀城碑」によれば、『石材は花崗砂岩(アルコース)』(現地の南東百メートルに露出する中生代三畳紀の利府層』が非常によく似た岩石を含む)、碑本体の高さは約一・八六メートル、幅約一メートル、厚さ約五〇センチメートルで、『その一面を平らにして字を彫っている。その額部には「西」の字があり、その下の長方形』の線刻の内側に十一行百四十字『の碑文が刻まれている。碑に記された建立年月日は』天平宝字六年十二月一日で多賀城の修築記念に建立されたと考えられている。『内容は、都(平城京)、常陸国、下野国、靺鞨国、蝦夷国から多賀城までの行程を記す前段部分と、多賀城が大野東人によって神亀元年』(七二四年)『に設置され、恵美朝狩(朝獦)』(後注)『によって修築されたと記す後段部分に大きく分かれる』。『現在は多賀城跡内の覆堂の中に立つ。江戸時代初期の万治~寛文年間』(一六五八~一六七二年)『の発見とされ、土の中から掘り出されたとか、草むらに埋もれていたなどの説がある。発見当初から歌枕の一つである壺の碑(つぼのいしぶみ)であるとされ著名となった』。以前は偽作説もあったが、現在では真作と考えられており、また日本『書道史の上から、那須国造碑、多胡碑と並ぶ日本三大古碑の一つとされ』ている。以下、芭蕉も懸命に判読しようとした同ウィキに載る碑文テクストを示しておく(「神」を正字化した)。

多賀城
去京一千五百里
去蝦夷國界一百廿里
去常陸國界四百十二里
去下野國界二百七十四里

去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也

天平寶字六年十二月一日

「高さ六尺餘横三尺計歟」「六尺」は約一・八二メートル、「三尺」は九一センチメートルであるから現在の実測にほぼ一致する。

「四維国界」「しゆいこくかい」で四方の国境。

「神亀元年按察使鎮守苻将軍大野朝臣東人之所里也」「神亀元年」は聖武天皇即位の年で西暦七二四年。この年の四月に蝦夷の反乱が勃発、当時、安房・上総・下総三国の按察使で式部卿であった藤原宇合（右大臣藤原不比等三男）が持節大将軍に任命されて出兵しているが、実はこの前後に「鎮守苻将軍大野朝臣東人」則ち、大野東人（？～天平一四（七四二）年）が蝦夷の鎮定とその経営に尽力した。彼は先立つ養老四（七二〇）年に発生した蝦夷の反乱（征夷将軍多治比縣守により鎮圧）後、まもなく蝦夷開拓の本拠としてまさにこの多賀柵を築いたのであった。天平元（七二九）年には陸奥鎮守将軍に任ぜられていた彼が鎮兵の行賞を奏上しており、その後も蝦夷の開拓を進めて、天平五（七三三）年にはそれまで最上川河口付近（現在の庄内地方）にあった出羽柵を雄物川河口付近（現在の秋田市付近）に移設するなどしている（ここはウィキの「大野東人」による。不審なことに「奥の細道」の注釈本はこうした彼の事蹟を詳述しておらず――ものによっては完全にスルーしていてこれを先に示した藤原宇合に誤読するような悪注もある――私は今回の注で初めて彼の具体な事蹟を知った）。「所里也」芭蕉の誤判読。「所置也」（置く所なり）で最初期の防衛線としての山塞としての多賀柵（多賀城）を築いたことを指す。

「天平宝字六年」西暦七六二年。

「參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣※」「※」は示した通り（「獦」―「葛」＋「萬」）であるが、これも芭蕉の誤判読で「獦」である。これは奈良時代の公卿藤原朝狩（あさかり　？～天平宝字八（七六四）年）のことで名は「朝獵」「朝狩」とも書き「恵美朝獦」とも称した。藤原仲麻呂（太保（右大臣）恵美押勝）四男で従四位下・参議。天平宝字三年に正五位下となって陸奥鎮守将軍に任ぜられて蝦夷鎮撫に下向した。以下、ウィキの「藤原朝狩」によると、天平宝字四（七六〇）年に父仲麻呂が太師（太政大臣）に任ぜられると、朝狩も先の陸奥国に於ける蝦夷の鎮撫と皇民化、無血による雄勝城（おかちのき）（朝狩が前年に雄勝郡（現在の秋田県雄物川流域地方）に造った城柵。現在は比定不能）完成の功により、従四位下に叙されて同年中には仁部卿及び東海道節度使にも任ぜられた。天平宝字六（七六二）年に仲麻呂が正一位に昇叙されると、朝狩は兄の真先・訓儒麻呂とともに参議に任じられ、親子四人が同時に公卿に列するという異例の事態となり、まさに位人臣を極め栄耀栄華を誇った仲麻呂一族であったが、孝謙上皇が道鏡を寵愛するようになって仲麻呂が淳仁天皇を通じてこれを諌めたところが上皇が激怒して天皇から政権を奪い、道鏡派（孝謙上皇派）と仲麻呂派（淳仁天皇派）の対立抗争が勃発する。天平宝字八（七六四）年九月に仲麻呂は反乱を計画するも密告により発覚、孝謙上皇派に先手を打たれたため、仲麻呂一族は平城京を脱出、朝狩もこれに従った。仲麻呂が長年国司を務めた勢力地盤である近江国国衙に入って再起を図ろうとしたが、官軍に先回りされてこれを阻まれ、仲麻呂八男の辛加知（しかち）が国司を務めていた越前国を目指したが、官軍が越前国衙へ先回りして未だ事変勃発を知らなかった辛加知を斬殺した上、国境の関を封鎖、仲麻呂一族は近江国高島郡に退いて抵抗するが、結局、一族悉く滅亡したとある。

「聖武皇帝の御時に当れり」誤り。聖武天皇の在位は神亀元（七二四）年～天平勝宝元（七四九）年八月）で、天平宝字六（七六二）年は淳仁天皇（淡路廃帝（あわじはいたい））の第五年である。

「木は老ひて若木にかはれば」先の段の武隈の松、次の末の松山などを念頭におく表現。

「代變じて」「よ、へんじて」と読む。

「記念」「かたみ」と読む。

「行脚の一徳、存命の悦び」この行脚の旅の果報として、また、こうして命あること、それゆえにこの古えの歌枕の碑に逢えたことの悦び。

■やぶちゃんの呟き

芭蕉は碑文の内容からも、それが確かな「壺の碑」であるという確信は必ずしもなかったもののようにも思われる。しかし芭蕉にとっては「壺の碑」の真贋などは、実はどうでもいいことであったに違いない。まさに白河関越え以降、初めて確かな「物」としての奥州の古蹟を目の当たりにしたことが芭蕉を「奥の細道」に入った実感として深く心に落ちたのであった。頴原・尾形訳注角川文庫版本文評釈にも、『壺の碑のくだりを特に標題を付して、『古文真宝後集』の「碑類」に擬した独立の一章に仕立てあげたのは、それが遠い古代の姿をそのままに現前していることに対する感動の強烈さによるもので』、「壺の碑」としての真贋など『は当時の芭蕉の関知するところではなかった』とし、

《引用開始》

すべて陸奥の歌枕が、未知の辺境、古代的なるもの、異国的なるものへのあこがれの上に成り立っている中でも、壺の碑は文化果つる所として最も強く中世の歌人たちの辺境への思慕を駆り立てた詩材であったが、芭蕉にはこの遺物がただに古代の姿をそのままに存しているだけでなく、碑面の文字を通して古代国家のさいはての地を踏まえ四維の国境を望んだ「古人の心」をさながらに語りかけていると思われたのである。碑面の文字を写し取ることは、したがって、この一章の中では特に重要な意味をになっている。古代の遺石に刻まれた古代の文字に接しての感慨を述べている点で、これは韓退之（かんたいし）の「石鼓歌」、蘇東坡の「後石鼓歌」と一脈通ずるところがあるが、ただ違うのは、それらが古代の文字を解し得ぬ嘆きを述べているのに対して、これは「千歳のかたみ」として「古人の心」に触れ得た「喜び」を語っている点である。天地の流転の相の中に、永劫不変の「千歳のかたみ」「古人の心」を感得した芭蕉のこの歴史的感動は、やがて不易流行論の提唱へと展開してゆく

ことになる。

《引用終了》

と評してある。私はこれに激しく共感する。まさに芭蕉がこの碑に激しく共感したように、である。」

＊

本日二〇一四年六月二十四日（当年の陰暦では五月二十七日）

元禄二年五月　八日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月二十四日

である。【その三】「壺の碑」を見た後、先に示したように芭蕉はこの日の午後二時頃に塩釜に到着、その後に「古今和歌集」「源氏物語」などで知られた歌枕「末の松山」を見ている（「曾良随行日記」八日の条『末の尅、塩竈に着、湯漬など喰。末の松山・興井・野田玉川・おもはくの橋・浮嶋等を見　り歸。出初に鹽竈のかまを見る。宿、治兵へ。法蓮寺門前、加衛門狀添。錢湯有に入。』）。「奥の細道」の「末の松山」の段を示す。発句はない。

＊

それより野田の玉川沖の石を
尋ぬ末の松山は寺を造りて
末-松-山と云松のあひあひ皆墓原
にてはねをかはし枝をつらぬる
契りの末も終はかくのこときと
かなしさも増りて鹽かまの浦に
入逢のかねを聞五月雨の空聊
はれて夕月夜かすかに籬か嶋も
程近しあまの小舟こきつれて
肴わかつこゑ〳〵に
綱手かなしもよみけむ歌のこゝろも
しられていとゝあはれ也其夜目盲法
師の琵琶をならして奥上るりと云もの
をかたる平家にもあらす舞にもあらすひ
なひたる調子打上て枕ちかうかしましけれと

さすかに邊國の遺風忘れさるもの
から殊勝に覺らる

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○綱手かなしもよみけむ歌のこゝろもしられて　→　●「つなでかなしも」とよみけん心もしられて

○邊國の遺風　→　●邊土の遺風

■やぶちゃんの呟き

全体を支配する感傷の実景とその実感が実に素晴らしい。……これは歌枕をパッチ・ワークしたみたような「作り物」なんかでは、決して、ない――

「野田の玉川沖の石」孰れも歌枕。「野田の玉川」は六玉川の一つで、多賀城跡の東方凡そ一キロメートル、塩釜との境付近にある、現在の塩竈市大日向から多賀城市内を通って砂押川に注ぐ小さな流れをそれと今に伝え、「沖の石」は末の松山から南へ伸びる道を下った直近、旧八幡村の農家の裏にあった奇石が連なる池を指すとする。「千載和歌集」「恋二」の二条院讃岐の第七六〇番歌、

我戀はしほひに見えぬ沖の石の人こそしらねかはく間もなし

で知られる（彼女は後にこの和歌によって「沖の石の讃岐」と呼ばれたとされる）が、実際にはこの和歌が元となって歌枕として設定された逆歌枕であったものらしく、事実、この二つの歌枕は孰れも伊達綱村の代に設定された新歌枕であった。

「末の松山は寺を造りて末-松-山と云」「末-松-山」は「まつしようざん」と音読みする。現在の多賀城市八幡の北にある末松山宝国寺（伊達正宗の代に再興。現在は臨済宗妙心寺派）。仙台藩重臣天童氏の菩提寺。本堂の奥に老松が聳える小丘の辺りが歌枕「末の松山」

と言われ、これは既に鎌倉時代には比定されていたことが古記録から分かる。ここには当時、連理の枝を模した相生の松など青松数十株があり、本の松山・中の松山・末の松山と三つの松山があったともされ、ここからは海も望見された。

「はねをかはし枝をつらぬる契り」「翼を交はし、枝を連ぬる契り」ご存知、不変の恋の誓約の象徴で比翼連理の契り。

「入逢のかね」来世までもという祈誓も所詮空しい墓原の散骨相から、諸行無常の響きをもって、次のシーンの「平家にもあら」ざる「奥浄瑠璃」へと響き合うようになっている。

「籬が嶋」歌枕。塩釜沖の小島。

「こぎつれて肴わかつ」漕ぎ連ねて岸へ戻り来ては、威勢よく、漁(すなど)った魚を分け合う。……美事なリアリズムではないか！――

「綱手かなしもよみけむ歌のこゝろもしられていとゝあはれ也」源実朝の「世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも」を指す。これは前の「あまの小舟こきつれて肴わかつこゑ〳〵」を受けて「世の中は常にもがもな」「のこゝろもしられ」るように、大観的な無常感を、刹那の常民の生き生きとした景とオーバー・ラップさせて、心憎い。

「奥上るり」奥浄瑠璃。御国浄瑠璃ともいい、仙台地方を中心に語られた古浄瑠璃風の芸能。伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の「末の松山」の注によれば、当時は義経奥州下りの段などが演じられたという。……私にはこの盲目の琵琶法師のその節が、はっきりと聴こえる――

「舞」幸若舞。室町時代に流行した簡単な舞を伴う語り物。南北朝時代の武将桃井直常の孫の幸若丸直詮(なおあき)を始祖とすると伝える。多く軍記物を題材とした。

「ものから」接続助詞（形式名詞「もの」＋格助詞「から」）。古文の試験でよく出るいやらしいものは逆接の確定条件であるが、ここは素直に「ものだから」で理由・原因を表す。

……ああ、実に確かに私は永い間、如何にもいやらしい試験問題を作り続けたものだったとつくづく思う……試験など、糞喰らえ、だ！――」

＊

本日二〇一四年六月二十五日（当年の陰暦では五月二十八日）

元禄二年五月　九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月二十五日

である。【その一】この日、塩釜を船出して正午頃、遂に芭蕉は念願の松島に辿り着いた。先にも述べたが、実は芭蕉は松島でちゃんと句を作っている（「奥の細道」ではこの「翌々日」の「五月十一日、瑞巌寺に詣づ」とあるのであるが、実際には芭蕉は、この九日の松島着後すぐに瑞巌寺の総てを拝観し終えてしまっている。ここは松島総説部が長いので、順列を変えずに【その二】として後に記すこととした）。

松島は好風扶桑第一の景とかや。古今の人の風情、此の島にのみ思ひ寄せて、心を盡し、巧みをめぐらす。およそ海の四方三里計りにて、さまざまの島々、奇曲天工の妙を刻みなせるがごとし。おのおの松生ひ茂りて、麗しき花やかさ、言はむかたなし。

嶋々や千々にくだけて夏の海

奥州松島にて

島々や千々にくだきて夏の海

松島や千々に砕て夏の海

［やぶちゃん注：第一句は「蕉翁文集」（土芳編・宝永六（一七〇九）年完成）の「松島詞書」に載る句形（これに限っては前書及び句は中村吉雄氏の「細道句碑とその周辺　曾良『随行日記』をたよりに」（文芸社二〇〇二年刊）を参考にした）、第二句目は「奥の細道菅菰抄附録」（奥細道附録【菅菰後考】・梨一著・文政一一（一八二八）年少波写）の、第

三句目は「俳諧一串抄」（亦夢著・天宝元（一八三〇）年序）の句形。但し、曾良の「俳諧書留」にも載らぬことから、これは旅の後の創作とも言われる。

ともかくもこの句、如何にもショボい。「奥の細道」に載せなくてよかった。

なお、存疑の句としては、

松島や夏を衣裳に月と水

があある（この句の部分異形句が他に三句有り）が、恥の上塗りである。採らない。

以下、「奥の細道」塩釜から松島の段。

＊

［やぶちゃん注：頭の八字は前の「末の松山」から「塩釜」の段の末尾「から殊勝に覺らる」の分の空欄。］

早朝鹽竈の

明神に詣ツ國守再興せられて

宮柱ふとしく彩-椽きらひやかに

石の階九尋に重り朝日あけの玉

かきをかゝやかすかゝる道の果塵土

のさかひまて神灵あらたにまします

こそ吾國の風俗なれといと貴し

神前に古き宝-燈有かねの戸ひら

のおもてに文治三年和泉三郎

奇進と有五百年來の俤今目

の前にうかひてそゝろに珍し

渠は勇義忠孝の士也佳名今

に至りてしたはすと云事なし誠人能

道を勤義を守て佳命をおもふへし
名も又これにしたかふと云り
日既午にちかし船をかりて松嶋に
渡ル其間二里餘小嶋の磯につく
抑松嶋は扶桑第一の好風に
してをよそ洞庭西湖を恥す
東南より海を入て江の中三里(セツ)浙
江の潮(ウシホ)をたゝふ嶋々の數を盡して
欹(ソハタツ)ものは天を指ふすものは波に圃(ハラ)
匐(ハウ)あるは二重にかさなり三重に
疊(タヽミ)て左りにわかれ右につらなる負る
あり抱(イタケ)るあり、兒孫愛すかことし
松のみとりこまやかに枝葉汐風に
吹たはめて、屈曲をのつからためた
るかことし其氣色(ヨウ)爾然として
美人の顔を粧ふ千早振神のむかし
大山すみのなせるわさにや造化の
天工いつれの人か筆をふるひ詞を
盡さむ
小嶋が磯は地つゝきて海に成出たる嶋也雲

石

居禪師の別室の跡坐禪■なと有將松
の木陰に世をいとふ人も稀々見え侍りて落
ほ松笠なと打煙たる草の庵閒に住なし
いかなる人とはしられすなから先なつかしく立

寄ほとに月海にうつりて晝のなかめ又
あらたむ江上に歸りて宿を求れは窓を
開き二階を作て風雲の中に旅寢する
こそあやしきまてたへなる心地はせらるれ

曽良

松島や鶴に身をかれほとゝきす
予は口をとちて眠らんとして
いねられす旧庵をわかるゝ時素堂
松嶋の詩あり原安適松がうらしまの
和歌を贈らる袋を解てこよひの
友とす且杉風濁子發句あり

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○かゝる道の果塵土のさかひまて神灵あらたにましますこそ吾國の風俗なれといと貴し

←

●かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、吾國の風俗なれと、いと貴けれ。

○誠人能道を勤義を守て佳命をおもふへし名も又これにしたかふと云り

←

●誠、「人、能く道を勤め、義を守るべし、名もまた是にしたがふ。」と云へり。

○小嶋の礒につく　　↓　●雄島の磯につく

○抑松嶋は扶桑第一の好風にして

←

●抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして

○小嶋か礒は　　↓　●雄島が磯は

○海に成出たる嶋也　　↓　●海に出たる島也

○且杉風濁子發句あり　　↓　●且、杉風・濁子（ぢょくし）が發句あり

■やぶちゃんの呟き

「鹽竈の明神」現在の宮城県塩竈市一森山（いちもりやま）にある鹽竈神社。

「國守再興せられて」ウィキの「鹽竈神社」によれば、『近世に入り仙台藩伊達家がよせた崇敬は特に厚く、伊達氏が当地を治めた江戸時代以降から明治時代に至るまで、歴代仙台藩主は「大神主」として祭事を司ると共に社領・太刀・神馬などを寄進した』とあり、『初代藩主政宗は岩出山から仙台に居城を移すと、領内寺社の整備に取り掛かる。鹽竈神社へは』元和五（一六一九）年に社領二十四貫三百三十六文を寄進、慶長一二（一六〇七）年に社殿造営を行い、第二代藩主忠宗は寛永一三（一六三六）年に鐘楼を再興、寛文四（一六六四）年に拝殿、さらに慶安三（一六五〇）年には長床（神社建築の一つで本殿の前方にたつ細長い建物。単なる拝殿ではなく、修験者・行人（ぎょうにん）（平凡社「世界大百科事典」によれば、諸堂の管理や供華点灯を始めとして炊事給仕など寺社に於いて雑務に従事した僧）らの宿泊や参籠の場を提供する建築区画を指す）を修造している。三代藩主綱宗は伊達騒動で万治三（一六六〇）年に家督を子綱村に譲ったが、寛文三（一六六三）年に大幅な社殿改築を行うとともに社領七貫五八四文を寄進しており、彼は『歴代藩主中で最も厚い崇敬を寄せ』、芭蕉来訪の前の、貞享二（一六八五）年には塩竈の租税免除や市場開催許可及び港湾整備を行って同地を手厚く遇している。貞享四（一六八七）年には『吉田家に神階昇叙を依頼し、鹽竈神社に正一位が昇叙され』、さらに後の元禄六（一六九三）年には『神祇管領吉田兼連をして鹽竈社縁起を編纂させ、それまで諸説あった祭神を確定させ』、元禄八（一六九五）年には『社殿の造営計画を立てて工事に着手』、九年後の第五代藩主吉村の宝永元（一七〇四）年に竣工している。『この時造営されたものが現在の社殿である』とある。ここで芭蕉が言うのは、無論、伊達綱村のこと。

「宮柱ふとしく」「ふとしく」は元来、「古事記」に出る「太知る」（ラ行四段活用）、「万葉

集」に出る「太知く」（カ行四段活用）という動詞で、宮殿の柱などをしっかりと立てるの意。諸注は「内外詣」（金剛流の伊勢神宮の神事を扱う特異な能）など、謡曲の慣用句とする。

「彩-椽」は「さいてん」と読み、彩色を施した垂木（たるき）のこと。山から切り出したままの材を用いた白木の垂木をいう「采椽」からの造語とする（後半は新潮古典集成富山奏校注「芭蕉文集」の注に拠る）。

「九尋に重り」流布本では「九仞」で非常に高いことをいう。「書経」の「旅獒」に基づく「九仞の功を一簣（き）に虧（か）く」という故事成句で知られる（九仞の高い山を築くのに最後の一杯の簣（もっこ）の土を欠いても完成はしない。転じて長い間の努力も最後の詰めの僅か一つで完成せずに失策となるという譬え）。

「あけの玉かきをかゝやかす」先の富山奏氏の注にやはり謡曲の慣用句とする。

「文治三年」西暦一一八七年。

「和泉三郎」藤原忠衡（仁安二（一一六七）年～文治五（一一八九）年）。藤原秀衡三男で藤原泰衡の異母弟。泉三郎は通称。泉冠者とも。ウィキの「藤原忠衡」によれば、文治三年十月二十九日、『父秀衡は平泉に庇護していた源義経を主君として推戴し、兄弟心を一つにして鎌倉の源頼朝に対抗するよう遺言して没した。忠衡は父の遺言を守り、義経を大将軍にして頼朝に対抗しようと主張するが、意見が対立した兄の泰衡によって誅殺された』（「吾妻鏡」文治五年六月二十六日の条。享年二十三）。『「奥州に兵革あり」と記録されている事から、忠衡の誅殺には軍事的衝突を伴ったと見られる。なお、中尊寺金色堂内の秀衡の棺内に保存されている首は忠衡のものとする説があったが』、昭和二五（一九五〇）年の実見調査によって確認された晒首の『痕跡から、現在では兄・泰衡のものとするのが定説化している』。『妻の佐藤基治（信夫荘司）の娘は、忠衡の菩提をとむらうため、薬師如来像を奉納して出家し、妙幸比丘尼と称した』というとある。佐藤基治は「弁慶が笈をもかざれ紙幟」の注をも参照されたい。総ては意識的に「平泉」に向くベクトルとして配置されてあるのである。

「五百年來」文治三年から元禄二年までの間は五百二年。今の我々は西暦によって簡単に区間計算が可能であるが、山本胥氏も「奥の細道事典」で素朴な疑問として述べておられるが、当時の人々は一体どのような方法で以って計算をしていたのであろうか？　各将軍の在位が何年、開幕から何年、どれそれの戦さがその何年前という足し算を常に意識の中で心得ていたのであろうか？　いや、西暦年号を覚えるのが厭で、日本史も世界史も選択しなかった（私は地理と政経を選択した。孰れにせよ、それで受けた新潟大と富山大は落ちたのであったが）私には頭が下がるばかりである。

「人、能く道を勤め、義を守りて佳命をおもふべし、『名も又、これにしたがふ。』と云へり」「古文真宝後集」の韓愈「進學解」（進學の解）に『動而得謗、名亦隨之』（動きて謗（そし）りを得、名も亦、之に隨ふ）とあるのに拠る。これは韓愈の実体験に基づく感懐で、私は「行動すると悪口をいわれ、名声や評判もそれに随って悪くなるというわけだ。」の謂いであるが、ここはそれをポジティヴな意味、「名声もまたその人の正しい節に基づいた正しい行動に伴って自然、生ずるものなのである、という意に反転させてある。

「船をかりて」当時の出船場所は現在のＪＲ仙石線本塩釜駅の市役所壱番館庁舎前の道の向かい辺りであった。

「二里餘」約七・九キロメートル。

「小嶋の磯」流布本は「雄島（をじま）の磯」。これならば、松島海岸の島の知られた島の固有名。渡月橋で陸と繋がる歌枕で、古来より真言密教の修業の場でもあった。現在の松島海岸駅の東南四〇〇メートル程の位置にあり、現在は「おしま」と濁らない。

「抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして」流布本で追加されたこの謂いは、新潮古典集成の富山奏校注「芭蕉文集」の注によれば、「ことにふりたれど、同じこと、また今更に言はじとにもあらず」という「徒然草」第十九段の謂いを踏まえ、さらに例の仙台で世話になった嘉右衛門加之が天和二（一六八二）年に実質的に執筆した大淀三千風撰「松島眺望集」にある『それ松島は日本第一の佳境なり』『けだし松島は天下第一の好風景』などとあるのを指す、とある。

「三里」約一一・八キロメートル。この数値は恐らく最初に上陸した雄島から東の宮戸乃尖端である萱野崎辺りまでの直線距離（地図上で一一・七キロメートル）を指しているように思われる。

「浙江の潮」景勝地浙江省西湖の傍を流れる銭塘江。河口では潮波が垂直の壁となって激しく河を逆流する海嘯現象が発生することで知られるが、松島湾の潮汐は特異ではない。寧ろ芭蕉はここで永年の潮汐現象によって奇岩奇石が生じたことを言わんとしているのであろう。

「兒孫愛すがごとし」杜甫の七律「望岳」（岳を望む）の首聯、

西嶽峻嶒竦處尊
諸峰羅立似兒孫

西岳　嶙峋として　竦處すること尊し
諸峰　羅立して　児孫に似たり

――五岳の名峰西岳たる華山は高く嶮しく、そして、その聳えてどっしりとしているさまはまことに尊い。それに比べれば、他の視界にある諸峰は、確かに連なり突っ立ってはいるものの、所詮、華山という祖の子どもか孫のようなものである。――というのに基づく。

「酒湫」恍惚として見とれること。

「顔」「かんばせ」と読む。

「大山ずみ」「大山祇」（正しくは「おおやまづみ」）で山を掌る神名。

「雲居禪師」「うんご」と読む。土佐生まれの臨済宗妙心寺派禅僧。寛永一三（一六三六）年の第二代藩主伊達忠宗に招かれて瑞巌寺に入り、伊達氏の保護もあって瑞巌寺中興の祖となった。瑞巌寺の七堂伽藍の整備は彼の手に成る。芭蕉来訪の三十年前の万治二（一六五九）年に七十八で没している。

「別室」雲居禅師個人の座禅堂。把不住軒と号した。

「坐禪■」「石」は右に行間に添えてあるが、「■」の部分には小さな「ハ」に似た何かが書かれている。但しこれは、行間で補った文字がここに入ることを示すためのただの記号であるのかもしれない。識者の御教授を乞うものである。

「草の庵」先に示した三千風の「松島眺望集」にここには先の把不住軒の他に、『また松吟庵とて道心者の室あり』とあり、また「曾良随行日記」にも『御嶋、雲居の坐禪堂有。その南に寧一山の碑之文有。北に庵有。道心者住す。』と記す。

「江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き、二階を作りて風雲の中に旅寢するこそあやしきまてたへなる心地はせらるれ」芭蕉が泊まったのは、「曾良随行日記」によって、やはりかの仙台の加右衛門の紹介による久之助と称する者の旅宿であった。瑞巌寺総門付近にあったものと推定されている。絶景一等地のロケーションである。

★「松島や鶴に身をかれほとゝぎす」この句、何故か、曾良の「随行日記」や「俳諧書留」に載らず、二年後の「猿蓑」に出現する（他に「陸奥鵆」「続雪丸げ」）。

＊　＊　＊

松嶋一見の時、千鳥もかるや鶴の毛衣とよめりければ、

松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

＊　＊　＊

一応、この前書が作句の下敷きをばらしてはいる。則ちこれは、鴨長明の「無明抄」の「千鳥鶴の毛衣を着ること」の、

＊　＊　＊

俊惠（しゅんえ）法師が家をば歌林苑と名づけて、月ごとに會しはべりしに、祐盛法師、其會宿にて、寒夜千鳥と云ふ題に、「千鳥も着けり鶴の毛衣」といふ歌を詠みたりければ、人々珍しなどいふほどに、素覺といひし人、たびたび是を詠じて、「面白く侍り。但、寸法や合はず侍らん」と、言ひ出でたりけるに、とよみ（響）になりて笑ひののしりければ、事冷めて止みにけり。「いみじき秀句なれど、かやうになりぬれば甲斐なきものなり」となん、祐盛、語

り侍りし。すべては此歌の難心得ず侍るなり。鳥はみな毛を衣とするものなれば、程につけて千鳥も毛皮着ずはあるべき。

＊　　＊　　＊

とある一節に基づく（本文は安東次男「古典を読む　おくのほそ道」のものを参考に正字化して読み易くした。但し、これは最後は省略されている模様である）。頴原・尾形訳注「おくのほそ道」の発句評釈には、この祐盛法師の和歌は「猿蓑さがし」（空然著・文政一二（一八二九）年）に、

＊　　＊　　＊

身にぞ知る眞野の入江に冬の來て千鳥もかるや鶴の毛衣

＊　　＊　　＊

とするも『何の集に出ているのか知らない』とする。

私はこの「松島や鶴に身をかれほとゝぎす」という句、実は芭蕉の作ではないかと疑っている。詠んだものの、「嶋々や千々にくだけて夏の海」よりはひねりが利いているがどうも観念的で芭蕉の気に入らず、曾良に与えたのではなかったか？　わざわざ句の直後に「予は口を閉ぢて」と句を詠まなかったことを暗示させているのも如何にもなポーズではないか？　なお、後の「松島の詩」の注も是非、参照されたい。

最後に。本句にはしかし、「奥の細道」全体での構造上の妙味が別にある（それは安東次男氏も前掲書で以下に示すように指摘しておられるが、私自身、高校の古典の授業でそれに気づき、はっとし、その「対（つい）」の心憎さに思わず呻ったのを決して忘れないのである）。それは、この「松島」の段に対して後に『恨むが如く』絶妙の観音開き、対称絶景として立ち現れることになる「象潟」の段で、芭蕉が詠んだ二句目、

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

が、まさにこの同行の弟子曾良の句（とされる）、

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

と美事な鏡像を成しているからである。安東氏は「象潟」の段のこの「汐越や」の句注で、『象潟（芭蕉）の「鶴脛」は、松島（曾良）の「鶴に身をかれ（ほととぎす）」の写しだというのが何ともしゃれた、同行俳諧である。こういうところを見落とすと俳諧紀行は無意味になる』と述べておられる。……これ何だか、田舎のしょぼくれた高校生の「僕」が安東さんに褒められたようで、ちょっと嬉しいのである……。

……駄目押しだ。……因みにその授業を受けた富山県立伏木高等学校の学び舎が立っている丘は……その古えの名を「如意が丘」というのだ……知らない？……「義経記」をお読みなさいな……「義経記」ではね、まさにここの近くの「如意の渡し」こそが、あの「安宅」関のエピソードに設定されているんだよ……芭蕉の好きな義経のね……もう一つ、言おうか？……その高校の近くには氷見線の越中国分という駅があるんだが……芭蕉の「奥の細道」の知られた名句――「わせの香や分入右は有磯海」――のロケーションと完全に一致するのはね、ここをおいて他にはないんだよ……

――――――

「旧庵」深川芭蕉庵。

「素堂」芭蕉の俳友山口素堂。芭蕉より二歳年長。芭蕉と知り合う前に芭蕉所縁の北村季吟との接触があり、同流の系統で句も蕉風に近いが、終生、あくまでよき友人であった。

「松島の詩」は以下。芭蕉は特に素堂の漢詩の才を推賞したという。

夏初松島自清幽
雲外杜鵑聲未同
眺望洗心都似水
可憐蒼翠對青眸

夏初（かしょ）の松島　自（おのづか）ら清幽

雲外の杜鵑（とけん）　聲　未だ同じからず

眺望　心を洗ふ　都（すべ）て水に似たり

憐れむべし　蒼翠の青眸に對するを

因みに、**この二句目はそれこそ「千鳥もかるや鶴の毛衣」を思い出す前に「松島や鶴に身をかれほとゝぎす」の作句の動機となっている**ように思われないか？（これについて言及する諸注は管見限り見当たらない）　とすれば、これをつまびらかにしているのは曾良ではなく、芭蕉である。**前の句の作句者はやはり曾良ではなく、芭蕉なのではあるまいか？**

「原安適」（生没年未詳）医師で歌人。晩年は阿波徳島藩主蜂須賀綱矩（つなのり）に仕えたとされ、享保（一七一六年～一七三六年）の初め頃、七十三歳で死去したともいう。江戸の地下歌壇の第一人者で芭蕉だけでなく、曾良とも親しかったらしい（以上は講談社「日本人名大辞典」に拠った）。

「松がうらしまの和歌」餞別の和歌は不明。「松がうらしま」は古典集成富山氏の注によれば、『宮城県七ヶ浜（しちがはま）。歌枕』とある。個人サイトと思われる「宮城県ナビ」の「東北の歌枕の地を訪ねて」の「七ヶ浜町」「松ヶ浦島（まつがうらしま）／御殿崎（ごてんざき）」に、『御殿崎は平安時代には松ヶ浦島と呼ばれ、当時の和歌の枕言葉として、その名は京の都まで知られていました。松ヶ浦島は、松ヶ浜地方の総称で、その中心が御殿崎だったのです。実際に、平安の大宮人（おおみやびと）（京都の宮中に住まう人々）は、松ヶ浦島を歌会の歌題としました』。『藩政時代になると、仙台藩主伊達家の遊覧地となりました。その中心となったのが、伊達政宗が松ヶ浜でもっとも眺めのよい鴻ヶ崎（こうがざき）に建てさせた仮館でした。その後、鴻ヶ崎は、お殿様の仮館が建つところという意味から御殿崎と呼ばれるようになり、その地名が今も残されています』として、写真の下にここを詠った古歌が並ぶ。この歌枕についての諸本の記載は乏しく、大変有り難かった。

「濁子」中川甚五兵衛。江戸詰めの大垣藩士で江戸蕉門の一人。」

＊

本日二〇一四年六月二十五日（当年の陰暦では五月二十八日）

元禄二年五月　九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月二十五日

である。【その二】【その一】で述べた通り、「奥の細道」では五月「十一日、瑞巌寺に詣づ」とあるのであるが、実際には芭蕉はこの九日の松島着後すぐに瑞巌寺の総てを拝観し終えてしまっている。以下、「瑞巌寺の段」を示す。

＊

十一日瑞岩寺に詣當寺三十二世の
昔眞壁の平四郎出家して入唐
歸朝の後開山す其後に雲居禪師
の徳化に仍て七堂甍改りて
金壁荘嚴光を輝シ佛土
成就の大伽藍とはなれりける
彼見佛聖の寺はいつくにやとしたはる

＊

荘厳なる七堂伽藍総てを見学したにしては如何にも記載があっさりし過ぎている。事大主義的権威的なそれらに芭蕉は日光東照宮の時と同じ、ある種の違和感や反発を覚えたのではなかったか？（山本胥氏も「奥の細道事典」で同様の見解を示しておられる（同書二一七頁）　私はかつて三度、松島に行ったことがあるが、その三度目に禅宗高僧（見る僧の殆どが相応に年配であった）の全国大会みたようなものがこの雲巌寺で開かれたのに遭遇、その日泊まったホテル（一応、松島一番の高級ホテルと称されるもの）で夜も更けてからバー・ラウンジに行ったところが、黄色や臙脂の色鮮やかな法衣をまとった坊主どもが三々五々、誰もミニ・スカートのコンパニオン・ガールを侍らせて、頭と顔を脂で照らつかせながら、ブランデーなんぞを傾け、葉巻なんぞまで吸っているのに出くわしてしま

ったのである。その数たるや、半端でない。既に酔っていた私は怒り心頭に発して、部屋へ戻って飲み直したという厭な経験がある。だから何となく、この芭蕉の不快が分かるような気がするのである。

「十一日、瑞岩寺に詣ず」既に述べた通り、虚構。諸家、その虚構の理由を述べるが、孰れも今一つ私には腑に落ちぬ。……やはり、芭蕉は怪しいよ。……

「瑞岩寺」瑞巌寺。臨済宗妙心寺派松島（しょうとう）青龍山瑞巌円福禅寺。天長五（八二八）年に慈覚大師を開基として天台宗延福寺として創建され、鎌倉時代に臨済宗建長寺派円福寺となり、さらに天正六（一五七三）年頃に臨済宗妙心寺派瑞巌寺と変わり、特に伊達正宗によって伊達家菩提寺として庇護を受けた（以上はウィキの「瑞巌寺」に拠った）。

「真壁の平四郎」鎌倉時代、禅に傾倒した執権北条時頼が武力で本寺の天台派僧徒を追放、法身性西（ほっしんしょうさい／せいさい）を住職に据えたが、その禅宗としての雲巌寺の開山の、常陸の国真壁郡猫島村の生まれと伝えられる彼の俗名である。彼の波瀾万丈の生涯については個人サイト「松島塾」の「法身（ほっしん）伝」が詳しい。瑞巌寺の公式サイトには天台宗延福寺は鎌倉時代中期、開創以来二十八代約四百年の歴史を以って滅したとし、法身禅師が開山とされて天台宗延福寺に遷じた寺は円福寺と命名されたが、その正確な開創年は分かっていないとある（この二十八代で天台宗が終わったというのと「當寺三十二世の昔」という数字の有意な四代分は時頼・法身による強制改宗という衝撃的事実とは何だか齟齬する感じがする）。ウィキには天台宗徒追放の理由の一説として、時頼は『酒肉をとり色に惑う天台僧の退廃を目にして、法身と語らってから、兵を差し向けた』と記す……が……はてさてあの日、私がホテルで見たのは正しく『酒肉をとり色に惑う』クソ禅『僧の退廃』そのものであったと断言して、よい……

「入唐」「につたう（にっとう）」。

「徳化」「とくげ」。

「七堂」七堂伽藍。禅宗では仏殿・法堂・僧堂・庫裏・三門・東司・浴室。

「金壁荘厳」「こんぺきしやうごん」。

「佛土成就の大伽藍」西方浄土にある理想の仏国土をこの世に顕現させた大寺院の意。

「見佛聖」平安末期、雄島に庵住した見仏上人のこと（「見仏聖の寺」というのはその雄島にあった彼の庵と伝えられた見仏堂（妙覚庵）のこと。当時は既に跡となっていた）。伯耆国の人で長治元（一一〇四）年に松島雄島に渡って島内に籠ること十二年、法華経六万部を読誦したという。「奥の細道菅菰抄」の契史の書き入れに、『西行上人、能登の切浦にてこの聖にあひし後、この聖を慕ひて松島まで來られしことなどあれば、「かの」とは申されたり』但し、これは「撰集抄」巻三の第一「松嶋上人事」に載る怪しい話（見仏上人は超自然の法力を体得していて能登と松島を瞬時にテレポーテションしたとある）に基づくものではある。」

＊

本日二〇一四年六月二十六日（当年の陰暦では五月二十九日）

元禄二年五月　十日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月二十六日

である。この日、松島を発った芭蕉は曾良の慫慂によるものか、石巻へ向かっている。翌十一日は登米（とめ）（現在の宮城県北部にある登米市。岩手県との県境にある）、十二日は増水により馬上ながら悪路の山越えをしてようよう平泉の足掛かりとなる一関へ到着している。以下、「奥の細道」の「石の巻の段」をしめす。

＊

十二日平和泉と心指あねはの松

緒たえの橋なと聞傳えて人跡

稀に雉兎葛-蕨の往かふ道そこ

ともわかす終に路ふみたかえて石

の巻といふ湊に出ㇲこかね花咲と

よみて奉たる金花山海上に見渡ㇱ

數百の　船入江につとひ人家地をあらそ

ひて竈のけふり立つゝけたりおもひ

かけすかゝる處にも來れる哉と宿からん

とすれと更宿かす人なし漸々

まとしき小家に一夜を明して

明れは又しらぬ道まよひ行袖の

わたり尾ふちの牧まのゝかやはら

なとよそめにみてはるかなる

堤を行心ほそき長沼にそふて

戸伊摩と云所に一宿して平泉に

至る其間廿餘里程とゝ覺ゆ

＊

■やぶちゃんの呟き

「十二日、平泉と心指し」事実は五月十日。これは虚構というより、瑞巌寺を参拝した日を五月九日から十一日に虚構したのに合わせると、こうするしかなかったのである。それにしても道に迷って石巻へ行くはずもなく、この松島を発った五月十日の「曾良随行日記」の、喉の渇きに水を求めんとした二人に対し、『家毎に湯乞共不ゝ與』という村人の反応といい、これら、前後全体が私には頗る怪しげなものに見えるのである。

「あねはの松」奥州の名松の一つである姉歯の松。歌枕。

「緒だえの橋」現在の宮城県北部の大崎市（旧古川市）を流れる緒絶川に架かる橋。悲恋絡みの歌枕。

「雉兎蒭蕘」「ちとすうぜう（ちとすうじょう）」で、「雉兎」は雉や兎を追うその猟師、「蒭蕘」の「蒭」は「芻」で草刈る人を、「蕘」は樵を指す。

『「こがね花咲」とよみて奉たる金花山』「万葉集」巻十八の大伴家持が聖武天皇に奉った奥羽産の金が初めて発見された（東大寺盧舎那仏を塗るため）ことを言祝ぐ四〇九七番歌（長歌四〇九四の反歌三首の三句目）、

天皇（すめろき）の御代榮えむと東なる陸奥山に金花（くがね）咲く

に基づく。

「金花山海上に見渡シ」「海上」は「かいしやう（かいしょう）」。牡鹿半島東南端にある島である金華山。古く俗伝で金の産地として誤称されていたらしい。なお、芭蕉が辿り着いた石巻の湊からでは金華山は見えないので、田代島若しくはその南東にある網地（あじ）島の孰れか又は重なって見えた両方を誤認したものと思われる（それとも実は何らかの理由で金華山まで行ったのか？）。

「宿からんとすれど更に宿かす人なし」当日の難渋振りを示すために、当日の「曾良随行日記」から全文を引いておく。

十日　快晴。松島立（馬次ニテナシ。間廿丁計）。馬次、高城（キ）村、小野（是ヨリ桃生郡。弐里半）、小野（四里餘）、石巻、仙台ヨリ十三里餘。小野ト石ノ巻（牡鹿郡）ノ間、矢本新田ト云町ニテ咽乾、家毎ニ湯乞共不レ與。刀サシタル道行人、年五十七、八、此躰ヲ憐テ、知人ノ方へ壱町程立歸、同道シテ湯エオ可レ與由ヲ賴。又、石ノ巻ニテ新田町四兵へト尋、宿可レ借之由云テ去ル。名ヲ問、ねこ村、コンノ源太左衛門殿。如レ教、四兵へヲ尋テ宿ス。着ノ後、小雨ス。頓テ止ム。日和山と云へ上ル。石の巻中不レ殘見ゆる。奥の海（今ワタノハト云）・遠島・尾駮の牧山眼前也。眞野萱原も少見ゆル。歸ニ住吉ノ社參詣。袖ノ渡リ、鳥居ノ前也。

「水」でなく「湯」であるのは、水当たり（食中毒）を用心したためである。この親切な武士のことは「奥の細道」には出ないが、芭蕉にはよほど強く印象に残ったものらしく、後年の曾良宛書簡の中でこの時のことを如何にも懐かしそうに思い出している。因みにこの親切な武士は今野源太左衛門といい、岩波文庫萩原恭男校注版「おくのほそ道」（一九七九年刊）の「曾良随行日記」の注によれば小野郷根古邑（ねこむら）五百石伊東重良の家臣と推定されている。

「まどしき」「貧（まど）し」である。

「袖のわたり・尾ぶちの牧・眞のゝ萱原」孰れも現在の石巻市の北上川沿いにあった歌枕。

「戸伊摩」「といま」。現在の宮城県登米（とめ）市にあった旧登米町（とよままち）の古名。

「其間廿餘里」「間」は「あひ（あい）」。松島を起点として平泉までの合算実動距離。二十里は七八・五、二六里で一〇二・二キロメートル。この二十六日から前日の二十八日の一関までの山本胥氏の作成された距離移動表から計算すると、徒歩八十六、馬十七キロメートルで、計一〇三キロメートルになるので「餘」は六里強を指して自然である。」

＊

本日二〇一四年六月二十九日（当年の陰暦では六月三日）

元禄二年五月　十三日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月二十九日

である。【その一】この日、芭蕉は平泉に到達、かのハレーションのような夢幻の名吟二句をものした。まずは「夏草や」の句。

奥州高館（たかだち）にて

夏草や兵共（つはものども）がゆめの跡

奥州高館にて

なつ草や兵どもの夢の跡

［やぶちゃん注：第一句は「猿蓑」の前書で「奥の細道」の、第二句は「泊船集」の句形。以下「奥の細道」。

＊

三代の榮耀一睡の中にして大門の跡は

一里こなたに有秀衡か跡は田野

になりて金鶏山のみ形を殘す

先高館にのほれは北上川南部より

流るゝ大河也衣川は和泉か城を

めくりて高館の下にて大河に落入

康衡等か旧跡は衣か關を隔て

南部口を指かためゑそをふせくと

見えたり扨も義臣すくつて此城に

籠り功名一時の草村となる
國破れて山河あり城春にして
青々たりと笠打敷て時のう
つるまてなみたを落し侍りぬ

夏艸や兵共か夢の跡

卯花に兼房みゆる白毛かな　曾良

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○康衡　　↓　●泰衡

［やぶちゃん注：誤字。］

●城春にして青々たり　↓　●城春にして草青みたり

■やぶちゃんの呟き

ここでは一つだけ注して、後は【その二】に譲りたい。

「兼房」十郎権頭兼房（じゅうろうごんのかみかねふさ）。「義経記」にのみ登場する架空の義経の家臣。ウィキの「十郎権頭兼房」によれば、『源義経の北の方（正室）である久我大臣の姫の守り役で、元は久我大臣に仕えた』六十三『歳の武士。義経の都落ちに北の方と共に付き従う。平泉高舘での義経最期の場面では、北の方とその子である』五歳の若君と亀鶴御前及び生後七日であった『姫君を自害させ、義経の自害を見届けて高舘に火をかける。巻八「兼房が最期の事」では敵将長崎太郎を切り倒し、その弟次郎を小脇に抱えて炎に飛び込み壮絶な最期を遂げ』る老義臣として描かれている。彼だけでなく『義経の北の方とされる久我大臣の姫、その子亀鶴御前と生後間もない姫君』というのも『いずれも架空の人物であり、歴史上では義経とともに死んだ正室は河越重頼の娘の郷御前で、子は』四歳の女児のみであったとされるとある。」

【その二】金色堂の句。

五月雨（さみだれ）を降（ふり）のこしてや光堂

五月雨や年々（としどし）降（ふり）て五百たび

五月雨や年々降（ふる）も五百たび

［やぶちゃん注：第一句は「奥の細道」の、第二句と第三句は曾良本「奥の細道」の推敲過程の句形の再現。実際には第二句が最初に書かれてあって、「降て」が「降も」と改められた上、さらに第一句の句形に直されている。従って推敲過程順に並べ直して読み易く書き換えると、

五月雨や年々降りて五百たび

↓

五月雨や年々降るも五百たび

↓

五月雨を降りのこしてや光堂

となる。

以下「奥の細道」。

＊

兼て耳驚したる二堂開帳す經堂は

三將の像を殘し光堂は三代の棺を

納メ三尊の佛を安直す七宝散うせて

玉の扉風にやふれ金の柱霜雪に朽て

既頽廢空虛の叢となるへきを

四面新に囲て甍を覆て風雨を凌

と

暫時千歳の記念をはなれり

五月雨や年々降りて五百たひ

螢火の晝は消つゝ柱かな

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○安直す　→　●安置す

［やぶちゃん注：誤字。］

●記念をはなれり　→　●記念をはなれり

［やぶちゃん注：「を」の右にミセ消チで「と」と記す。］

■やぶちゃんの呟き

最初に。最後の「螢火の晝は消つゝ柱かな」の句は恐らく皆さんは見慣れぬ句であろう。別に【その三】として公開する。

この日の「曾良随行日記」は以下の通り。

十三日　天氣明。巳ノ尅ヨリ平泉へ趣。一リ、山ノ目。壱リ半、平泉へ以上弐里半ト云ドモ弐リニ近シ（伊澤八幡壱リ余リ奥也）。高館・衣川・衣ノ關・中尊寺・（別當案内）光堂（金色寺）・泉城・さくら川・さくら山・秀平やしき等ヲ見ル。泉城ヨリ西霧山見ゆルト云ドモ見ヘズ。タツコクガ岩ヤヘ不レ行。三十町有由。月山・白山ヲ見ル。經堂ハ別當留守にて不開。金雞山見ル。シミン堂、无量劫院跡見。申ノ上尅歸ル。主、水風呂敷ヲシテ待、宿ス。

最早よく知られることだが、これを以って諸家は実際には見ていなかった「經堂は三將の像を殘し」の虚構の「三將の像」を致命的誤りとして論う。具体的には――「三將」は清衡・基衡・泰衡であるが、同経堂にある三体の像は獅子に乗る文殊菩薩と獅子を曳く優塡王に善財童子であるという「事実」をである――しかし乍ら言い添えておくと実際にはそこには後(あと)まだ二体、仏陀波利三蔵(ぶっだはりさんぞう)と婆藪仙人(ばそう)が安置されてあって全五体で文殊五尊像を成すのである。

この議論はしかし、今の私にはすこぶる退屈な話としてしか聴こえぬのである――いや、かくいう私も高校教師時代、確かに鬼の首を捕ったようにこの「虚構」を解説していたのだが、今、そうした自分を実におぞましく思っているのである。

そんなことは、この平泉の名シーンを味わうのには、全く以って不要なことだからである。況や、雨が降っていたか晴れていたかなんぞは全く問題の外である。私は高校時代にこの段を読んで以来、快晴の（前句はそこに草いきれの光景が附加される）景以外を平泉の段に想起したことは一度もない。どう転んでも、**この「五月雨の句」に五月雨が降っていなければならないという必要条件はない**し、そもそもが**「三將」と言わずに、ここに正直に「うどん」だか「ぜんざい」だかというくだくだしい事実情報の添え物を店開きする必要も、これ、さらさらない**からである（但し、正直言っておくと私はこの平泉の文殊の五尊像が個人的には頗る好きではある）。

よろしいか？

ここは――**『芭蕉の「奥の細道」という系の中の一つの極北の金字塔としての特異点たる平泉』**――なのである。

そこは――**『虚も実も総てが呑み込まれた芭蕉の創造した厳粛荘厳なる心象風景』**――なのである。

この「平泉の段」こそは実に――**『「奥の細道」の最も優れたモンタージュが施された芭蕉遺愛のプライベート・フィルム』**だったのである。」　＊

本日二〇一四年六月二十九日（当年の陰暦では六月三日）

元禄二年五月　十三日

はグレゴリオ暦では

一六八九年六月二十九日

である。【その三】実は光堂で創られていながら、恐らく最も知られていない芭蕉の句が次の句である。

螢火（ほたるび）の晝は消えつゝ柱かな

［やぶちゃん注：曾良本「おくのほそ道」で、先の「五月雨や年々降（ふる）も五百たび」の次に書かれて、見セ消チとなっている句である。この「晝は消えつゝ」の語自体は百人一首で知られる大中臣能宣朝臣の、

御垣守衞士のたく火の夜は燃え晝は消えつつものをこそ思へ

に基づくが、山本健吉氏の「芭蕉全句」の評釈によれば、この眼目は霜雪に朽ちた金の『柱に昼の蛍を見たのは、芭蕉の幻であろう』『芭蕉の詩心は』実際には頽廃を食い止めた鞘堂を想像の中で『取り払』い、イメージされた『廃屋の中の、七宝の散り失せ』てしまった『朽ちた柱に、一匹の昼の蛍をを止まらせ』たのだとされ、昼の蛍、それは結局、清少納言の言う「冷（すさま）じきもの」に当たり、『火の消えた冷（すさま）じいさまの「昼の蛍」を取り合わせたところに、荒廃した光堂に寄せる芭蕉の感慨があった』。『同じく光堂を詠みながら、彼はその光耀と荒廃と、二様に詠み上げようとしたらしい。少なくとも「五月雨のふり残してや」』（その先行句も含めて）『だけでは、芭蕉の光堂から受けた感動は尽くされなかったのである。ただし句勢が弱いため、芭蕉はこの句を棄ててしまった』と美事に詠み解いておられる。蓋し、名評釈である。］

＊

本日二〇一四年七月　二日（当年の陰暦では六月六日）

元禄二年五月十六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月　二日

である。この日の前日、芭蕉は尿前の関を越えた。

蚤虱馬の尿（のみしらみ　しと）する枕もと

蚤虱馬の尿（ばり）する枕もと

蚤虱馬のばりこくまくらもと

蚤虱馬の尿（ばり）つく枕もと

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は曾良本「おくのほそ道」の、第三句目は「泊船集」の、第四句目は「俳諧古今抄」（支考編・享保一五（一七三〇）年跋）のそれぞれの句形。私は永らく響きからも「馬の尿（しと）する枕もと」が断然よいと感じ続けてきたが、この別稿や以下の自筆本を見ると芭蕉は当初は一貫して「ばり」と読んでいたことが分かる。なお、「広辞苑」などで「しと」は人の尿で、「ばり」は特に動物の小便であるとする説もあるが「すばりする」という動詞の近世の用法から考えるとそれを以って「ばり」とするのは必ずしも唯一正統なる結論であるとは思われない。それはそれとして、私は今は、実はこれは――「ばり」――こそ芭蕉の描きたかった俳諧の音楽であったのだと感じている。仙台の方言で「小便をする」を「ばりつく」ということが「日本国語大辞典」にも載る。則ち。これは芭蕉が実際に現地で聴いた生（ナマ）の言葉であったのだ。およそ歌語とは極北の「尿」を奇異な地名として新歌枕に詠み込み、しかもそうした土地の民族語彙と

しての「馬のばりついた！」という新鮮な響きに拘ったのが一貫した初期形に表われているのだと思うのである。結果的にその強烈さが、「奥の細道」前後や全体の風雅の推敲過程でやはり雅びに着せ替えさせられてしまい、句を「尿とする」の「とする」とした瞬間、芭蕉は「ばり」の響きも「尿前の関」に和して「しと」と変えんとする思いを許さざるをおえなかったのかも知れない。それでもしかし、芭蕉の耳には――「バリ」という懐かしい語が――さらには実際の、勢いよく迸り出る「バリッ！」というオノマトペイアが――奥の細道の、まさに極北の強烈なシンボリックな響きとして残響しているのだと今の私は思うに至っているのである。

以下、「奥の細道」の「尿前の関」の段。

＊

南部道はるかにみやりて岩手の
里に泊る小黒崎水の小嶋を過て
なるこの湯より尿（シト）前の關にかゝ
りて出羽の國に越むとす此道
旅人稀なる處なれは關守に
あやしめられて漸にして關を
こす大山をのほつて日既暮け
れは封ㇾ人の家を見かけて舎ㇾ
を求ㇺ三日風ㇾ雨あれてよし
なき山中に逗留す

蚤虱馬の尿（バリ）する枕もと

あるしの云これより出羽の國に
大山を隔て道さたかならされは
道しるへの人を頼て越へきよしを
申さらはと云て人を賴侍れは

究-竟の若者脇指をよこたへ樫の
杖を携て我々か先に立て行
けふこそ必あやうきめにもあふへき
日なれと辛きおもひをなして
後について行あるしの云にたかはす
高山森々として一鳥聲きかす木
の下闇茂りあひて夜ル行かことし
雲端に土ふる心地して篠の中蹈分
蹈分水をわたり岩につまついて
肌(ハタヘ)につめたき汗を流して最上の
庄に出ス かの案内せしおのこの云やう
この道必不用の事有つゝかなう送り
まいらせて仕合したりとよろこひて
わかれぬ跡に聞てさへ胸とゝろく
のみ也

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○漸にして　→　●漸(やうやう)として

○脇指　→　●反脇指(そりわきざし)

■やぶちゃんの呟き

「南部道はるかにみやりて」南部藩の領地（現在の盛岡市を中心とした一帯）へと通ずる街道。「奥の細道」の北限は当初より平泉定まっていたが、放浪詩人芭蕉の心情としては極北への思いがいやさかに昂まっていたことは想像に難くない。

「岩手の里」「いはでのさと」と読む。現在の宮城県大崎市岩出山。

「小黒崎」「水の小嶋」現在の宮城県大崎市鳴子にあった歌枕。

「なるごの湯」現在の宮城県大崎市鳴子温泉。鳴子は東北弁では「なるご」と濁り、「奥の細道」でも現在は「なるご」と濁って読まれている。

「尿前の關」わたなべあきら氏のサイト「おじさんジャーナル」の『『おくの細道』をよむ」の「尿前の関」によれば、『尿前という地名はもともとアイヌ語地名で「山裾＝シュツ・根もとの意・にあるところ＝オマイ」に由来すると、山田秀三はのべている。尿前の関址はたしかに山裾の林の中にある』。『アイヌ語で尿前とおなじ意味をもつ地名が津軽半島にある。十三湊（市浦村）から小泊港へいく道を途中から左に折れ、権現崎（小泊岬）の山裾に降りていくと、南に面した下前という漁業部落がある。私も幾度か立ち寄ったことがあるが、ある年の秋晴れの日に、日本海をへだてて下前から見た岩木山の光景は今も忘れがたい』。『このアイヌ地名に、後になって和人が漢字を宛てた。尿前はいかにも異様であり、命名者はわからないが、その地名はわたしたちを捉えて離さない』とされ、最後に『国文学者の久富哲雄氏は「尿」をしとと読んでいますが、谷川氏の「ばり」との読み方はいかにも馬の小便のようで、私はふさわしい読み方だと感じます』と述べておられる。今こそ私は確かにそう感じているのである。

「出羽の國」現在の山形県と北東部除いた秋田県。

「關守にあやしめられて漸にして關をこす」「あやしめられて」はマ行下二段活用の動詞「怪しむ」の未然形に受身の助動詞「らる」で「あやしまれて」と同じい。「曾良随行日記」を見ると（一部の字下げを無視した）、

一　十五日　小雨ス。右ノ道遠ク、難所有ㇾ之由故、道ヲカヘテ、二リ、宮。〇壱リ半、かぢは澤。此邊ハ眞坂ヨリ小藏ト云カヽリテ、此宿へ出タル、各別近シ。

〇此間、小黒埼・水ノ小島有。名生貞ト云村ヲ黒崎ト所ノ者云也。其ノ南ノ山ヲ黒崎山ト云。名生貞ノ前、川中ニ岩島ニ松三本、其外小木生テ有。水ノ小嶋也。今ハ川原、向付タル也。古ヘハ川中也。宮・一ツ栗ノ間、古ヘハ入江シテ、玉造江成ト云。今、田畑成也。

壹リ半尿前。シトマヘヽ取付左ノ方、川向ニ鳴子ノ湯有。澤子ノ御湯成ト云。仙臺ノ説也。關所有。斷六ケ敷也。出手形ノ用意可ㇾ有ㇾ之也。壹リ半、中山。

○堺田（村山郡小田嶋庄小國之内）。出羽新庄領也。中山ヨリ入口五六丁先ニ堺杭有。

○十六日　堺田ニ滞留。大雨、宿（和泉庄や、新右衞門兄也）。

とあって、難所と聞いて事前に想定していた街道を変更した結果、尿前の関所の通行手形がなかったために、実際に関所で足止めを喰らい、往生した事実がこれで分かる。

「大山」は一般名詞で奥羽山脈の尿前の裏山から中山峠を越える山塊を指している。

「封ㇾ人の家を見かけて舎ㇼを求ム」の「封人」の「封」は国境で、そこを管理守備する役人の意。前に示した「随行日記」に見える、新庄と伊達の国境の新庄藩側の守備管理を命ぜられていた堺田村（現在の山形県最上郡最上町堺田）の庄屋有路家（ありじや）新右衛門のこと。実際には「よしなき山中」（止むを得ずかくも山深い土地）ではあったものの、相応に大きな屋敷であった（現在復元されてある）。難儀を演出する芭蕉の常套手段であり、さればこそ「蚤虱」の句を頗る効果的に際立たせるのである。

「樫の杖」これは杖というよりもいざという時の棍棒であって、前の脇差とともにこのシークエンスのスリリングさを、弥が上にも昂める効果を確信犯で狙って、「けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれと辛きおもひをな」して、びくついている芭蕉と曾良をフレーム・アップするのである。

「高山森々として一鳥聲きかず」山中独座の隠逸詩である王安石の七絶「鐘山即事」の結句「一鳥不啼山更幽」（一鳥啼かず山更に幽なり）に基づく。

「雲端（うんたん）に土ふる心地して」杜甫の七律「鄭駙馬宅宴洞中」（鄭駙馬が宅にて洞中に宴す）の一節「已入風磴霾雲端」（已に風磴（ふうとう）に入れば雲端に霾（つちふ）る）――もうすでに、涼しい風のよく抜けてゆく石段の路に入れば、雲の端の方から何ともかえって匂うような土埃が吹き降ろしてくるのである――をインスパイアしたもの。この二箇所の引用を見ただけでも、表面上の難路を謂いながらもその実、その自然と一体になって秘かに楽しんでいる風狂人芭蕉

の姿が垣間見える。

「最上の庄」現在の山形県北村山地方一帯。

「不用（ぶよう）の事」不用心な出来事。山賊などの害をいう。」

＊

本日二〇一四年七月　三日（当年の陰暦では六月七日）

元禄二年五月十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月　三日

である。この日、芭蕉は尾花沢に着き、土地の豪商で紅花問屋であった鈴木清風（島田屋）の饗応を受け、五月二十七日（グレゴリオ暦七月十三日）に山寺へ発つまで十泊して英気を養った。

涼しさを我宿（わがやど）にしてねまる也

［やぶちゃん注：紅花の収穫期に当たったため、清風は芭蕉と曾良の宿所として村外れの閑静な天台宗弘誓山（ぐせいざん）養泉寺をそれに当てた。句自体は五月二十一日と二十三日の両日の清風宅で行われた饗応の席の孰れかで巻かれた歌仙「すゞしさを」の巻の発句で、

すゞしさを我がやどにしてねまる也　　芭蕉

つねのかやりに草の葉を焼（たく）　　清風

なお、別に清風を発句とする歌仙「おきふしの」の巻も巻かれており、そこでは

おきふしの麻にあらはす小家かな　　清風

狗ほえかゝるゆふたちの蓑　　芭蕉

と芭蕉が脇を付けている。

事実としては清風宅へ招待されて通されたまさに清風、涼風（すずかぜ）吹く座敷での寛ぎを詠じた事実に基づく挨拶句（「曾良随行日記」によれば初日の五月十七日とこの両日は清風宅に泊

まってはいる）乍ら、寧ろ心尽くしで既に提供されてある養泉寺で、義経・西行所縁の一つの目標点であり、しかも最北到達点でもあった平泉の嘱目を終え、長く困難であった仙台以降の旅の疲れが、この静謐な尾花沢の山寺ですっかり癒されたことを言祝ぐ一種の祝祭の意を底に含む句のように私は詠む。**ここに必要なのは立派な座敷ではなく、無人の板敷の寺の本堂であり、そこの「涼しさ」の中に独り心地よさそうに文字通り「ねまる」芭蕉の姿を見てこそ句の真意は知れる**というものだ。私のこの句から受けるイメージは以下のような諸家の読み解く標準レンズの構図には一向に収まりきらない（以下のような解釈だけならば、解釈の必要がない。「奥の細道」の前書本文がそう述べてしまっているではないか）のである。

「ねまる」寛いで休む。無論、他にも寝る・臥すの意も持つ。安東次男や山本健吉はこれを訪問の折りに清風若しくはその家人が用いた芭蕉への労いの言葉であったと捉え（山本は「ねまる」を『うちくつろいで坐ることの出羽方言』とする）、それを『当意即妙に』（山本）『裁ち入れて返したところに俳諧がある』とする。

以下に「尾花沢の段」を総て示しておく。

＊

尾花沢にて清風と云ものを尋ぬ
かれは富るものなれとも心さしさす
かにいやしからす都にも折々かよひて
旅の情をもしりたれは日比とゝめて
長途のいたはりさまさまともてなし侍る
　涼しさを我宿にしてねまる也
　這出よかひやか下のひきのこゑ
　まゆはきを俤にして紅粉の花
　子飼する人は古代のすかた哉　　曾良

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○かれは冨るものなれども、心ざしさすがにいやしからず

←

●かれは富るものなれども、志いやしからず

○都にも折々かよひて、旅の情をもしりたれば

←

●都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知たれば

［やぶちゃん注：個人的にこの「さすがに」の改稿はまさに文章の彫琢を知る者にのみに出来る推敲であるという気がする。

■やぶちゃんの呟き

残りの句は以下、尾花沢滞在に合わせてゆるゆると分割して掲げようと思う。因みに「まゆはきを俤にして紅粉の花」は尾花沢ではなく、立石寺へ赴く途次の紅花に触発された艶なる吟である。ゆっくらと参ろう――「奥の細道」の旅は、急いては、孤高の詩人の心を、遂に見逃すこととなる――

「子飼する人は古代のすがた哉」この曾良の句はここでの嘱目吟ではない。「曾良俳諧書留」の高久宿の「時鳥」の句の後、須賀川の相楽等躬宅での歌仙「風流や」の前の部分に、

落くるやたかくの宿（しゅく）の時鳥　　翁

木の間をのぞく短夜の雨　　曾良

元祿二年孟夏

蠶する姿に残る古代哉　　曾良

奥州岩瀬郡之内須か川

相樂伊左衛門ニテ

風流の初やおくの田植歌　　翁［やぶちゃん注：以下略。］

という酷似した句形で出るからで、実際には白河前後の嘱目吟と推定される。先の芭蕉の「這出よかひやか下のひきのこゑ」が「万葉集」の「巻十　秋相聞」にある作者未詳の第二二六五番歌、

朝霞鹿火屋が下に鳴く河蝦聲だに聞かばわれ戀ひめやも

や、同「巻十六　由縁ある雑歌」にある河村王（伝未詳）の第三八一八番歌、

朝霞鹿火屋が下の鳴く川津偲ひつつありと告げむ兒もがも

に基づくもので（詳細は後掲）、そのインスパイアされた時代を遙かに遡った実景を、さらに読者の眼前に重ねさせるために、この時代詠染みた句が敢えてここに配されたものと見てよい。］

＊

本日二〇一四年七月　九日（当年の陰暦では六月十三日）

元禄二年五月二十三日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月　九日

である。十泊した尾花沢の滞在七日目。本句は尾花沢滞在中の清風宅での印象をもとにものされた一句と見られるので、初日に次いで清風宅に招かれ饗応を受けて泊まった第一回目のこの日に配しておく。

這出(はひいで)よかひやか下のひきの聲

這出よ飼屋が下の蟇(ひきがくる)

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目「四季千句」（挙白編・元禄二年奥書）の句形で、後者が初案と思われる。なお、柿衛(かきもり)本「奥の細道」では、

這出てかひやか下のひきの聲

とするが、これは私には誤写としか思えない。

「かひや」は「飼ひ屋」で、養蚕のために蚕を飼う小屋。蚕室。

本句は既に述べた通り、「万葉集」の「巻十　秋相聞」にある作者未詳の第二二六五番歌、

朝霞(あさがすみ)鹿火屋(かひや)が下(した)に鳴く河蝦(かはづ)聲だに聞かばわれ戀ひめやも

や、同「巻十六　由縁ある雑歌」にある河村王(かわむらのおおきみ)（伝未詳）の第三八一八番歌、

朝霞鹿火屋が下の鳴く川津倭ひつつありと告げむ兒もがも

右の歌二首は、河村王の宴居の時に、琴を弾きて即ち先づ此の歌を誦み、以ちて常の行と爲り。

をインスパイアしたものである。但し、この両歌の上五は語の続き方に未詳（講談社文庫版「万葉集」中西進氏）の部分があり、この「朝霞鹿火屋」は中西氏によれば、『朝霞のように山すそにたなび』く煙で、それは鹿火屋（作物を荒らす鹿や猪を追い払うために火を焚く番小屋から出るもの）、その小屋の下で鳴く蛙、その声のように、とする（他に『稲の先』（「牙」で植物の芽を意味する）。『を収める小屋の節もある』とあるが、他にも諸本「蚊火屋」「香火屋」等ともする。孰れにせよ、実はこれは芭蕉が用いた蚕室としての「かひや」の意ではないことが分かる。芭蕉はその不詳性を承知の上で俳諧に転ずるに措定されていた鹿を小さき蚕に、河鹿を大きな蟇蛙に転じたものであろうか。安東次男氏によれば（「古典を読む　おくのほそ道」）、蚕が脱皮や蛹化の前に桑の葉も摂らず凝としていることを指す「蚕のねむり」という季語（春）があり、『蚕が上で眠に入れば蟇は下で目ざめる（片や繭ごもり片や冬ごもりから出る）、ということを目付とした句』とし、『無言で這い出した姿が夏の風物詩となる』とする。問題は蚕や蟇の声が春を想起させる語であることだが、安東氏はこれを「蟇の聲」が季語なのではなく、春にはあんなに鳴いていた蟇よ、この初夏に今一度鳴けと呼びかけたのが、改案決定稿になったとする。蓋し、名推理であろう。

諸家は紅花摘みに加えて養蚕の時期で何かと忙しくする清風宅にあって、何の役にも立たぬ自身を、若しくは客でありながらふっと忘れ去られたような感じの己れを見出し、それを蟇に投影したものと採る。それも一理はあろう。

しかし私は寧ろ、本句の元とした二つの和歌が孰れも、

……下で小さな声で鳴く蛙の声ように、その秘かなあなたの声さえ耳にすることが出来たなら、こんなにもならぬ恋に苦しむことはなかっただろうに――（二一六五）

……下でひっそりと鳴く蛙（かわづ）の声ように、「秘かにそっと慕っておりまする」と私に告げて呉れる娘がいたらよいのだがなぁ――（三八一八）

という焦れる恋を詠ったものであることにこそ着目すべきであると思う。即ち、この一句は次に出る、

まゆはきを俤にして紅粉（べに）の花

の強く恋を連想させる艶句を引き出すために配されてある、配されねばならなかった「聲」であったのだと私には思われてならないのである。」

＊

本日二〇一四年七月　十三日（当年の陰暦では六月十七日）

元禄二年五月二十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月　十三日

である。【その一】この日、芭蕉は尾花沢を発って山寺（立石寺）へと向かった。

まゆはきを俤（おもかげ）にして紅粉（べに）の花

行（ゆく）するゑは誰（たが）肌ふれむ紅の花

向後（ユクユク）は誰（たが）肌ふれむ紅の花

［やぶちゃん注：最初に示した句は「奥の細道」の句。「曾良俳諧書留」に、

立石の道ニテ

まゆはきを俤にして紅ノ花　　翁

とあって本句が立石寺へ向かう道中吟であったことが判明する。「猿蓑」には、

出羽の最上を過（すぎ）て

と前書、真蹟詠草には、

もがみにて紅粉のわたるをみて

と詞書を記す。この「わたる」は辺り一面に紅花が咲いていることをいう。

次の句は「西華集（さいかしゅう）」（支考・元禄十二年刊）に載る句であるが、そこには、

此句はいかなる時の作にかあらん、翁の句なるよし人のつたへ申されしが、題知らず。

という附記があるが、「俳諧一葉集」（仏兮・湖中編・文政一〇（一八二七）年刊）では、

清風亭二句

と前書して前の「まゆはきを俤にして紅粉の花」と並べて載せる。

ところが「芭蕉発句集説」（幹員著・寛政一〇（一七九八）年自序）では、

或人加州千代女の句なるよしさも有るべし、翁の調に非ず。

と頭書するし、三番目に出した句は「俳諧　反故集（ほぐしゅう）」（遊林編・元禄九年自序）に載る二句目のヴァリエーションとも思われるものであるが、そこでも、

作者不知

とする。底本（中村俊定校注「芭蕉俳句集」）では明らかに芭蕉の句としているものの、こう並べてみると、「誰肌ふれむ紅の花」の句は、やはりやや疑わしい気がしてくる。

キク亜綱キク目キク科アザミ亜科ベニバナ *Carthamus tinctorius* は、新暦では七月上旬の梅雨の時期から梅雨明けにかけて真黄色の花を咲かせる。まさに芭蕉が尾花沢を訪れたのが新暦七月三日であるから、まさに紅花の花の真っ盛りの野道を芭蕉は山寺へ向かったのであった。尾花沢の滞在中もそしてこの途次の景の中にも紅花摘みの最上乙女の姿が

あった。最初の句はその鮮やかな紅花の蔭にちらつく乙女らへの極上の挨拶句／恋句である。

紅花からは染料を製するが特に赤色色素を抽出して陶磁器製の猪口の内側などに刷き乾燥させたものを口紅とした。ウイキの「ベニバナ」によれば、『良質な紅は赤色の反対色である玉虫色の輝きを放ち、江戸時代には小町紅の名で製造販売された』。芭蕉はその一面の紅花と紅花摘みをする可憐な乙女たちからそうした女性の化粧を連想し、さらに紅花の花の形に化粧道具の「眉掃き」（白粉（おしろい）をつけた後に眉を払うのに用いる小さな刷毛（はけ）。眉刷毛（まゆはけ））を艶なる面影に見たのである。

第二・第三の句は口紅若しくは紅花で染め上げた衣へ思いを馳せてそれが行く末はどんな佳人の唇や肌に触れるのであろう、というのであるが、本作は「誰肌ふれむ」が男性との交合をダイレクトに連想させてしまい、そのエロティシズムが赤裸々となって却って下品な印象を与える。その点でもこの句は存疑とすべきものであろう。」

＊

本日二〇一四年七月　十三日（当年の陰暦では六月十七日）

元禄二年五月二十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月　十三日

である。【その二】この日の午後二時過ぎ頃、立石寺（山寺）へ着いた。

閑（しづか）さや岩にしみ入（いる）蟬の聲

涼しさや岩にしみ入る蟬の聲

立石寺

山寺や石（いは）にしみつく蟬の聲

さびしさや岩にしみ込（こむ）蟬のこゑ

淋しさの岩にしみ込せみの聲

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は「芭蕉句選年考」（石河積翠著・寛政年間成立）に真蹟にかく上五を変えたものがあるというのを復元した句形（これは底本にはなく、潁原・尾形訳注角川文庫版の注に基づいて復元したものである）。第三句目は「曾良俳諧書留」の、第四句目は「初蟬」（風国編・元禄九年刊）の、第五句目は「芭蕉翁追悼　こがらし」（壺中／芦角編・元禄八年刊）の句形。

一般には以下のような推敲過程を経たとされる（読み易く書き換えた）。

山寺や石(いは)にしみつく蟬の聲
　←
さびしさや岩にしみ込む蟬の聲
　←
閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

山本健吉氏によれば、この決定稿は「猿蓑」に撰せられていないことから、「猿蓑」の撰以後、『おそらく「奥の細道」の定稿の成った時である』とされる。現在、「奥の細道」の決定稿は元禄七年初春の頃に成立したと考えられているから実に五年近くの推敲がなされた苦吟であったことが分かる。さればこそ「奥の細道」中、一、二の名吟が生み出されたのであった。

本句の発想の元は諸家によると、南北朝の梁の詩人王籍の五律「入若耶溪」（若耶溪(じやくやけい)）に入る」の頸聯（書き下しは我流）、

蟬噪林逾靜
鳥鳴山更幽

蟬　噪(さや)ぎて　林　逾々(いよいよ)靜たり
鳥　鳴きて　山　更に幽たり

に基づくとする。しかも安東次男氏は、とかく同じ意になり易い漢詩の対句の弊害を念頭にして、『噪蟬を以て閑情を深めたければ、漢詩より発句の方がまさる、というところに芭蕉の云いたいところ、挨拶がある』とまさに安東節で快刀乱麻の評を附しておられる（「古典を読む　おくのほそ道」）。

推敲は、初案、

山寺や　　石（いは）にしみつく　　蟬の聲

は上五が地名で死んでしまって平板な写生に堕し、しかも「しみつく」が小さな「石」の表面にべったりとはりついたような、まさに平板で力のない、いや寧ろ、皮膚感覚に生理的不快感をさえ惹起させるものとなってしまっている。それに対して、改案の、

さびしさや　岩にしみ込む　　蟬の聲

は山寺の寂寥が描き出されて蟬の声もより大いなる「岩」に「さびしさ」として浸潤してゆく。しかしその浸透はまだ十分ではない。そうしてそれは「さびしさ」が勝ち過ぎて、蟬の声を後退させてしまうからである。だからこそ決定稿では、

閑かさや　岩にしみ入る　　蟬の聲

山寺の実景もその寂寥をも併呑する形而上的な「閑かさ」が選び出され、それに従って実相へ直に貫入するところの「しみ入る」が定まったのだと私は思う（そういう解釈で私は教師時代にこの句を教授してきた）。――その決定稿にあっては詠じている芭蕉の姿さえ掻き消えて、無人の山寺全山がゆっくりとクレーン・アップで映し出されるのである。――

現代の評釈ではこの推敲課程分析の他に、この「蟬」の同定も喧しい（それは私にとっては実にある意味で文字通り「喧しい」ものである。安東次男氏は『蟬がニイニイゼミかアブラゼミか、一匹か複数かというようなことはどうでもよい』とこの不毛な議論を斬って捨ててておられる）。ウィキの「閑さや岩にしみ入る蝉の声」の「論争」の項に以下のようにある（注記[1]は『セミの自然誌』pp. 81-84』とある。アラビア数字を漢数字に変えた）。

《引用開始》

一九二六年、歌人の斎藤茂吉はこの句に出てくる蝉についてアブラゼミであると断定し、雑誌『改造』の九月号[1]に書いた「童馬山房漫筆」に発表した。これをきっかけに蝉の種類についての文学論争が起こった。一九二七年、岩波書店の岩波茂雄は、この件について議論すべく、神田にある小料理屋「末花」にて一席を設け、茂吉をはじめ安倍能成、小宮豊隆、中勘助、河野与一、茅野蕭々、野上豊一郎といった文人を集めた。

アブラゼミと主張する茂吉に対し、小宮は「閑さ、岩にしみ入るという語はアブラゼミに合わないこと」、「元禄二年五月末は太陽暦に直すと七月上旬となり、アブラゼミはまだ鳴いていないこと」を理由にこの蝉はニイニイゼミであると主張し、大きく対立した。この詳細は一九二九年の『河北新報』に寄稿されたが、科学的問題も孕んでいたため決着はつかず、持越しとなったが、その後茂吉は実地調査などの結果をもとに一九三二年六月、誤りを認め、芭蕉が詠んだ詩の蝉はニイニイゼミであったと結論付けた。

ちなみに七月上旬というこの時期、山形に出る可能性のある蝉としては、エゾハルゼミ、ニイニイゼミ、ヒグラシ、アブラゼミがいる。

《引用終了》

私は蝉の羽化は当該年の春から気温変化に大きく作用されるから、以上の「ニイニイゼミ」考証が真に科学的であるかどうかは断定出来ないと思う。確かに「しみつく」「しみ込む」「しみ入る」という本句の雰囲気に「はにいにいぜみ」（有翅昆虫亜綱半翅（カメムシ）目同翅亜（ヨコバイ）亜目セミ上科セミ科セミ亜科ニイニイゼミ族ニイニイゼミ *Platypleura kaempferi* の通奏音は確かに最も相応しいとは思う。しかし芭蕉らが山寺を巡礼に登ったのは宿坊を借りて後のことで、午後二時半時以降、日の暮れる前の夕景であったから、私個人としてはこの「閑かさ」を演出する蟬は――私の偏愛してやまない――これを聴くと大嫌いな暑い夏を許す気になる――あの――蜩（セミ亜科ホソヒグラシ族ヒグラシ *Tanna japonensis* ）の声ばかりなのである――

以下、「奥の細道」。

＊

山形領に立石寺と云山寺有
慈覺大師の開記にして殊清閑の
地也一見すへきよし人々のすゝむるに
仍て尾花沢よりとつて返し其間
七里計なり日いまた暮す麓の
坊に宿かり置て山上の堂に登ル
岩に巖を重て山とし松栢年ふり
土石老て苔なめらかに岩上の院々
扉を閉て物の音きこへす岸をめくり
岩を這て佛閣を拜し佳景寂莫
としてこゝろすみ行のみ覺ゆ

閑さや岩にしみ入蟬の聲」

＊

本日二〇一四年七月　十五日（当年の陰暦では六月十九日）

元禄二年五月二十九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月　十五日

である。この前日の五月二十八日、山寺を発った芭蕉は午後二時頃、大石田（現在の山形県北村山郡大石田町）に到着、滞在二日目の今日、滞在先の最上川河畔で船問屋を営んでいた高野一栄（本名高野平右衛門）宅の最上川に面した裏座敷に於いて四吟歌仙「さみだれを堂礼遠」の巻を興行、翌日の三十日に続きが催されて満尾した。

五月雨（さみだれ）をあつめて早し最上川

大石田、高野平衛門亭ニテ

五月雨を集て涼し最上川

［やぶちゃん注：第一句は「奥の細道」の、第二句目は「曾良俳諧書留」に載る句形でこれが初案である。「さみ堂礼遠」の巻では、脇を亭主一栄が、

さみ堂禮遠あつめてすゝしもかミ川　芭蕉

岸にほたるを繋ぐ舟杭　一榮

と付けている。初案は従って最上川を下る前のこの日のものであり、現在知られる「早し」という語を選び変えたのは四日後の六月三日（新暦七月三日）の新庄から五月雨で増水した日本三大急流の一つ最上川を河港の清川（現在の山形県東田川（ひがしたがわ）郡立川町立川地区）へと一気に二十九キロメートル下った経験に基づく実感によったのであった。山本健吉氏は「芭蕉全句」（講談社）で『「集めて早し」とは濁流の量感と速度そのものの即物的、端的な把

握である。岸で作った眺望の句が、一字の改訂で、最上川経験の直接のっ感動の表現に矯め直されたのである』と評しておられる。

以下、「奥の細道」の大石田と最上川の段。

＊

もかみ川乗らんと大石田と云處に
日和を待爰に古き俳諧のたね
落こほれてわすれぬ花のむかしを
したひ芦角一聲の心をやはらけ此
道にさくりあしゝて新古ふた道に
ふみまよふといへとも道しるへする人し
なければはとわりなき一巻を殘しぬ
このたひの風流爰にいたれり
最上川はみちのくより出て山形を
水上とすごてんはやふさなと云お
そろしき難所有板敷山の北を
流て果は酒田の海に入左-右山
おほひ茂みの中に船を下ス

ね

これをいなふと云白糸の瀧は青葉
の隙々に落て仙人堂岸に臨て立
水みなきつて舟あやうし
さみたれをあつめて早し最上川

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○俳諧のたね落こほれて　→　●俳諧の種、こぼれて

○わりなき一巻を殘しぬ　→　●わりなき一巻（ひとまき）殘しぬ

○これをいなふねと云　→　●是に稲つみたるをや、いな船といふならし

■やぶちゃんの呟き

「もがみ川乗らんと」最上川を舟に乗って下ろうと。

「日和を待」「曾良随行日記」を見ても著しい天候の悪化は見られない。これについて安東次男氏は『新月（三日月）を待って羽黒に登ること』がこの時点で既に『予定の事実』としてあったに違いなく、それがこの「日和」の意味であるとされ、『はたせるかな、このあと芭蕉は「涼しさやほの三か月の羽黒山」の句を詠んでいる』と解析されておられる。

「爰に古き俳諧のたね……わりなき一巻を殘しぬ」私はこれは「奥の細道」の中では極めて特異な叙事記載と感ずる。その内容を示すと以下のようになる。

①この土地には、如何なる不可思議な縁によるものか、古い俳諧の風雅が伝えられた。

これは仙台で出た大淀三千風が全国行脚の折りに当地の人々に談林俳諧を伝授したことを指す。

←

②①が元となって今もその談林の俳風の持つ風雅を忘れずに、その跡を慕っている。

「花」は「種」の縁語。

←

③辺鄙な田舎であるが、まさにその古風な俳諧がその地の人々の心を慰めてきた。

「芦角一聲（ろかくいっせい）」は「和漢朗詠集」に載る大江朝綱の七律「王昭君」頸聯、

胡角一聲霜後夢

漢宮萬里月前腸

胡角（こかく）一聲　霜後の夢

漢宮萬里　月前の腸（はらわた）

もの悲しい胡人の角笛の音、それが霜夜の儚い夢を破り、

故郷漢の都は万里の彼方、冷たい月光の注ぐ辺境に腸が断たれる思いがする。

や、謡曲「猩々」の「蘆の葉の笛を吹き波の鼓どうと打ち」に基づく（後者は富山奏氏の「新潮日本古典集成　芭蕉文集」に拠る）。「芦角」は荒涼とした辺地に響く異民族胡人の角笛（つのぶえ）を、やはり鄙の寂寥を感じさせる蘆笛（あしぶえ）と併せて合成した造語で、辺鄙な田舎といった謂いを大上段に諧謔したものである。

←

④③のようではあったが、やはり今まさに闇夜を足で探るような感じで、そうした俳諧の古風と新風の、その孰れへと進むべきかと土地の人々は踏み迷っている。

富山奏氏はこの「さぐり足して」「蹈み迷ふ」もやはり謡曲「猩々」の「足もとはよろよろと」を踏まえての表現とする。「古風」は談林派、「新風」は芭蕉を含めた元禄期の各派の新風を指す。

←

⑤このような状態にあるにも拘わらず、正しい方向へ導いてくれる人が今のこの地にはいない。

←

⑥ゆえに、私（芭蕉）は土地の人々からそうした先達となって呉れるようにと熱心に乞われた。

←

⑦乞われるままに、その熱意にほだされて止むに已まれぬ思いに駆られて遂歌仙一巻を巻いては残し留める仕儀となった。

←

⑧まさに今回のこの「奥の細道」の旅の風流は、この地のこの熱心な人々の風雅に於いて

こそ極まったのであった。

構造上は①から⑥までが栄一に代表される土地の俳人の直接話法で、⑦⑧が芭蕉の実行行為とそれへの感慨となっているのであるが、ここにはそうした宗匠として懇請された芭蕉自身の強い自信が漲っており、ここには既に芭蕉が独自に打ちたてた蕉風への確信に満ちた宣言のようなものが感じられるのである。潁原・尾形訳注の角川文庫版「おくのほそ道」の本文評釈に以下のようにある（傍線はやぶちゃん）。

《引用開始》

立石寺の宿坊に一宿、二十八日（陽暦七月十四日）に大石田に取って返した一行は、川役高野一栄方に滞在して、二十九日・晦日にかけて最上川歌仙を巻き、六月朔日（陽暦七月十七日）陸路新庄へ赴いて渋谷風流方に宿泊、ここでまた歌仙を巻いて、三日に元合海［やぶちゃん注：現在の山形県新庄市大字本合海（もとあいかい）］から船で最上川を下り、古口［やぶちゃん注：「ふるくち」と読む。現在の山形県最上郡戸沢村。］を経由して清川に上陸、羽黒に向かった。一栄・風流との関係は、尾花沢の清風との縁によるもので、如上の経緯と対比すれば、「大石田といふ所で日和を待つ」と書き、新庄への陸行を省略したのは、最上川中心に記事をまとめるためのフィクションとしなければならない［やぶちゃん注：前掲注も参照されたい。］。「新古二道に踏み迷ふ」とは、談林調より漢詩文調を経て元禄の〝景気の句〟へとめまぐるしく進展しつつあった転換期の俳壇の気運を反映したもので、「このたびの風流ここに至れり」とは、須賀川の俳筵（はいえん）で等躬の風雅をたたえた「風流の初めや」の句に呼応しながら、この土地の人々の素朴で熱心な俳事をたたえたのである。この賛辞の裏には、当時都市俳壇においては前句付けの興隆に伴って、宗匠を中心とする精神共同体的な俳諧の場が失われつつあり、芭蕉のこの旅には、一面において、都市に失われた俳諧の場を地方俳壇に見いだすことの期待が小さくなかったという俳壇史的事情も参照する必要があろう。「五月雨を集めて早し」の句は、もと中七「集めて涼し」の形で、右の大石田での歌仙の発句としてよまれたものだった。芭蕉はこれを紀行文の中で中七を改めるこ

とにより、挨拶の句から最上の急流の本意をとらえた句へと転位したのである。歌枕の跡をなぞり『東関紀行』をふまえた前文の、息の短い、畳みかけるような文体も、よく急流の感じに即応している。

《引用終了》

最後の部分は後注を参照されたい。

「ごてんはやふさ」碁点・隼。最上川の大石田の上流にある難所の呼称。「碁点」は川の中に岩石が点在することから、「隼」は急流に由来する。

「板敷山」、山形県最上郡戸沢村古口と庄内町（旧立川町）肝煎（きもいり）を結ぶ古道の途中のピーク。歌枕。標高六二九・六メートル。

「酒田」現在の山形県酒田市。最上川河口の商港。

「いなぶね」稲船。稲を積んで運搬した細長い平舟。人の運搬にも用いられた。これは「最上川上れば下るいな舟のいなにはあらずこの月ばかり」（「新古今和歌集　巻第二十　大歌所御歌　東歌」の第一〇九二番）を匂わせたものらしい。この歌は「いな」は「否」を掛けたもので上句は序詞。窪田章一郎校注の角川文庫版「古今和歌集」では信仰上の禁忌と推定されているが、伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の同段の評釈では『男が女に言い寄ったところ、セックスを拒否するわけではないが、いまちょうど「月」のもの（月経）ゆえに「否」だと断られた、の意。奔放な東歌である』とある。私は後者に賛同する。

「白糸の瀧」は板敷山の対岸にある瀧で、仙人堂と芭蕉が上がった清川とのほぼ中間点にある。歌枕。

「仙人堂」現在の山形県最上郡戸沢村にある。外川神社とも呼ばれ、源義経の家臣常陸坊海尊が鎌倉初期に開いたと伝わる。サイト「山形県の町並みと歴史建築」の「仙人堂（外川神社）」によれば、常陸坊海尊は『義経が平泉へ下向中この場所へ訪れた時、傷を負っていた為ここに残っ』て生き永らえ、『傷がいえた後で修業を重ね仙人のようになったことから仙人堂と呼ばれるようになり、最上川舟運関係者からは舟の安全、周辺住民からは雨ごいの場所として信仰の対象となっ』たとある。義経好きの芭蕉には欠かせないランド・マ

ークであった。

「水みなぎつて舟あやうし」顕原・尾形校注「おくのほそ道」注に「和漢朗詠集」の「月」の「秋水漲來船去速」（秋水　漲り來りて　船　去ること　速やかなり）や、これを踏まえた「東関紀行」の天龍川の条の「いと危き心ちすれ」とあるのを踏まえるとする（前注の同書からの引用参照）。」

＊

本日二〇一四年七月十七日（当年の陰暦では六月二十一日）

元禄二年六月　一日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月十七日

である。この日、芭蕉は大石田を発って新庄に到着、尾花沢で知遇となった豪商渋谷風流（甚兵衛）の邸宅で歓迎の宴が催された。恐らく以下の句以下の「水の奥」を発句とするの「三つ物」（連歌・俳諧で発句・脇句・第三の三句を指し、早くからこの三句だけを詠む形式が好まれた。特に近世以降は歳旦の祝いとしてよく詠まれた形式である）はその席上で読まれたものと推定される。

風流亭

水の奥氷室尋（ひむろたづぬ）る柳哉

［やぶちゃん注：「曾良俳諧書留」。以下、これを発句とする「三つ物」。

風流亭

水の奥氷室尋る柳哉　　翁

ひるがほかゝる橋のふせ芝　　風流

風渡る的の變矢に鳩鳴て　　ソラ

新庄には翌日も新庄に滞在、その翌六月三日（新暦七月十九日）に現在の山形県新庄市大字本合海（もとあいかい）に向けて発っているが、本「三つ物」がものされたのがこの日に比定出来るのは、芭蕉の発句に詠み込まれた「氷室」に依拠する。この旧暦六月一日は「氷室の節句」「氷の朔日」に当っているからである。これは奈良時代の古えからこの日に前年の冬に氷室に貯蔵しておいた雪氷を食す習慣に基づくもので、庶民の間では高価な氷の代わりに前年十二

月の水で製した「凍り餅（氷餅）」や「欠餅（かきもち）」をこの日に食して暑気払いや夏の厄除けとしたのであった。時候を押さえた心憎い挨拶句であるからこそ比定の有力な証左となるのである。因みに曾良の第三の「變矢」は「へんや」で尾羽を彩色などした変わり矢羽根のことか。

山本健吉氏の指摘するように、実際にそんな氷室が風流亭の奥にあったわけではなく、そのような幽邃な邸を讃える全くの想像吟であったと考えてよかろう（但し、私は実際に氷室の氷が食膳に供された可能性はあると考えている）。なお諸本の指摘にもある、芭蕉が羽州街道を新庄城下に入った際、そこにあった「柳の清水」（昭和初期までは湧水として知られた）で清涼な冷「水」を掬したものと考えてよく、その「柳」をも添えて亭主を含む土地の自然をも言祝いだのだとすれば万全の句とも言えよう。「氷室」には無論、主人の富貴も匂わせてある（そう考えると氷若しくは氷を用いた冷やし物が実際に膳に出ていなければ厭味にもなり、挨拶吟として機能しなくなると私は思うのである）。」

＊

本日二〇一四年七月十八日（当年の陰暦では六月二十二日）

元禄二年六月　二日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月十八日

である。新庄二日目。この日、芭蕉は渋谷風流の兄で問屋業を営む商人で城下一の豪商渋谷九郎兵衛盛信に招かれ、風流宅の斜向いのその豪邸に於いて七吟歌仙「御尋に」の巻と以下の句を発句とする芭蕉主催の三つ物をものした（後者は前日の風流主催のそれへの返礼）。

盛信亭

風の香も南に近し最上川

［やぶちゃん注：「曾良俳諧書留」。三つ物を示す。

盛信亭

風の香も南に近し最上川　翁

小家の軒を洗ふ夕立　息　柳風

物もなく麓は霧に埋て　木端

主人盛信は俳諧を嗜まなかったので歌仙にも参加していないが、そのホスト代役として盛信の「息」子の柳風（仁兵衛）が脇を、第三を地元の俳人木端（小村善衛門）が付けたものである。

山本健吉氏は「芭蕉全句」で、『この句の季題は「風薫る」。『増山の井』』（ぞうやまのい：俳書（季寄せ）。北村季吟著。寛文三（一六六三）年刊。）『に「風薫（かおる）」を録して「南薫（なんくん）。六月にふ涼風也。薫風自南来（みなみよりきたる）と古文真宝前集にいへり」と説いている』とある。この「薫風

自南来」は寧ろしばしば禅語として目にするもので、そこでは例によって「くんぷうじなんらい」と棒読みする。この語は唐代の文宗が作った「人皆苦炎熱／我愛夏日長」（人　皆炎熱に苦しむも／我　夏日の長きを愛す）の句に文人柳公権がつけた「薫風自南來／殿閣生微涼」（薫風　南より來たり／殿閣　微涼を生ず）の七絶の転句である。

山本氏は先の引用部に続けて以下のように本句を評しておられる。

《引用開始》

「風の香も南」と言って、この南薫を意味している。新庄は、最上川より大分北になるので、芭蕉は南からの風に最上川の水辺の匂いを感じ取ったのである。近々と最上川が感じられることを、盛信への挨拶とした。大国に入っての挨拶句の格をはずしていない。同じ日、盛信亭での歌仙の脇句に、芭蕉は「はじめてかほる風の薫物」と作っていて、「風薫る」の季題にひどく執著している様子が見える。

《引用終了》

因みに、この七吟歌仙「御尋に」の巻の方の発句は風流の「御尋に我宿せばし破れ蚊や」である。

以上の山本氏の指摘は例えば、明日示す、この翌日六月四日の句である「奥の細道」にも載るそれが、

有難や雪をかほらす南谷（みなみだに）

であることからもすこぶる首肯出来る。」

＊

本日二〇一四年七月二十日（当年の陰暦では六月二十四日）

元禄二年六月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月二十日

である。【その一】この前日に新庄を発った芭蕉は羽黒山へ向かった（途中、本合海（もとあいかい）から古口・清川を経て狩川まで、実に二十九キロメートルに及ぶ最上川の川下りを初めて体験している）。羽黒山では南谷の別院に入り、途中に芭蕉生涯一度の本格登山であった月山（一泊）・湯殿山登頂を挟んで十日に鶴岡に発つまで、七泊八日を過ごした。

四日の正午頃、本坊に招かれ、天台の高僧別当代会覚（えかく）阿闍梨（京都出身。法名和合院照寂。次の「其玉や」で注するように第五十代別当天宥が伊豆流罪に処せられて後、当「羽黒三山」（天台宗系ではかく呼称した）の別当は本山の東叡山寛永寺が兼務をした。芭蕉参詣当時の別当は東叡山大円覚院公雄であったが、兼務別当は当地には赴かず、その別当（院）代として派遣されていたのが会覚である）に謁して蕎麦切をふるまわれ、その場で本句を発句とした歌仙「有難や」の巻が巻き初められた（但し、この日は初折の表六句までで、翌五日羽黒山山頂（標高四一八メートル）の羽黒権現の参詣の後に初裏十二句で初折まで出来、月山と湯殿山の登頂が無事成就した後の九日に再開、名残の折（表十二句と裏六句）が詠まれて完成したらしいことが「曾良随行日記」の記載から窺える）。

有難（ありがた）や雪をかほらす南谷（みなみだに）

此日閑に飽て、翁行脚の折ふし、羽黒山於本坊興行の歌仙をひらく、

元祿二年六月にや

有難や雪をめぐらす風の音

羽黒山本坊ニおゐて興行

元禄二、六月四日

有難や雪をかほらす風の音

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の句形。

第二句目は「花摘」（其角編・元禄二年奥書）の句形で、「南谿集（みなみだにしゅう）」（羽州羽黒山連であった松童窟文二編・文政（一八一八）元年刊）にはこの句形で載り、

元祿二年六月四日、於羽黒山本坊

という前書と、

おくの細道には、雪をかほらず南谷とあるは、例の後に再案せられしなるべし

と丁寧に附記されてある（ここらは底本の岩波文庫版中村俊定校注「芭蕉句集」の脚注に基づく）。

第三句目は「曾良俳諧書留」に載る完成した歌仙「有難や」の巻の発句の句形。脇は「奥の細道」にフル・ネームで名が載る芭蕉らをここに案内した、門前町荒町で山伏たちの摺り衣染めを生業とする図司（近藤）左吉、俳号露丸（呂丸とも記す）が、

有難や雪をかほらす風の音　芭蕉
住程（すむほど）人のむすぶ夏草　露丸

と付けている。

以上から本句は、

有難や雪をかほらす風の音

←

有難や雪をめぐらす風の音

←

有難や雪をかほらす南谷

の推敲過程を経たことが知れる。「かほらす」（仮名遣は正しくは「かをらす」は既にして「風」を匂わせているから決定稿の「南谷」は実際の芭蕉が泊した霊場の地名であり、その「かほり」は霊地の妙香ででもあるのであろうが、それは同時に自ずと「南風」から「風薫る」の意が利くように選ばれたものであるということがこの推敲順列から判然としてくるのである。

以下、「奥の細道」の羽黒山の段の前段。

＊

六月三日羽黒山に登る圖司左吉
と云ものを尋て別當代會覺阿
闍梨に謁ス南谷の別院に舎して
憐愍の情こまやかにあるしせらる
四日本坊於本坊俳諧興行

有難や雪をかほらす南谷

＊

■やぶちゃんの呟き

この露丸は三十そこそこの若者であったが、芭蕉は親しく接した別当代会覚に対しては勿論（次に掲げる「其玉や羽黒にかへす法（のり）の月」の私の注を参照)、この俳諧に精進せんとする青年露丸に対しても非常な好感を持ったことが「奥の細道」やその関連諸資料によってはっきりと分かる。伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の人名解説「呂丸（近藤）」には『呂丸は『聞

書七日草』という書物を残すが、これは羽黒山での芭蕉の教えを記述した書。芭蕉の俳論「不易流行」が最初に着眼されたのはこの時の呂丸との対話の中といわれている』とあり、また、露丸は後の元禄五年九月には芭蕉庵をも訪問、この時に芭蕉は「三日月日記」の稿本を彼に譲っている。しかしこの露丸、その翌元禄六年二月二日、京都で客死してしまうのである。」

＊

本日二〇一四年七月二十日（当年の陰暦では六月二十四日）

元禄二年六月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月二十日

である。【その二】芭蕉はこの羽黒山滞在中に、親しく接した別当代会覚阿闍梨らから羽黒山中興の祖として知られる第五十代別当天宥法印追悼の句を求められたらしい。一応、ここに配しておく。

羽黒山別当執行不分叟天宥法印は、行法いみじききこえ有て、

止観円覺の仏智才用、人にほどこして、あるは山を穿、石を刻て、

巨靈が力、女媧がたくみを盡して、坊舎を築、階を作れる、

青雲の滴をうけて、筧の水とほくめぐらせ、石び器、木の工、

此山の奇物となれるもの多シ。一山擧て其名をしたひ、其徳をあふぐ。

まことにふたゝび羽山開基にひとし。されどもいかなる天災のなせるにやあらん、

いづの國八重の汐風に身をたゞよひて、波の露はかなきたよりをなむ告侍るとかや。

此度、下官、三山順禮の序、追悼一句奉るべきよし、

門徒等しきりにすゝめらるゝによりて、をろをろ戯言一句をつらねて、

香の後ニ手向侍る。いと憚多事になん侍る。

其玉や羽黒にかへす法の月

無玉や羽黒にかへす法の月

悼遠流の天宥法印

その玉を羽黒にかへせ法の月

その玉を羽黒へかへせ法の月

［やぶちゃん注：長い前書を有する第一句目は現存する出羽三山歴史博物館蔵になる真蹟懐紙の句形。末尾に

元禄二年季夏

とクレジットする。

第二句目は第一句の真蹟懐紙の句が、

其

無玉や羽黒にかへす法の月

とあるのから復元した句。即ち、懐紙では「無」と最初に書いたものを見せ消ちにして「其」と改めてあるのである。これは誤字なのではなく、初案を変えたものと採るべきである。

第三句目は「泊船集」（風国編・元禄十一年）の、第四句目は「芭蕉句選」（華雀編・元文四（一七三九）年刊）の句形。これらは後の改案であろう。私は「その玉を羽黒にかへせ法の月」の「に」が羽黒山での臨場感を伴っていて、しかも命令形であるところに魂呼びの感懐が漂い好ましいと感ずる。

出羽三山神社（出羽三山という呼称は実は近代以降に使われるようになった語であって、かつては「羽州三山」・「奥三山」・「羽黒三山」（天台宗系）・「湯殿三山」（真言宗系）と呼ばれていた。三山それぞれの山頂に神社があってこれらを総称して現在は出羽三山神社という。宗教法人としての現在の正式名称は「月山神社出羽神社湯殿山神社（出羽三山神社）」。この注記部分はウィキの「出羽三山」に拠る）の公式サイト内の「中興の祖・天宥法印に続く歴代別当遺品展」によれば、天宥別当は慶長一一（一六〇六）年に山形県西村山郡川

土居村吉川（現在は西川町）安仲坊に生れ、二十五歳にして第五十代別当に就いてその類稀な才能を発揮、一山の繁栄を願って様々な施策を講じた。例えば今に見る天然記念物指定の四百本にあまる羽黒山杉並木や羽黒山頂までの二千四百四十六段に及ぶ石段、また、東三十三ヶ国を出羽三山の信仰区域と規定してその受け入れ先としての組織や諸制度を整備するなどの現在ある出羽三山信仰の磐石の基礎を築いた人物であった。しかし、讒言によって伊豆大島へ流罪となり、遂に帰ることなく八十二歳にして遷化したとある。芭蕉らが泊まった宝前院若王寺南谷別院も、芭蕉が詣でた二十余年前にこの天宥が五年をかけて建てた建坪七百坪（約二千三百平方メートル）の壮大なものであったともいう（場所については異説もある。現在の比定地には礎石が残るのみ）。山本胥氏は「奥の細道事典」で、天宥は『なかなかの事業家』で、『当時勢力のあった天海僧正に取り入り、つぎつぎに寺領を拡大』するといった『強引さが、一部の人たちから反感を受けた』とし、『事業欲にはしりすぎた天宥は、芭蕉好みの男ではない』と断ずる（私も同感である。山本氏も指摘するように、この前書で記されたような門徒衆の称揚した天宥の業績に対して本当に芭蕉が好ましく感じたとすれば、それは「奥の細道」に記されねばならない。しかし天宥のことは一言も触れられていないのである）。山本氏は、寧ろ、そうした追悼の句を望んだ会覚や門徒露丸の人柄にこそ惹かれ、その懇望にほだされて「戯言（ざれごと）」と諧謔しつつものしたものが、この句と前書であったのではないかと推理されている。これにも私は諸手を挙げて賛同するものである。

「其玉」は七月の魂祭（たままつり）、祖霊祭を指していよう。私の好きな第三句ならば――遠島となって流人の島大島で亡くなられた法印天宥さまの御魂を――仏法のあまねき慈悲の光を放つ月よ――今も恋い慕って已まぬ衆徒らのいる、この神々しい羽黒に、還しておくれ――というのである。第一句・第二句では御霊は羽黒に既に還されたこととなるが、句の詠ぜられる際のそこで仮想された句内の時間が当該の魂祭の日であったとすれば、これでもおかしくはない。」

＊

本日二〇一四年七月二十二日（当年の陰暦では六月二十六日）

元禄二年六月　六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月二十二日

である。この日、芭蕉は遂に月山（標高一九八四メートル）の頂上を踏破し（登頂は午後三時過ぎ）、山頂の角兵衛小屋に泊まった。

雲の峰幾つ崩(くづれ)て月の山

［やぶちゃん注：「奥の細道」。「曾良俳諧書留」には、

雲の峰幾つ崩レて月の山

とある。

この句は私の亡き母が好きな句であった。童謡のようなこの句を詠ずる優しい母の声の響きが今も聴こえる……

ここで「奥の細道」の羽黒山の段の後段総てを示しておく。

＊

五日權現に詣當山開闢能除大師は
いつれの代の人と云事をしらす
延喜式に羽州里山の神社と有書
瀉黒の字誤て里山となせるにや羽
州黒山を中略して羽黒山と云にや

月山湯殿を合て三山とす當ー寺

武ー江東ー叡に属して天台止觀の

月明らかに円ー頓融ー通の法の燈かゝけ

そひて僧坊棟をならへ修ー驗行ー

法を励し靈ー山靈ー地の校ー驗人貴ヒ

且恐ルル繁ー榮　長（トコシナヘ）　にして目出度御山

と可謂

八日月ー山にのほる木綿しめ身に引かけ

寶ー冠に頭を包強ー力と云ものに

道ひかれて雲ー霧山ー氣の中に

氷ー雪を蹈てのほる事八里更に

日ー月行ー道の雲ー關に入かとあやしまれ

息絶身こゝえて頂上に至れは

日没（ホツシ）て月あらはる笹を鋪篠を

枕として臥て明るを待日出て雲

消れは湯殿に下ル

谷の傍に鍛冶小屋と云有此國の鍛ー

冶靈ー水を撰て爰に潔斉して

劔を打終月山と銘を切て世に

栄せらるる彼龍ー泉に劔を淬（ニラグ）とかや

［やぶちゃん字注：「栄」はママ。「賞」の誤字。］

干將莫耶のむかしをしたふ道に堪

能の執あさからぬ事しられたり

岩に腰かけてしはしやすらふ程

三尺計なる桜のつほみ半（ナカハ）にひらける

ありふり積雪の下に埋てはるをわ
すれぬ遅桜の花の心わりなし
炎天の梅-花爰にかほるかことし
行尊親王の歌の哀も増りて覺ゆ
惣此山-中の微-細行者の法式として
他言する事を禁す仍て筆をとゝめて
しるさす
坊に歸れは阿闍梨の求に仍て
三-山順-礼の句々短冊に書
涼しさやほの三か月の羽黒山
雲の峰幾つ崩て月の山
語られぬ湯殿にぬらす袂哉
曾良
湯殿山錢ふむ道のなみた哉
＊
■異同
（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）
○書瀉黑の字誤て里山となせるにや
←
●書寫（しよしや）、「黑」の字を「里山」となせるにや
○×【自筆本になし】
←
●出羽といへるは、「鳥の毛羽（もうう）を此國の貢（みつぎもの）に獻（たてまつ）る」と風土記に侍（はべる）とやらん。
○靈-山靈-地の校-驗
←

●靈山靈地の驗(げんかう)效、

○目出度御山と可謂［やぶちゃん注：訓読するなら「めでたきおやまといふべし」である。］

←

●めで度(たきおやま)御山と謂(いひ)つべし。

○三尺計なる桜のつほみ半にひらけるあり

←

●三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり。

○行尊親王の歌の哀も爰に增りて覺ゆ

←［やぶちゃん注：二箇所の相違がある（傍線部）。］

●行尊僧正の歌の哀(あはれ)も爰に思ひ出て猶(なほ)まさりて覺ゆ

■やぶちゃんの呟き

この部分の前半は珍しく地誌の考証の体(てい)を成している。最後に出る句のうち、「涼しさや」と「語られぬ」は別に後掲して注する。

「能除大師」「のうじよだいし（のうじょだいし）」と読む。飛鳥時代の皇族蜂子皇子（はちこのおうじ　波知乃子王　欽明天皇二三（五六二）年?～舒明天皇一三（六四一）年?）のこと。崇峻天皇の第三皇子。ウィキの「蜂子皇子」によれば、崇峻天皇五（五九二）年十一月三日、『蜂子皇子の父である崇峻天皇が蘇我馬子により暗殺されたため、蜂子皇子は馬子から逃れるべく丹後国由良（現在の京都府宮津市由良）から海を船で北へと向った。そして、現在の山形県鶴岡市由良にたどり着いた時、八乙女浦にある舞台岩と呼ばれる岩の上で、八人の乙女が笛の音に合わせて神楽を舞っているのを見て、皇子はその美しさにひかれて、近くの海岸に上陸した。八乙女浦という地名は、その時の八人の乙女に由来する。蜂子皇子はこの後、海岸から三本足の烏（ヤタガラスか?）に導かれて、羽黒山に登り羽黒権現を感得し、出羽三山を開いたと言われている』（羽黒山の語源説の一つ「奥羽の黒山」の元はこの話に基づく）。『羽黒では、人々の面倒をよく見て、人々の多くの苦悩を

取り除いた事から、能除仙（のうじょせん）や能除大師、能除太子（のうじょたいし）などと呼ばれる様になった。現在に残されている肖像画は、気味の悪いものが多いが、多くの人の悩みを聞いた結果そのような顔になったとも言われている』とあるが、伝説上の比定に過ぎない。

「延喜式に羽州里山の神社と有」「延喜式」にはこうした記載はない。不詳。

「風土記」出羽国の「古風土記」は現存しない。この語源説は誤伝であろう。

「木綿しめ」「ゆふしめ（ゆうしめ）」と読み、「木綿注連」である。紙縒りを編んで作られた修験の袈裟。行者の登山装束（新潮日本古典集成「芭蕉文集」富山奏氏の注に拠る）。

「寶冠」白い木綿で出来た頭を包み巻く頭巾のこと。同じく行者の登山装束（参照元は同前）。

「日月行道の雲關」「じつげつぎやうだうのうんくわん（じつげつぎょうどうのうんかん）」と読む。太陽や月に代表される星々が永遠に運行するところの天空雲間の境域。

「彼の龍泉に劒を淬（にら）ぐとかや」は後に出る中国の名剣（或いはその剣を鍛冶した夫婦の名ともされる）「干將莫耶」（「かんしやうばくや（かんしょうばくや）」と読む）の伝説に基づく。同伝説については私の電子テクスト芥川龍之介の「上海游記　十三　鄭孝胥氏」の『「夢奠何如史事強。呉興題識遜元章。延平劒合誇神異。合浦珠還好祕藏」』の注を参照されたい。「晉書」の「巻三十六　列傳第六」の張華の伝に載るそれを詳述してある。「龍泉」とは干將と莫耶の夫婦が呉山で籠って鍛えた雌雄二振りの宝剣を「淬（にら）ぐ」のに使った泉水のこと。「淬ぐ」とは焼き入れをすることをいう。

「堪能の執」練達の人の厳しい執念の強烈さ。

「三尺」約九十一センチメートル。

「わりなし」いじらしい。殊勝だ。前述の富山奏氏の注に、『雪中に痛めつけられながらも咲いている花に、花としての使命に忠実な自覚があるかのごとく感じての言葉。「わりなし」は切実な心情を表明する芭蕉の慣用語』とある。

「炎天の梅花」やはり富山氏注に、「雪裡（せつり）の芭蕉は摩詰（まきつ）が畫、炎天の梅蘂（ばいずい）は簡齋が詩」という「禅林句集」の句に基づき、『稀有（けう）の状の比喩』とある。「摩詰」は盛唐の詩人で絵もよ

くした王維の号、「簡齋」は陳簡齋で宋の詩人陳与義の号。

「行尊親王」（天喜三（一〇五五）年～長承四（一一三五）年）は冷泉天皇第二皇子三条院の曾孫、敦明親王（小一条院）の孫。参議従二位侍従源基平の子で、保安四（一一二三）年に天台座主となった（但し、拝命直後に辞任している）。天治二（一一二五）年、大僧正。白河・鳥羽・崇徳三天皇の護持僧で和歌をよくした。ここは「金葉和歌集」の第五二一番歌、

大峯にて思ひもかけず櫻の花の咲きたり
けるを見てよめる
もろともにあはれと思へ山ざくら花よりほかにしる人もなし

に基づく。しばしば参考にさせて戴いているサイト「やまとうた」の「行尊」で彼の和歌が読める。

「湯殿山錢ふむ道のなみた哉」前掲富山氏注に、当時は『地に落ちている物を拾わぬ山中の法で、賽銭は土砂のごとく散り敷いていたという』とある（山本胥氏の「芭蕉　奥の細道事典」での実地踏査の記録では現在はそういうことはないようである）。

――――――

……昼――
月山の尾根――
微速度撮影で雲海に且つ現われ且つ消える月山……

……夜――
月山の山頂――
幻想的な雲海たゆたう下界――
見下ろす真如明鏡の月……

○芭蕉が見た月について

●一六八九年七月二十二日当日は月齢五・四。当日の月の形は「こよみのページ」の「月の朔望」の「1689年7月」を見よ。

●一六八九年七月二十二日当日の山形（酒田標準）の月出没時刻（「こよみのページ」の算出に拠る）

月の出　午前一〇時六分
月正中　午後　四時九分
月の入　午後一〇時一分

である。

最後に。最後に記した山本胥氏の「芭蕉　奥の細道事典」（講談社α文庫一九九四年刊）には湯殿山から逆に芭蕉のここでの足跡を辿った記録が「月山登山記」として載る（三三六頁～三四三頁。三三三頁には羽黒山・月山・湯殿山の芭蕉の登山行程を示す概念図もある）。山本氏は「奥の細道」のこの月山登頂記の部分を明治以降に爆発的に流行する近代登山とその紀行『を先取りした山岳紀行といっておかしくな』く、まさに『世界最古の山岳紀行』と称するに足る名文と讃えておられる。山本氏の芭蕉を検証したその登攀記録は、如何なるインキ臭い評釈にも勝る非常に素晴らしい記録である。是非、ご一読をお薦めする。」

＊

本日二〇一四年七月二十三日（当年の陰暦では六月二十七日）

元禄二年六月　七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月二十三日

である。この日、月山頂上で目醒めた芭蕉は西の尾根を下って湯殿山を踏破、麓の湯殿権現に参った。その後、再び月山を昼頃に経由し（この月山と湯殿山御神体のルートは出羽三山参拝の最難所とされ、梯子や鎖場を配した急斜面の岩場が一・五キロほども続く）、日暮れになってようよう羽黒山へと帰還したのであった。

語られぬ湯殿にぬらす袂(たもと)かな

湯殿

語られぬゆどのにぬるゝ袂哉

［やぶちゃん注：第一句は「奥の細道」の、第二句は「花摘」の句形。

山本健吉氏は『三山順礼の三句の中で、最も感銘の乏しい句』と斬って捨てるが……どうもそんな気には私はなれない……この句は……昔から気になっていた……

……「語られぬ」は無論、「惣(そうじ)て此の山中の微細(みさい)、行者の法式(ほっしき)として他言(たごん)する事を禁ず。仍(よっ)て筆をとゞめてしるさ」ざるという禁忌を受けた語ではある。……

……「湯殿」と「ぬらす」は縁語で、「ぬらす」は容易に「袂」を引き出す。それは確かに一見、神域に至ったその感涙の涙とはとれる。……

……が……どうもそればかりではない気がする……何か「語られぬ」対象の中に幽かな隠微なるものが漂う……その隠微が実は同じく隠微な響きで「ぬらす」を引き出し、「ぬらす袂」は女人禁制の霊域に……意外にも……仄暗い山中の水迸る岩影に……鏡花の「高野聖」の艶なる妖女のイメージさえ誘い出だしているようには思われまいか？……

――「猥雑なるやぶちゃん！」――と指弾するなかれ！……

……確かに――そうした自分の感懐の中にあるところの猥雑なる詩想を持った己れを痛切に感じて慚愧の念に堪えないことは確かな事実ではある――ある――が……

……さて。この句について、かの安東次男氏は以下のように述べておられるのである。引用して終わりと致そう。

《引用開始》

○語られぬ湯殿にぬらす袂かな――湯殿詣は『時勢粧（いまようすがた）』（維舟編、寛文一年）の「夏」の部に「湯殿行（ぎょう）」として収め、「垢離（こり）かけば如来肌也（にょらいはだなり）湯殿行　中井正成」という例句を挙げている。『桜川』（風虎編、延宝二年）などにも見える。

修験道の四季の入峰（にゅうぶ）修行のうち夏の峰は、豊年祈願と身心鍛練法を兼ねて、近世に入ると広く一般に行われるようになった。湯殿詣もその一つだが、たまたまこれは三山祭（六月十五日、今は七月十五日）の時分と重り、一方、湯殿の御神体が女陰の形をした巨大な自然岩でその円丘を絶間なく涌湯が洗っているところから、とくに有名になったようだ。湯殿が三山の奥の院とされたのは、性器崇拝に因んでいる。古歌から名を借りて「恋の山」とも呼ぶ。

他言を封じた御山とはいえ、湯殿の御神体を拝んだらさすがに語りたくなった。だがやはりそれはできない、と読まなければ面白みはない。俳諧師なら、秘法の山をただ有難がって袂を濡したわけはない。

《引用終了》

■やぶちゃんの呟き

「曾良随行日記」の三山参拝から帰還するまでの三日間（五日は羽黒山参詣と精進潔斎のさまを確認するため）の記録を見ておきたい（ひらがなの読みは私が附したもの）。

○五日　朝の間、小雨ス。晝ヨリ晴ル。晝迄斷食シテ註連（しめ）カク。夕飯過テ、先、羽黒神前ニ詣。歸、俳、一折ニミチヌ。

〇六日　天氣吉。登山。三リ、強清水（こはしみづ）。二リ、平清水（ヒラシミヅ）。二リ、高清水（たかしみづ）。是迄馬足叶（かなふ）道（人家、小ヤガケ也）。彌陀原（みだがはら）、こや有。中食ス。（是ヨリフダラ、ニゴリ澤・御濱ナドヽ云ヘカケル也。）難所成。御田有。行者戻リ、コヤ有。申ノ上尅、月山ニ至。先、御室ヲ拜シテ、角兵衛小ヤニ至ル。雲晴テ來光ナシ。夕ニハ東ニ、旦ニハ西ニ有由也。

〇七日　湯殿へ趣（おもむく）。鍛冶ヤシキ、コヤ有。牛首（本道寺へモ岩根沢へモ行也）、コヤ有。不浄汚離、コヽニテ水アビル。少シ行テ、ハラジヌギカエ、手繦（たすき）カケナドシテ御前ニ下ル（御前ヨリスグニシメカケ・大日坊へカヽリテ鶴ケ岡へ出ル道有）。是ヨリ奥へ持タル金銀錢持テ不ㇾ歸。惣テ取落モノ取上ル事不ㇾ成。淨衣・法冠・シメ計（ばかり）ニテ行。晝時分、月山ニ歸ル。晝食シテ下向ス。強清水迄光明坊より辨當持せ、サカ迎（むかへ）セラル。及暮、南谷ニ歸。甚勞ル。

△ハラヂヌギカへ場ヨリシヅト云所へ出テ、モガミへ行也。

△堂者坊ニ一宿。三人、壱歩。月山、一夜宿。コヤ賃廿文。方々役錢弐百文之内。散錢弐百文之内。彼是、壱歩錢不ㇾ余。

月山山頂での「來光ナシ」というのは山岳での大気光学現象として知られるブロッケン現象のことを指している。陽光を背に立った際、影の側に雲や霧があると、光が散乱されて観察者自身の影の周囲に、虹に似た光の環となって現れるもの。霧や雲が観察者の近くにあると見た目の奥行きや巨大感が増大する。本邦では古来、「御来迎（ごらいごう）」「山の後（御）光」「仏の後（御）光」などと呼ばれ、「観無量寿経」などで説かれる阿弥陀如来の空中住立の御姿が現じたものと信じられた（ウイキの「ブロッケン現象」を参照した）。

特に最後の曾良の記載は当時の出羽三山での山岳修験霊場乍ら、結構、いろいろと冥加料のようなものが求められたことが分かる（私は残念なことに月山に登ったことがないのであるが、先に示した山本胥氏の「芭蕉　奥の細道事典」の現代の再現踏査でも、小屋で親切ごかして薬湯を飲ませて金を求められるシーンがあり、今も昔と変わらぬらしい）。

この難行苦行の行程の途中、芭蕉は可憐な咲きかけた高根桜（バラ目バラ科サクラ属タ

カネザクラ *Prunus nipponica*。別名、峰桜（みねざくら）を見出だし、それを「奥の細道」に詠み込んだ。

――「惣て此の山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめてしる」せなかった女陰秘蹟の山行に――淡い紅一点を――美しくもまた艶にも――仄めかしたのではあるまいか……私にははっきりと……可憐な峰桜を愛おしんで……「袂」を「露」に「ぬらし」つつこごんでいる……芭蕉が……見えるのである……」

＊

本日二〇一四年七月二十四日（当年の陰暦では六月二十八日）

元禄二年六月　八日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月二十四日

である。以下の句、羽黒山滞在中の句ではあるが、この日に同定出来る資料はない。しかし三山礼拝を終えて困憊して休んだその翌日（会覚自らが芭蕉を別院に訪ねている）にこの禅味に満ちた句を配するのは強ち不自然とは思われないのである（この翌日には「曾良随行日記」によって歌仙「有難や」が満尾していることが分かる）。

月か花かとへど四睡（しすい）の鼾（いびき）哉

天宥法印の賛

月か花歟（か）問へば四睡の眠り哉

［やぶちゃん注：第一句目は真蹟画賛の、第二句目は「芭蕉翁句解参考」（何丸著・文政一〇（一八二七）年刊）の句形。第二句目の前書は「天宥」を「天看」と誤る。訂した。天宥筆の「四睡図」への画賛の句である。会覚に請われたものであろう。

「四睡図」とは中国天台山国清寺（こくせいじ）の僧であった豊干・寒山・拾得の三人が虎とともに睡る姿が描かれた禅画の画題。禅の悟りの境地を示すものとされる。参照したウィキの「四睡図」によれば、『構図としては豊干を画面中央に大きく描き、その左右にトラと寒山及び拾得とを小さく配し、不等辺三角形をなす。画題にふさわしく静粛と安定のある図相である点で、諸作品はほぼ一致する』とある。グーグル画像検索「四睡図」。

「月か花か」と風狂人芭蕉が大上段に問うのが面白い。芭蕉は既にして自らは鈴（りん）を振られる身と、わざと俗物丸出しで問う。さすれば四睡は鈴の代わりにいや増しの高鼾で応えるのである。］

＊

本日二〇一四年七月二十五日（当年の陰暦では六月二十九日）

元禄二年六月　九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月二十五日

である。この日は羽黒山滞在の最後の夜であった。

涼しさやほの三か月の羽黒山

涼風やほの三ケ月の羽黒山

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は「曾良俳諧書留」の句形（元は「涼風」を「掠風」と誤る。訂した）。後者は真蹟短冊もあり、これが初案である。底本（岩波文庫中村俊定校注「芭蕉俳句集」）では六月九日の作かとある。句柄や状況からも実際には私もこの日の作であったと思いたい（この日の月の山形での南中は六時十二分。但し、月齢から見ると、確かな「三か月」の形であるためにはその六月八日（南中は五時二十九分）の方がよりよいが、ここは三山順礼の間の月が三日月であったその名残を詠んだとすれば問題ない）。

夕景である。しかし、この句、ただの写生ではない。

本句は意外にも「奥の細道」旅立ち以後の初めての月の句であるが、安東次男氏は「古典を読む　おくのほそ道」でこの点に着目し、芭蕉が冒頭「松島の月まづ心にかかりて」と述懐しておきながら、結局、『松島で月の句を詠まなかったのは』、『羽黒の月（法（のり）の月）』（仏法の真如を写す明鏡としての月の謂いであろう）』を大切に思う心が既にその時点』（松島での意）『であったからだ、と覚らせる作りだ。「ほの三か月」に仄見を掛け、前文の「他言する事を禁ず」と呼応させて、私にも修行者の真如の月がいくらか見え初めたと言っているのだ。三日の新月に合わせて羽黒入したのは、どうやら予定の行動だった。ここまで

くると先に見咎めた「日和待ニ』（最上川大石田の段で天気はそう悪くないのに日和を待ったとあり、事実、滞留している）『の意味がほぐれる』とある。頗る同感する分析である。」

＊

本日二〇一四年七月二十六日（当年の陰暦では六月三十日）

元禄二年六月　十日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月二十六日

である。この日、芭蕉は遅く午後三時頃に羽黒山を後にし、鶴岡へ夕刻五時頃に着いた。鶴岡では先の図司左吉（露丸。彼はここまで芭蕉らと同道している）の縁者であった庄内藩（鶴岡藩とも呼ぶ）士長山五郎衛門重行（しげゆき）亭に泊まり、その日から三日がかりで本句を発句とする歌仙「めづらしや」の巻が巻かれた。

羽黒山を出（いで）て鶴が岡重行亭

めづらしや山を出羽（いでは）の初茄子（はつなすび）

［やぶちゃん注：「初茄子」（呉天編・享保一三（一七二八）年跋）。「曾良俳諧書留」に歌仙が載る。そこでは、

元禄二年六月十日

七日羽黒に參籠して

めづらしや山を出羽の初茄子　　芭蕉

[illegible]に車の音添（そふ）る井戸　　重行

という前書に発句、脇を亭主が付けている（他に曾良と露丸）。

「山を出羽（いでは）」は、羽黒山をというよりも、山また山の奥羽山脈を越えて遂に日本海側へと下ったといった感慨に「出で端（は）」山家から出てすぐにの意を掛けて、亭主が饗応した膳に盛られた初茄子を詠み込んで謝意の挨拶句とした。加藤楸邨は「芭蕉の山河」（講談社学術文庫一九九三年）で、この茄子は鶴岡近くで産する小粒の珍しい民田（みんでん）茄子と呼ばれるも

ので『非常にうまい』と記しておられる。山形県農林水産部六次産業推進課の「やまがた伝統野菜」によれば、民田茄子は『皮が堅く、果肉のしまりが良』く、『手のひらに乗るくらいに成長したところで収穫、卵型で果皮が堅く、果肉のしまりが良い。江戸時代、民田地域の八幡神社の社殿を作る際に京都の宮大工が種を持ち込んだと言われている』。『浅漬け、からし漬け、味噌漬け、一夜漬けなど漬物として食べられる』とある。」

＊

本日二〇一四年七月三十日（当年の陰暦では七月四日）

元禄二年六月十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年七月三十日

である。この前日の十三日、芭蕉は鶴岡から赤川を行く川舟で発ち、酒田に着いた。翌日の十四日、酒田湊の豪商御城米浦役人（東西廻船の要所に配された城米輸送船の荷の積み替えや監視・管理を掌っていた幕府の米置場役人。ここ酒田湊は西廻廻船の要衝として幕命を受けた豪商河村瑞賢が設置した）寺島彦助安種（やすたね）（号は詮道）邸に招かれて、七吟連句（恐らくは歌仙）興行が行われた。

暑き日を海にいれたり最上川

安種亭より袖の浦を見渡して

涼しさや海に入（いれ）たる最上川

涼しさを海に入たりもがみ川

暑き日を海に入てたる最上川

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は「継尾集（つぎおしゅう）」（不玉編・元禄五年刊）で「曾良俳諧書留」も同句形で、そこでは、

六月十五日、寺島彦助亭にて

涼しさや海に入れたる最上川　　芭蕉

寺島

月を揺りなす浪のうき見る　　詮道

と亭主が脇を付けている。日附が十五日となっているが、同じ曾良の「随行日記」の、

○十四日　寺島彦助亭へ被ㇾ招。俳有。夜ニ入歸ル。暑甚シ。

によって十四日の誤りと推定される。これによってこの「涼しさや」が初案と分かるが、これは既に決定稿とは印象が全く異なり、別稿・改案というより全くの別句としたくなるものである。所謂、芭蕉にしばしば見られる、有意に乖離した二様の創作時心情の併存という稀有の心的状態である（私は実はここにこそ芭蕉に対する深い魅力を感じている）。なお、この七吟連句は「曾良俳諧書留」には七句を並べただけで『末略ス』とあり、満尾したものが残されていない。

第三句は「奥の細道菅菰抄附録」＝「奥細道附録菅菰後考」（梨一著・文政一二（一八二九）年少波写本）の、第四句目は「奥の細道曾良本」の初稿である。

さて、頴原・尾形氏訳注の角川文庫「おくのほそ道」の発句評釈では、この日を「暑き夏の一日」とし、「暑き日」を直ちに水平線に沈む「太陽」を指すという解釈は、『芭蕉当時の句としては、そうした見かたや考え方はふさわしくない』とし、夕陽の海に沈む実景を知ることによって鑑賞を確かなものにするのは『少しもさしつかえない』、『しかし、「暑き日」の日は、やっぱり直接太陽をさしたものではない』と、異常なまでに【「日」≠「陽」説】を否定する。

ところが山本健吉氏の講談社学術文庫「芭蕉全句」では、逆に「日」を即物的な『沖に

今しがた沈もうとする赤い大きな夕陽の景観と、最上川の押し流す力との間に、一つの対応を作り上げている。最上川が夕陽を水平線の彼方に押し入れようとしているものとして、表現している。「暑き日」を「暑き太陽」と取らず、「暑き一日」と取る解釈もあるが、句の味わいが落ちる。太陽と大河と、あたかも自然のエネルギーとエネルギーのが相い搏(う)ような壮観であり、大景によって得た感動の句である』、と全く真逆の【「日」＝「陽」限定説】を宣明する評釈が載る。

個人的には、前者のような観念上の「暑き一日」を象徴する海に没する夕陽の実景として私は印象してきた。

そもそも前者には、当時の詩人の観念には即物的な夕陽の物理的直截詠や包括的象徴的手法はなかったという肝心のその証左が挙げられておらず、何より、「暑き一日」鑑賞の一助とするに『少しもさしつかえない』がしかしその印象は全くの誤りであるということを知れ、というこの意味不明の、国文学者の人を食った非論理的な謂いが、すこぶる附きで不快である。

かといって後者の山本氏のように、ジリジリと焼けつくような往年の日活映画みたいな「太陽」でなくてはだめ！　「太陽」が「青春」そのものを短絡的にドラマライズする如きシャウト一点張りの主張も、ちょとついて行けない。

加藤楸邨は「芭蕉の山河」でこの議論の多い問題に触れるが、『それにこだわらない方がよいであろう。自分の相伴ってきたこの最上川の流れを、今海に入れて涼しさが萌してきた。甚だしいこの暑き日』（楸邨氏の謂いなら「(陽)」と追記したくなる）『も海に入れてしまって、今眼前には最上川だけが涼しく海に流れこんでいるという気持ち』を詠んだものであり、『芭蕉の発想は横から眺めるというのでなく、対象とする物の中に入り立って、そこから機微の真実を把握してくるゆき方』をとる。この句の場合も『単なる眼前の景と限定するのでなく、最上川そのものの中に入り立ってゆくことを大切にしてみたいと思うのである』と美事、中庸の【「日」∨「陽」説】で記される。如何にも元国語教師然とした心地よい解説ではある（私も似たようなもってまわった言い方をしばしば教師時代にした

ことを思い出すのである)。両説をいなすのではなく、体をくいっと捻ってかわした上に、分かったような分からないような禅語染みたオチをつけるである。両者の包括的相互象徴的共時認識と言わないところがミソである。それともやっぱり芭蕉の時代にこうした複合的比喩象徴やアウフヘーベンに似た観念はタブーだとでもいうのであろうか?

安東節ではどうなるか、やっぱり最後はそこを楽しみにしていたのであるが、これが思ったより案外にしょぼいのである。安東次男は曾良の「随行日記」を披見してみたら当日の最後に『暑甚シ』とあるので、芭蕉が「涼しさや」から改稿した思い付きが分かった、と言うのみである。即ち、『甚暑にかさねて「暑き日」を持出したらかえって涼意をつよめるだろう、というところに滑稽の』それがある、と評するだけなのである。

敢えて私の立ち位置に近いものを選ぶとすれば、凡そ教師時代の私とは対極乍ら、やはり根性ドラマ風の熱血系山本健吉先生のそれを最終的には支持する。インキ臭い輩は惟然坊風に、

日を海にじゆつと入れたり最上川

とでもやらかさない限り、梗塞した頭脳には十七音が響かぬものらしい。これは冗談ではない。私はその音が確かに聴こえると本気で言っているのである。それは本段の直前にその音が聴こえるように芭蕉がちゃんおセットしていると考えているからである。前段、標高の高い羽黒山から月山・湯殿山は、登攀の大苦行はあったものの、「雪をかほらす」地であり、「ふり積む雪の下に埋もれて遅ざくら」が「かほる」地であり、「涼しさ」と「月の山」「ぬらす袂」の山行であった。「炎天(の梅花)」などは比喩の彼方へ去って涼風に冷感さえ添えている。しかしここで考えてみると、何故に芭蕉は、

谷の傍らに鍛冶小屋と云ふ有り。此の國の鍛冶、靈水を撰みて、爰に潔齋して劒を打つ。終ひに月山と銘を切りて世に賞せらるる。彼の龍泉に劒を淬(にら)ぐとかや。

という考証をわざわざ挟み込んだのか? それはこの三山詣前から始まって体感し始めて

いた下界の「甚暑シ」（『曾良随行日記』にしばしば出る）という自然を捕らまえているからに他ならない。そうしてその直後、饒舌さを反転させて、「羽黒を立」ち「川舟に乗」って「酒田の湊に下る」までの急ぎに急いで削ぎに削いだ（これは「五月雨を」の句のような最上川の速さではなく、私はその川風の向こうにある、実は炎熱をこそ暗示させるものだと思っている）の文の後にあるのは「あつみ山や吹浦かけて夕すゝみ」の炎暑の昼間を表象する句であり、その次に本句「暑き日を海に入れたり最上川」が現われれば、それはまさに直前で鍛えに鍛え抜いた真っ赤になった「日」＝「陽」の「劔」を最上川が「龍泉」たる海（「龍」と「海」とこれほどぴったり合致する語彙があろうか）にぐいっ！　と差し入れて「淬ぐ（にら）」と読まない方が、私は鈍感だと断ずるものである。

ともかくも私は――本句が大好き、なのである。

以下、「奥の細道」の鶴岡・酒田の段を示すが、そこに出る「あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ」という句は、この後、象潟へ行って再び酒田へ戻ってから創られた句で、時系列上の操作が加えられている。従って象潟の句の後に再掲して評する。

＊

羽黒を立て鶴か岡の城下長山氏
重行と云ものゝふの家にむかへられて
俳諧一巻有左吉も共に送りぬ
川舟に乗て酒田のみなとに下ル
渕庵不玉と云醫師の許を宿とす
　あつみ山や吹浦かけて夕すゝみ
　暑き日を海に入（いれ）たる最上川

＊

■やぶちゃんの呟き

「渕庵不玉」「えんあんふぎよく（えんあんふぎょく）」と読む。伊東玄順（慶安元（一六四八）年～元禄一〇（一六九二）年）。淵庵が医号で不玉は俳号。既出の大淀三千風が天和

三（一六八三）年が酒田を訪れた際にその脇を付けている。この時、芭蕉に昵懇して蕉門に入った。現在の酒田市中町一丁目に不玉宅跡が残る以外、事蹟はあまり知られていない（以上はムーミンパパのサイト「旅のあれこれ」内の『奥の細道』ゆかりの俳人　伊東不玉」を参照させて頂いた。不玉の脇句なども読める）。「醫師」は「くすし」。」

＊

本日二〇一四年八月　二日（当年の陰暦では七月七日）

元禄二年六月十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月　二日

である。【その一】この時、酒田を拠点にしていた芭蕉はこの日、奥の細道の最北端である象潟に到達した。［やぶちゃん注：　句に添えた二枚の写真は上から順に日本語版ウィキの「ネムノキ」の Kurt Stüber 氏の撮影になる合歓の花の再使用許可画像と英語版ウィキの“*Albizia julibrissin*”の Famartin 氏の撮影になる合歓の花の再使用許可画像を拝借した。グーグル画像検索「合歓の花」もリンクさせておく。］

象潟（きさかた）や雨に西施がねぶの花

象潟　六月十七日朝雨降〔十六日着、十八日に立〕

象潟の雨や西施がねむの花

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の句形で、同形で載る「雪まろげ」には、

六月十七日、朝象潟雨降ル、夕止、舟にて潟を　る

の前文がある。

第二句目は「曾良俳諧書留」の句形。〔　〕は縦二行の割注。初案であるが、こちらでは雨の景が主体で並列的叙景となって組み写真のような素人っぽさが出る。まさに俳諧の「てにをはの命」で、「の」一字の彫り(え)によって「西施」の面影の「ねむの花」が主人となったのであった。

因みにこれらの「潟」の字は総て底本（岩波版中村俊定校注「芭蕉俳句集」）では〈（さんずい）＋「写」〉の字体である。また、「合歓花」の「歓」は「歡」であるが、私の好みから「歡」とした。

私が「奥の細道」で最も愛する句である。

「ねむの花」マメ目マメ科ネムノキ亜科ネムノキ属ネムノキ *Albizia julibrissin* の枝先に集まって夏に咲く、細い刷毛の塊のような羽毛状に開いた（頭状花序的という）花。淡紅色のおしべが長く美しく、香りは桃のような甘さがある。和名の「ネム」「ネブ」は、夜になると葉が閉じるて就眠運動をすることに由来する。漢字名の「合歓木」は中国においてネムノキが夫婦円満の象徴とされていることから付けられたものである（以上は主にウイキの「ネムノキ」に拠る）。

芭蕉は「奥の細道」の象潟の段では、冒頭から闇中模索の絶景の地の属性である迷宮(ラビリンス)を演出、実際の天候や事実や実見を自在に変容(メタモルフォーゼ)させてモンタージュして、極めて詩的な映像――私はタルコフスキイの映像に近いものをそこに感ずる――を創り上げている（事実との齟齬に今の私は何の興味もない。それは諸家が隅を突っつき、詰まった木端まで綺麗に掘り出しているからそれらを参照されたい）。

何よりまず、「雨も又奇なりとせば」と呟くことによって、蘇東坡の七絶、

飲湖上初晴後雨
水光瀲艶晴方好
山色空濛雨亦奇

欲把西湖比西子
淡粧濃抹總相宜

湖上に飲す　初め晴れ　後に雨ふる

水光　瀲艶（れんえん）として　晴れて　まさに好く
山色　空濛として　雨も亦　奇なり
西湖を把（も）つて　西子（せいし）に比せんと欲せば
淡粧　濃抹　總て相ひ宜（よろ）し

［やぶちゃん語注：「瀲艶」は漣（さざなみ）のたちゆらぐさま。「空濛」は雨霧のために薄暗く朦朧としているさま。「西子」は西施。現在の浙江省諸暨（しょき）の田舎娘であったが会稽の恥を雪がんとする越王句践（こうせん）によって籠絡の道具として仇敵呉王夫差のもとへ送り込まれた悲劇の美女。「淡粧」は薄化粧、「濃抹」は欠くところのない完璧な厚化粧の意で、前者が晴天の、後者が雨に煙る西湖を比す。「相宜」は孰れも適って完全無欠な素晴らしさ示すの謂い。］

を象潟の秘鑰（ひやく）（秘密を解く鍵）として提示、そこに「奥の細道」の中の名文中の名文、「俤、松嶋にかよひて又異（コト）なり。松しまはわらふかごとく、象潟はうらむがごとし。さびしさに悲しびをくはへて、地勢、魂をなやますに似たり」という、恐ろしいまでに彫琢された表現を彼方まで敷き広げて、象潟の内向する幽玄深奥な形而上学的感懐で全景をゆっくりパンさせるのである。

本句はそうした夢幻的な広角画面から一気に、**雨にしっとりと濡れ垂れた、独り閨房に泣きはらした末に、涙を湛えたままに閉じられかけた睫毛のような（この私の比喩は雨後の合歓の花を見たことがある人にしか分からない）合歓の花**にクロース・アップ、「飲湖上初晴後雨」の「西湖を把つて西子に比せん」から死に至る懐郷病（ノスタルギア）に憂悶する深閨の幸薄き美姫を読者に直ちに連想させる。

以下、「奥の細道」の象潟の段を総て示す。

＊

風光

江ー山水ー陸の數を盡して今象潟に
方ー寸を責(セム)酒田の湊より東ー
北の方山を越礒を傳ひいさごを蹈
て其際十里日影やゝかたふく比
汐風眞砂を吹上雨朦ー朧として
鳥海の山かくる闇ー中に莫ー作して
雨も又奇なりとせは雨後の晴ー色又

と

賴母敷蜑の苫屋に膝を入て雨の
晴るゝを待其朝天能霽て朝日
花やかに指出る程に象潟に舟をうかふ
先能因島に舟をよせて三年幽
居の跡をとふらひむかふの岸に舟
をあかれは花の上こくとよまれし
櫻の老木西行法師の記念を殘ス
江上に御陵あり神功皇宮の
御墓と云寺を干滿珠寺と云
この處に行幸ありし事いまたき
かすいかなる故にや此寺の
方丈に座して簾を捲は風景
一眼の中に盡て南に鳥海天を
さゝへ其陰うつりて江に有西は

むやむやの關路をかきり東に堤

に

を築て秋田にかよふ道遙海北に

かまえて浪打入るゝ處を汐こしと云

江の縦横（シウヲウ）一里はかり俤松嶋に

かよひて又異（コト）なり松しまはわらふかことく

象潟はうらむかことしさひしさに

悲しひをくはへて地勢魂をなや

ますに似たり

象潟や雨に西施かねふの花

汐越や鶴はきぬれて海涼し

祭礼

曽良

象潟や料理何くふ神祭

美濃國商人 低耳

蜑の家や戸板を敷て夕すゝみ

岩上に雎鳩の巣を見る

曽良

波こえぬ契ありてやみさこの巣

＊

［やぶちゃん字注：本文中の「潟」の字も総て、〈（さんずい）＋「写」〉の字体である。］

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○いかなる故にや　　↓　●いかなる事にや

○さびしさに悲しびをくはへて　→　●寂しさに悲しみをくはえて

■やぶちゃんの呟き

象潟は芭蕉が訪れた当時は潟湖であった。ウィキの「象潟」によれば（アラビア数字を漢数字に変え、記号も一部変更した）、『紀元前四六六年に鳥海山が噴火し、発生した大規模な山体崩壊による流れ山が日本海に流れ込み、浅い海と多くの小さな島々ができあがった。やがて堆積作用の結果、浅海は砂丘によって仕切られて潟湖ができた。そして小さな島々には松が生い茂り、風光明媚な象潟の地形ができあがった。東西の長さは二〇町（約二二〇〇メートル）、南北の長さは三〇町（約三三〇〇メートル）をそれぞれ超える程度』の潟であったが、この時より一一五年後の『文化元年（一八〇四年）の象潟地震で海底が隆起し、陸地化した。その後、干拓事業による水田開発の波に飲まれ、歴史的な景勝地は消されようとしていたが、当時の蚶満寺の住職の呼びかけによって保存運動が高まり、今日に見られる景勝地の姿となった』。『現代も一〇二の小島が水田地帯に点々と残されている。とりわけ田植えの季節に水が張られると、往年の多島海を髣髴とさせる風景が見られる』とある。私は残念ながら訪れたことがない。

「苫屋（とまや）に膝を入（いれ）て」ここは直後に名の出る能因の、「後拾遺和歌集」の五一九番歌、

世の中はかくても経けり象潟の海士（あま）の苫屋をわが宿にして

に基づく。

「花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念を殘ス」これは、

象潟や櫻の波にうづもれてはなの上こぐ漁士（あま）のつり舟

を指すが、実はこれは西行が詠んだと伝承されるに過ぎない歌であって、山家集には所収しない。しかし、長谷川成一氏の『近世出羽国「象潟」―名所・名勝における歴史的景観の

保存と開発」によれば、『宗紙の「名所方角抄」に見えるところであって、もっとも和歌詠み達に引用される和歌で』あり、『この歌に詠まれた桜は、西行桜と呼ばれ、蚶満寺阿弥陀堂の北の島の桜といわれている』（当然、それは桜の「老い木」の精と西行の物語である木世阿弥の夢幻能「西行桜」と響き合い、芭蕉も確信犯でここでそれを字背に匂わせようとしている。もしかするとこの時、俳諧師芭蕉はシテの老桜の精となって『この浮世と見るも山と見るも。唯其人の心にあり。非情無心の草木の。花に浮世のとがはあらじ』という言葉を心の内に木霊させていたのかも知れない）とあり、また井原西鶴の「好色一代男」に引用されたり、前に出た酒田の不玉の「継尾集」にも載る、当時は確かに西行の和歌として諸人の共有していた〈真歌〉であったのである。長谷川氏は『西行が実際に象潟へ来訪したのかどうかについては、色々と意見が分かれるところであ』るが、『目崎徳衛『西行の思想史的研究』（吉川弘文館一九七九年二二四頁）では、能因がそこで越冬までした象潟の地を西行が目指した可能性は大きい』とあるのを支持されておられる。個人的には西行の歌かどうかは別として本歌を私はこの芭蕉の句とともに偏愛する。西行の「海」と「桜」と「海士」と――この華麗なモザイクが――「象潟（海）」と「合歓の花」と「西施」と――に不思議に私にはオーバー・ラップして〈聴こえてくる〉のである。

「むやむやの關」有耶無耶の関。歌枕。現在の由利（ゆり）郡象潟町関にあったとする。後掲する「曾良随行日記」参照。

「汐こし」汐越。象潟の西の入海の、潮が打ち寄せてくる浅瀬及び海浜の低地の固有地名。評者によっては象潟と同義とする。

「象潟や料理何くふ神祭」象潟汐越の熊野権現の社の祭の際には魚肉を食うことを禁忌としていることに基づくか。評者によっては祭日の珍しい料理を連想するともする。孰れにせよ、一見、駄句である。不玉の「継尾集」には、

神事の日にまいりあひければ
蚶潟（きさがた）や幾世になりぬ神祭り　　曾良

という別句が載る。前二句の引き立てとしか私には思われないが、これは祭りを詠まず、時間と時代を遙かに超越した象潟の自然の中に潜み込んでしまった芭蕉の世界を、俳諧的に一気に俗界のリアリズムに引き戻すという大切な役割を持っているとは言えよう。

「蜑の家や戸板を敷て夕すゞみ」作者の低耳は宮部彌三郎という岐阜長良の行商人で池西言水の流れを汲む俳人で芭蕉とは旧知（元禄元年頃に鵜飼見で知り合ったらしい）。「奥の細道」の旅では芭蕉らの象潟以降の北陸道での宿所の紹介をしたりしている（ここは主に安東次男氏の「古典を読む　おくのほそ道」に拠る）。表に戸板を敷き並べて縁台替わりとして夕涼みをする、鄙の漁村の日常の海士の景。前句のハレをぐっと鄙びた漁師の納涼という風流に繋げ、次の句の最後まで象潟の段は潮の匂いが満ち満ちるのである。

「雎鳩」「みさご」と読む（音は「ショキュウ」）。タカ目タカ亜目タカ上科ミサゴ科ミサゴ属 *Pandion* のタカ類の総称。主に海岸に棲息し、好んで魚を捕食することから魚鷹の異名を持つ。漢字では「鶚」「雎鳩」と書く。和名は、高空から水中に突入して足で獲物を攫み取ることから「水さぐる（ミズサグル）」→水探（ミクサ・ミサゴ）→水捜し（ミゾサガシ）」等の意とする説、水沙の際にいることから「水沙（ミサコ）」の意とする説、獲物を捕らえた際の水音に由来するという説等がある。

「波こえぬ契ありてやみさごの巣」安東次男氏は前掲書で、この句について、

《引用開始》

『詩経』の「周南」に「関々タル雎鳩河洲ニ在リ。窈窕タル淑女　君子ノ好逑（よき配偶者）」とあり、愛情こまやか夫婦の引合にされる鳥である。それを、遥々北の荒海までやって来て見た、ということが感動になっている。因にこの句には、「北海のあらけなき波の中に、鶚とき岩ほ有。頂のうへに雎の巣作り侍りて、あひやはらげるはごくみも、いとあはれに覚ければ、　浪こさぬ契りやかけしみさごのす」、という曾良自筆の懐紙もある。

《引用終了》

と述べておられる。これはまさに最初の芭蕉の句の夫婦和合の「合歓の花」に響き合うよ

うに同じ象徴である「睢鳩」が花鳥の翫（ぬいとり）、鴛鴦のそれのように象潟の段の発句という閨（ねや）の通路には、美しく掛っているのであった。

最後に「曾良随行日記」を対比検証はせずに掲げておく（『蚶彌寺』は『蚶滿寺』の誤字）。

○十五日　象潟へ趣。朝ヨリ小雨。吹浦ニ到ル前ヨリ甚雨。晝時、吹浦ニ宿ス。此間六リ、砂濱、渡シ二ツ有。左吉狀届。晩方、番所裏判濟。

○十六日　吹浦ヲ立。番所ヲ過ルト雨降出ル。一リ、女鹿（めが）。是ヨリ難所。馬足不レ通。番所手形納。大師崎共、三崎共云。一リ半有。小砂川、御領也。庄内預リ番所也。入ニハ不レ入二手形一。塩越迄三リ。半途ニ關と云村有（是より六郷庄之助殿領）。ウヤムヤノ關成ト云。此間、雨強ク甚濡。船小ヤ入テ休。

○晝ニ及テ塩越ニ着。佐々木孫左衞門尋テ休。衣類借リテ濡衣干ス。ウドン喰。所ノ祭ニ付テ女客有ニ因テ、向屋ヲ借リテ宿ス。先、象潟橋迄行テ、雨暮氣色ヲミル。今野加兵へ、折々來テ被レ訪。

十七日　朝、小雨。晝ヨリ止テ日照。朝飯後、皇宮山蚶彌滿）寺へ行。道々眺望ス。歸テ所ノ祭渡ル。過テ、熊野權現ノ社へ行、躍等ヲ見ル。夕飯過テ、潟へ船ニテ出ル。加兵衞、茶・酒・菓子等持參ス。歸テ夜ニ入、今野又左衞門入來。象潟緣起等ノ絶タルヲ歎ク。翁諾ス。彌三郎低耳、十六日ニ跡より追來テ、所々へ隨身ス。

私がこの句を偏愛する理由は何より――合歓の花がいっとう好きな花だから――である。」

＊

本日二〇一四年八月　二日（当年の陰暦では七月七日）

元禄二年六月十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月　二日

である。【その二】西行桜での一句が残る。

西行櫻　　西行法師

象潟の櫻はなみに埋（うづも）れて

はなの上こぐ蜑（あま）のつり船

花の上漕（こぐ）とよみ玉ひけむ古き櫻も、いまだ蚶滿寺（かんまんじ）のしりへに殘りて、

陰波（かげなみ）を浸せる夕晴（ゆふばれ）いと涼しかりければ

ゆふばれや櫻に涼む波の花

［やぶちゃん注：「継尾集」所収の句。「曾良俳諧書留」には、

夕ニ雨止て、船ニて潟を　ル

と前書する。また「菅菰抄附録」には、この句は真蹟が越中井波にあるとし、そこでは、『象潟西行櫻にて』と前書した上、『夕がた雨やミて處の何がし舟の中を案内せらるゝ』と附記するとあるが意味をなさない。「ねぶの雪」（立国編・元文四（一七三九）年刊）「道しるべ集」（也足編・慶応二（一八八六）年序・真蹟模刻本）では、

夕方雨やみて處の何がし、舟にて江の中を案内せらるゝ

とあるのが正しい。また、別に真蹟懐紙が残り、そこでは、

と前書するとある。

伝西行の和歌については前の「象潟や雨に西施がねぶの花」の私の注を参照されたいが、桜の古木蔭に夕涼みするこの芭蕉は、「波」を「花」と見立てて西行の古歌を偲んで西行と自身を重ね合わせると同時に、前書に謡曲「西行桜」を通わせて、桜の老い木の精と自身をも一体化させて而してその影をも消滅させ、波の花が涼やかな舞いを舞っていると幻想しているように私には感じられる。」

＊

本日二〇一四年八月　二日（当年の陰暦では七月七日）

元禄二年六月十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月　二日

である。【その三】汐越の句。

汐越(しほごし)や鶴はぎぬれて海涼し

腰長(タケ)の汐といふ處はいと淺くて、鶴をり立(たち)てあさるを

腰長や鶴脛(はぎ)ぬれて海涼し

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の句形。

第二句目は「ねぶの雪」の句形。「曾良俳諧書留」にも、

腰長汐(こしたけのしほ)

という前書でこの句形で載るから、こちらが初案であった。「腰長」は腰丈で、地名の汐越と同様、入海の潮の入り来る腰位ほどの浅瀬のことをいう一般名詞から転じたものであろう。夏場でもあり、嘱目吟の可能性は薄いと思われるが、博物誌に詳しい安東次男氏は『タンチョウなら、ひょっとして象潟辺でも夏場に棲んでいたかも知れぬ』と留保されている。安東氏は既に「松島　嶋々や千々にくだけて夏の海」で引用した通り、『じつはもう一つ大切な見どころがある。象潟（芭蕉）の「鶴脛」は、松島（曾良）の「鶴に身をかれ（ほとぎす）」の写しだというのが何ともしゃれた、同行俳諧である。こういうところを見落す俳諧紀行は無意味になる』と述べておられる。例によって険のある安東節乍ら、私も松島の段で述べた如く、昔からこの鏡像関係に強く惹きつけられてきただけに、激しく共感す

るものであり、安東氏ではないが、この眼目をこの句で語らない評者は「奥の細道」が分かっていないと言いたくなるのである。」

＊

本日二〇一四年八月　四日（当年の陰暦では七月九日）

元禄二年六月十九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月　四日

である。この前日に芭蕉一行は象潟から酒田の医師伊藤玄順（号淵庵不玉）方へ戻った。

あつみ山や吹浦（ふくうら）かけて夕すゞみ

あつみ山吹浦かけて夕すゞみ

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の句形。但し、そこでは酒田到着最初の発句のように記されてある。「曾良俳諧書留」には、

出羽酒田伊藤玄順亭にて

と前書した不玉と曾良との三吟歌仙「あつみ山や」の巻が載る。脇は不玉が付けて、

温海山や吹浦かけて夕すゞみ　　翁

みるかる磯にたゝむ帆筵　　不玉

としている。「継尾集」では

江上之晩望

と前書する。「出羽　俳諧袖の浦」（洪水編・明和二（一七六五）年自跋）には、

袖之浦江上納涼

とあって、本句が酒田湊に船を浮かべての夕涼みの広角の景であることが分かる。因みに「鼠日記」（支考編・元禄十一年奥書）では、本句について、

此句は吹浦の二字うれしければかく申され侍しを、此ごろなにがしが集には、福浦かけてと出し侍り。是俳諧をしらぬのみにあらず。先師をあやまるにちかし。

と漢字一字の誤りを激しく批難しているが、この『なにがしの集』とは「鳥之道集」（玄梅編・元禄一〇（一六九七）年序）である。蕉門随一の論客と言われた支考は実は芭蕉から信頼されておらず、対するこの玄梅は芭蕉の絶大な信頼を受けていた去来に近かった人物ではなかったかと思われている。

「温海山」「あつみやま」と読む。は現在の温海岳（標高七三六メートル）。酒田の港からは南南西約三九キロメートル（この後の六月二十六日にはこの山麓の海沿いの町である温海に芭蕉は宿泊している）のところに位置し、一方の「福浦」は北北東一〇キロメートルのところにある砂浜海岸の漁村（こちらはこの前の六月十五日に象潟に向かう途中で一泊した場所である）。地図上から考えると全景を広角で見渡せたと言うのは少し疑問で、ここは既に宿泊予定地としていた温海という地名に「暑（あつ）」さを掛け、吹浦には実景たる夕べの納涼の酒田湊の浦を吹く風を掛け、それらを合わせて縁語とした、大観に寛ぎの気分を詠んだものではある。支考が大上段に齧みつくほどの句ではない。芭蕉も草葉の蔭で笑っておられよう。」

＊

本日二〇一四年八月　八日（当年の陰暦では七月十三日）

元禄二年六月二十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月　八日

である。この日は酒田の最後の夜で、「曾良随行日記」に『晴。近江ヤ三良兵へ〻被ㇾ招。夜ニ入、即興ノ発句有』と記す句である。近江屋というのは富豪で酒田三十六人衆の一人、俳号を玉志といった。この時、芭蕉・曾良・不玉・玉志の四人であった。二句続けて示す。

あふみや玉志亭にして、納涼の佳興に瓜をもてなして、

發句をこふて曰、句なきものは喰事あたはじと戯ければ

初眞桑四にや斷ン輪に切ン

初眞瓜四ツにやわらん輪にやせむ

初眞桑たてにやわらん輪に切ん

［やぶちゃん注：第一句目は真蹟詠草の、第二句は「うき世の北」（可吟編・元禄九年）の、第三句は「泊船集」の句形。］

花と實と一度に瓜のさかりかな

［やぶちゃん注：「芭蕉翁追悼　こがらし」「泊船集」「浪化壬申日記」（自筆・元禄五～八年）に載り、「蕉翁句集」（＝蕉翁文集第一冊「風一」・土芳編宝永六（一七〇九）年成立）

で元禄二年の作とする。一応、瓜繋がりでここに配しておく。山本健吉氏は「芭蕉全句」で『これでは何の奇もないので、何かの事情』『たとえば、ある親と子と一度に身の栄えにあったような時にそれを祝って詠んだ句かもしれない』とする。仮にこの前の句と同じ席とすれば、饗応役の近江屋三郎兵衛玉志への祝祭の挨拶句という仮定は一応、出来そうだ。」

＊

本日二〇一四年八月　十三日（当年の陰暦では七月十八日）

元禄二年六月二十九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月　十三日

である。酒田を十日に立った芭蕉は大山（現在の山形県鶴岡市大山）、十一日温海（現在の鶴岡市温海）、十二日中村（現在は新潟県村上市北中）、この十三日には村上に着いた。村上を発ったのは二日後の七月一日であった。

西濱

小鯛さす柳涼しや海士（あま）がつま

西濱

小鯛さす柳涼しや海士が家

小鯛さす柳涼しや海士が軒

［やぶちゃん注：第一句は「曾良俳諧書留」の、第二句は「雪まろげ」の、第三句目は「芭蕉翁発句集」（蝶夢編・安永三（一七七四）年刊）の句形。「白雄夜話」（加舎白雄著・天保四（一八三三）年刊）ではこの第三句目を第一句の初案とする。

「西濱」という地名が現在まで不明で、どこで詠まれた句か同定されていない。山本健吉氏は多様な評者の比定地を掲げる最後に「曾良随行日記」に『六月二十九日、村上に泊まって「未ノ下尅、宮久左衛門同道ニテ瀬波へ行」とあり、瀬波とは村上の西方の海岸だから、この時の嘱目かもしれない』と記され、『二十八日に村上に着いて、二日も滞在したのだから、ここで一句も作らないとも考えられない』とするのに従って本日に配した。

因みに、山本氏によれば、この句は後に金沢で披露され、『金沢の俳人が表六句を付けて

い』るが、その脇句は、

小鯛さす柳涼しや海士が家　芭蕉
　北にかたよる沖の夕立　名なし

と「奥の細道附録」にあると記され、この名のない脇句こそはこの村上滞在の際、『芭蕉を歓待した土地の人として『随行日記』に名前が出てくる喜兵・友兵・太左衛門・彦左衛門・友右などのうち、誰かであろう』とまで推測されている（七月朔日の条）から、山本氏の同定は確信に近い。」

＊

本日二〇一四年八月十五日（当年の陰暦では七月二十日）

元禄二年七月　一日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月十五日

である。この日芭蕉は村上を発って築地（旧新潟県北蒲原郡築地村。現在の新潟県胎内市築地）へ泊まっている。

風かほるこしの白根を國の花

［やぶちゃん注：「柞原集」（句空・元禄五年奥書）に載る。底本巻頭には、

春なれやこそのしら根を國の花

此句、芭蕉翁一とせの夏越路行脚の時、五文字「風かほる」と置てひそかに聞え侍るを思ひ出て、卒尓に五もじをあらたむ

と句空が附記しているとあり（「卒尓」は「そつじ」で「卒爾」に同じ。軽率にも、でこの「春なれや」という改変が句空によるもの――芭蕉の句ではないことが告白されているのである点に注意されたい）、「蕉句後拾遺」（康工編・安永三（一七七四）年自序）には、

加賀へ文通に

と前書する。

この最後の前書と、怪しげな句空の改作行為から見て、少なくとも本句は金沢に着く前、旅先から加賀の句空宛に記された私的な書簡中の挨拶句であった可能性が高い。特にこの

日に配する理由はないが、間隙が有意に空くのを避けたいので今日に配しておく。寧ろ、加賀に近づいてしまったのでは句の感懐は半減してしまう感ずるからでもある。以下に述べるように私の日時比定は必ずしも見当違いとは思っていない。

「こしの白根」越の白嶺。霊峰加賀白山の古称。現在の石川県白山市と岐阜県大野郡白川村に跨る。標高二七〇二メートル。標高が高いために他の山で残雪が消えた季節でもあっても雪を被ったその峰が遠方からでもはっきりと見える。それが目立って白くなった越の白嶺というは北陸路に晩秋が訪れた象徴でもある。芭蕉が実際に金沢に入ったのは旧暦七月十五日で秋の季感としてはぴったり一致するということに着目すべきであろう（但し、これは暦上のことで句空自身が芭蕉の来訪を『一とせの夏越路行脚の時』と言っているように、当時にあっても実感は夏であったのである）。しかもこの句が村上でのものならばまさに秋の始まりでである七月一日である点でも句作の季が極めて一致もするのである。無論、加賀藩領内に入らぬ限り白山は見えないから、この句は以上の推理から想像句であることが判明する。そうして先行する月山での芭蕉の句、「有難や雪をかひらす南谷」に即して考えれば、ここで「風かほる」のはまさに越の白嶺を象徴する白峰から吹き下してくる「雪」を「かほ」らせて吹き渡る「風」と読める。そしてその雪をいただく神聖霊妙な偉容の山を芭蕉は加賀の「國の花」と讃えているのである。そうしてその想起された「國の花」たる白山は、そのまま挨拶をした風雅の「國の花」たる句空をも指し、白嶺から吹き降ろす秋の雪薫る涼風とともに貴方にお逢い出来るのを心待ちにしています、という挨拶吟へと転じているのである。

以上を記すに大いに参考になった山本健吉氏の「芭蕉全句」の評釈は、『句空が初五「春なれや」と改めたのは、祝賀の句に仕立て直したものか。愚かなことである』と結んでおられるが、同感である。季感を無視した捏造に等しいものである。尤も、金沢の平民であった俳人句空は生没年不詳ながら、「朝日日本歴史人物事典」によると元禄元（一六八八）年四十一、二歳の頃に京都知恩院で剃髪、金沢卯辰山の麓に隠棲し、翌年のこの時、芭蕉が金沢を訪れた際に正式に入門、同四年には大津の義仲寺に芭蕉を訪ねている。五部の選

集を刊行している俳壇的野心は全くなく、芭蕉に対する敬愛の念は非常に深く、宝永元(一七〇四)年に刊行した「ほしあみ」の序文では芭蕉の夢を見たことを記しているとあるから、一種熱狂的な芭蕉の弟子の一人であったものと思われ、こうした恣意的な改造も彼にとっては芭蕉との一体感を味わえるものでもあったのであろう。」

＊

本日二〇一四年八月十八日（当年の陰暦では七月二十三日）

元禄二年七月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月十八日

である。この日、芭蕉は出雲崎に到達、かの「荒海や」の名吟が詠まれた。

荒海や佐渡によこたふ天河（あまのがは）

［やぶちゃん注：「奥の細道」。「曾良俳諧書留」には、

七夕

と前書する。因みにこの前書は記載位置から、ちゃんと実際の七夕が過ぎた八日以降に附された前書と思われるのが微笑ましい。曾良の「雪まろげ」にも、

越後の國出雲崎といふ所より佐渡が島へ海上十八里となり。

初秋の薄霧立（たち）もあへず、流石（さすが）に波も高からざれば、たゞ手の上の如く見渡さるゝ

と前書がある。

本句に関わって芭蕉は別に複数の真蹟懐紙で俳文様の長い類似した前書を多くものしているが、それらと大同小異の「風俗文選」（許六編・宝永三（一七〇六）年跋）の「銀河の序」と称されるものが人口に膾炙するので、以下に句も含めて全文を示す（底本は岩波文庫一九二八年刊の伊藤松宇校訂「風俗文選」を用いたが、総て句点であるため、読み易さを考えて適宜読点に代え、一部に読みを歴史的仮名遣で追加した。踊り字「〱」「〲」は正字化した）。

銀河ノ序

芭蕉

〇北陸道に行脚して、越後ノ國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡が島は海の面十八里、滄波を隔て、東西三十五里に、よこおりふしたり。みねの嶮難の隈隈まで、さすがに手にとるばかり、あざやかに見わたさる。むべ此島は、こがねおほく出て、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞こえあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらんむとするほど、日既に海に沈で、月ほのくらく、銀河半天にかかりて、星きらきらと冴たるに、沖のかたより、波の音しばしばはこびて、たましひけづるがごとく、腸ちぎれて、そゞろにかなしひきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なにゆゑとはなくて、しほるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

「曾良随行日記」を見ると、

〇四日　快晴。風、三日同風也。辰ノ上刻、弥彦を立。弘智法印像爲ㇾ拝。峠ヨリ右へ半道計行。谷ノ内、森有、堂有、像有。二三町行テ、最正寺ト云所ヲノヅミト云濱へ出テ、十四、五丁、寺泊ノ方へ來リテ左ノ谷間ヲ通リテ、國上へ行道有。荒井ト云、鹽濱ヨリ壱リ計有。寺泊ノ方ヨリハ、ワタベト云所へ出テ行也。寺泊リノ後也。壱リ有。同晩、申ノ上刻、出雲崎ニ着、宿ス。夜中、雨強降。

〇五日　朝迄雨降ル。辰ノ上刻止。出雲崎ヲ立。間モナク雨降ル。至柏崎ニ、天ヤ彌惣兵衛へ彌三良状届、宿ナド云付ルトイヘドモ、不快シテ出ヅ。道迄兩度人走テ止、不止シテ出。小雨折々降ル。申ノ下尅、至鉢崎。宿タワラヤ六郎兵衛。

とあるから、この嘱目した眺望は四日の宵であったことが分かる（因みに句とは関係ない

がこの五日の柏崎での予想外のトラブル・シーンは日記中、珍しく芭蕉と曾良の怒りがはっきりと感ぜられる珍しい箇所である)。

本句を現代音で総てローマ字化して示してみる。

Araumi ya Sado ni yokotau(yokotou) Amanogawa

十七音の内、母音の「a」音が九音(若しくは八音)、「o」音が四音(若しくは五音)で山本健吉氏が「芭蕉全句」で述べられているように、『ほとんど強音の a 音と o 音で組立てられ、雄渾な調べを』構成している。

続いて山本氏は、『「横たふ」は元来他動詞であるべきものを自動詞として用いた文法的誤用だと言われている。だがこれは、たとえば他動詞「寄する」を、自分を寄せるという意味で自動詞「寄る」と同じように使った場合に準ずべきもので、反射動詞(再帰動詞)的用法として』(*)

[やぶちゃん注:(*)再帰動詞:ヨーロッパ言語に於いて意味上の動作主と被動者(形式的には主語及び目的語として現れることが多い)が同じであるような動詞をいう。目的語として再帰代名詞をとる動詞でフランス語「se lever」(起きる)やドイツ語の「sich freuen」(喜ぶ)などの類(ここは「大辞泉」に拠った)。ウィキの「再帰動詞」によれば、『意味的には、自分自身を対象として行う行為(再帰的)のほか、言語にもよるが、複数の人または物が互いにしあう行為(相互的:英語では each other などを使う)、他の明示されない動作主や現象によって受ける行為(受動的:英語では能格動詞などを使う)などにも用いられる。本質的再帰動詞は、他の言語ならば自動詞を使うような場面(他の動作主があるとは普通考えられない)に用いられる』とあり、また、日本語にはこうした『再帰動詞はないが、再帰代名詞に当たる「自分」「自ら」などがあり、また相互的動作を現す補助動詞的成分「あう」(「投げあう」「罵りあう」など)がある。また形式的には特殊な点はないが、「着る」「脱ぐ」のように自分のことについてのみ用いる他動詞を再帰動詞と呼ぶこともある。「顔を洗う」なども用法的にはこれに含められる』とある。私は大学時代、フランス語を第一外国語にしたが、こんなこともうすっかり忘れていて少し淋しい気がした。]

『日本語の自然法からはずれているわけではない。学者よりも詩人が、母国語の法則を直感的に把握している一例と見做してよいであろう』と、インキ臭い重箱の隅掘りの文学の分からぬ国語学者共を論破されている。実に小気味よいではないか。かの安東次男氏も「古典を読む　おくのほそ道」で同様に、『一種の再帰動詞的絶対動詞の語法を兼ねているよう』で、織女の来迎を待ち望む牽牛、望郷の思いにかられている佐渡の流人たち（若しくはその魂魄）という、『（待ち侘びる者の許へ小舟を渡してやるために）天の川が自分自身を横たえる、と考えればよい。芭蕉はさしずめ脱出の共犯である』と述べておられる。流石は安東節、炸裂している。

実は私には本句についての教師時代の教授に内心忸怩たるものがある。それは「天の川は佐渡には横たわらない」ということを強調したことである。それは無論、詩的真実の説明のためであったが、それによって芭蕉の操作性を鬼の首を捕ったように豪語していた（確かに豪語であったことを告白する。その点に於いては先に私自ら批判した国語学者連中と私は同列であった）自分が情けないのである。頴原・尾形評釈（角川文庫版「おくのほそ道」）ではこのことについて「横たふ」論に続けて以下のように述べてあるので含めて引用し、自戒としたい。

《引用開始》

なおこの句については、「横たふ」に関する文法上の論と、銀河は出雲崎から佐渡に横たわるようには見えないという地理上の実際説とがある。前者については、文法的に「横たはる」と自動詞を用いたのでは、語勢がゆるんでしまう。こうした場合まず貴むべきは、ことばからくる感じやリズムであるから、文法的な破格は当然許されねばならぬというのが定説となっているようだ。もちろんそれが正しいにちがいない。しかし芭蕉がそうした文法論や修辞論を考えた結果、「横たふ」としたのではない。これは自然に芭蕉の口に浮かんだことばだったのである。そうし文法的誤謬（ごびゅう）があろうがなかろうが、結局「横たふ」でなければならなかったのである。また地理の実際はなるほど句と異なっているかも知れぬ。しかし「銀河半天にかかりて」という景観は、たとえその方向が出雲崎の町そって流れて

いたろうとも、作者の心に「佐渡に横たふ」と思わせるに十分な感銘があったにちがいない。それは一個の詩境である。読者は作者とともにこの詩境を味わえば足りる。かならずしも銀河の実際の方向の如何（いかん）を問題とする必要はない。

《引用終了》

なお、本句が実際に披露されたのは「曾良随行日記」「曾良俳諧書留」からは、三日後の今町（直江津）での会吟の折りであったと考えられる。

「奥の細道」の原文は次の「文月や六日も常の夜には似ず」の句で示すこととする。」

＊

本日二〇一四年八月二十日（当年の陰暦では七月二十五日）

元禄二年七月　六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月二十日

である。この日、芭蕉は今町（現在の直江津）に到着、また弥三郎の紹介状を見せて当時の住職が眠鷗という俳人でもあった聴信寺という寺を訪ねたが、忌中につき宿泊を断られた。それを聴いた檀家の石井善次郎なる人物が呼び止めた。「曾良随行日記」には『〇六日雨晴。鉢崎ヲ晝時、黒井ヨリスグニ濱ヲ通テ、今町へ渡ス。聽信寺へ彌三狀届。忌中ノ由ニテ強テ不ㇾ止、出。石井善次良聞テ人ヲ走ス。不ㇾ帰。及再三、折節雨降ル故、幸ト歸ル。宿、古川市左衞門方ヲ云付ル。夜ニ至テ、各來ル。發句有』とあるように、まさに前日五日の柏崎の天屋（あまのや）の一軒のフラッシュ・バックであった。本句はその日の連句の発句であった。

直江津にて

文月（ふみづき）や六日（むいか）も常の夜には似ず

文月の六日も常の夜には似ず

文月や六日も常の夜には似ぬ

［やぶちゃん注：第一句目は「曾良俳諧書留」の句形。「其袋（そのふくろ）」（嵐雪編・元禄三年自序）には、

此國何トヤラいふ崎にとまりて、所の夷もおし入て、句をのぞみけるに

というやや穏やかでない（と私は思う）前書を附す。

第二句目は「泊船集」の、第三句目へ「俳諧　柏原集（かしわばらしゅう）」（江水編・元禄四年自序）句形。脇は石塚喜左衛門左栗なる人物（土地の有力な俳人か。亭主ではない）が、

文月や六日も常の夜には似ず　はせを
　露をのせたる桐の一葉　左栗

と脇を付けており、しかもこの連句には芭蕉の宿泊を断った眠鷗も参加している。ところがこの連句（おそらくは歌仙）、二十句で未完に終わっている。

――明日は牽牛織女の出逢う七夕という今日六日……夜空も祭前夜の町内もそうしてここにこうしている我らの心も……常には似ず何か艶めいた空気の中にいることだ――

というのであろう。

「奥の細道」の越後路の段を示す。

＊

酒田の余波（ナコリ）日を重て北陸道の
雲に望遙々のおもひ胸をいた
ましめて加賀の苻まて百三十
里と聞鼠の關をこゆれは
越後の地に歩行を改て越中
の國一ふりの關に至る此間九日
暑濕の勞に神をなやまし病おこりて
事をしるさす
　文月や六日も常の夜には似ず
　荒海や佐渡によこたふ天河

＊

■やぶちゃんの呟き

「百三十里」約五百十一キロメートル弱。これは酒田からの距離であろう。但し、酒田から長めに推定計測しても加賀金沢までの距離は実際には四百五十キロメートルは越えるものの、五百は越えないようだ。

「此間九日」酒田の次の大山着が六月二十五日（グレゴリオ暦八月十日）で市振着は七月十二日（グレゴリオ暦八月二十六日）で実際には鼠が関越（現在の山形県の新潟県境に在る）が六月二十七日だから、北陸路の日数と限定しても、事実は十四日である。諸本がこの大きな齟齬を問題にし続けているが、頴原・尾形注は『俗に「越後路九日、越中路三日」という』と注する。しかし安東はこれについて、そういう俗諺があるというが、『当時既にそういう云方があったかどうか分からない』と留保する。私は寧ろ、ここを実際より短く言ったことと、この「荒海や」の作中第一とも目される名句を配しながらその通称、越後路と呼ぶ章段が如何にもそっけなく短いことと無関係ではないと感じる。見てきたように、実は象潟のしっとりとした感動を含む酒田の愉しい思い出以降、この越後路では急転直下、腸の煮えくり返る意想外の乞食俳諧師扱いを受けることになった。それはある意味、思い出したくない部類の出来事であった。さすれば、完成した「奥の細道」では「暑湿の労に神をなやまし病おこりて事をしるさず」と圧縮・省略・割愛したのではなかったか？　その忌避意識が自ずと時制をも短縮させたのではあるまいか？

そうして、そうした眇めでこの句を見ると「常」「には似ず」とするのは、何やらん、妖しい雰囲気とも読め、暗に不当なあしらいを受けた連中（前に述べた通り、その場には宿泊を拒んだ当の住職もいるのである！）への皮肉にもとれるのである。ここまでは大方の御批判を俟つものではある。

いや、この日数の齟齬はよく見ると、私には齟齬でもなんでもない、正しいものに見えてくるのである！

この段には「奥の細道」では数少ない、特定日を限定出来る日附が極めて例外的にある。それが本句の七月六日なのである。そうしてそれは次の「荒海や」の句がその翌日の七夕

の句であると読めるように出来ている。とすれば、あくまで作品内の仮想事実（この場合、市振に着いた実際の日附が七月十二日であったことは実は全く意味をなさない。そもそも市振の段は日付の特定は出来ないのである）として、この句が七月六日の夜にようよう疲労や病いから解放されて、のびのびと創った句であるというのであれば、その直前までの文章は、一気に体調が回復するのは逆に不自然だから、少なくともその前日の七月五日か四日ぐらいに措定出来よう。そうするとそこから九日前というのは、先に示した実際の大山着である六月二十五日や鼠が関越の六月二十七日に限りなく一致するからである。「曾良随行日記」が発見されてこの方、多くの研究者はその実際的事実と「奥の細道」との齟齬とそれに基づく虚構の暴露に躍起となった余り、創作物としての「奥の細道」内の時間の中に身を穏やかに委ねるということに対して哀しいことに免疫を失ってしまったのだと私は思うのである。

基。翻って、寧ろ、以上述べたような生臭い現実を完全に払拭して、七月六日の日附を持つこの一見凡庸にしか見えぬ句とそれに続く名吟「荒海や」を虚心に眺めたならば、この句がまさにこの操作によって創作順を崩して「荒海や」の前に持ってこられているという事実が、この二句を以ってもっと連句的な付け合いとして読み解くことを別に可能とする。

即ち、本句が年に一度の彦星と織姫星を結ぶ妖しい艶なる天の川を引き出すならば、ここは一つ、荒海の彼方に妖しく蹲る悲劇の流人島とそこで流人らが恋い焦がれた本土との間に、一句の天の川を掛けてやろう、というのが「荒海や」をそこに配した芭蕉の感懐であったのである。

「荒海や佐渡に横たふ天の川」が名句中の名句である所以は、その字背にある歴史の中の心傷（トラウマ）としての流人島に纏わる非常に深く痛いノスタルジアに基づくものなのだと私は今、感ずるのである。」

＊

本日二〇一四年八月二十二日（当年の陰暦では七月二十七日）

元禄二年七月　八日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月二十二日

である。この日、高田に着き、二日間滞在して十一日に能生（現在の新潟県糸魚川市大字能生。その翌十二日が市振となるのである）に発った。高田では医師細川春庵（俳号は棟雪）なる人物が何かと心遣いをしてくれ、本句を発句とした歌仙「薬欄を」一巻を二日で巻いている（実際の宿泊先は池田六左衛門方）。

細川春庵亭ニテ

薬欄（やくらん）にいづれの花をくさ枕

越後の國高田醫師何（なにが）しを宿として

薬園にいづれの花を草枕

［やぶちゃん注：第一句目は「曾良俳諧書留」の、第二句目は「泊船集」の句形。「曾良随行日記」に、

○八日　雨止。欲立、強テ止テ喜衞門饗ス。饗畢、立。未ノ下尅、至高田ニ。細川春庵ヨリ人遣シテ迎、連テ來ル。春庵ヘ不寄シテ、先、池田六左衞門ヲ尋。客有。寺ヲかリ、休ム。又、春庵ヨリ手紙ル。頓而尋。發句有。俳初ル。宿六左衞門、子甚左衞門ヲ遣ス。謁ス。

○九日　折ゝ小雨ス。俳、歌仙終。

○十日　折ゝ小雨。中桐甚四良ヘ被招、歌仙一折有。夜ニ入テ歸。夕立ヨリ晴。

○十一日　快晴。巳ノ下尅（暑甚シ。）、高田ヲ立。五智・居多ヲ拜。名立ヘ手不屆。直ニ

能生へ通、暮テ着。玉や五良兵衛方ニ宿。月晴。

とあるように、この春庵という人物、恐らくは芭蕉来訪の情報を事前に得ていて、事前に準備していたことがこの記載からも分かる。歌仙では、

薬欄（やくらん）にいづれの花をくさ枕　　翁
　荻のすだれをあげかける月　　棟雪

と亭主が脇を付けている。

「薬欄」は薬草園のこと。医師の亭主に対して相応しい挨拶句である。そうしてそれまでの越後路でのおぞましい現実への芭蕉の憤りと憂鬱がやや落ち着きを取り戻したかのような寛ぎの感じも伝えているように私には思われる。

さすればこそ遂に満を持して小説的章段「市振」の段がこの直後に生まれるのであるが（但し、諸本から推すと、本文は勿論、「一（ひと）つ家（や）に遊女もねたり萩と月」というかの吟も市振での即吟ではなく、旅を終えて本文を書いた折りの作かとも言われる）……既に気づかれた方もいるであろう……この棟雪の付けた脇……「荻のすだれをあげかける月」――「荻」と「月」である……妙に気になるのである……」

＊

本日二〇一四年八月二十六日（当年の陰暦では八月二日）

元禄二年七月　十二日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月二十六日

である。この日、芭蕉は市振に着いた。

一つ家に遊女もねたり萩と月

一つ家に遊女も寝たり荻と月

一つ家に遊女も寝たり萩に鹿

［やぶちゃん注：前の項で述べた通り、諸資料から推すと、物語仕立ての異例の、話柄そのものの虚構性が喧しい「奥の細道」の当段本文は勿論のこと、本吟も実際のこの日の市振での即吟ではなく、旅を終えて「奥の細道」本文を書いた折りの作であろうと多くの研究者は指摘している。しかし、そんなことは何の意味もないことである。紀行だろうが随筆だろうが小説だろうが（そもそも当時、今のような虚実認識に立った近代文芸上の息苦しい画然とした区別は存在しない）総てそれは物語りである。芭蕉が実際に遊女らに逢ったかどうかという刑事染みた聴き込み捜査をする必要は文芸として味わうためには寧ろ、致命的な強毒として作用する。但し、私は事実ここに書かれたものに近い遊女との邂逅がこの旅の何処かで実際にあったと考えている。そう考えてこそ／のみこの話は我々の印象の中で忘れ難いリアリズムを持つからである。そう考えずにこの章段の虚構性を殊更に論う輩は、句を含めた本文を味わう資格を最早、永遠に喪失する者だと言わざるを得ない。敢えて言うならこのこのシークエンスは、以前に検証したようにここまでの芭蕉の越後路の実際は忘れてしまいたい不本意にして不快な現実体験（風体の乞食俳諧僧と胡散臭く思

われて宿を断られ、後から芭蕉と知れれば手を返したようにすり寄ってくるといった凡俗の態度に接したこと）の多いものであったと考えられ、さればこそ、その事実を拭い去ってしまい、自身の思い出の、昇華された「奥の細道」の旅を、かくも濃厚に演出したのだと言い換えてもよい。

第一句目は「奥の細道」の知られた句形。

第二句目は「泊船集」の句形。但し、何人かの研究者はこれを異形句とせずに単なる「萩」を「荻」の誤字とする。底本の岩波文庫版中村俊定校注「芭蕉俳句集」には本文は勿論、脚注にも載せない。中村氏は完全に「泊船集」のそれを誤伝としているものと思われる。私は後述する理由からこれを異形句として掲げておく。私はこの句と「曾良俳諧書留」の市振の時間帯（無論、本句は載らない）のすぐ前に記されてある、前項で記した、高田での、

薬欄にいづれの花をくさ枕　翁
　荻のすだれをあげかける月　棟雪

の医師細川春庵棟雪）のつけた脇句が気になって仕方がないのである（これを指摘している方は管見する限り、誰もいないので、猶更気になるのである。私は気にしない方がおかしいと思うからである）。この荻は荻で出来た簾ではある、しかし芭蕉の意識の中にはこの棟雪の「荻」と「月」という取り合わせを生かしたい意識が沈殿したのではなかったとは言えない。私は敢えて言うなら寧ろ、カラーで撮る「市振の段」の「萩と月」よりも、もの寂びたモノクロームの「市振」の段を撮りたい。そうしてその時私の好みとしてはあからささまに艶なる色を感じさせる「萩と月」よりも「荻と月」の映像を選びたく思うのである。少なくともそうした私の「市振の段」のフィルムの印象の中では「荻と月」も十分に資格を持った句として認識されるのである。次の第三句の解説も参照されたい。

第三句目は「芭蕉句選年考」（石河積翠著・寛政年間（一七八九年～一八〇一年）成立）に『或本に萩に鹿ともあり』と記されあるものから復元した。この第三句目は頴原退蔵・尾形仂訳注の角川文庫版「おくのほそ道」の発句評釈の注記データではこの句形を『疑問』として否定的であるのに対し（実はこの句の直後に示された出典その他の注記部分は尾形氏によって後から追加されたもので、頴原氏の研究を後継して本初を改訂した尾形氏はこの第三句目を明らかに存疑の句とし、捏造された可能性が強いと考えていることを示唆する謂いとしか読めない）、後掲するように恐らくは頴原氏の手になると思われる発句評釈中では当「萩に鹿」が初案であった可能性を強く示唆する叙述となっている（時間を置いて二人の研究者が携わったことによる齟齬で、これについては冒頭の凡例で尾形氏も別な箇所については断っているのであるが、読む者は頗る戸惑わざるを得ない強い違和感がある）。私は評釈本文の立場をとってこの句形を掲げておくこととする（底本の岩波文庫版には脚注に「句選年考」の記事を引用するのみで異形句としては本文採用をしていない）。評釈は遊女が「萩」に、芭蕉自身が「月」に象徴されるように思われたという通釈の後、以下のように続く。

《引用開始》

萩と月は実景であったろうが、この句の場合、それは実景としてよりも一種の比喩として重く見られねばならぬ。しかし単に遊女を芭蕉自身を月に喩えたというだけならば、談林風の見立てと相距ること遠くはない。これは単純な、もしくは理知的な比喩や見立てとはちがう。萩と月とは、いわば遊女と芭蕉との「にほひ」である。楚々として可憐な萩の姿、清く世塵を離れた月の光、それは眼前の景であると同時に、芭蕉の心には遊女と自分との相をそのま見ているのであった。萩と月とは実であり、また虚である。つまりこの句は、そうした芭蕉の心持からはいって味わうべきであろう。芭蕉自身を月の清光に擬したのはおかしいという考えもあろうが、この場合道徳的な反省などは加わっていない。ただ遊女の萩に対して、芭蕉は自分の世捨て人めいた境涯を、何となく素月の光に思いくらべたのであろう。

この句をかように解すると、おそらく今日の人々からは好感をもたれまい。たとえ萩と月とが「にほひ」を表わしたものにせよ、それが比喩的に取扱われているかぎり一種の臭味がある。だから萩と月とをまったく眼前の景物として見ようとする解もある。しかしそれは、樋口氏もいわれている通り、芭蕉時代の句としては正しい鑑賞のしかたではあるまい。『句選年考』に「ある本に」というのは出所が明らかでないが、とにかく、「萩に鹿」と伝えたものさえあるというのである。芭蕉が「萩と月」と置いたのは、けっして単なる景物のあしらいではなかった。もとより「萩に鹿」のままではあまりに露骨な比喩に終わるので、さらに推敲（すいこう）をかさねた結果、この句を得たのではあるまいか。

《引用終了》

因みに文中の「樋口氏」云々というのは昭五（一九三〇）年麻田書店刊「奥の細道評釈」とその著者樋口功氏のことである。私はこの解釈が支持されるとならば、寧ろ、第二句の「荻と月」は正当な句案の一つであった可能性がもっと支持されてよいと考えるものである。いや、例えば初案を「萩に鹿」とあからさまに見立ててその如何にもな『臭味』を避け、高田の棟雪の脇句で気に掛かっていた取り合わせの「荻と月」と改作してみたものの、その画像が如何にもな陰画なってしまい、艶が減衰するのを物足りなく思い、最初の印象を反芻して「萩と月」と決したとしても——そういう推敲過程があったと仮定しても何らおかしくない。

一つ家に遊女も寝たり萩に鹿
←
一つ家に遊女も寝たり荻と月
←
一つ家に遊女もねたり萩と月

いや、寧ろ、「市振の芭蕉」という情話のショート・フィルムとしては「萩に鹿」の方が断

然、面白いと私は思うのである（というよりもこの推敲過程そのものをショート・フィルムとして撮ったらこれは格別に傑作が出来ると真剣に思っているのである）――言っておくが私はアカデミズムの研究者ではない。だからこそ彼らが言いたくても言えない／本来言いたいはずの自由な愉しい夢想を飛ばすことが出来る。いや、本当の研究者というのはそういう文芸の享受の核心にあるはずのエクスタシーを失った時、最早、饐えた魂なき遺骸を掘る盗掘者に成り下がるのだと思う――。

以下、「奥の細道」の市振の段。

＊

今日は親しらす子しらす犬もとり駒返し
なと云北國一の難所を越てつかれ
侍れは枕引よせて寝たるに一間隔て
面の方に若きをんなの聲二人計ときこゆ
年老たるおのこの聲も交て物語する
をきけは越後の國新潟と云處の
遊女成し伊勢に參宮するとて
此關までおのこの送りてあすは古里に
かへす文したゝめてはかなき言傳なと
しやる也白浪のよする汀に身をはふら
かしあまのこの世をあさましう下りて
定めなき契日々の業因いかにつた
なしと物云をきくきく寝入てあし
た旅たつに我々にむかひて
行末しらぬ旅路のうさあまり覺
束なう悲しく侍れは見えかくれに
も御跡をしたひ侍ん衣の上の御情

に大慈のめくみをたれて結縁せさ
せ給へとなみたを落す不便の
事には侍れ共我々は
所々にてとゝまる方おほし
唯人の行にまかせて行へし
神明の加護必つゝかなかるへ
しと云捨て出つゝあはれさ
しはらくやまさりけらし
　一家に遊女もねたり萩と月
曽良にかたれは書とゝめ侍る

＊

■異同

（異同は〇が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

〇伊勢に參宮する　→　●伊勢參宮する
〇行末しらぬ旅路のうさ　→　●行衞しらぬ旅路のうさ
〇不便の事には侍れとも　→　●不便（ふびん）の事には思ひ侍れども

■やぶちゃんの呟き

まさに壮大な連句「奥の細道」の巻の、特異点としての恋と月の座である。

本段は西行の江口（淀川と神崎川の交わる場所にあった川湊。現在の東淀川区内）の伝承を第一の本歌とする。「新古今和歌集」の「巻第十　羈旅歌」の第九七八・九七九番の問答歌がそれである（二首ともに多少の異同を含むが「西行法師家集」「山家集」にも所収する）。西行が天王寺詣の途次、にわか雨に遇ってこの江口の遊里で一夜の宿を望むも、女主人の舟遊女「江口の君」妙（たへ）にすげなく断られる。そこで西行は、

世の中を厭（いと）ふまでこそ難（かた）からめ仮りの宿りを惜しむ君かな

と詠むと、江口の君は、

世を厭ふ人とし聞けばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ

と返したという話である。

これは後の「撰集抄」で厚艶な西行伝説に改作される。これが第二の本歌。

遊女妙は和歌を返した後、宿内へと西行を迎え入れ、妙が遊女の苦界（くがい）を語り、出家を志す胸内を『しやくりもあへず泣』きつつ訴え、一夜懇ろに語り合って再会を約すも、客のあって訪れることが出来ず、互いに逢いたい思いを和歌で贈答するもそのまま時の経つうちに、遂に行方知れずとなって亡くなったと聴いた。『かの遊女の最期のありさま、いかゞ侍るべきと、かへすがへすゆかしく侍り』と終わる（引用は岩波文庫版一九七〇年刊西尾光一校注本を用いた）。

そうしてさらに、この「撰集抄」を元に創作された夢幻能「江口」が第三の本歌となる。行脚の二僧（ワキ・ワキツレ）が都から江口の里に来て西行の古歌を口ずさんで懐かしむ。と、里の女（前シテ）が呼びかけつつ現われて、西行と遊女との問答歌の真意を説く。訝る僧らに自らを「江口の君」の霊と告げて消え失せる。里の男が旅僧に遊女が普賢菩薩となって現れる奇瑞を語って供養を勧めると、旅僧らが弔いをする。すると江口の君の霊（後ジテ）が二人の遊女を連れて舟に乗って現われ、遊女の悲惨な身と六道流転の歎きを述べた後、悟りの舞を舞って、執着を捨てたならば迷いはないとする大悟を示して、遊女は普賢菩薩に、舟は白象となって西の空へ消えて去ってゆく。

冒頭のワキとワキツレの「次第」は、

月は昔の友ならば　月は昔の友ならば

に始まり、後ジテの「江口の君」の舟遊びの舞いの場面を中心に集中的（九回）に「月」が現れるが、この場合、この月が真如の月であることは言を俟たない。

これらをインスパイアした芭蕉は俳諧の象徴性により、静謐さと同時に濃艶な暗示の匂わせを施した。ここでの遊女と僧形の俳諧師芭蕉は、第一本歌に立っている西行のような小洒落たストイッシズムや教養に富んだ高級娼婦のそれでもなく、第二本歌の過剰にウェットで互いに接して漏らしそうな濃密さを孕んだ何やらん隠微なエロティシズム（を私は強く感じる）でもなく、第三本歌の荘厳にして私には異様にしか見えない菩薩化する遊女とそれを崇める供養僧のそれでも、これ、さらさらない。

萩と月――これはやはり、素直にそのままの自然の「萩と月」なのであり、萩に作為のない「女」という存在の匂いを、月にそれを照らす静かな芭蕉の「真如」ならぬ「女」を遂に忘却することの出来ぬ凡夫としての「男」としての芭蕉の「心」の影を、私は詠むのである。そういう象徴関係をここに感じてはいけないのだと殊更に禁忌の駄目出しをし続ける一部の諸家（結構いる）は俳諧の真の味わい方を寧ろ、御存じない方だと私は断ずるものである。少なくともその人の見ている萩と月は、私の見ている萩と月とは全く違う対象であり、彼我の世界は世界と反世界であり、全く断絶した永遠に理解し合えぬものである。

「曽良にかたれば書きとゞめ侍る」「随行日記」にも「俳諧書留」にも記載はない。参考までに「随行日記」の当日と翌日の記事を示して終わりとする。

〇十二日　天氣快晴。能生ヲ立。早川ニテ翁ツマヅカレテ衣類濡、川原暫干ス。午ノ尅、糸魚川ニ着、荒ヤ町、左五左衛門ニ休ム。大聖寺ソセツ師言傳有。母義、無事ニ下着、此地平安ノ由。申ノ中尅、市振ニ着、宿。

〇十三日　市振立。虹立。泊ニテ玉木村。市振ヨリ十四五丁有。中・後ノ堺、川有。渡テ越中方、堺村ト云。加賀ノ番所有。出手形入ノ由。泊ニ至テ越中ノ名所少〻覺者有。入善ニ至テ馬ナシ。人雇テ荷ヲ持せ、黒部川ヲ越。雨ツヾク時ハ山ノ方へ　ベシ。橋有。壹リ

半ノ廻リ坂有。晝過、雨聊降晴。

申ノ下剋滑河ニ着、宿。暑氣甚シ。」

＊

本日二〇一四年八月二十八日（当年の陰暦では八月四日）

元禄二年七月　十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月二十八日

である。芭蕉は十三日に市振を発、滑川泊、十四日に滑川から高岡に出、その周辺を巡って三時過ぎに高岡に戻って泊まり、翌十五日、倶利伽羅峠を越えて金沢へ午後二時頃に着いている。諸本はこの句を十五日の作と比定するが、かの地に六年住んだ私に言わせれば、この行程ではロケーションは断然、十四日である。それ以外には、ない。

わせの香や分入（わけいる）右は有磯海

猶（なほ）越中をへてかゞに入（いる）

稲の香や分入右は有曾海

早稲の香や分入（わけいる）道はありそ海

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の句形。「卯辰集」（楚常編・元禄四年）には、

越中に入りて

と前書する。私はこの前書が本句の景には最も相応しいと考えている。「有磯海」（浪化編・元禄八年）の注記、

此句ハ元禄二年奥羽の行脚に春夏を送り、氷（あき）立たつ頃三越ぢにかゝり、處處（ところどころ）の吟ありけるなかに、當所のほ句と申つたへける

というのも、「氷止たつ頃三越ぢにかゝり」が七月十四五日に越後と越中を過ぎて、倶利伽羅越えを経て越前加賀入りをした、その直前の、という意味に於いて支持出来る文章である。「曾良俳諧書留」には、

かゞ入

と前書するが、山本健吉氏によれば、『当時は加越能、三国にわたって前田百万石の領内であるから、ここでは三国を一つながりに見て三国と言ったのである。ことに越中の呉羽山を境にして呉東・呉西と言い、呉東は加賀藩の支藩、呉西は加賀藩の直轄であり、有磯海は呉西であるから加賀の国と言ってもおかしくはない』と解説されておられる。眼から鱗であった。

第二句目は真蹟詠草の、第三句は「類柑子」（其角著・宝永四（一七〇七）年跋）の句形。

以下、「曾良随行日記」を見る（〔　〕は右傍注。□は判読不能字）。

〇十四日　快晴。暑甚シ。冨山カヽラズシテ〔滑川一リ程來。渡テトヤマへ別。〕、三リ、東石瀬野〔渡シ有。大川。〕。四リ半、ハウ生子（しやうづ）。〔渡有。甚大川也。半里計。〕。氷見へ欲ㇾ行、不ㇾ往。高岡へ出ル。二リ也。ナゴ・二上山・イハセノ等ヲ見ル。高岡ニ申ノ上刻、着テ宿。翁、氣色不ㇾ勝。暑極テ甚。少□同然。

一　十五日　快晴。高岡ヲ立。埴生八幡ヲ拜ス。源氏山、卯ノ花山也。クリカラヲ見テ、未ノ中刻、金澤ニ着。

京や吉兵衛ニ宿かり、竹雀・一笑へ通ズ。艮刻、竹雀・牧童同道ニテ來テ談。一笑、去十二月六日死去ノ由。

「艮刻」は「とらのこく」ではなく、「即刻」の誤字（岩波文庫萩原恭男校注版「おくのほ

そ道」に拠る)。

「有磯海」は本来は波の荒い嶮しい岩礁性海岸を指す一般名詞であるが、富山では新湊から氷見にかけての沿岸海域を広汎に指す万葉の香を湛えた固有名詞となった。

この日記を見る限り、「分け入る右は有磯海」に最も相応しいロケ地は、現在の新湊市にある放生津潟(ほうしょうづ)周辺、若しくは「ナゴ」則ち奈呉の浦で現在の新湊市の海岸、さらに現在の高岡市伏木の「二上山」麓の国分(こくぶ)浜辺りである。しかもその前に「氷見へ欲レ行、不レ往」とある点、即ち、後掲する「奥の細道」本文でも歌枕「担籠(たご)の藤波(ふじなみ)」(現在の富山県氷見市下田子)に行くことを強く望んだ点に着目すれば、この時、芭蕉と曾良が途中まで辿り着きながら、土地の者に、「是より五里、いそ傳ひして、むかふの山陰に入り、蜑の苫ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじ」(ここは通用本から引用)と、嚇されて断念したとするロケーションに最も合致するのはただ一つ、伏木の国分浜しかあり得ない(「五里」は十九キロメートル弱であるが、これは丁度、国分浜辺から氷見へと向かい、そこから十二町潟などの万葉の名跡を訪ねて、「担籠の藤波」のある田子浦藤波神社へ向かう距離にほぼ等しい。何より、「いそ傳ひして、むかふの山陰に入り」はここから氷見へ向かうルートを美事に述べているからである。現在、芭蕉の本句碑の立つ奈呉の浦からだと「五里」の距離はストレート・コースならよく一致するものの、庄川と小矢部川を挟んでおり、不自然である。私は本句は高岡市伏木の国分浜で詠まれたと信ずるものである。——私は実は中学・高校時代をこの高岡市伏木の二上山麓で過ごした。国分浜の直上の古名如意が丘には私の出身である県立伏木高等学校がある。そうして何より私の忘れ難い青春の思い出の地こそがこの国分浜であったのである。……これはしかし、単なる個人的ロマンティシズムによる牽強付会ばかりではないのである。この「如意が丘」という地名は非常に古い。丘の東の麓から新湊に渡るための小矢部川の渡しを古く「如意の渡し」と呼んだ。そうして——その「如意の渡し」こそが——芭蕉の偏愛する義経の「勧進帳」の話の元であるところの「義経記」に載る本当の舞台なのである!——芭蕉がそれを知らなかったはずは絶対にない。とすれば、万葉の「担籠の藤波」に少しでも近づき、爽やかな幽かな早稲の香

に加えて義経の残り香をもかぐわせるためにも――「いそ傳ひして、むかふの山陰に入」った雨晴（あまはらし）には義経が雨宿りをするために弁慶が磯の岩を持ち挙げたという伝承が残る岩も残る――芭蕉がここ国分浜で本句を詠じたと考えるのが、文学的に最も相応しい――それ以外にはないと私は考えるのである。

以下、「奥の細道」の越中路の段。

＊

くろへ四十八が瀬とかや數しらぬ川を
わたりて那古と云浦に出担籠の藤
波は春ならす共初秋のあはれ
とふへものをと人に尋れは是より
五里礒つたひしてむかふの山陰に入
蜑の芦ふきかすかなれば一夜の宿

イ

かすものあるましと云おとされて
かゝの国に入
わせの香や分入右は有ソ海

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○とふへものを　　↓　●とふべきものを

［やぶちゃん字注：脱字であろう。］

○蜑の芦ぶきかすかなれば、一夜の宿かすものあるまじ

←

●蜑の苫ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじ］

＊

本日二〇一四年八月二十九日（当年の陰暦では八月五日）

元禄二年七月　十五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月二十九日

である。芭蕉はこの日、高岡を発って倶利伽羅越えをし、金沢に到着した。本句はその途中吟。

加賀の國を過（すぐる）とて

熊坂がゆかりやいつの玉まつり

盆　同所

熊坂が其名（その）やいつの玉祭

加賀の國にて

熊坂をとふ人もなし玉祭リ

［やぶちゃん注：第一句目は「笈日記」の、第二句目は「曾良書留」の、第三句目は「俳諧翁艸」（里圃編・元禄九年奥書）の句形。

「熊坂」熊坂長範。芭蕉の好きな義経の伝承に登場する大盗賊。牛若丸が金売吉次に伴われて奥州の藤原秀衡のもとへ下る途中、吉次の荷物を狙った長範一行に襲われたが、牛若丸の活躍によって長範は討ちとられたとする。但し、長範が牛若丸を襲う場所は「幸若舞」の「烏帽子折」や謡曲「現在熊坂」では美濃国青墓（あおばか）、謡曲「烏帽子折」「熊坂」では同国赤坂とも伝える。「義経記」では盗賊の名は長範ではなく「藤澤入道」と「由利太郎」とし、場所は近江国鏡の宿とされている。生国についても加賀の熊坂（現在の石川県加賀市熊坂町）とも越後と信濃の境にある熊坂（現在の長野県上水内郡信濃町熊坂）とも伝える（ここ

までは平凡社「世界大百科事典」に拠った)。ここで芭蕉は加賀出生説を採って、さらに加賀入りの盆に合わせて供養に纏わる謡曲「熊坂」(旅僧の前に長範の亡霊が現われて牛若丸に討たれた無念を語って自身の命日の回向を頼む夢幻能)を通わせたものである。

「いつの玉まつり」とは「いつ」の疑問詞によって、かの稀代のピカレスクのその末裔が今もどこかで秘かにその御魂を鎮魂する魂祭りをしているのであろうか、と興じたのである。大悪漢なればこそ自身の大国入国の、ピカレスク・ロマン染みたとでも言い得る文芸的諧謔に相応しい祝祭句と考えた芭蕉の思いつきが面白い。別稿では謡曲の世界はいざ知らず、極悪人故に追善する者もなく、あったとしてもとうに絶えていよう、という暗示の寂寥が勝ってしまい、逆に俳諧味が薄まるように思われる。

「玉まつり」この日は七月十五日で盂蘭盆の中日である。」

＊

本日二〇一四年八月三十一日（当年の陰暦では八月七日）

元禄二年七月　十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年八月三十一日

である。以下の句は「奥の細道」では途中吟として、七月二十四日の金沢を発って小松に向かった折りの嘱目吟として出るが、これは全くの虚構で、現在はこの金沢滞在（七月十五日到着で九泊した）の三日目、立花北枝亭で創られたとほぼ推定されてある（荻野清氏の説に拠る）。

あかあかと日は難面（つれなく）もあきの風

［やぶちゃん注：「奥の細道」金沢の段。

真蹟に、

旅愁慰め兼て、もの憂き秋もやゝ至りぬれば、さすがに目に見えぬ風の音づれも、

いとゞ悲しげなるに、殘暑猶（なほ）やまざりければ

あかあかと日はつれなくもあきの風

と長い前書をするものが残り（曾良の「雪まろげ」もほぼ同文）、芭蕉自身会心の作と認識していたらしく、五種の真蹟が現存する。その内の二種の前書を以下に示しておく。

北國行脚の時、いづれの野にや侍りけむ、

暑さぞまさるまさる、とよみ侍りし撫子の花さへ盛過行比（さかりすぎゆくころ）、

萩・薄に風のわたりしを力に、旅愁を慰め侍るとて

北海の磯傳ひ、眞砂は焦れて火のごとく、水は沸て湯よりも熱し。

旅懐心をいたましむ。秋の空幾日に成ぬとおぼえず

この「奥の細道」の「難面」という用字は新在家文字といって、「迚」「社」「梶」「不知黒白」など、室町以降、連歌に多く用いられた特殊な用字である（新在家という呼称は連歌師などが多く住んでいた京の地名に由来する）。

この句は、謂わば芭蕉の俳諧の季詞に対する根源的な疑義と、その皮肉として私には響く。

――暦の上では秋である……しかし炎熱の陽光はそれを一向知らぬげに私（我が面をとしてもよい）にあかあかとぎらつきながら射刺して来る……だが……同時にその季も知らぬ顔の厳しい陽射しを裏切るように……夕暮れのこの今――ふっと――秋草の広がる野の彼方からもの侘しい秋の風が――さっと――私の盌を過ぎった――

山本健吉氏は「芭蕉全句」の評釈で、『季感の上の齟齬に想を発した古歌として藤原敏行の』（「古今和歌集」第一六九番歌）、

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

『があり、芭蕉のこの句の想においてつながっている』と述べておられる。山本氏の謂いに水を差すわけではないが、これは実は別な芭蕉の真蹟の前書で、

めにはさやかにといひけむ秋立つけしき、薄かるかやの葉末にうごきて、

聊昨日に替る空のながめ哀なりければ

と、インスパイアを芭蕉自身が明らかにしている事実である。

なお、思うところあれば、「奥の細道」原文は次の「秋涼し手毎にむけや瓜茄子」そのまた次の「塚も動け我泣声は秋の風」に出だすこととする。」

＊

本日二〇一四年九月　三日（当年の陰暦では八月十日）

元禄二年七月二十日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　三日

である。金沢滞在中のこの日の、犀川畔にあった齋藤一泉の松玄庵句会での半歌仙の発句。ありがちな挨拶吟である。

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎（てごと）にむけや瓜茄子

松玄庵參會即興

殘暑しばし手毎にれうれ瓜茄子

訪草庵

秋さびし手毎にむけや瓜茄子

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は次の句で詳述する小杉一笑の兄で俳号ノ松（べっしょう）が一笑追善に編んだ「西の雲」（元禄四年跋）の、第三句目は「韻塞（いんふたぎ）」（許六ら編・元禄九年自序）の句形。

一泉の脇句は、

殘暑しばし手毎に料理れ瓜茄子　芭蕉

みじかさまたで秋の日の影　一泉

と付けている。「奥の細道」に載せたのは、次に掲げる芭蕉の絶唱「塚も動け我泣聲は秋の

風」と先に掲げた「あかゝと日は難面もあきの風」の、慟哭／炎熱・寂寥を配した複式夢幻能の間狂言といった感じでここに配したもののように私には思われる。」

＊

本日二〇一四年九月　五日（当年の陰暦では八月十二日）

元禄二年七月二十二日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　五日

である。芭蕉は「奥の細道」の旅に出でて以来、金沢でまだ見ぬ愛弟子小杉一笑に逢うことを一番の楽しみとしていた。

ところが既に示した「曾良随行日記」の金沢着の十五日の末に『一笑、去十二月六日死去ノ由』と記す通り、やはり書簡で教えを乞うばかりであった師芭蕉と直に逢うことを心待ちにしていた一笑は、既に半年以上も前、病いのためにとっくに幽冥境を異にしていたのであった。享年三十六歳。芭蕉は彼の死を知らずに「奥の細道」の旅に出、松島・象潟に感じ入った後の彼は、只管、難渋の越路を一笑に逢うことを心の拠りどころとして金沢を目指していたとも言えるのであった。

小杉一笑（承応二（一六五三）年～元禄元（一六八八）年）は茶葉商人で元禄期の加賀を代表する俳人。通称、茶屋清七（新七とも）。「俳諧時勢粧（いまようすがた）」（松江重頼（維舟）編・寛文一二（一六七二）年成立）・「山下水」（梅盛編・寛文一二（一六七二）年刊）・「大井川集」（重頼編・延宝二（一六七四）年）・「俳枕」（高野幽山編・山口素堂序・延宝八（一六八〇）年刊）・「名取河」（重頼編・延宝八（一六八〇）刊）・「孤松（ひとりまつ）」（江左尚白編・貞享四（一六八七）年刊）・「阿羅野」（山本荷兮編・元禄二（一六八九）年刊の芭蕉俳諧七部集の一。但し、一笑死後の刊行）などに続々と句が採られた。特に近江大津で刊行された「孤松」には実に百九十三句も入集、上方でもその名が広く知られるようになったが、そうした中でも芭蕉が最も注目した若手俳人であった。貞門から談林を経、この二年前の貞享四年頃には蕉門に入門している。追善集は兄ノ松編の「西の雲」で芭蕉の本句を始めとして諸家の追悼句及び一笑の作百四句を収める（ここまでは諸資料を参照したが、最も詳細と判断した石川県金沢市東山にある「茶房　一笑」の「小杉一笑」のデータを一応のベースとさせて戴き、諸データを追加してある）。

金沢到着から七日目のこの七月二十二日、小杉家菩提寺の金沢市野町（のまち）にある浄土真宗大谷派願念寺に於いて兄の小杉丿松によって一笑追善供養が催され、本句はその席で詠まれた。

塚も動け我泣（わがなく）聲は秋の風

［やぶちゃん注：「奥の細道」。真蹟詠草に、

　とし比（ごろ）我を待ちける人のみまかりけるつかにまうでゝ
つかもうごけ我泣聲は秋の風

と前書したものが残る。「曾良俳諧書留」には、

　一笑追善
塚もうごけ我泣聲は秋の風　　同
玉よそふ暮のかざしや竹露　　曾良

と載る（「竹露」は無論「たけのつゆ」と読む）。なお、後者の曾良の句は曾良の真蹟があり、

　一笑居士のつかに詣侍りけるに、
いとやさしき竹の墓のしるしになびきそひたるも哀まさりぬ
玉よそふ暮のかざしや竹露　　曾良

と前書、「西の雲」では、

翁供して詣でけるに、やさしき竹の墓のしるしとてなびき添たるもあはれまさりぬ

玉よそふ暮のかざしや竹露　　曾良

とあってこれらの前書によって句意が判然とする。ネット上に「雪まろげ」には、

一笑追善

玉よばふ墓のかざしや竹の露　曾良

という有意な異形句が載ると複数の情報にあるが、少なくとも私が管見した同書には前書のみで句がない。一応、記しおくこととする。

一笑の句を示さないわけにはいかない。まず、伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の「小杉一笑」から引いておく（恣意的に正字化した）。最後の辞世以外は「阿羅野」に採られた句である。リンク先のリンクで句意も解る。

元日は明すましたるかすみ哉　　一笑

さし柳たゞ直なるもおもしろし　　一笑

すがれすがれ柳は風にとりつかむ　一笑

蚊の滝て鎧のうへにとまりけり　　一笑

いそがしや野分の空の夜這星　　一笑

火とぼして幾日になりぬ冬椿　　一笑

辭世　心から雪うつくしや西の雲　一笑

次に安東次男氏が「古典を読む　おくのほそ道」に引用するもの。

雨ぬるゝ壁に喰ひつく燕かな　　一笑

みをつくし小鮎身をうつ夕日かな　一笑

さびしさに壁の草摘五月哉　　一笑

いつとなくおとがひだるき火燵哉　一笑

ふらぬ日や見たい程見る雪の山　　一笑

この安東氏の引用する句はどれもまことに掬すべき佳句である。

以下、「奥の細道」金沢の段を示す。

＊

卯の花山くりからかか谷をこえて金

澤は七月中の五日也爰に大坂より

かよふ商人何處と云ものありそれか

旅宿をともにす

一笑と云ものは此道にすける名の

ほのほの聞へて世に知人も侍しに去年

の冬早世したりとて其兄追善
を催スに

塚もうこけ我泣聲は秋の風

ある草庵にいさなはれて

秋すゝし手毎にむけや瓜天茄

途中唫

あかあかと日は難面もあきの風

［やぶちゃん字注：「天茄」は厳密にはナス目ヒルガオ科ハリアサガオ（針朝顔）*Calonyction muricatum* の漢名であるが、ここは「なすび」（ナス目ナス科ナス *Solanum melongena* ）と訓じている。］

＊

■やぶちゃんの呟き

「卯の花山」本来は卯の花の咲いている山の意で、固有名詞ではないが、後世、越中の歌枕となった。旧源氏山。旧富山県西砺波郡砺中町（とちゅう）（現在は小矢部市）の砺波山（となみやま）。標高二六三メートル。倶利伽羅峠直近にある。芭蕉の偏愛する木曽義仲の倶利伽羅合戦に於ける陣所であった。

「何處」（？～享保一六（一七三一）年）「かしよ（かしょ）」と読む。伊勢出身の大阪の薬種問屋主人。この時、事実、偶然の同宿をして蕉門に入った。「芭蕉ＤＢ」の「何処」によれば、『以後、芭蕉が上方にある時はしばしば訪れていたもようである。『猿蓑』などに入集されている』とある。

他の二句はこの前に既に掲げてある。そこでの私の注も参照されたい。

最後に（以下の文中のリンク先は孰れも私の電子テクストである）。

私は、この句を芭蕉の辞世「旅に病で夢は枯野をかけ　る」以上の、芭蕉畢生の絶唱として記憶している。

人間芭蕉痛恨の一句は、これ以外にはない。

因みに、芭蕉の死後二年後の元禄九年春に義仲寺の墓前を訪れた丈草の句に、

陽炎（かげろふ）や塚より外に住むばかり

という名吟があるが（同句の私の通釈は「宇野浩二　芥川龍之介　二十一～(5)」の私の注を参照）、この芭蕉の一笑を失った激しい慟哭と比べてしまった時、私は芥川龍之介の「枯野抄」の、「法師じみた」「老實な禪客の丈艸」の姿を想起して、鼻白んでしまうのを常としている――」

＊

本日二〇一四年九月　八日（当年の陰暦では八月十五日）

元禄二年七月二十五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　八日

である。【その一】この前日、芭蕉は金沢（ここでもう一人、立花北枝が随行者として加わった）を発って小松に到着、翌日の今日、三人が旅立とうとしたところを、小松の俳人連が北枝を介して頻りに慰留した。そこで更に一泊することとし、芭蕉の偏愛する木曽義仲の命の恩人齋藤別当実盛所縁の多太八幡（現在の石川県小松市上本折町にある多太神社）を訪れてかの名吟をものした。

加賀の小松と云(いふ)處、多田の神社の寶物として、實盛が菊から草のかぶと、
同じく錦のきれ有(あり)。遠き事ながらまのあたり憐(あはれ)におぼえて

むざんやな甲の下のきりぎりす

多田の神社にまふでゝ、木曽義仲の願書幷(ならびに)實盛がよろひかぶとを拜ス

あなむざんや甲の下のきりぎりす

あなむざんやな甲の下のきりぎりす

［やぶちゃん注：第一句目は「猿蓑」。「奥の細道」も同句形。「陸奥衮」（桃隣編・元禄十年跋）には、

太田神社寶物實盛鎧

と記す。

第二句目は「卯辰集」の句形。

第三句目は「花実集（かじつしゅう）」（・秋色編（しゅうしきへん）。安永二（一七七三）年序）の句形で、「去来抄」に、

魯町曰、先師も基より不レ出風侍るにや。去來曰、奥羽行脚の前はまゝ有り。此行脚の内に工夫し給ふと見へたり。行脚の内にも、あなむざんやな甲の下のきりぎりすと云ふ句あり。後にあなの二字を捨られたり。是のみにあらず、異體の句どもはぶき捨給ふ多し。此年の冬はじめて、不易流行の教を説給へり。

とある。『不レ出風』（出でざる風（ふう））とは俳諧連歌の古形を元としない新しい自由な破調句を指すが、私は芭蕉自身が改作しようがなにしようが、何と言っても直覚的に「狂句木枯しの身は竹齋に似たるかな」と同様に、破格の第三句目「あなむざんやな甲の下のきりぎりす」を断然、支持するものである（因みに私は中学時代に自由律俳句の『層雲』から出発した人間である）。

なお、「曾良随行日記」を見ると、

一　廿五日　快晴。欲二小松一立。所衆聞テ以二北枝一留。立松寺へ移ル。多田八幡へ詣テ、眞盛が甲冑・木曾願書ヲ拜。終テ山王神主藤井伊豆宅へ行。有レ會。終テ此ニ宿。申ノ刻ヨリ雨降リ、夕方止。夜中、折〻降ル。

［やぶちゃん字注：「立松寺」は「建聖寺」の誤記と考えられる。「眞盛」は「實盛」の誤記（「廿七日」も同じ誤りであるが、「奥の細道」本文でも「眞盛」とあり、通行する決定稿でも二箇所の内の後者が「眞盛」のままである。ということは実は当時は「實盛」は「眞盛」とかく書いて通用したのかとも思わせる。無論、「實」と「眞」の崩し字は近似するが、これだけ改稿されたものがそこだけ最後の最後までたまたま誤字が残ってしまったと言うのは私には考えにくいのである）。「藤井」は「藤村」の誤り。］

一　廿六日　朝止テ巳ノ刻ヨリ風雨甚シ。今日ハ歡生方へ被レ招。申ノ刻ヨリ晴。夜ニ入テ、

俳、五十句。終テ歸ル。庚申也。

一　廿七日　快晴。所ノ諏訪宮祭ノ由聞テ詣。巳ノ上刻、立。斧ト・志格等來テ留トイヘドモ、立。伊豆晝甚持賞ス。八幡ヘノ奉納ノ句有。眞盛が句也。予・北枝隨ヾ之。

とあって、実はこの句が実際に齋藤別当実盛の供養のために、多太八幡神社に奉納されたのは小松を発つ、二十七日であった。しかし、御覧の通り、実際の多太神社参詣は二十五日であり、感懐のシンクロニティとしては二十五日以外にはない。

因みに『予・北枝之に隨ふ』とあるのは「卯辰集」に、

多田の神社にまうでゝ、木曾義仲の願書、並に實盛がよろひかぶとを拜す

三句

あなむざん甲の下のきりぎりす　芭蕉

幾秋か甲にきへぬ鬢の霜　曽良

くさずりのうら珍しや秋の風　北枝

と載るものを指す。

斎藤実盛（天永二（一一一一）年～寿永二年六月一日（グレゴリオ暦一一八三年六月二十二日））は藤原利仁の流れを汲む斎藤則盛（斎藤実直とも）の子。越前国の出で、武蔵国幡羅郡長井庄（現在の埼玉県熊谷市）を本拠としたことから長井別当と呼ばれた。以下、参照したウィキの「斉藤実盛」より引用する（アラビア数字は漢数字に代えた）。『武蔵国は、相模国を本拠とする源義朝と、上野国に進出してきたその弟・義賢という両勢力の緩衝地帯であった。実盛は始め義朝に従っていたが、やがて地政学的な判断から義賢の幕下に伺候するようになる。こうした武蔵衆の動きを危険視した義朝の子・源義平は、久寿二年（一一五五年）に義賢を急襲してこれを討ち取ってしまう（大蔵合戦）』。『実盛は再び義

朝・義平父子の麾下に戻るが、一方で義賢に対する旧恩も忘れておらず、義賢の遺児・駒王丸を畠山重能から預かり、駒王丸の乳母が妻である信濃国の中原兼遠のもとに送り届けた。この駒王丸こそが後の旭将軍・木曾義仲である』。『保元の乱、平治の乱においては上洛し、義朝の忠実な部将として奮戦する。義朝が滅亡した後は、関東に無事に落ち延び、その後平氏に仕え、東国における歴戦の有力武将として重用される。そのため、治承四年（一一八〇年）に義朝の子・源頼朝が挙兵しても平氏方にとどまり、平維盛の後見役として頼朝追討に出陣する。平氏軍は富士川の戦いにおいて頼朝に大敗を喫するが、これは実盛が東国武士の勇猛さを説いたところ維盛以下味方の武将が過剰な恐怖心を抱いてしまい、その結果水鳥の羽音を夜襲と勘違いしてしまったことによるという』。『寿永二年（一一八三年）、再び維盛らと木曾義仲追討のため北陸に出陣するが、加賀国の篠原の戦いで敗北。味方が総崩れとなる中、覚悟を決めた実盛は老齢の身を押して一歩も引かず奮戦し、ついに義仲の部将・手塚光盛によって討ち取られた』。『この際、出陣前からここを最期の地と覚悟しており、「最後こそ若々しく戦いたい」という思いから白髪の頭を黒く染めていた。そのため首実検の際にもすぐには実盛本人と分からなかったが、そのことを樋口兼光から聞いた義仲が首を付近の池にて洗わせたところ、みるみる白髪に変わったため、ついにその死が確認された。かつての命の恩人を討ち取ってしまったことを知った義仲は、人目もはばからず涙にむせんだという。この篠原の戦いにおける斎藤実盛の最期の様子は、『平家物語』巻第七に「実盛最期」として一章を成』す（以下で私が原文を掲げてある）。以下、「史跡・伝承について」の項の『『前賢故実』による斎藤実盛」、『室町時代前期の応永二一年（一四一四年）三月、加賀国江沼郡の潮津（うしおづ）道場（現在の石川県加賀市潮津町に所在）で七日七夜の別時念仏を催した四日目のこと、滞在布教中の時宗の遊行十四世太空のもとに、白髪の老人が現れ、十念を受けて諸人群集のなかに姿を消したという』。『これが源平合戦時に当地で討たれた斉藤別当実盛の亡霊との風聞がたったため、太空は結縁して卒塔婆を立て、その霊魂をなぐさめたという。この話は、当時京都にまで伝わっており、「事実ならば希代の事也」と、醍醐寺座主の満済は、その日記『満済准后日記（まんさいじゅごう）』に書き留めている。そ

してこの話は、おそらく時宗関係者を通じて世阿弥のもとにもたらされ、謡曲『実盛』として作品化されている。以来、遊行上人による実盛の供養が慣例化し、実盛の兜を所蔵する石川県小松市多太神社では、上人の代替わりごとに、回向が行われて現代に至っている』。

『実盛が討たれる際、乗っていた馬が稲の切り株につまずいたところを討ち取られたために、実盛が稲を食い荒らす害虫（稲虫）になったとの言い伝えがあ』り、そこからイイネの害虫として知られる『稲虫（特にウンカ）は実盛虫とも呼ばれ』て怖れられた。享年七十三。

最後の伝承は鎌倉権五郎景政と同様に剛腕の荒武者は死してもそのパワーが残り、祭祀を疎かにすると禍いを起こすというタイプの御霊信仰であるが、私は実盛の事蹟を考える時、彼を短絡的にかのおぞましいウンカ（御存じない方が多いが植物吸汁性ながら人を刺す）如きに喩えたこの習俗としての虫送りが今一つ好きになれないのでもあった。

私の偏愛する「平家物語」の当該のシークエンスを引く。底本は昭和四七（一九七二）年講談社刊高橋貞一校注「平家物語」を一応の底本にしたが、総て恣意的に正字化し、また句読点や改行などを適宜追加した。まずは「巻第七　篠原合戦」の冒頭（実盛が登場、味方を試して一味同心を確かめる最後に「むざん」が既にして出る。最初にこの多田八幡神社も義仲の神領寄進に登場している。太字化はやぶちゃん）。

※

木曾殿やがて其處にて諸社へ神領を寄せらる。多田八幡へは蝶屋の庄、菅生社へは能美の庄、氣比社へは飯原の庄、白山社へは横江、宮丸二箇所を寄進す。平泉寺へは藤島七郷をぞ寄せられける。

去んぬる治承四年八月石橋山の合戦の時、兵衞佐殿、射奉りし武士ども、皆、逃げ上つて、平家の御方にぞ候ひける。

宗徒の者には長井齋藤別當實盛、浮巣三郎重親、俣野五郎景久、伊藤九郎助氏、眞下四郎重直なり。これらは皆、軍のあらん程、暫く休まんとて、日毎に寄り合ひ寄り合ひ、巡酒

をしてぞ慰みける。先づ長井齋藤別當が許に寄り合ひたりける日、實盛申しけるは、

「つらつら當世の體を見候に、源氏の方はいよいよ強く、平家の御方は負色に見えさせ給ひて候。いざ、各木曾殿へ參らう。」

と云ひければ、皆、

「さんなう。」

とぞ同じける。

次の日、また浮巣三郎が許に寄り合ひたりける時、齋藤別當、

「さても昨日、實盛が申しし事は如何に、各。」

と云ひければ、その中に俣野五郎景久、進み出でて申しけるは、

「さすがわれらは、東國では人に知られて、名ある者でこそあれ。吉について彼方へ參り、此方へ參らん事は、見苦しかるべし。人々の御心をば知り參らせぬ候。景久に於ては、今度平家の御方で討死せんと思ひ切つて候ふぞ。」

と云ひければ、齋藤別當、あざ笑つて、

「誠には各の御心どもを、かな引かんとてこそ申したれ。實盛も今度、北國にて、討死せんと思ひ切つて候へば、二度命生きて、都へ歸るまじき由、大臣殿へも申し上げ、人々にもその樣を申し置き候。」

と云ひければ、皆、又、この儀にぞ同じける。その約束を違へじとや、當座にありける二十餘人の侍どもも、今度、北國にて皆、死ににけるこそ**無慙なれ**。

※

因みに、ただの思いつきなのだが、この一同が声を合わせる「さんなう」というのは「そうだなあ」という意の感動詞である。小松で芭蕉を迎えて人々が参集して開かれた「山王會」（さんのうかい）という名称には、もしかするとこの「平家物語」の「さんなう」が掛けられているのではあるまいか？　因みに、「大臣殿」は平宗盛のこと。

次に「巻第七　實盛最後」全段。

＊

落ち行く勢の中に、武藏國の住人、長井齋藤別當實盛は、存ずる旨ありければ、赤地の錦の直垂に萌黄縅の鎧着て、鍬形打つたる甲の緒をしめ、金作りの太刀を帶き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、連錢葦毛なる馬に、金覆輪の鞍を置いて乘つたりけるが、御方の勢は落ち行けど、唯一騎返し合はせ、返し合はせ、防ぎ戰ふ。

木曾殿の方より、手塚太郎、進み出でて、

「あな、やさし、いかなる人にてわたらせ給へば、御方の御勢は、皆、落ち行き候に、唯一騎殘らせ給ひたるこそ優に覺え候へ。名乘らせ給へ。名乘らせ給へ。」

と、詞をかければ、

「先づかういふわ殿は誰そ。」

「信濃國の住人、手塚太郎金刺光盛。」

とこそ名乘つたれ。

齋藤別當、

「さては互によき敵、但し、わ殿を下ぐるにはあらず。存ずる旨があれば、名乘る事はあるまじいぞ。寄れ、組まう、手塚。」

とて馳せ竝ぶる處に、手塚が郎等、主を討たせじと中に隔たり、齋藤別當に押竝べて、むずと組む。實盛別當、

「あつぱれ、おのれは、日本一の剛の者と組んでうずなうれ。」

とて、わが乘つたりける鞍の前輪に押し付けて、ちつとも動かさず、首掻き切つて捨ててけげる。

手塚太郎、郎等が討たるるを見て、弓手に廻り合ひ、鎧の草摺引上げて、二刀刺し、弱る處を組んで伏す。齋藤別當、心は猛う思へども、軍にはしつかれぬ、手は負うつ、その上、老武者ではあり、手塚が下にぞなりにける。

手塚太郎、馳せ來る郎等に首取らせ、木曾殿の御前に參り、畏つて、

「光盛こそ奇異の曲者と組んで、討つて參つて候へ。侍かと見候へば、錦の直垂を着て候。又大將軍かと見候へば、續く勢も候はず。名乘れ、名乘れと責め候ひつれども、遂に名乘

り候はず。聲は坂東聲にて候ひつる。」

と申しければ、木曾殿、

「あつぱれ。これは、齋藤別當にてあるござんなれ。それならんには、義仲が上野へ越えたりし時、をさな目に見しかば、白髪の糟尾なつしぞかし。今は早七十にも餘り、定めて白髪にこそなりぬらんに、鬢鬚の黒いこそ怪しけれ。樋口次郎兼光は、年來馴れ遊んで、見知りたるらん。樋口召せ。」

とて、召されけり。

樋口次郎、唯一目見て、

「**あな無慚**、齋藤別當にて候ひけり。」

とて涙を流す。

木曾殿、

「それならんには、早七十にも餘り、白髪にもなりぬらんに、鬢鬚の黒いは如何に。」

と宣へば、ややあつて樋口次郎、涙を押へて申しけるは、

「さ候へば、その様を申し上げんと仕り候ふが、餘りに哀れに覺え候うて、先づ不覺の涙、こぼれ候ひけるぞや。されば弓矢取る身は、聊かの所にても、思出の言をば、かねて遣ひ置くべき事にて候ひけるぞや。實盛別當、常は兼光に逢うて、物語りにし候ひしは、

『六十に餘つて、軍の陣へ向はん時は、鬢鬚を黒う染めて、若やがうと思ふなり。その故は若殿ばらに爭うて、先を驅けんもおとなげなし。又、老武者とて人の侮られんも口惜しかるべし。』

と申しければ、木曾殿、さもあるらんとて、洗はせて御覽ずれば、白髪にこそなりにけれ。

又、齋藤別當、錦の直垂を着ける事も、最後の暇申しに大臣殿の御前に參つて、

「かう申せば、實盛が身一つにては候はねども、先年、坂東へ罷り下り候ひし時、水鳥の羽音に驚き、矢一つだに射ずして、駿河の蒲原より逃げ上つて候ひし事、老の後の恥辱、只この事候。今度、北國へ罷り下り候はば、定めて討死仕り候ふべし。實盛元は越前國の者にて候ひしが、近年、御領につけられて、武藏國長井に居住仕り候ひき。事の譬の候ぞ

かし。『故郷へは錦を著て歸る』と申す事の候へば、何か苦しう候べき。錦の直垂を御免候へかし。」

と申しければ、大臣殿、

「優しうも申したりけるものかな。」

とて、錦の直垂を御免ありける、とぞ聞えし。

昔の朱買臣は、錦の袂を會稽山に飜し、今の齋藤別當は、その名を北國の巷に揚ぐとかや。朽ちもせぬ、空しき名のみ留め置いて、骸は越路の末の塵となるこそ哀れなれ。

去んぬる四月十七日、平家十萬餘騎にて、都を出だでし事柄は、何面を向かふべしとも見えざりしに、今、五月下旬に都へ歸り上るには、その勢、僅に二萬餘騎、

「流れを盡くして漁る時は、多くの魚を得るといへども、明年に魚なし。林を燒いて獵る時は、多くの獸を得るといへども、明年に獸なし。後を存じて、少々は殘さるべかりけるものを。」

と申す人々もありけるとかや。

※

次にこの「平家」を下敷きとした芭蕉の第二の本歌で、直接の上五の引用である謡曲の伝世阿弥作「実盛」をダイジェストしておく。これは先の実盛の引用に出た室町前期の応永二一（一四一四）年三月、加賀国江沼郡の潮津道場にて時宗遊行十四世他阿太空が七日七夜に及ぶ別時念仏を催した際に白髪の老人（実盛の霊）が現れて十念を受けて群衆の中に消えて行ったという伝承をもとにした夢幻能である。

加賀の篠原。遊行の他阿彌上人（ワキ）の説法の場に老翁（前シテ）が近づき、聴聞の法悦を詠嘆するが、この老翁が周囲の人々には見えていない（その怪異は冒頭の聴聞を聴きに来た狂言方の里の男（アイ）の口開けよって初めから示されている。これは現在能の手法で夢幻能では異例）ことから、その素性を問うと、古えここで討たれた実盛の執心の霊と名乗って池畔に消える。

里の男によって実盛の最期が語られ、池畔で上人による別時念仏の弔いが修されると、

実盛の霊（後ジテ）が現われて、弥陀を讃仰、白き鬢鬚の華やかな出立ちの老武者の霊は、修羅道の苦患の救済を乞い、弥陀の大慈悲心による往生を信じて安堵、以下、生前の慚愧を懺悔するという形で、かの「平家」の最期の場面が実盛の霊自身によって語られるのである。

引用は新潮日本古典集成「謡曲集　中」（伊藤正義校注新潮社昭和六一（一九八六）年刊）を参考にしながら、正字で示した。太字化はやぶちゃん。

＊

シテ「時いたつて今宵逢ひ難き御法を受け」

地　「慚愧懺悔の物語。なほも昔を忘れかねて。忍ぶに似たる篠原の。草の蔭野の露と消えし。有様語り申すべし」

シテ「さても。篠原の合戦破れしかば。源氏の方に手塚の太郎光盛。木曽殿の御前に参りて申すやう。光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大将かと見れば續く勢もなし。又侍かと思へば錦の直垂を着たり。名のれ名のれと責むれども終に名のらず。声は坂東声にて候ふと申す。木曾殿あつぱれ長井の齋藤別當實盛にてやあるらん。しからば鬢鬚の白髪たるべきが。黒きこそ不審なれ。樋口の次郎は見知りたるらんとて召されしかば。樋口參り唯一目見て。涙をはらはらと流いて。**あな無慚やな**。齋藤別當にて候ひけるぞや。實盛常に申ししは。六十に餘つて戦をせば。若殿ばらと爭ひて。先をかけんも大人氣なし。又老武者とて人々に侮られんも口惜しかるべし。鬢鬚を墨に染め。若やぎ討死すべきよし。常々申し候ひしが。誠に染めて候。洗はせて御覧候へと。申しもあへず首を待ち」

地「おん前を立つてあたりなる。この池波の岸に臨みて。水の綠も影映る。柳の糸の枝たれて」

地　「〽氣霽れては　風新柳の髪を梳り　氷消えては　波舊苔の　鬚を洗ひて見れば　墨は流れ落ちてもとの　白髪となりにけり　げに名を惜しむ弓取りは　誰もかくこそあるべけれや　あらやさしやとて　皆感涙をぞ流しける

地　〽また実盛が　錦の直垂を着る事　私ならぬ望なり　実盛都を出でし時　宗盛公に

申すやう　故郷へは錦を着て　歸るといへる本文(ほんもん)あり　実盛生國は　越前の者にて候ひしが　近年御領に附けられて　武藏の長井に居住つかまつり候ひき　此度北國に　罷り下だりて候はば　定めて討死つかまつるべし　老後の思出これに過ぎじ　御免あれと望みしかば　赤地の錦の直垂を下し賜はりぬ

シテ〽然れば古歌にももみぢ葉を

地　〽分けつゝ行けば錦着て　家に歸ると　人や見るらんと詠みしもこの本文の心なりされば いにしへの　朱買臣は　錦の袂を會稽山に翻へし　今の實盛は名を北國の巷に揚げかくれなかりし弓取りの　名は末代に有明の　月の夜すがら　懺悔物語申さん

地　〽げにや懺悔の物語　心の水の底清く　濁りを殘し給ふなよ

シテ〽その執心の修羅の道　巡り巡りてまたここに　木曾と組まんとたくみしを　手塚めに隔てられし　無念は今にあり

地　〽続く兵(つはもの)　たれたれと　名のる中にもまづ進む

シテ〽手塚の太郎光盛

地　〽郎等は主を討たせじと

シテ〽驅け隔たりて實盛と

地　〽押し並べてくむところを

シテ〽あつぱれ　おのれは日本一(につぽんいち)の　剛の者と組んでうずよとて　鞍の　前輪に押しつけて。首　掻き切つて捨ててんげり。

地　〽其後手塚の太郎　實盛が弓手に回(まは)りて　草摺りを疊み上げて　二刀刺すところをむずと組んで二匹が間(あひ)に　どうと落ちけるが

シテ〽老武者の悲しさは

地　〽戰には爲疲(しつか)れたり　風にちゞめる　枯木(こぼく)の力も折れて　手塚が下に　なるところを郎等は落ちあひて　終に首をば掻き落とされて　篠原の　土となつて　影も形もなき跡の影も形もなむあみだぶ　弔ひて賜(た)び給へ　跡弔ひて賜び給へ

＊

「きりぎりす」現在のコオロギ。山本健吉氏は直翅（バッタ）目剣弁（キリギリス）亜目コオロギ上科コオロギ科コオロギ亜科ツヅレサセコオロギ *Velarifictorus micado* に種同定されている（といってもこれは特別な種ではなく、実が我々が「コオロギ」と呼んでいる種の正式和名である）。和名は「綴れ刺せ蟋蟀」で、古くはコオロギ全般の鳴き声が「肩刺せ、綴れ刺せ」と聞きなし、冬に向かって衣類の手入れをせよとの意にとったことに由来すると参照したウィキの「ツヅレサセコオロギ」にある。

本句は首実検をする見立てである。さればこそ「あなむざんやな」と歎く主体は実際の証人たる義仲四天王の一人で乳兄弟ではなく、それを認めたところの木曽義仲自身である。即ち、本句は実は芭蕉が義仲であり、句背にある芭蕉の愛した義仲へのオマージュこそが「あなむざんやな」の感懐の真実の対象である。「奥の細道」はどうしても旅程の関係上、芭蕉が好きだった今一人の悲劇の武将義経に絡みがちであり、芭蕉も判官贔屓は文字通り義経でそれを前面に押し出す方が読者の共感も遙かに得られるものと胸算用したものとは思われる。そうした偏向の不満を謂わば自身の心内で補正する働きが、この句には潜んでいるように思われる。

孰れにせよ、私は実盛が好きで、さればこそ、この句も芭蕉の好きな句を想起せよと言われると、五番以内に挙がってくる句なのである。

しかし、私は俳諧的諧謔性を伝家の宝刀とする安東次男氏のように、私と同様、首実検の思付としながらもそこに、『見得が生じ、滑稽も現れる』という風にはとれないし、『こういう句をいたずらに感傷的に読むと解釈を誤る』（以上は「古典を読む　おくのほそ道」）という言説にはやはり承服し得ない。

寧ろ、山本健吉氏が「芭蕉全句」の評釈で述べるように、実盛の『亡霊の化身かのように胄のほとりにはきりぎりすが』鳴き、『実盛が虫に化したという伝承』が連動して、『不気味で無慙な感じを深め』、『前に平泉の光堂で』「螢火の晝は消つゝ柱かな」（以前に述べた通り、この句は結局は捨てられたが）『と、柱にとまる昼の蛍を詠んだのも、歴史を蘇らせた白日夢であった』という覚悟の武者（もののふ）らをイメージした「直き」解釈（少なくとも私は

この句に諧謔を感じないからである）に強く惹かれるのである。

「奥の細道」の小松の段を示しておく。

＊

小松と云處にて

しほらしき名や小松吹萩薄

此所太田の神社に詣齋藤別

當眞盛が甲錦の切あり往昔

源氏に

属せし時義朝公より給はらせ給ふとかや

けにも平士のものにあらす目庇より

吹返しまて菊から艸のほりもの金

をちりはめ龍頭に鍬形打たり

眞盛討射死の後木曾義仲願

并にそへて此社にこめられ侍る

よし樋口の次郎か使せし事共

まのあたり繪巻にみえたり

むさむやな甲の下のきりぎりす

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○齋藤別當眞盛が甲錦の切　→　●實盛が甲錦の切

［やぶちゃん字注：「齋藤別當」の除去と、「眞」が「實」となっている二箇所。］

○往昔源氏に屬せし時　→　●其（その）昔源氏に屬せし時

［やぶちゃん字注：「往昔」は「そのかみ」と訓じている可能性が強く、ここは実際には異同とは言えぬ。］

○射死　　↓　●討死

■やぶちゃんの呟き

「錦の切」「平家物語」に出た、宗盛に願い出て賜わった鎧の下に着用する赤地錦の鎧直垂。

「目庇」「まびさし」と読む。眉庇。鉢から正面に庇のように張り出された額の防護部。

「吹返し」可動性を高めるための、兜の側面の錏（兜の鉢の左右・後方に垂らして首から襟の防御とするもの。一般には札又は鉄板を三段乃至五段下りとして縅し附ける）の両端が上方へ折れ返っている部分。

「菊から草」菊唐草。菊の花に唐草模様をあしらった文様。

「龍頭」兜の前面に附ける飾り。立物。

「鍬形」元は鍬を象ったところから、兜の前部に附けて威厳を添える前立物の一つで、金属や練り革で作った二枚の板を眉庇つけた台に挿して角状に立てたお馴染みのもの。

この実際の兜は修復されたものが多田神社の公式サイトで見られ、そこには兜正面にある祓立には八幡大菩薩の神号が浮彫りにされているのが分かる。

「木曾義仲願状にそへて、此社にこめられ侍るよし、樋口の次郎か使せし事共、まのあたり謌咄にみえたり」「木曾義仲願状」義仲が実盛の兜や鎧直垂といった遺品とともに多太神社に供養の趣旨を認めて奉納した文書。「謌咄にみえたり」とあるが、これは誤りで、実際にはその「木曽義仲願状」の中に、

嗟乎苦哉、某甲與公執父子之約僅七日、罔極悲其爲誰哉、乃爲公菩提及義仲祈禱、所被甲錦直垂幷某甲表指箭、納于能美郡多田神社

○やぶちゃんの勝手自在書き下し文

嗟呼、苦なるかな、某甲、公と父子の約を執るも、僅か七日にして、罔極の悲しび、其れ、誰か爲さんや、乃ち公の菩提及び義仲の祈禱を爲し、被れる所の錦・直垂並びに某甲の表指の箭、能美郡多田神社に納む。

と載るものを指す。

・「罔極」は極まりがない、果てしないこと。ここは幼き日に命を救ってくれた義父たる実盛に対し、報いよにも報いきれぬ恩を言った。「詩経」の「小雅」の「蓼莪（りくが）」篇に基づく語で、通常は「罔極之恩」で父母への大恩を指す。

・「表指の箭」とは、二本の鏑矢を他の矢より少し高く箙や胡簶（やなぐい）に差して置くこと。

以上の引用文は御橋悳言（みばしとくごん）氏の続群書類従完成会刊行と思われる「平家物語證注下　第四巻」の注に出るものをグーグル・ブックスで視認したもので、訓読は力技の我流で自信がない。私の持つ関連書では見つからず、同神社の公式サイトにも載らないので不本意な箇所もあるがさらけ出しておくこととする。是非、識者の御教授を乞う。

斉藤実盛は如何にも芭蕉好みの武者（もののふ）であった。

現在の研究では、芭蕉の出自である松尾家は平氏の末流を名乗る一族で、当時は苗字・帯刀こそ許されていたものの身分は農民であったとされ、異説も多いものの、伊賀国上野の侍大将藤堂新七郎良清の嗣子藤堂主計良忠（かずえよしさだ）（俳号、蝉吟）に仕えていた若き日の彼は、その厨房役か料理人であったとされる（ここはウィキの「松尾芭蕉」に拠る）。

しかしそれでもなおかつ、芭蕉自身は一種の「直くたくましきもの」としての「たけきもの」を志向し、自らをそのような意味に於ける地位や身分としての「武士」ではなく、精神的な意味に於ける武者（もののふ）として自認していたものと考えている。

実盛・義仲・義経という存在は謂わば、そうした芭蕉の理想像として鏡像関係にあった。

「奥の細道」にあっては――まさにウィトゲンシュタインが言うように――鏡像である彼らこそが――実に〈孤独者としての芭蕉という孤高の人〉を――説明している――と言い得るのであると私は思うのである――」

＊

本日二〇一四年九月　八日（当年の陰暦では八月十五日）

元禄二年七月二十五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　八日

である。【その二】この日、芭蕉は日枝神社神主藤村伊豆（俳号鼓蟾）の屋敷で、以下を発句とする世吉（百韻の初折と名残の折とを組み合わせた四十四句で満尾する古形の連歌由来の連句形式。山本健吉氏によれば、この亭主鼓蟾が連歌畑の俳人であったことを考慮したものとある）一巻を巻いている。

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

［やぶちゃん注：「奥の細道」。以下に見るように、ここは珍しく本文も以上の前書と句のみである。「曾良俳諧書留」では、

七月廿五日　小松山王會

しほらしき名や小松吹萩薄

と載る。「山王會」は山王権現の例祭を指すが時期的におかしい。ここは本当の祭ではなく、山王を祀った日枝神社での連句の句会名に神事のそれを洒落れて言祝いだものと思われる。後の曾良「雪まろげ」では、

北國行脚の時、いづれの野にや侍りけん、あつさぞまさるとよみ侍りしなでしこの花

さへ盛過行頃、萩薄に風のわたりしを力に旅愁をなぐさめ侍りて

しほらしき名や小松吹萩薄

という長い前書がある。

鼓蟾の脇は、

しほらしき名や小松吹萩すゝき　芭蕉

露を見しりて影うつす月　鼓蟾

であった。

平安時代に始まる「小松引き」という正月初めの子（ね）の日に、野に出でて小松を引き抜いて娘子供らが遊んだ「子の日の遊び」というのがあり、芭蕉はそれに通うこの地の名「小松」を「しほらし」い（正しくは「しをらし」で、愛らしい・可憐だの意）と言祝ぎ、それが下五「萩」「すゝき」にも掛かり、「吹く」は同時に小松にも萩や薄にも掛かる。恐らくは庭前にも姫小松が萩が芒が如何にも秋庭らしく配されてあり、そこを渡ってゆく涼やかな秋風もまた実景である。俳諧というより連歌的な風雅を通わせた挨拶句で、脇付も連歌風でスラーのように音楽的になめらかでしかもしっとりとしている。」

＊

本日二〇一四年九月　九日（当年の陰暦では八月十六日）

元禄二年七月二十六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　九日

である。この日、小松滞在中の芭蕉は堤八郎右衛門歓水（「觀水」は連歌の雅号で、俳号は享子）の屋敷に招かれて連句五十韻を興行した。その発句。

廿六日　同歡水亭會　雨中也

ぬれて行（ゆく）や人もおかしき雨の萩

かゞ小松にて

ぬれて行く人もおかしや雨の萩

同國小松觀水亭雨中の會

ぬれて行く人もやさしや雨の萩

［やぶちゃん注：第一句目は「曾良俳諧書留」の、第二句は「泊船集」の、第三句は「菅菰抄附録」の句形。

脇句は亭主が、

ぬれて行や人もおかしき雨の萩　芭蕉

すゝき隠（がくれ）に薄葺（すすきぶく）家　享子

と付けている。「人」は自身を含んだ連座の俳衆の客観表現。雨もまた奇なりと歓水の前庭を雨中に巡っては濡れつつも、うち興ずる自身の姿を「おかしや」と詠んだのである。前

日二十五日の鼓蟾と同じく連歌畑の相手であることを意識して脇が付けやすいようにした素直な挨拶句である。」

＊

本日二〇一四年九月　十日（当年の陰暦では八月十七日）

元禄二年七月二十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　十日

である。【その一】この日、芭蕉は山中温泉に到着、八月五日まで八日間も滞在した。山本健吉氏の「芭蕉全句」によれば、宿所は湯本十二軒（山中温泉草創より営む十二の旧家）の一つ和泉屋（現在の温泉街中心部である石川県加賀市山中温泉本町にあった温泉宿。現存しないものの、和泉屋に隣接していた現存する山中温泉最古の建築である宿屋扇屋別荘の建物を移築、芭蕉の資料を展示する「芭蕉の館」となっている。リンク先は公式サイト）、当主は未だ十四歳（満十三であろう）の久米之助（これは幼名で成人後は甚左衛門と名乗った）という少年で、彼の祖父及び父は貞門の俳人として知られていた。この時、少年久米之助も芭蕉に入門、桃妖（桃夭とも）という号を貰っている。本句はこの少年に与えた句である。

山中や菊はたおらぬ湯の匂（にほひ）

山中ノ湯

山中や菊は手折らじ湯の薫（にほひ）

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」、真筆懐紙（勝峰晋風編・昭和五（一九三〇）年刊の真蹟図録集「芭蕉翁遺芳」）には、

北海の磯傳ひして、加州山中の涌湯（いでゆ）に浴ス。里人の曰、このところは扶桑三の名湯の其一なりと。まことに浴する事しばしばなれば、皮肉うるほひ、筋骨に通りて、心神ゆるく、偏に顔色をとゞむるこゝちす。彼桃源（かの）も舟を失ひ、慈童が菊を枝折（しをり）も知らず。

と前書し、文末に『元祿二仲秋日』とある（ここは角川文庫版頴原・尾形訳注「おくのほそ道」に拠った）。これは山中温泉をかの陶淵明の「桃花源之記」の深く迷い行った山中の桃源郷に擬え、更に周の穆王に仕えた侍童菊慈童をも引き出す。この侍童は罪あって南陽郡の酈県に流されてその地の山中で菊の露を飲み、遂には不老不死の仙童となったという。謡曲に「菊慈童」（観世流の題。他流では「枕慈童」と題する）があり、そこでは周から七百年後の魏の文帝がこの仙童に逢って、童子は菊枕を戴き、帝の七百年の長寿を言祝ぎ、菊を手折って山中へと消えてゆくというストーリーである。まさにこの「山中」温泉の湯は不老不死の妙湯で、かの漁師が桃源郷に行くべき舟などなんのその、菊慈童の手折る菊（古来より菊酒・菊枕など長寿や無病息災の霊能を持つ）の露も不要、というのである。

しかもここから、**句自体があからさまに「菊」慈童を久米之助に通わせて、しかもやはり見え見えの「菊」「たをらぬ」（正しい仮名遣は「たおらぬ」）「少年」からこれは久米之助少年への――クナーベン・リーベ――少年愛の句であることが分かる**のである。「扶桑三の名湯の其一」とあるが、一般には「日本三名泉」は有馬温泉（兵庫）・草津温泉（群馬）・下呂温泉（岐阜）、「日本三古泉」は有馬温泉・道後温泉（愛媛）・白浜温泉（和歌山）〔白浜・道後の代わりに下呂や別府等を入れる説もある〕、「枕草子」第百十七段に載る「三大名泉」は榊原温泉（三重）・有馬温泉・玉造温泉（島根）で古来の名湯名数には挙がってこない（個人サイト「名湯・秘湯・立ち寄り湯」のこちらのページを参照させて戴いた）。ウィキの「山中温泉」によれば、開湯から千三百年とされ、『奈良時代行基による開湯伝説も存在する。しかしながら広く知られる開湯伝説は平安時代の開湯とされ、鎌倉武士、長谷部信連は傷を負った白鷺が傷を癒しているところから発見し、あらためて掘ってみたところ温泉が湧き出たと言われる』とあるから古湯であることは確かで、何よりまさに「奥の細道」のこの記載によっても、山中温泉は後世、芭蕉が訪れ、殊の外気に入った名湯として知られるようになったとも言えよう。しかも芭蕉は一見、温泉を好まないことが「奥の細道」全体を読んでいると分かる（但し、この芭蕉の「温泉嫌い」（ウィキにもそうある）というのは、

恐らく当時の温泉地の持つ世俗的喧噪やある種の猥雑性に対する芭蕉の生理的嫌悪感に基づくものであると私は思っている)。

第二句目は、「曾良俳諧書留」の句形で、これが初案。明確に、手折るまい、と語りかけた確信犯の強さはよいが、すると上五／中七／下五と三段に切れていかにも句意の優しさと合わない。

以下、「奥の細道」の「山中の段」。ご覧のように、芭蕉はまたしても時系列操作を行って、あたかも那谷寺を山中へ向かう途中で参詣したかのように改変しているが、事実は山中を発った八月五日の句である。前半については後に「石山の」の句の注で再掲して注する。

＊

山中の温泉に行ほと白根か嶽
跡に見なしてあゆむ左の山際に
観音堂有花山の法皇三十三所

大慈

の順礼とけさせ給ひて後大悲の
像を安置し給ひて那谷と名付給ふと也
那智谷組の二字をわかち侍しとそ
奇-石さまざまに古-松植ならへて
萱ふきの小堂岩の上に造り
かけて殊勝の土地也

石山の石より白し秋の風
温泉に浴す其功有明に次と云

山中や菊はたおらぬ湯の匂
あるしとするものは久米之助とて
いまた小童也かれか父俳諧を好て

洛の貞室若輩のむかし爰に
來りし比風雅に辱られて洛
に歸て貞德の門人となつて世に
しらる功名の後此一村判詞の料を請す
と云今更むかしものかたりとは成ぬ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○那智谷組の二字　→　●那智・谷汲の二字

○好(このみ)て　→　●好み

○むかしものかたり　→　●昔語(むかしがたり)とはなりぬ

■やぶちゃんの呟き

「有明」有明は「有間」の誤字。これは決定稿でも残存している不思議な誤記である。有馬温泉のこと。

「貞室」安原貞室(ていしつ)（慶長一五（一六一〇）年～延宝元（一六七三）年）は江戸前期の俳人。貞門七俳人の一人。名は正明(まさあきら)、通称、鉾屋(かぎや)彦左衛門、別号は腐俳子(ふはいし)・一嚢軒(いちのうけん)。京都の紙商であった。寛永二（一六二五）年、松永貞徳に師事して俳諧を学び、慶安四（一六五一）年四十二歳で点業（俳諧の点者として興行を生業とすること）を許された。貞門派では松江重頼と双璧を成したが、自分だけが貞門の正統派でその後継者であると主張するなど、同門、他門としばしば衝突した。主に参照したウィキの「安原貞室」によれば、『作風は、貞門派の域を出たものもあり、蕉門から高い評価を受けている』とある。

「久米之助」久米之助は如何にも若年で当主というのが気になるが、石川県立大聖寺実業高校情報ビジネス科課題研究ブログ「実高ふれ愛隊日記」の「隊員ＮＯ．５あやかさん」の報告になる西島明正氏の講演内容の要約によれば、『まだまだ若い久米之助の後見役をしていたのが、叔父の自笑(じしょう)で』、彼は『加賀の俳壇で人気のあった人で、芭蕉が金沢に着いた

とき、金沢まで出かけ、山中温泉に芭蕉を誘ったとも言われてい』るとある。また桃妖は、宝暦元（一七五一）年十二月二十九日、満七十五歳で逝去、桃妖の墓は、今も医王寺にあるとある。高野山真言宗国分山医王寺は加賀市山中温泉薬師町の薬師山にあり、行基開創とし、温泉守護寺として薬師如来を奉っていることから、通称「お薬師さん」として親しまれている。芭蕉の忘れ杖などを所蔵（山中温泉観光協会公式サイト内の「医王寺」に拠る）。

「かれが父」角川文庫版嶺原・尾形訳注には又兵衛豊連（「とよつら」と読むか）とあり、延宝七（一六七九）年没、『ただし、『書留』には「祖父」とする。祖父は又兵衛景連』といい、寛文七（一六六七）年没とある。「曾良俳諧書留」には、

貞室若クシテ彦左衛門ノ時、未廿餘トカヤ、加州山中ノ湯へ入テ宿、泉や又兵衛ニ被〻進、俳諧ス。甚恥悔、京ニ歸テ始習テ、名人トナル。一兩年過テ、來テ俳モヨホスニ、所ノ者、布而習〻之。以後、山中ノ俳、點領ナシニ致遣ス。又兵へハ今ノ久米之助祖父也。

とある（以上は岩波文庫版萩原恭男校注「おくのほそ道」のデータに、「奥の細道 レビュー」の資料を突き合わせたものである）。

「貞徳」貞門俳諧の祖松永貞徳。

「判詞の料を請ずと云」は「はんじのれう（りょう）をうけずといふ」と読む。貞室が点者となって知られるようになってからも、この村からだけは俳諧指導の謝礼を受け取らなかったという、の意。単なる伝承の類いのようには思われる。

最後に。十三歳の桃妖には、その雅号をつけるに際して詠まれた次に示す「桃の木のその葉散らすな秋の風」という句もあり、また、山中を去るに当たって芭蕉はやはり後掲する「湯の名殘（なごり）今宵は肌の寒からむ」を彼への留別吟としてものしている。これらは皆、恋情の確信犯である。この桃妖という雅号がまさに「妖」しい。山本健吉氏は『水上の』（山中温泉という山中の水上（みなかみ）の、という謂いであろう）『桃花源のあやしい童子』といった謂い

であろうとされるが、別に「桃夭」とくれば、これはもう、嫁ぐ若い女性の美しさを桃の実のみずみずしさにたとえた「詩経」の同名の詩も直ちに想起される。ここではその破瓜のイメージを若衆道に反転させればこと足りる。「桃の木のその葉」を「散らすな」という呼びかけと言い、「湯の名殘り」から「今宵は肌の寒からむ」と語りかける妖艶な秋波のポーズといい――本「山中や」から初めて、徹頭徹尾、これは**とんでもない十三の少年への禁断に近い危ない恋句群**と私は感ずるのである。

但し、私は個人的にこれらの句群が嫌いではない。但し、上手いとは思わない。それでも、世の俳諧の宗匠（当時、芭蕉は満四十五歳）である何とも浮世離れした壮年の男性から、十三の時にこれらの句を捧げられたら、これは私も天にも昇った気持ちになることは請け合う。芭蕉から句を頂戴するだけでも、凄いことだが、これはまさに恋歌なのだ。

だが問題は別にある。

……この芭蕉の形振り構わぬホモセクシャルな恋句の連発を前にして……ここまで旅の辛酸や感動をともにしてきた、かの曾良が……とてものことに穏やかでいられたはずが、ないのだ……

……事実……曾良はまさにこの山中を最後として芭蕉と別行動をとることになるのである…

…そこはまた、「今日よりは書付消さん笠の露」の句で考えてみたい――」

＊

本日二〇一四年九月　十日（当年の陰暦では八月十七日）

元禄二年七月二十七日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　十日

である。【その二】山中温泉での宿所和泉屋当主満十三歳の久米之助（後、甚左衛門）少年に桃妖の号を与えた際に少年へ与えた句。

加賀山中、桃妖（たうえう）に名をつけ給ひて

桃の木の其葉（そのは）ちらすな秋の風

［やぶちゃん注：「泊船集」。「菅菰抄附録」には前の「山中や」の句に続けて載せ、

おなじ時期桃妖に名をあたへて

と前書する。底本（岩波文庫中村俊定校注「芭蕉句集」）では『七月廿七日か』と推測してある。

俳号については前の句の注を参照にされたいが、これが如何に尋常でない格別の計らいであることに、お気づきになられただろうか？……「桃妖」の「桃」は……同時に……芭蕉庵松尾桃青という自身の俳号の一字を取ってもいるのである。「桃青」と「桃妖」……「秋の風」は老年を迎えた芭蕉を容易に通わす……その風に「其」の「葉」を「ちら」してはなるまいよ、と呼びかける芭蕉……「ちら」すまいとする芭蕉の心が動く……

無論、ここまで芭蕉が惚れ込んだ理由には聡明な美少年であった意外にも、**この直前に芭蕉が体験した小杉一笑の死の事実による激しい心傷（トラウマ）が相当に強く影響を与えている**ものと考えてよい。**その尋常ならざる老少不定の心的複合（コムプレクス）が、芭蕉をして「秋の風」を通してダイレクトに響き合う**のである。二つの句を並べて見るがよい。

塚も動け　我が泣く聲は　　秋の風

桃の木の　其の葉散らすな　秋の風

――**芭蕉切実の愛の命令形**――である……」

＊

本日二〇一四年九月　十四日（当年の陰暦では八月二十一日）

元禄二年八月　一日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　十四日

八日間滞在した山中での句。中間のここに配しておく。

山中十景　高瀬漁火（たかせのいさりび）

いさり火にかじかや波の下むせび

此地に十景あり。先師むかし高瀬の漁火という題をとりて

かゞり火にかじかや波の下むせび

［やぶちゃん注：第一句目は「卯辰集」の、第二句目は支考編「東西夜話」（元禄十四年成立）の句形と支考による前文。

「山中十景」『山中かわら版』第十九号（二〇一一年十二月発行・ＰＤＦ版）の中の医王寺住職鹿野恭弘氏の記事「山中十景と素晴らしき先人達」によれば、彦根の俳人中村湧西（ようゆう）なる人物が享保十（一七二五）年に山中温泉に逗留、その時医王寺薬師堂に参詣して十景絵馬奉納句の扁額を見たことが記されているとあり、その時、湧西は桃妖甚左衛門（当時、四十九歳）にも会っているとある。以下、同記事に出る十景を正字化して記しておく（読みは記事にある現代仮名遣によった）。

桂清水螢（かつらしょうずぼたる）・醫王林花（いおうりんか）・湯屋烟雨（ゆやえんう）・水無啼猿（みずなしていえん）・小富士暮雪（こふじぼせつ）・大巖紅葉（おおいわこうよう）・黒谷城跡（くろだにじょうせき）・道明秋月（どうめいしゅうげつ）・蜻蛉橋霜（こおろぎきょうそう）・高瀬漁火（たかせいさりび）

ありがちな名数であるが、音読みの中に訓読みを含むというのは比較的珍しいのではあるまいか。

「芭蕉ＤＢ」の本句のページによれば、『山中温泉旅館の主挑妖の説明で、この山中温泉

には十景があって、その中に「高瀬の漁火」というものがあると聞いて芭蕉は作句したといわれている。それゆえ、この句は題詠であって嘱目吟ではない』とする。確かに「東西夜話」の前文からはそうなる。しかし、八日の滞在で凝っと温泉にばかり浸っていた（そもそも芭蕉は温泉好きでは実はないと思う）とは考えられぬから、ここは嘱目ととっても構わないと思われるのだが。……それともちょっとした外出の意欲をも殺いでしまうような事態が、芭蕉と同行者曾良との間に起っていたのか？……

「かじか」ここは「漁火」と出るから、魚の条鰭綱カサゴ目カジカ科カジカ *Cottus pollux* 及び同カジカ属 *Cottus* の仲間を指す。山中温泉辺りということになれば、降海しない河川型（湖沼陸封型）の種であろう。金沢では幻となってしまったゴリ料理のゴリである。但し、無論、彼らは発声器官持たない。ここは同名を持つ山地の渓流に棲息する両生綱無尾目ナミガエル亜目アオガエル科カジカガエル属 *Buergeria buergeri* の鳴き声との混同誤認によるものである（たちの悪いことに古い歳時記には「鳴く」と出る）。大変、美しい声で鳴く。AKIRA OOYAGI 氏の「カジカガエルの美声 Japanese Stream Frog song」でお聴きあれ。

十景全部に句をつけたのなら俳諧の興もあろうというもの乍ら、その気配はない。しかも漁網に絡め捕られんとする鰍（かじか）が我が身の儚さを思って咽び泣くという如何にもな（しかもダルでネガティヴな）句柄、山本健吉氏は『総じて山中の句は低調である』と断ずる。**それは年甲斐もなく芭蕉が桃妖にほだされてしまったからだけではあるまい。その反作用によって曾良との関係が破綻寸前まで悪化していたからに他ならない**と私は考えている。」

＊

本日二〇一四年九月　十八日（当年の陰暦では八月二十五日）

元禄二年八月　五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　十八日

【その一】この日、芭蕉は八日間滞在した山中和泉屋を発った。「奥の細道」では「曾良は腹を病みて、伊勢の國、長嶋と云ふ所にゆかりあれば、先き立ちて行く」とあるが、事実は以下に見るように「曾良随行日記」によって、金沢から見送りのために同道して山中温泉にも同宿していた立花北枝とともに同日の『晝時分』に先に那谷寺へと発ち、曾良はその後、程なく山中を発っている。これは何か、奇妙ではあるまいか？

ともかくも、百二十五日目（「奥の細道」の旅は江戸深川から大垣まで全行程は百五十六日で約六百里、二千四百キロメートル相当）の曾良との別れの句である。

今日よりや書付消さん笠の露

今日よりは書付消さん笠の露

同行（どうぎやう）なりける曾良、道より心地煩（わづらは）しなりて、我より先に伊勢の國へ行（ゆく）とて、

「跡あらむ倒（たふ）れ臥（ふす）とも花野原」

といふ事を書置（かきおき）侍るを見て、いと心ぼそかりければ

さびしげに書付消さんかさの露

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は「芭蕉句選年考」（石河積翠著・寛政年間（一七八九年～一八〇一年）成立）の句形。第三句目は潁原・尾形訳注角川文庫版「奥の細道」の「発句評釈」に「湖中芭蕉翁略伝」に所収する真蹟懐紙の句形（現在は原物不明）として示されるもので、前書の「心地煩しなりて」はママ。

「書付」この場合は行脚僧や巡礼などが常に仏や弘法大師と一緒にいるという意を込めて笠の内側などに書きつけるところの「乾坤無住同行二人」（ともに天地の間を修行する一所不住の謂い）を指す。それを笠においた露をもって万感の思いの中、手ずから消す芭蕉の実写にのみ私は心打たれてきたのだが、流石は安東次男氏は岩波同時代ライブラリー「古典を読む　おくのほそ道」で、そこを恐るべき博識を以ってディグしている。「奥の細道」に先行する曾良の句の句解を含め、引用するには長過ぎて、やや憚られるものの、引かずにはおれない（恣意的に西行の和歌や「曾良随行日記」の引用部分は正字化し、踊り字「〱」は「々」とした）。

《引用開始》

〇行々てたふれ伏とも萩の原曾良――「いづくにかたふれ伏共（とも）萩の原」として「書留」に見える。「元禄二年翁に供せられて、みちのくより三越路（後・中・前の三つ）にかゝり行脚しけるに、かゞの国にていたはり（労、病）侍りて、いせまで先達（さきだち）けるとて」と前書をつけ、同じ句形（「いづくにか」）で『猿蓑』にも収める。「行々て」は、元禄四年夏より後の句形である。『ほそ道』に入れるために、芭蕉が改めたものかもしれぬ。たぶんそうだろう。

「無常の歌あまた詠みける中に、いづくにかねぶりねぶりてたふれ伏さんとおもふ悲しき道芝の露」（西行、山家集）

この歌を下敷にした作りに相違ないが、初の形には更に別案があった。「原」の傍に「かゞ」と注目すべき書入が見られる（「いづくにかたふれ伏とも萩の加賀」）。これだと、加賀の地かもしくは其地での思出にうしろ髪を引かれる、留別の吟ということになる。通説は、西行歌に釣られて、曾良の行脚の覚悟と解しているようだが、改めた末の形はどうあれもとはそういうつもりで詠んだ句ではない、ということがわかる。「萩の原」が、同行の思出ひいては後に残す芭蕉の身を案ずる心の表現だ、とは続けて芭蕉の唱和の句を読めば納得がゆくのだ。

［やぶちゃん注：中略。］

○今日よりや書付消さん笠の露――「書付」の事実は知られていないが、貞享五（元禄元）年の春、万菊丸（杜国）を伴って吉野に遊んだときは、「乾坤無住同行二人」と笠の内にしるした（『笈の小文』）。今回も同じに考えてよいだろう。同行二人とは、もともと御仏と二人の意味である。一人旅でもよい。ならば消す必要はないわけだが、それを「消さん」と云っているところに、まず含のある句の趣向をさぐらせる。

先行する者が、西行歌を使って留別の句を詠めば、跡に残った方は西住（さいじゅう）を思わぬはずがない。西住は西行が『山家集』のなかで、只一人「同行」の名を以て呼んでいる人物である。出自や経歴はよくわからないが、いうなれば影の形に添うごとき存在で、西行の無二の友だった。その西住を讃岐修行に伴ったときの歌が、『山家集』にある。

四國の方へ具して罷りたりける同行、都へ歸りけるに、
歸りゆく人の心を思ふにも離れがたきは都なりけり

ひとり見をきて歸り罷りなんずるこそ哀れに、
何時か都へは歸るべき、など申しければ、
柴の庵のしばし都へ歸らじと思はむだにもあはれなるべし

とくにこの後の歌が、句作りのたねのようだ。前書に云う「見捨てて帰るさえつらいのに、いつ君は都に戻るのか」く問うのは西住である。「西行は都へ帰らぬだろうと、一瞬君が思うのさえあわれである」と慰めるのは西行だ。道心のなかにユーモアを覗かせる歌だが、前書共、一首はそのまま曾良に対する芭蕉の送別の口ぶりに置換えることができる。

ここまで読むと、問答の意味がようやくはっきりする。「書付消さん」は、相手の心残りを断つ工夫だ（自分のためなら「同行二人」を消す必要はない）。安心して先に行け、と芭蕉は云っているのである。君は、「道芝の露」の歌を使って、深刻に別れを告げたがるが、この場にはむしろ「柴の庵」の歌の方が似合う、とはげましていると読んでもよい。近い

うちに又合うではないか、とも慰めている。

「いづくにか」を「行々て」に改めたのは、やはり芭蕉だった、と考えてよいだろう。その辺のことがわからぬと、読取はすっかり狂ってしまう。一句立なら甚だ無性格で、見送る人・送られる人どちらでもよいが、そうではない。第一、「消さん」とは、書かれたものが先あってのはなしである。同行を安堵させるための後追の興らしいということは、字遣いからも見当がつく。それを西住・西行の関係に是めれば、おのずと拠るべき情況と歌はうかんでくる。いかにも脇づとめの上手らしい目の付けどころだろう。この句は「書留」にはもうしるされていない。

「五日（九月十八日）朝曇。晝時分、翁・北枝、那谷へ趣。明日於二小松一左駒萬子（加賀藩士、知行千石。以後蕉門）爲二出會一也。…立、大正侍ニ趣。全昌寺へ申刻着、宿。夜中、雨降ル。」（日記）［やぶちゃん注：後略。「那谷」は現在の小松市那谷町の那谷寺。「奥の細道」では時系列変更によって山中の段の前にある。後日、評釈する。「大正侍」は「正」の右に『（聖）』と安東氏の傍注がある。現在の石川県加賀市大聖寺町のこと。前田家支藩七万石の城下町であった（「侍」の誤記については、やはり後日の評釈を待たれたい）。「全昌寺」加賀市大聖寺町の曹洞宗の寺。山中温泉の和泉屋の菩提寺であり、当時の住持月印は和泉屋若主人久米之助の伯父であったから、明らかに久米之助の配慮による紹介である。芭蕉もこの後日に同寺に泊している。なお以下、山中逗留中に興行された北枝・北枝・芭蕉三吟による七巡（二十一句。但し、二十二句目以降は北枝・芭蕉の両吟となる。安東氏によれば、『以後たぶん両人の別れ（松岡）までの間に歌仙満尾し、『卯辰集』に収められ』たとある）の解説と全句が載る。」

《引用終了》

まさに安東節、再炸裂、彼の評は凡百の国文学者が総出でかかっても敵わない気がする。

第三句について同引用元（潁原・尾形訳注角川文庫版）では、『「煩しなりて」のごとき不審の点もあるが、忽卒（そうそつ）』（「倉卒」に同じい。慌ただしい中で、の意）『の際に書いたものとすれば、誤脱もないとはいえない。とにかくまったくの偽作とも思えないようである。

あるいはこれが実際初案であったのかも知れぬ。すると曾良の句も「跡あらむ倒れふすとも花野原」から、次第に推敲（すいこう）をかさねられたわけである』とある。これは傾聴に値する見解と思う。

以下、「奥の細道」から山中温泉の曾良留別の段を引く。

＊

曽良は腹を病て伊勢の国長嶋
と云處にゆかりあれは先立て旅
立行に

ゆきゆきてたふれ伏共萩の原

と書置たり行ものゝ悲しみ殘る
ものゝうらみ隻鴨のわかれて雲に
まよふかことし予も又

けふよりや書付消さん笠の露

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○先立て旅行（たびゆく）に　→　●先立て行くに
○隻鴨　→　●隻鳧

■やぶちゃんの呟き

「曽良は腹を病みて」確かに、「随行日記」を見ると曾良は金沢で、

一　十七日　快晴。翁、源意庵へ遊。予、病氣故不隨（したがはず）。今夜、丑ノ比ヨリ雨強降テ、曉止。

とあり、以下（■は判読不能の字）、

一　廿一日　快晴。高徹ニ逢、藥ヲ請（こふ）。翁ハ北枝・一水同道ニテ寺ニ遊。十徳二ツ。〔■■〕

十六四。

一　廿二日　快晴。高徹見廻(みまふ)。亦、薬請。此日、一笑追善會、於　寺興行［やぶちゃん注：空白はママ。願念寺。］。各朝飯後ヨリ集。予、病氣故、未ノ刻ヨリ行、暮過、各ニ先達而歸(さきだつてかくる)。亭主ノ松(べつしよう)。

一　廿三日　快晴。翁ハ雲口主(あるじ)ニテ宮ノ越ニ遊。予、病氣故不行(ゆかず)。江戸へノ状認(したたむ)。鯉市・田平・川源等へ也。徹ヨリ藥請。以上六貼也。〔今宵、牧童・紅爾等願滞留。〕

と、芭蕉との同行を何度も欠している。「高徹」（北枝と親交のあった金沢の医師）が処方もし、往診もしているから、体調不良のためであることは間違いない。次の滞在地である山中温泉は胃腸病に効くことでも知られるから、曾良の病態はまさに「腹を病」むというところの、急性か亜急性の胃腸障害であった可能性が窺われる。

しかし、この翌七月二十四日に金沢を発ってから（北枝も同行）は、山中滞在中で、

廿九日　道明淵［やぶちゃん注：山中温泉の東方を流れる大聖寺川にある淵。］、予、不往(ゆかず)。

とある以外には（ところが翌『八月朔日』の記事には『快晴。道明が淵。』とあって恐らく曾良一人で同所に行っているのである）、実は芭蕉と分かれて先行すること、八月十五日の伊勢長島の大智院（現在の三重県桑名郡長島町の内）到着までの一人旅の日記には体調不良の記事は認められない。但し、この大智院に着いた翌日の条に、

十六日　快晴。森氏、折節入來(じゆらい)。病躰談(だんず)。

俳友ででもあったかと推測される、訪ねて来た大垣藩藩医森恕庵玄忠に病態の相談をしている。以上、ここでは事実のみを注して、私の推理は最後に述べることとする。本文への注を先に片づける。

「ゆきゆきてたふれ伏共萩の原」既に第三句形の前書や安東氏の引用にも出たが、これらを総合すると本句には以下、決定稿の他に三形が認められることになる。

行き行きて倒(たふ)れ伏すとも萩の原

跡あらむたふれ臥すとも花野原

いづくにかたふれ伏(ふす)とも萩の加賀

いづくにかたふれ伏とも萩の原

最初の句が「奥の細道」本文の句形（当然、芭蕉の斧正による決定稿）、第二句目が「湖中芭蕉翁略伝」所収の真蹟懐紙の句形、第三句目が「曾良俳諧書留」の句の傍らの書き入れを復元したもの（安東氏に拠る）、第四句目は「曾良俳諧書留」の決定稿（？）と「猿蓑」に載る句形である。但し、この句は実は「書留」の旅中の部分ではなく、「猿蓑」入集句をメモした部分に書かれてあると嶺原・尾形角川版の発句評釈の補記に記されてある。それらを総合すると私の推理では、

跡あらむたふれ臥すとも花野原

←（曾良推敲若しくは芭蕉の初期斧正）

いづくにかたふれ伏とも萩の原

←（曾良改悪）

いづくにかたふれ伏(ふす)とも萩の加賀

←（芭蕉最終斧正）

行き行きて倒(たふ)れ伏すとも萩の原

の推敲過程を経たものかと思う。決定句は私には曾良の句というより芭蕉の句という誤認印象の呪縛から私は逃れられないのである。

「隻鴨のわかれて雲にまよふかことし」「隻鴨」は「そうこう」と読み、雌雄つがいのカモのことをいう。通行本では「隻鳧」とし「せきふ」と読んでいるが、「鳧」は広義に、また芭蕉の当時は、カモ目カモ亜目カモ科 Anatidae に属するもののうち、ハクチョウ・ガン・アイサの仲間を除いた、中形大の水鳥であるカモ類を総称するものであると考えてよい。具体的にはマガモ・コガモ・オナガガモ・ハシビロガモなどが含まれる（ここは主に「大辞林」の記載に拠った。狭義にはチドリ目チドリ亜目チドリ科タゲリ属ケリ *Vanellus cinereus* がおり、これに限定している評者が実は多いが私は従わない）。これは十九年の永きに亙って匈奴に捕われていた漢の蘇武が、両国の和睦によってついに帰国の途に就くこととなり、かつての盟友で匈奴に投降して厚遇されていた李陵（匈奴の右校王となった）の別れに際し詠んだ詩の一節にある（「蒙求」所収）、

雙鳧俱北飛
一鳧獨南翔
子當留斯館
我當歸故鄉

雙鳧(さうふ) 俱(とも)に 北に飛び
一鳧(いつふ) 獨り 南に翔(かけ)る
子(し)は當(まさ)に斯(こ)の館(たち)に留むるべし
我は當に故郷に歸るべし

に基づく。この「雙鳧」（私はこれも広義の鴨と採るものである）と「一鳧」から、芭蕉は

「隻鳧」（＝隻鴨）としたことは間違いなく、それについて安東次男氏は前掲書で、『一を隻に置替えて、隻の暗示（別れがあればいっしょになる日もある）としたところがうまい。一、二は単なる数だが、隻、雙は一躰という点が目付だ。隻は手（又）に一羽の鳥（隹）を、雙はつがいの鳥を持つ意味である』とまたしてもの安東節で剖り分ける。少し補足すると「隻」は「右手」を表わす「又（ユウ）」と「鳥」の意の「隹」の合字で、手に一羽の鳥の羽を握っているの意の会意文字で、そこから「一つ」の意となるのに対し、対義語である「雙」は二羽の鳥（「隹」＋「隹」）を手（「又」）で持っている意の会意で、一対・一つがいの意となったものである（「双」は「雙」の俗字で二つの手で原意に通じたものである）。

さて。

「曾良随行日記」の芭蕉と曾良が別れた八月五日を再度見てみよう（安東氏の引用は省略がある。またこの箇所は判読不能の部分があり、諸本で異なる。そこは角川文庫版を参考にしながら独自のテクストとした。〔　〕は割注であるが全く判読出来ないものらしい）。

一　五日　朝曇。晝時分、翁・北枝、那谷へ趣。明日、於小松（こまつにおいて）ニ、生駒萬子、爲出會（しゆつくわいのためなり）也。〔■■〕■〔■■〕聊從シテ歸テ、艮刻、立。大正侍ニ趣。全昌寺へ申刻着、宿。夜中、雨降ル。

この判読不能の本文や割注部も実に怪しいが（続く「聊從」は「順從」や「輒談」と判読するものもある。私は那谷寺へ向かう道を少しだけ見送って山中温泉に帰ったと読む）、原本を見ることが出来ないのでそこは問題にしないこととしよう。「生駒萬子」は加賀藩士で蕉門の生駒万兵衛（後述する）。

問題は**芭蕉・北枝の出立が前で、それから程なくして**（「艮」ではおかしいので、現在、「即」の誤字と考えられている）**曾良が出発したという点**なのである。

芭蕉は曾良の胃腸の不具合を思い遣って、恐らく同病に効く山中温泉への今暫くの湯治を

曾良に勧め、曾良もそれを肯んじたのではなかったか？

ところが、いざ、別れて和泉屋で独りきりとなり、甲斐甲斐しく世話しようとする、芭蕉の耽溺した十三歳の美少年の主人久米之助と向き合ってみると、曾良は居ても立ってもいられなくなり、突発的に発つことに決せずにはいられなくなったのではなかったろうか？　そう考えた時にのみ私は、この奇妙な曾良の行動の意味が初めて納得出来るのである。

私は、先の山中滞在以降の評釈以降ずっと述べて来た通り、曾良は山中温泉での芭蕉の、桃妖久米之助に対する溺愛を見てきた。その彼にしてこの少年と居ることは出来ないことは言を俟たない。

確かに山中直前の金沢から、曾良の胃腸の不具合は発生しているが、私は実はこれは暑気当たりや水や食物による中毒及び感染症ではなく、また内因的な病変による胃腸疾患でもなく、心因性の神経性の胃腸疾患ではないかと疑っている。

則ち、この少し前から芭蕉との間には――少なくとも曾良には誠心籠めて付き従ってきた芭蕉に対する――ある種の精神的な意味での抑えがたい不満や不快感が募り初めてきていたのではなかったかと思うのである。

それは私の推理では、恐らくあの躓きの多かった苦難の越後越中路辺りから兆し始めたものと考えている。「随行日記」を見ると例えば、六月二十七日の温海（あつみ）を発った条をみると、

廿七日　雨止。温海立。翁ハ馬ニテ直ニ鼠ケ關被趣（おもむかる）。予ハ湯本へ立寄、見物シテ行。半道計ノ山ノ奥也。今日モ折々小雨ス。及暮、中村ニ宿ス。

とあって、異例の別行動を取っているのである。――芭蕉は鼠ヶ関に直行したが、曾良は二キロメートルほど山に入ったところにある温海温泉の湯本へ日帰り湯をした――というのである。なお、これについて「腑に落ちない」と疑問を投げ掛けておられるのは管見する限り、「芭蕉奥の細道事典」の山本胥氏ぐらいなもの（当該書三六三頁）である）。この頃から、この「同行二人」の芭蕉―曾良の乖離現象は始まっていたのではなかったか？

また、山本氏の同書の記載（四三三頁）によると、金沢を発って小松に向かった折り、松任（現在の石川県南部の松任市）まで来たところ、「随行日記」の中に出る芭蕉の弟子で加賀藩士生駒万兵衛（芭蕉の金沢滞在中は勤めで会見出来なかった）が裸馬で追い駆けてきて、『白い絹と袷と金子三両を餞別として差し出した』が、『芭蕉はかたくなに拒否している』事実が生駒万兵衛の日記によって分かっているとある。しかも『どうやらこのとき、芭蕉の路銀は底をついていたようだ。すべての会計をまかされている曾良は、それにも心を悩まされていた』とあるのである。どうも芭蕉は金銭の授受に対しては異常な潔癖感を持っていたらしい。但し、山本氏の『底をついていた』という表現は大袈裟で、それでは旅はここで終わってしまうから、ここは二人で敦賀――近江蕉門の出迎えがあるから大垣までではなく、ここまでよい――まで旅するにはあまりに心もとないものしか手元になかったということを意味するものであろう。しかしそれはまさに、**胃が痛くなるような**更なる現実的懊悩に曾良が苛まれていた事実が浮かび上がってくるのだ。

曰く、

私はそうした内憂外患が曾良の神経を一ヶ月余りに亙って苛み、神経性胃炎辺りを発症させ、漸次増悪した上に、

山中温泉でアッシェンバッハ芭蕉（ヴィスコンティの映画版「ヴェニスに死す」の主人公。原作はあくまで「老作曲家」）がタドジオ久米之助を溺愛するさまを見るに及んで――やってらんねえ！！！――と、遂に曾良の堪忍袋の緒が切れたのではなかったか

と、私は二十代の頃からずっと信じて疑わないのである。少なくとも曾良が芭蕉と別行動をとることに決した背景にはそれ以外のしっくりくる説明を、私は私自身に出来ないからである。――

……因みに、芭蕉は曾良のそうした精神変調に気づいていなかったのかといえば……**芭蕉はとっくに気づいていた**ものと思う。

芭蕉はしかし、それを指摘したり、それに合わせて自身の言動を変化させるタイプの人間ではない。

曾良から先行する意志が明らかにされた時も芭蕉はそれを実に穏やかに受け入れたのであろう。

そもそもが曾良は曾良で、その提案を、これ見よがしの本音の「やってらんねえ！」ケツ捲り方式で芭蕉に告げるとなどということはありえない。

――腹の具合が悪いこと

――思うところあって伊勢長島に急ぎたく思うこと（これについては安東氏が「古典をよむ　おくのほそ道」（二六六頁）で『曾良は、あわよくば長嶋に新風を育てて、ゆくゆく伊勢路経営の拠点にするつもりだったのかも知れない。金沢の乙州の経営ぶりを面の当り見たことも、刺激になったと思う。例の先行の理由はここにも一つ見つかる』とされており、非常に示唆に富む）

――向後も立花北枝という新しい同行者が途中（福井の旧知の等栽宅まで。但し、何故か、北枝はその僅か手前の丸岡で芭蕉と別れている。それはまた「物書（かい）て扇引きさく余波（なごり）かな」の句で考えてみたい）までは同道して呉れるであろうこと――

等々の最もな理由をのみ淡々と並べ、芭蕉にやんわりと別行動の慫慂をしたものと考えてよい。

但し、そこで曾良は芭蕉がそれを禁じ、慰留し、同行を続けるよう命じて呉れることをどこかで望んでいなかったかと言えば嘘になるような気はする。

しかし、何と、芭蕉はここで笑みとともにそれを快諾し、逆に曾良を思いやって、

「今暫くこの山中の湯に入って養生致すがよかろうぞ――」

と労わって呉れたのではなかったか？

曾良が結局、足早に山中を発ったのは、別な意味では、**師に対する一時の違和感や桃妖への嫉妬心に駆られて、取り返しのつかない我儘**（この後の行程から見れば、芭蕉は曾良の後をかなり忠実に追う形をとっているから、曾良が同行を再開することも容易ではあった。しかし縷々言い訳し、留別吟までも交わして別れた手前、途中で芭蕉を待って合流するのは、流石の根性なしの私でさえもやらぬ、如何にもおぞましい行為であることは言うまでもない）**を通してしまったことへに一種の強烈な自己嫌悪**が作用したから、と言えなくもないようにも思えてくるのである。……」

＊

本日二〇一四年九月　十八日（当年の陰暦では八月二十五日）

元禄二年八月　五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　十八日

【その二】「その一」で述べたように、この日、芭蕉は八日間滞在した山中和泉屋を発った。本句は、その十三歳の若主人で門人となった久米之助桃妖への留別吟である。

湯の名殘今宵（なごりこよひ）は肌の寒からむ

山中湯上（ゆあが）りにて桃妖に別るゝ時

湯の名殘今宵は肌の寒からぬ

［やぶちゃん注：第一句目は句空の「柞原（ははそはら）集」（元禄五年奥書）の句形で、

此句ハ、はせを翁山中上湯の時、やどりのあるじ桃妖に書てたぶ。まへがきありしかどわすれ侍り

という附記がある。「上湯」や次の句の前書の「湯上り」はともに湯治明けのこと。第二句目は「立圃花めぐり」（岸𠀋（がいし）編・文化五（一八〇八）年刊）の句形。「今宵」の「宵」は底本（岩波文庫版中村俊定校注「芭蕉俳句集」）では「※」＝「雨」（かんむり）＋「月」。

温みが今宵まで持つか持たぬか、それぞれに解釈は可能であるが、これは湯ではなく美少年の肌のぬくもりを通わせる確信犯の稚児愛憐、クナーベン・リーベの恋句であるから、断然、その肌へに触れることが最早出来ぬ今宵は「どんなにか寒いことであろうよ」という第一句でなくてはならぬ。

こりゃ、やっぱ、ヤバいよねぇ、曾良さん……］　＊

本日二〇一四年九月　十八日（当年の陰暦では八月二十五日）

元禄二年八月　五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月　十八日

【その三】既に述べた通り、この日、曾良と別れ、立花北枝とともに山中温泉を発った芭蕉は現在の石川県小松市那谷町にある自生山那谷寺（じせいざんなたでら）を訪れ、再び先に泊した小松へ向かった。本名句はその那谷寺での句。

石山の石より白し秋の風

［やぶちゃん注：「奥の細道」。

那谷寺は寺伝によれば養老元（七一七）年に泰澄法師が越前国江沼郡に千手観音を安置したのが始まりとされる。その後寛和二（九八六）年に花山法皇が行幸の折り、岩窟で輝く観音三十三身の姿を感じて、観音霊場三十三カ所は総てこの山に凝縮されるとして、西国三十三観音の一番「那智」と三十三番「谷汲」の山号から一字ずつを取って「自主山厳屋寺」から「那谷寺」へと改名した。南北朝時代に戦乱に巻き込まれ荒廃したが、近世になって加賀藩藩主前田利常が再建、この時の大工は気多大社拝殿を建てたのと同じ山上善右衛門であった。前田利常は、江沼郡の大半を支藩の大聖寺藩に分置したが、この那谷寺がある那谷村付近は自身の隠居領としたため、その死後も加賀藩領となった（後に領地交換で大聖寺藩領となっている。以上はウィキの「那谷寺」に拠った。私は行ったことがないが、なかなかに美しい「那谷寺」公式サイトも必見である）。

本句は、その境内にある太古の海底噴火の跡と伝えられる流紋岩を主とする凝灰岩から成る奇岩霊石がそそり立つ「遊仙境」の岩肌に臨んだ嘱目吟である。陰陽五行説によれば白秋で秋は白であるが、ここは白く晒された奇景を秋の白い風が山の緑の色彩をも奪って精神のハレーションを起こさせる。この画像の飛びは、まさについ今しがたあった、同行

二人の曾良を手ずからの露（涙）を以って指で押しのごってしまった、芭蕉自身の精神の空白を伝えて余りある。

この名吟を最後として以後の「奥の細道」には最後まで遂に、少なくとも人口に膾炙するような佳句は生まれなかった。ただ、その分、芭蕉は旅を純粋に旅として、彼の人生の中での数少ない、侘しい魂の独り旅を味わったのだった、とは言えよう。

しかしてまた、**私はこの句を以って、芭蕉の「奥の細道」での俳諧のミューズのドゥエンデ（スペイン語「dueño de casa」。私はアントニオ・ガデスが人間業を超えたステップが出来る瞬間の霊感を指して言った言葉である）は去ったように感ずる**のである。

以下、「奥の細道」那谷寺の段を出すが、前に述べた通り、山中温泉の段とひっくり返してある。煩を厭わず先に出したものと同じく山中までを再掲する。

＊

大慈

山中の温泉に行ほと白根か嶽
跡に見なしてあゆむ左の山際に
観音堂有花山の法皇三十三所
の順礼とけさせ給ひて後大悲の
像を安置し給ひて那谷と名付給ふと也
那智谷組の二字をわかち侍しとそ
奇-石さまざまに古-松植ならへて
萱ふきの小堂岩の上に造り
かけて殊勝の土地也

石山の石より白し秋の風
温泉に浴す其功有明に次と云

山中や菊はたおらぬ湯の匂
あるしとするものは久米之助とて

いまた小童也かれか父俳諧を好て
洛の貞室若輩のむかし爰に
來りし比風雅に辱られて洛
に歸て貞徳の門人となつて世に
しらる功名の後此一村判詞の料を請す
と云今更むかしものかたりとは成ぬ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○那智谷組の二字　→　●那智・谷汲の二字

○好（このみ）て　→　●好み

○むかしものかたり　→　●昔語（むかしがたり）とはなりぬ

■やぶちゃんの呟き（那谷寺の段のみ。山中の段はつぶやき済）

「白根が嶽」加賀白山。現在の石川県白山市と岐阜県大野郡白川村に跨る標高二七〇二メートルの山。富士山・立山とともに日本三名山（日本三霊山）の一つ。北陸地方では標高が高く、一年中、山頂が雪に覆われているところから、遠くから見てもその白さから一目で判別出来ることからかく呼ばれた。

「花山の法皇、三十三所の順礼」第六十五代花山天皇は愛する后が死んだ悲しみから落髪して法皇となって西国巡礼の旅に出、そして長徳元（九九五）年六月一日にこの那谷に来たという伝承がある（諸データは史実とするものが多いが、私は全く信じていない）。

「大慈大悲の像」同寺の本尊である千手観音菩薩像。那谷寺本殿にある。

「那智・谷組の二字」「谷汲」が正しい。「那智」本邦の観音信仰巡礼でも最も古ものの一つとされる西国三十三所の最初、第一番札所である紀伊の那智山青岸渡寺の「那」と、最後の第三十三番札所で現在の岐阜県揖斐郡揖斐川町谷汲（たにぐみ）にある谷汲山華厳寺（たにぐみさん）の「谷」をのそれぞれの一字を取って、の意。

「殊勝」神々しく霊験あらたかなさま。」

＊

本日二〇一四年九月二十二日（当年の陰暦では八月二十九日）

元禄二年八月　九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十二日

【その一】山中温泉で芭蕉と別れた曾良は、当然のことながら、芭蕉のメインの行路をほぼ先行する形で大垣まで旅している（恐らくは大垣（推定ではほぼ同時に曾良は大垣に着いた可能性もある）芭蕉の到着を迎えた後、路通・木因（ぼくいん）らともに芭蕉従って伊勢長島に向かい（この事実は曾良の単独行の当初の理由と齟齬していてやはり怪しい）、更に伊勢神宮参宮へと向かった）。後掲するように「奥の細道」では『曾良も前の夜此寺に泊（とまり）て』とあって、本句を詠んだのは曾良がここ全昌寺（加賀市大聖寺神明町に現存。曹洞宗、山号は熊谷山（「ようこくざん」と読むか）。前に注した通り、山中和泉屋若主人久米之助桃妖の心遣いによる二人への紹介によったもの。和泉屋の菩提寺であり、しかも当時の住持月印が和泉屋若主人久米之助の伯父であった）に泊まった翌日と記している。曾良の日記は曾良の独り旅となった後も記されており、山中を発った八月五日は全昌寺に午後四時頃に着、翌六日は雨のため同寺に滞留、翌七日の午前八時頃に発っているから、芭蕉の言葉が正しいとすれば、芭蕉が全昌寺に着いたのは八日、発つに際しての挨拶吟として本句を詠んだのはこの九日朝のことということになるのである。

庭掃（はい）て出（いで）ばや寺に散（ちる）柳

庭はきて出ばや寺に散柳

庭掃て出（いづ）るや寺に散柳

［やぶちゃん注：第一句目は通行本の「奥の細道」の句形。第二句目は「島之道」（玄梅編・

元禄十年序）及び「東西夜話」（支考編・元禄十四年成立）の句形で、後者には、

なにがし前昌寺といふ寺は先師一夜の泊(あき)をわびて

という支考の前書を記す。第三句目は井筒屋本「奥の細道」の句形。他に、「宇陀法師」（許六ら編・元禄十五年刊）に、

庭拂て出ばや寺に散柳

と載るが、私はこの「拂」は「掃」の誤字と断じて採らない。

禅寺に一夜の宿を求めて翌朝行脚に発つ折りには、境内を払掃するのが礼式。

「奥の細道」の全昌寺の段。

＊

大聖持の城外全昌寺と云寺に
泊る猶かゝの地也曽良も前の
夜此寺に泊て

　終夜秋風聞やうらの山

と殘ス一夜の隔千里におなし
我も秋風を聽て衆寮に臥
明ほのゝ空ちかふ讀經聞ユルニ板鐘
鳴て食堂に入けふは越前の
國へと心早卒にして堂下に下ル
若き僧共紙硯をかゝへて階の
もとまて追來ル折節庭中の
柳散れは

庭掃て出はや寺に散柳

とりあへぬ一句草鞋なから書捨ッ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○終夜　　↓　●終宵

（但し、読みは孰れも「よもすがら」。）

○板鐘　　↓　●鐘板

○堂下に下る　↓　●堂下に下るを

■やぶちゃんの呟き

「大聖持」現在の加賀市大聖寺町。当時は加賀藩前田利明七万石の支城であったが、伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の「奥の細道　曾良との別れ」の語注によれば、『幕府ににらまれることを嫌って、金沢とは一体的に経営しなかったという』とある。山中温泉の北西約八キロメートルに位置する。町名はかつてあった大聖寺という寺名によるか（現存しない）。「持」は誤字ではなく、寺名を憚って地名の字を変えたものであろう（鎌倉の浄妙寺と地名浄明寺などよく見られる）。

「全昌寺」冒頭の私の注を参照。

「終夜秋風聞やうらの山」「よもすがらあきかぜきくやうらのやま」と読む曾良の句。秋夜孤客の常套の奥に、私は山中で芭蕉と別れたことへの曾良の自責の念が強く響く。芭蕉が敢えてここに曾良の句を挿入したのには、そうした曾良の心境を芭蕉が既にして汲み取っていた――その上で、しかも敢えて曾良と決別したのだったという事実を私には伝えるものでもある。芭蕉の孤愁も、実は深かったことが次の「一夜の隔だて千里に同じ」の語彙選びからも窺える。

「一夜の隔だて千里に同じ」――ただ一夜（ひとよ）だけの違いだのに、まるで千里も彼と隔たったいるような断腸の思いが我が身を引き裂く――というのである。以下の蘇東坡の五言古詩

を、曾良との離別（更には私に言わせれば哀しい意識の齟齬をさえ）インスパイアしていることは最早、明白である。

潁州初別子由二首　其二

近別不改容
遠別涕霑胸
咫尺不相見
實與千里同
人生無離別
誰知恩愛重
始我來宛邱
牽衣舞兒童
便知有此恨
留我過秋風
秋風亦已過
別恨終無窮
問我何年歸
我言歲在東
離合既循環
憂喜迭相攻
悟此長太息
我生如飛蓬
多憂髮早白
不見六一翁

潁州にて初めて子由に別る　其の二

近き別れは　容を改めざるも
遠き別れは　涕胸を霑す
咫尺にして相ひ見ざれば
實は千里と同じ

人生　離別が無くんば
誰か恩愛の重きを知らん
始め我　宛邱に來たりしとき
衣を牽きて　兒童舞ふ
便ち知ぬ　此の恨うらみ有るを
我を留めて 秋風を過ごさしむ

秋風　亦　已に過ぎ
別れの恨みは　終に窮きわまり無し
我に問ふ　「何れの年に歸る」と
我は言ふ　「歲の 東 に在るとき」と

離合　既に循環すれば
憂喜　迭ひに相ひ攻む
此れを悟りて　長太息す
我が生は飛蓬のごとし
憂ひ多ければ　髪　早く白からん
見ずや　六一の翁を

本詩は蘇軾三十六歲の熙寧四（一〇七一）年九月の作。王安石の新法党を批判していた彼

が、弾圧が強まる中、この年、自ら地方官を望んで、通判杭州（現在の浙江省杭州市の副知事）となって赴任した、その途次の師との再会であった。詩の内容は弟蘇徹の頑是ない子らととの一時の対面と別れのシークエンスを語っているが、遂に最後となった師との別れをもさりげなく、最後の一句に暗示させる造りともなっている（かのように私は感じられる）。

●「潁州」現在の安徽省阜陽県。

●「子由」欧陽脩。科挙試を監督した際、蘇軾を見い出したのは彼であった。王安石の抜擢も彼であったが、彼の起こした新法には反対派の先頭に立ち、そのままこの前年に政界を引退して、ここ潁州に隠棲していた。当時六十五歳。この翌年同地にて没している。

●「咫尺不相見」「咫」は周尺の八寸（約十八センチメートル）、「尺」はその一尺、十寸で、二二・五センチメートル。転じて、距離の極めて近いことをいう。

●「宛邱」陳州（現在の河南省淮陽県）の異称。潁州の西北百キロメートルほどに位置する。蘇軾の弟蘇徹が陳州学官（教授職）の任にあったのを、赴任の途次、訪ねて同道して欧陽脩に謁したのであった。

●「兒童」蘇徹の子どもたち。「問我何年歸」はこの子どもの台詞である。

●「歲」注の参考にした岩文庫小川環樹・山本和義選訳「蘇東坡詩選」の語注によれば、『歳は太歳。太歳は十二年で天球を西から東へ一巡する歳星（木星）を十二支に位置づけ、その対角にある十二支で呼ぶもの。この詩が作られたのは辛亥の歳で、太歳は亥にある。それが東すなわち寅に位置するのは、杭州の任期が満了する三年後の甲寅の歳（熙寧七年）である』とある。

「迭」代わる代わる。

●「悟」「語」とするテクスト有り。

●「飛蓬」同じく「蘇東坡詩選」の語注によれば、『蓬はアカザ科の植物で、砂漠地帯に生え、根を吹きちぎられて、風のままに転びゆく』（これは本邦の「蓬」、キク科キク亜科ヨモギ *Artemisia indica* とは全く異なるので注意。この説明から想起出来るように、西部劇

でしばしば見るところの、あのころころと転がる草、ナデシコ目ヒユ科オカヒジキ属 Salsola 、英名「Tumbleweed」の類であると思われる。アカザ科とあり、実際に多くの植物分類学者はアカザ科を独立の科として扱っているものの、二〇〇三年版の被子植物新分類体系ＡＰＧⅡ（「Angiosperm Phylogeny Group」（被子植物系統グループ）第二版の略称）では認められておらず、ヒユ科 Amaranthaceae の中に含まれている。ここは主にウィキの「アカザ科」の記載に拠った）『古来、飛蓬・転蓬に比喩して人生の不安定さが嘆かれた』とある。なお、以上の私のタンブルウィード（ロシアアザミとも言う）の同定に疑義のある方は、例えば個人ブログ「書迷博客」の「李白／送友人（三）」の比定などを参照されたい。

●「六一翁」欧陽脩の号。「蘇東坡詩選」の語注によれば、彼は『蔵する書物一万巻・金石遺文一千巻・琴一張・碁一局・酒一壺に自らの一老翁を加えて六一居士と号した』とある。

「衆寮」禅寺の雲水らの宿寮のこと。

「板鐘」「ばんしよう」と読んでいよう。鐘板（しょうばん）。雲板。主に禅寺で食事の合図に打ち鳴らす板。少なくとも私の目にした多くは木製で、口に珠を銜えた長身の魚形（主に鯉という）をしていて、食堂（じきどう）若しくはその近くの軒下に吊られてあった。

「心早卒にして」「こころさうそつにして」と読む。気がせくままに急いで。

「とりあへぬさまして」差し当たっての即応吟として。謝意の他に、禅の公案の答えを諧謔化したもののようにも私には読める。特に、直前の「若き僧共、紙・硯をかゝへて階（きざはし）のもとまて追ひ來たる」というドタバタとした滑稽で俗な〈動〉に対して、「庭掃いて出でばや寺に散る柳」のあくまで澄んだ〈静〉が、そのような対位法的コール・アンド・レスポンスを醸成しているように私は感ずるのである。」

＊

本日二〇一四年九月二十二日（当年の陰暦では八月二十九日）

元禄二年八月　九日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十二日

【その二】金沢からついて来た立花北枝が芭蕉と別れたのは何時であるかは判然としないが（曾良と別行動となったために、山中以降は事実を推測するための一次資料が失われている）、芭蕉にはここで出来るだけ辛く孤独な旅をして貰おうと思う（但し、推定では福井の等栽宅までの、その手前の越前丸岡（現在の福井県吉田郡永平寺町。以下に見るように芭蕉は総ての箇所で「松岡」「丸岡」と徹底的に誤っている）から凡そ十キロメートルばかりの短い間のみとは思われるのであるが、これについては、山本胥氏が「芭蕉　奥の細道事典」（講談社α文庫）で述べておられるように、『芭蕉の生涯で、ひとり旅の初体験といえる。旅好きの芭蕉だが、ひとり旅は苦手のようだった。苦手というより、できない人だった、といったほうがよい』（四四九頁）という見解に私は激しく同意するものである。芭蕉が同行者なしに覚悟の旅に出たのは――他には実に――死出の旅路きりであったのだ……）。

物書て扇引さく余波哉

もの書て扇子引ささく名殘哉

松岡にて翁に別侍し時、あふぎに書て給る

もの書て扇子へぎ分る別哉

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は「泊船集」（風国編・元禄十一年）の、第三句は「卯辰集」（楚常撰・北枝補・元禄四年刊）。の句形で、この第三句が初案。「卯

辰集」巻三には、

松岡にて翁に別侍りし時、あふぎに書きて給はる。

もの書て扇子へぎ分る別哉　　翁

笑うて出づる朝きりの中　北枝

となくなく申し侍る。

と北枝が脇を付けている。

「へぎ分くる」というのは、扇の両面を骨で合わせてあるのを、逆(へ)ぎ分ける、逆いで二つとするの謂いである。諸家はこの改案をそれぞれにあからさまとか、意に寓するとか、なんだかんだと言っているが、私はこの「へぐ」も「わくる」も遺体を剖検しているような、甚だ不快な響きを感じるので、純粋に音韻的に初案を支持しない。本句の「引き裂く」を尋常でないとして、この折りの北枝との関係を詮索する方（山本胥氏など）もいるが、寧ろ、芭蕉は曾良との痛恨の訣別の後、自身を殊更に孤客とせんとした意識を強く感じるものである。少なくとも、私は「扇引きさく」に、立枝との人間関係の不具合を読む気には全くならないとだけ言っておこう。実際には扇を裂いて分け合ったのではなく、芭蕉が一筆ものした扇を与えたものであろうが、そこには寧ろ、これも一種の公案の応答の一つの所作と私には読める。安東氏も「古典を読む　おくのほそ道」で、『無（白扇）を捨てることはできぬが、さりとて書けば捨扇（無）にならぬ、という絶対的矛盾に禅機をもとめた句である。つまり、「物書て扇引さく」とは別れずに済す工夫である』と禅問答風に分かったような分からぬような（公案を出されて「作麼生(そもさん)」と促されたその答えとはそもそもがそのようなものである）評釈を述べておられて小気味よい。

「奥の細道」の汐越の松から北枝との別れの段。

＊

越前の境吉崎の入江を舟に

棹指て汐越の松を尋

西行

終宵嵐に波をはこはせて
月をたれたる汐越の松

この一首にて數景盡たり若一辨を加ルものは無用の指を立るかことし

丸岡天龍寺の長老古き因あれは
尋ぬ又金澤の北枝と云ものかりそ
（したひ）
めに見送りて此處まて來ル所々
の風景過さすおもひつゝけて
折節あはれなる作意なと聞ゆ
今既別に望みて
物書て扇引割名殘哉

＊

「吉崎」現在の福井県金津町。蓮如が開いた吉崎御坊があり、浄土真宗の聖地としても知られていた。

「汐越の松」「しほこしのまつ」と読む。吉崎の対岸の浜坂にある岬にあった松で、名は海浜に延びた枝が潮をかぶったことに由来する歌枕。現存しない。伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の「汐越の松」に苦労された探訪記と無惨な跡の画像が載る。

「終宵（よもすがらあらし）嵐に波を運ばせて月を垂れたる汐越の松」これは西行の和歌ではなく、蓮如の作であるが、芭蕉の頃には西行作という俗伝も行われていた、と新潮日本古典集成「芭蕉文集」の富山奏氏の注にある。

「丸岡」冒頭に述べた通り、松岡の誤り。

「天龍寺の長老」清涼山天龍寺は現在の福井県吉田郡永平寺町松岡春日にある曹洞宗永平寺末寺。藩主松平家菩提寺でもある。当時の松岡は松平昌勝五万石の城下町であった。「長老」は禅寺の住持を指す語。当時は大夢（たいむ）和尚で、彼はかつて江戸品川にある曹洞宗寺院、瑞雲山天龍寺の住職であったことから芭蕉とは旧知の仲であった。

「北枝」立花北枝（生年不詳～享保三（一七一八）年）。ここで詳細を注しておく。通称は研屋源四郎。金沢に住み、刀の研師を業とする傍ら、俳諧に親しんだ。元禄二年のこの時、蕉門に入り、後、加賀蕉門の中心人物として活躍したが、無欲な性格で俳壇的な野心はなかった。自分の家が丸焼けになった際には、

焼にけりされども花はちりすまし

と詠んで芭蕉の称賛を得たエピソードは有名で、世俗を離れて風雅に遊ぼうとする姿勢が窺える（以上は「朝日日本歴史人物事典」に拠った）。」

＊

本日二〇一四年九月二十三日（当年の陰暦では八月三十日）

元禄二年八月　十日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十三日

この前の松岡（「奥の細道」は「丸岡」と誤記）辺りでの北枝との別れを私は取り敢えず個人的な欲求から八月九日としたが、この後の福井の等栽宅到着は、諸資料から八月十二日辺りと推定されている（敦賀の月見の予定から）。「奥の細道」ではその間に芭蕉は永平寺を訪れていることになっている。以下、「奥の細道」の永平寺の段。まず、通行の校訂本文を示す。

五十町山に入りて、永平寺を禮（らい）す。道元禪師の御寺（みでら）也。邦畿（はうき）千里を避けて、かかる山陰に跡を殘したまふも、貴（たふと）きゆゑ有りとかや。

［やぶちゃん注：以下、自筆本を示す。

＊

平

五十丁山に入て永寺を礼す道元

禅師の御寺也邦機千里を避て

かゝる山陰に跡を殘し玉ふも貴き

故有とかや

＊

■やぶちゃんの呟き

「五十丁（町）」約五・五キロメートル。これは現在のえちぜん鉄道勝山・永平寺線の永平寺口附近から寺までの距離に相当する。これは広大な永平寺の境内地からの距離という。

後注「奥細道菅菰抄」（蓑笠庵梨一著・安永七（二七七八）年刊）参照のこと。

「邦機（畿）千里」本邦の王城の地である京を中心とした四方千里。「詩経」にある、『邦畿千里、惟民所止』（邦畿千里、惟れ民の止まる所）の俗塵の域の謂いである。

「奥細道菅菰抄」に、

永平寺ハ、越前國、志比村ニ立。（福井ヨリ三里。丸岡ヨリ四里）吉祥山ト號ス。後深草院建長五年ノ草創。北条時頼ノ修願ニテ、曹洞禪宗ノ本山ナリ。コヽニ五十町山ニ入トハ、此寺領ノ入口ヨリ、山中ノ寺マデノ行程ヲ云。（山へ登ル事ニハアラズ）道元禪師、姓ハ源氏、京師ノ人、宋ニ入テ天童如淨禪師ニ謁シ、曹洞宗ヲ傳フト云。邦機千里とは、機ハ畿ノ字ノ誤ニテ、邦畿ハ帝都ノ稱。詩ニ、邦畿千里、維民所ㇾ止、ト云是ナリ。貴きゆへありとは、相傳ふ、はじめ寺地を京師にて給らんと有しを、禪師の云、寺堂を繁華の地に營ては、末世に至り、僧徒或は塵俗に堕するものあらん歟、と固く辭して、終に越前に建立すと云。此事なり。

とある。

さて。

永平寺の位置及びそこを芭蕉が一人で往復したというのは、事実としては、独り旅の苦手な芭蕉にして、寧ろ考え難いとも言える気はする。

立枝との別れは実はこの永平寺訪問の後であったと考えた方が自然な気もするし（私が立枝なら必ずそれを望む）、独り旅を芭蕉が例によって虚構したというのも如何にもありそうなことではある。因みに、松岡を起点とすると、永平寺までは約十四・五キロメートル、そこから直に福井に向かうとやはり同程度の距離があって、足すと三十キロメートルほどになる。

しかも「奥の細道」にはご覧の通り、短い詞を述べるだけで句はなく、諸資料にも現存する中に永平寺で作句したと思われる句は不思議にも存在しない。

実は、本当に芭蕉は永平寺に行ったのだろうかと疑いたくなる気持ちを、私はどうして

も抑えられないでいる。

いや……そう考えれば考えるほど、この独り行く芭蕉の後ろ影が……否応なく謎めいて見えてくるからでもある。……」

＊

本日二〇一四年九月二十五日（当年の陰暦では九月二日）

元禄二年八月　十二日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十五日

諸資料からこの八月十二日辺りに芭蕉は福井の旧知の俳人等栽宅に到着したものと推定出来る（敦賀の月見の予定から逆算）。まず、「奥の細道」の福井の段の通行の校訂本文を示す（但し、思いのあって、平仮名書きを増やし、直接話法及び心内語部分を改行してある）。

福井は三里ばかりなれば、夕飯したためて出づるに、たそかれの道たどたどし。ここに等栽といふ古き隠士あり。いづれの年にか、江戸に來りて、予を訪ぬ。はるか十とせあまりなり。いかに老いさらぼひてあるにや、はた死にけるにやと人に尋ねはべれば、いまだ存命して、

「そこそこ。」

と教ゆ。市中ひそかに引き入りて、あやしの小家に、夕顔・へちまの延えかかりて、鶏頭・帚木に戸ぼそを隠す。さては、このうちにこそ、と門をたたけば、侘しげなる女の出でて、

「いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此のあたり何某と云ものの方に行ぬ。もし用あらば訪ねたまへ。」

といふ。かれが妻なるべしとしらる。

『昔物語りにこそ、かゝる風情ははべれ。』

と、やがて尋ねあひて、その家に二夜泊りて、名月は敦賀の湊に、と旅立つ。等栽もともに送らんと、裾をかしうからげて、路の枝折と浮かれ立つ。

［やぶちゃん注：以下、自筆本を示す。

＊

福井は三里計なれは夕飯した

ためて出るにたそかれの道たと
たとし爰に等栽と云古き
隠士有いつれの年にや江戸に

尋

來りて予を遙十とせ餘り也
いかに老さらほひて有にや將死け
るにやと人に尋侍れはいまた
存命してそこそことをしゆ
市中ひそかに引入てあやしの
小家に夕顔へちまのはかゝり淋
頭はゝ木ゝに戸ほそをかくす扨
は此うちにこそと門を扣は侘し
けなる女の出ていつくよりわたり
玉ふ道心の御坊にやあるしは
このあたり何某と云ものゝ方に行
ぬもし用あらは尋玉へと云かれか
妻なるへしとしらるむかし物
かたりにこそかゝる風情は侍れと
やかて尋あひて其家に二夜
とまりて名月はつるかの湊に
と旅立等栽も共に送らんと裾

と

おかしうからけて道の枝折とうかれ
立

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○夕顔へちまのはかゝり　→　●夕顔へちまの延(は)えかかりて

［やぶちゃん注：元は「夕顔・糸瓜の葉掛かり」（延び掛かって）であった可能性が窺えるか。］

■やぶちゃんの呟き

「等栽」「とうさい」と読む。洞哉とも書く。神戸氏。生没年未詳。福井俳壇の古老で、芭蕉と同じく北村季吟の流れを汲む。安東次男氏によれば、芭蕉が初めて江戸に下ったのは寛文一二（一六七二）年二十九歳頃のことであるが、元禄二年から「十とせ餘り」とすれば、延宝七（一六七九）年で芭蕉三十六頃より前ということになり、その頃は『まだ深川に庵を結んでいない』頃と記しておられる。

「道の枝折」案内役。古来、旅する者は後から来る人が道を違えぬよう、枝を折って道標べとしたことに由来する。この時、彼は芭蕉を敦賀まで見送っている。芭蕉の独り旅が実際には如何に短いものであったかが知れる。

さても本段は高校生でも即座に「源氏物語」の「夕顔」の段のインスパイアであるとは気づく。しかし、それだけの曲のない流用によるパロディ化だけであるなら、これは当の高校生でさえも鼻白むに違いない。その辺りの深奥を美事に剔抉したのは、やはりかの安東氏の「古典を読む　おくのほそ道」（岩波同時代ライブラリー）であった。補助部分も含めるとかなり長いが、私はこれ以上に腑に落ちる解釈はないと思うによって、そのままあえて引かせて戴く。

《引用開始》

○むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れ――意味は、いかにも物語にありそうな風情ということで、特定の物語を指すわけではないが、この云いまわしは『源氏物語』の「帚木」と「夕顔」に出てくる。

「…いと物思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきを眺めて、虫の音にきほへるけしき、昔

物語めきておぼえはべりし。」（帚木）「…ただこの枕がみに、夢に見えつる容（かたち）したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそかかることは聞けと、いと珍らかにむくつけけれど…」（夕顔）前の方は、久しく通わぬ女からの歌（「山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよなでしこの露」）にほだされた頭中将が、常夏の女を又尋ねた話を源氏に語る場面（雨夜の品さだめ）で、女はのちの夕顔、「なでしこ」は娘の玉鬘である。後の方は、八月十五夜の明方ちかく源氏に連出された夕顔が、その晩、六条御息所の生霊に取付かれて頓死するくだりである。

福井訪隠の興は、それとさとらせる詞の借用ぶりにもよく現れているようだ。「帚木」をさすらいの初心として旅に出た男が（20ページ参照）、名月にちかく、ハハキギも既に老いた宿で（帚木の季は晩夏である）、ユウガオの実と出合えば、常懐（とこ）しさに駆られぬ方がおかしい。夕顔の恋は、芭蕉の俳譜に特別の因縁があったから、猶のことそう思う。

「遥十とせ余り」の旧知を尋ねるという思付は、頭中将の夜ばなしにかさねて、玉鬘をいとおしむ源氏の懐旧が、面影になっているだろう。「なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根（夕顔）を人や尋ねん」（常夏）美しく成長した娘を実父内大臣（もとの頭中将）に、ふと、逢わせてみたくなって源氏が詠む歌だが、これは夕顔の死から十九年後だ。

訪隠の心はどうやらこの歌らしい。そういう男は、案の定、等栽を敦賀の月見に連出している。通説は、「たそかれ」「あやしの小家」「夕貌」などの片言をとらえて、福井入の描写を「夕顔」の巻の書出に較べたがっているが、俳文の面白さはそんな幼稚な裁入にあるわけではない。「帚木」に見定めた漂泊の興がまずなければ、そして「常夏」という後日譚がなければ、福井のくだりは児戯に類する作文としか見えぬはずだ。

《引用終了》

この途中の『「帚木」をさすらいの初心として旅に出た男が（20ページ参照）』と『夕顔の恋は、芭蕉の俳譜に特別の因縁があった』についても当然、等閑には出来ぬ。まず、前者であるが、これは「奥の細道」の旅立ちの段のかの「月は有明にて……」の名文句の注を指す。

《引用開始》

〇月は在明にて光をさまれる物から――「月は有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えて、なかなかをかしき曙なり。」（源氏物語、帚木）有明の描写など、古歌・古文には掃いて捨てるほどある。その中でこの『源氏』の描写がとくにすぐれているわけではない。光が穏やかになったから反って月の形がはっきり見える、というのはいかにも夏の月らしい観察で、うまいといえばそこがうまいが、それとて特に云うべきほどのことではあるまい。芭蕉は、一字の変更も加えずに裁入れている。芸のないことをしたものだと思いたくなるが、恋の遍歴も漂泊だと考えれば納得がゆく。「帚木の巻」は、光源氏のさすらいの第一歩である。援用箇所は空蝉との後朝の場面で、物語は先の文に続けて、「何心なき空の気色も、ただ見る人から、艶にも凄くも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸いたく、言づて入れむよすがだになきを、かへりみがちにて出で給ひぬ」とある。

芭蕉はこれを、例の須磨流謫につないで読んでいるらしい。「道すがら、おもかげにつとそひて、胸も塞がりながら、御舟に乗り給ひぬ。日長きころなれば、追風さへそひて、まだ申の時ばかりにかの浦に着き給ひぬ。（中略）うち返り見給へるに、来し方の山は霞み、はるかにて、まことに三千里の外の心ちするに、櫂のしづくもたへがたし。」（須磨）時分は弥生も末のことで、これも『ほそ道』の旅立と符合しているが、「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく」は瞭かに踏替だと気がつく。戻って、「上野谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし」も、「いつか又春のみやこの花を見む時うしなへる山がつにして」（須磨、春宮への源氏の消息歌）を下に敷いているらしい。前年、須磨明石に吟興を尽したばかりであってみれば、それも当然と思われるが、紀行は旅じまいの種の浜のくだりでも、「寂しさや須磨にかちたる浜の秋」の一句を書留めている。『ほそ道』の俳詣師は、自分を光源氏になぞらえて旅立妄った（雛流しにされるなら光源氏でゆこうという思付はうまい）、そう考えてよさそうだ。

さすらいの手はじめは「帚木の巻」から、という趣向は俳諧がある。この道行のちょっとした興、浮かれ心に気がつかぬと、「月は在明にて光をさまれるものから」と、わざわざ

無芸に、言葉を丸のまま裁入れた狙も見落すことになる。

《引用終了》

また、後者の『因縁』については補注があるので、これも引用させて戴く（太字は底本では傍点「ヽ」）。

《引用開始》

深川墓庵には素堂が命名した名物瓢（「四山」ノ瓢）があって、訪庵者たちをよろこばせたという話は有名だが、ヒサゴはユウガオの実である。夕顔の恋は挨拶の恰好のたねになった。貞享五年、更科の月見のあと、そのまま越人を江戸に連れ帰った芭蕉が、後の名月（九月十三夜）に寄せて興行した両吟の歌仙（発句は「雁がねもしづかに聞（きけ）ばからびずや越人」、脇は「酒しゐ［やぶちゃん注：右に安東氏の『（ひ）』という傍注がある。］ならふこの此の月　芭蕉」）はまさにそれだったようだ。酒（瓢）好の越人を、今度は娘（玉鬘）に見立て替えて、前の名月（夕顔の恋）を偲ぼう、というしゃれた思付である（拙著『連句入門』の「後の月の恋」「夕顔の恋余聞」を参照されたい）。加えてこの歌仙は、出来映と云い趣向と云い、其後の蕉風俳諧の一手本になったと見えて、元禄六年初冬、越後屋の手代たちが芭魚庵に押掛けて請うた例の「夷講」の巻（『炭俵』所収）には、初折（しょおり）の月の扱をめぐつて、明らかに右の両吟を意識したと思われる転合（てんごう）な恋の仕掛が見られる（「解釈ということ」、289ページ参照）。

戻って、『猿蓑』の「夏の月」の巻にも「夕顔」の巻からの裁入がある（『連句入門』「連句の興　の起るとき、其三」）。

《引用終了》

ここに示された参照注記の「後の月の恋」「夕顔の恋余聞」「解釈ということ」の孰れもがこれまた優れてディグされたものなので是非、それぞれお読みになられることを強くお薦めする（と記しておけば掟破りの長文引用も許されよう）。

いや、凄い！　退屈極まりない典拠挙げの羅列でよしとするような凡百の国文学者の評釈とも言えぬ評釈と比べ、何というキれにキれた評言、否、俳言であろう！

……上野谷中の桜の梢……かさねという八重撫子……市振の萩……山中の菊……花尽しの蔭には恋があった。……

……何よりここに、夕顔（等栽）を訪う光（芭蕉）を心秘かに慕うている悶々たる六条御息所（曾良）もいるではないか？！……

……禁断の朧月夜（桃妖）との契りによって引き起こされた、失脚の寂しき羈旅は……

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

……まさに……須磨への流謫であったのである……」

＊

本日二〇一四年九月二十六日（当年の陰暦では九月三日）

元禄二年八月　十三日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十六日

【その一】諸資料から、この八月十三日辺りに、芭蕉は福井の旧知の俳人等栽宅から彼を伴って敦賀気比（けひ）の明神に十五夜の月見をせんものと旅立ったと考えられる（従って懲憩の作句であるから前日の十二日の吟かも知れぬが、タイミングとしてはここに配したい）。福井から敦賀までは二日ほどの旅程に相当する。

福井洞栽子をさそふ

名月の見所（みどころ）問（とは）ん旅寝せむ

越前福井等載に對して

名月の名どころ問ん月見せん

名月の名所問はむ旅寝せむ

［やぶちゃん注：第一句目は「荊口句帳」（荊口筆／路通序・元禄二年成立・この書名は仮称であって荊口の残した懐紙の綴りであり、その「芭蕉翁月一夜十五句」の冒頭に載る句。個人サイト「温泉ドライブのページ」の『「芭蕉翁月一夜十五句」（荊口句帖）』によれば、これは『大垣藩士宮崎荊口と、その子此筋・千川・文鳥を中心とする発句・連句の書留で』、昭和三四（一九五九）年になって、『大垣市で発見されて大垣市立図書館に寄贈された』という非常に新しく見出された資料である）の句形。「芭蕉翁月一夜十五句」は以下の通り（「十五句」としながら、実際には十四句しか載らないが、これは原資料が断裂して見えないためであることが以下の引用の後書で分かる。以下に上記サイトに載る「芭蕉翁月一夜十五

句」を正字化して示した。無論、以降、順次各句を評釈する）。

芭蕉翁月一夜十五句

福井洞哉子をさそふ　　は（せを）

名月の見所問ん旅寝せむ

阿曾武津の橋

あさむづを月見の旅の明離

玉江

月見せよ玉江の蘆をからぬ先

ひなが嶽

あすの月雨占なハんひなが嶽

木の目峠いもの神也と札有

月に名をつゝミ兼てやいもの神

燧が城

義仲の寝覺の山か月かなし

越の中山

中山や越路も月ハまた命

氣比の海

國々の八景更に氣比の月

同明神

月清し遊行のもてる砂の上

種の濱

衣着て小貝拾ハんいろの月

金が崎雨

月いつく鐘ハ沈める海の底

はま

月のミか雨に相撲もなかりけり

ミなと

ふるき名の角鹿や戀し秋の月

うミ

名月や北國日和定なき

いま一句きれて見えず

「芭蕉ＤＢ」の「敦賀」の解説には、これらの句はこの元禄二年八月十四日の夜一夜にして詠んだと伝えられているとあるが、これは単なる伝承の類いであり、明らかにそれ以前、十三日のロケーションのもの（但し、これらを纏めて一気呵成に詠じたのは確かに十四日

であったかも知れない。それだけにこれらの句は殆んどが戴けない句となっているとも言える)、最後の方や「名月や」の句は明らかな十五日の句で、私は先に述べた行路日程から見ても、やはり本句を十三日の句と採る。

第二句目は「奥の細道菅菰抄附録」の句形。前書の「等載」はママ。

第三句は「芭蕉翁句解参考」(何丸(なにまる)・文政一〇(一八二七)年)の句形。中七と下五の意志を重ねたぎくしゃくした口振りはまことに拙い。

芭蕉が「奥の細道」の旅の最後の見所を敦賀の気比の名月とようとしたことがこれで分かる(その予定は山中で芭蕉によって決定されていたものと思われ、しかもそこで芭蕉は曾良とではなく、この等栽と、と曾良に提案した可能性を安東次男氏は述べる。これは実に面白い。まさにそれが桃妖の一件で悶々としていた曾良が最後にキレた瞬間であったという可能性は、私はすこぶる高いものと感じているのである)。しかし、後に「奥の細道」の本文に見るように、その期待は裏切られ、雨が降って月は見得なかった。

響もきも匂いもない。芭蕉の旅程とその意図は知れるものの、私には駄句としか見えない。残しおかぬ方が芭蕉のためにはよかった部類の句と私は断ずるものである。」

＊

本日二〇一四年九月二十六日（当年の陰暦では九月三日）

元禄二年八月　十三日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十六日

【その二】句の並びと句意からは（後注及び次の「あさむつや」の考証を参照）この日の未明に福井を発って、朝まだき、福井と麻生津の間にある「玉江の蘆」で知られた玉江（現在の福井県花堂（はなんどう）町の虚空蔵川の架かる橋で蘆を合わせて読むのを常とする歌枕）を過ぎたと思われる。地名は「奥の細道」に載るが句はない。

玉江

月見せよ玉江の芦（あし）を刈（から）ぬ先

［やぶちゃん注：「ひるねの種（たね）」（荷兮編・元禄七年自序）に載る句。

――月見をせよ！――古歌で知られた玉江の蘆は、いままさに丁度、穂を出したところ……さあ、この穂が刈られてしまう前に……その風雅な穂波の彼方に浮かぶ月影を！――

またしても強気の命令形である。敦賀の月見と洒落たところの自身の決めたその思いつきを下敷きにして、何か、妙に力んで詠んでいる感じがする。私はどうも好感が持てない。

「奥の細道」の敦賀到着までの段を示す（ここは自筆本では前の福井の旅立ちと連続していて、最初の行の頭には「立」が入っている）。

＊

漸白根か嶽かくれて比那か
嵩あらはるあさむつの橋をわ
たりて玉江の芦は穂に出けり
鶯の關を過て湯尾峠を越れ
は火打か城かへる山に初鴈を聞

て十四日の夕暮つるかの津に

宿をもとむ

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○穂に出けり　→　●穂に出でにけり

＊

「漸」やうやう。

「白根か嶽」加賀白山。

「比那か嵩」「ひながたけ」と読む。日野山。現在の福井県越前市と南条郡南越前町に跨る標高七九四・八メートルの山。養老二（七一八）年、泰澄によって開山された山岳信仰のメッカで、白山・越知山福井県福井市と丹生郡越前町の境にある）・文殊山（福井県福井市と鯖江市の境にある）・蔵王山（福井県永平寺町にある）と併せて越前五山の一つに数えられてきた霊山（ウィキの「日野山」及び同各リンク先に拠る）。『福井平野から眺める山容が秀麗な景観を見せることから、現在では俗に越前富士と呼ばれている』とある。

「あさむづの橋」現在の福井市浅水町を流れる浅水川に架した橋で、福井城下から南へ凡そ八キロメートルほどの位置にある、「枕草子」などにも出る歌枕。但し、位置関係からは次に出る玉江を過ぎて、浅水の橋に至る、と山本健吉氏の「芭蕉全句」にある。「橋」「渡る」「江」「蘆」という縁語順列というか、意識の景観配列の自然さを狙ったものか。

「鶯の關」新潮日本古典集成の富山奏氏の注には、現在の『福井県今庄町と南条町との間。この当時は歌枕の関跡を留めるのみ』、伊藤氏の「芭蕉ＤＢ」の「敦賀」では、現在の『福井県南条郡南越前町湯尾にあった歌枕』、安東次男氏は『南条郡鯖波の旧関、当時は既になかった』とある。また、こちらの「福井県史」では『今宿・脇本続いて鯖波の宿を過ぎると関ケ鼻に着く。「帰鴈記」は関の原の名所の歌として、「うぐひすの啼つる声にさそはれてゆきもやられる関のはらかな」をとりあげ、鶯の関ともいい関ケ鼻をいい誤ったものとしている』とあって、これだと、南条郡南条町関ケ鼻が比定地となる。

「湯尾峠」福井県南条郡南越前町湯尾と同町今庄の間、東の三ケ所山と西の八ヶ所山の鞍部にある標高約二百メートルの峠。参照した個人サイト「街道の風景」の「湯尾峠」によれば、『峠名は峠下にある湯尾に由来しますが、昔は柚尾の峠とも書かれています。昔から北陸街道がこの峠を通り交通、軍事上の要地でした』。『江戸期には峠の』附近に四軒の『茶屋があって、にぎやかに商売を営み、また御利益の多い疱瘡神の孫嫡子御守札を配布していました』とある（後の句注で詳述する）。

「火打か城」燧（ひうち）が城。湯尾峠東南方（現在の南越前町今庄）にある芭蕉の好きな木曽義仲軍の砦跡。

「かへる山」帰山。南越前町湯尾にある歌枕で、続くように併せて雁を詠むのを常とした。歌枕の羅列で、若い頃、父に車でそばを通ったきりの和歌嫌いの私には実景も浮かばず、ひたすら月見、月見と声高にして、「奥の細道」ではここ暫く、私には如何にもダルに感ずる箇所である。」

＊

本日二〇一四年九月二十六日（当年の陰暦では九月三日）

元禄二年八月　十三日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十六日

【その三】前の「月見せよ」の冒頭で述べた通り、句柄からは、この日の未明に福井を発って、朝まだき、玉江を過ぎて歌枕浅水橋（現在の福井市浅水町）を明け六つ（午前六時頃）に通った（と仮想したものかも知れぬところの）吟詠。「奥の細道」での順序の逆転は前の「月見せよ」の注を参照されたい。

淺水のはしを渡る時、俗あさうづといふ。

清少納言の橋はと有一条あさむつとかける所也

あさむつや月見の旅の明ばなれ

阿曾武津の橋

あさむつを月見の旅の明け離れ

［やぶちゃん注：第一句目は「其袋」の、第二句目は先に示した「荊口句帳」の句形。

「枕草子」六十一段の橋尽くしに、

橋はあさむつの橋。長柄の橋。天彦の橋。濱名の橋。ひとつ橋。うたた寝の橋。佐野の舟橋。堀江の橋。かささぎの橋。山菅の橋。をつの浮橋。一すじ渡したる棚橋、心狭けれど、名を聞くにをかしきなり。

と筆頭に掲げられてある。「心狭けれど」いかにも恣意的で私個人の偏向した感じを受けるかもしれないけれど、という謂いであろう。いやいや、芭蕉も私も「あさむつの橋」はな

かなか「をかし」と思いますよ、清さん。

芭蕉は「あさむつ」を「朝六つ」＝「明け六つ」に掛けた。掛けたからには事実はどうであったかよりも、この景は十三夜月を堪能した明け方午前六時の浅水（あそうず）橋の景である。因みに、この日の当地での月没は午前二時八分であった。」

＊

本日二〇一四年九月二十七日（当年の陰暦では九月四日）

元禄二年八月　十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十七日

【その一】宿泊地や旅程からの厳密な比定ではないものの、句意から、この十四日の句と採っておく。

ひなが嶽

あすの月雨占なはんひなが嶽

［やぶちゃん注：「荊口句帳」。

「ひなが嶽」は前に注した「比那が嵩」で霊山日野山（ひのさん）のこと（現在の福井県越前市と南条郡南越前町、武生の南東に聳える）。その霊験あらたかな山の頂きにかかる雲を以って明日名月の晴雨を占おうというのであるが、芭蕉が「雨」と詠み込んでしまったことは、これ、悪しき言挙げとなってしまった。］

＊

本日二〇一四年九月二十七日（当年の陰暦では九月四日）

元禄二年八月　十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十七日

【その二】湯尾峠（ゆのおとうげ）（福井県南条郡南越前町湯尾と同町今庄の間、東の三ケ所山と西の八ヶ所山の鞍部にある標高約二百メートルの峠）にて。

湯尾

月に名を包みかねてやいもの神

［やぶちゃん注：「ひるねの種（たね）」。「荊口句帳」には、

木の目峠　いもの神やど札有

という前書がある。この「やど札」とは、姓名などを記して門口に掲げ、その人の住居であることを知らせる門札、今の表札の意で、ここは「いもの神」＝疱瘡神が住まっていることをこの貼札で告げて、疱瘡の厄を払うための御札を指すものと思われる。

「いも」は天然痘のこと。前に注した通り、当時、この峠附近には四軒の茶屋が賑やかに商売を営み、また、峠の西端にある疱瘡神を祀ったとされる孫嫡子神社があって、これらの茶屋ではその御守札も配布していた。y_ogawa 氏のサイト「北陸の峠道」の「湯尾峠」によれば、『峠に老夫婦住みて子なきを嘆く、通りかかった役小角（えんのおづぬ）が哀れんで如意輪観音の七星の神呪を授けた。暫くして娘現れ子となり、光明童子の化身現れて娘と結ばれて子を授け云々とあ』り、後、『孫嫡子長じて奈良東大寺等に学び、この地に庵をむすび観音を祭り人々の災厄を除き開導せし』めたばかりか、『醍醐天皇疱瘡を患い当社に祈願したらたちまちに平癒したまう、それより疱瘡の神として世に伝わった』と記す。疱瘡神絡みの「い

も峠」は諸国にあったと山本健吉氏の注にある。ここは「いも」に八月十五夜の月「芋名月」（里芋を供えることに由来）を掛けた如何にも軽い洒落句である。」

＊

本日二〇一四年九月二十七日（当年の陰暦では九月四日）

元禄二年八月　十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十七日

【その三】芭蕉偏愛の木曽義仲が平家方を打ち破った砦の跡、燧（ひうち）が城を遠望しての吟詠。湯尾峠東南方（現在の南越前町今庄）にあり、敦賀へ進行する芭蕉の右手に見えた。

燧山（ひうちやま）

義仲の寝覚（ねざめ）の山か月悲し

［やぶちゃん注：「ひるねの種」。

峠越えが夜であったとは思われないから、この句は昼の景から時間を巻戻って陣中の義仲を詠んだ時代詠である。「平家物語」巻七「燧合戦」に詳しい。但し、この義仲平家追伐の緒戦に於けるここの城築を命じたのは義仲であるが、自身はまだその時には信濃にいたので注意されたい。孰れにせよ、破竹の勢いで南下した義仲がこの営中に辿りついた頃には、まさに寝覚めの名月を賞する余裕もあったに違いなく、しかしその英雄の兵（つわもの）も、みるみる夢の跡として露の如くに消えいったことを思えば、まさに芭蕉の「月悲し」はしみじみと生きてくるとは言える。「奥の細道」で何故か、語らなかった自身の愛する悲劇の英雄義仲の一句である。思い入れは伝わるものの、「寝覚」と「月悲し」の衝突が上手くいっておらず、句力が分散してしまい、義仲へのオマージュたり得ていないと私は思う。］

＊

本日二〇一四年九月二十七日（当年の陰暦では九月四日）

元禄二年八月　十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十七日

【その四】西行の和歌と同名の越の中山を遠望した一句。木の目峠を過ぎた「奥の細道」本文に出る帰山（かえるやま）の西方に望見されたはずである。

越（こし）の中山

中山や越路（こしぢ）も月はまた命

中山の越路も月は又いのち

［やぶちゃん注：第一句目は「荊口句帳の、第二句目は「芭蕉翁句解参考」の句形。

西行の知られた一首、

年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

を本歌とした一句。但し、西行の詠んだ「小夜の中山」は遠江国で東海道の金谷宿と日坂宿の間、現在の静岡県掛川市佐夜鹿（さよしか）の峠。若き日の西行が奥州行脚の折りに越えたそこを、西行は六十九の高齢でまたしても越えた折りの感慨を詠んだもので、「命」は「運命」である。芭蕉はそれをインスパイアして、私もまた、この越の中山を再び越えることがあろうか――と詠んだものだが、これに先立つ十三年前の延宝四（一六七六）年夏、伊賀上野に帰郷した際に実際の小夜の中山で芭蕉が詠んだ名吟（これはやはり芭蕉が二度目に小夜の中山を越えたという感慨に裏打ちされたもの）、

命なりわづかの笠の下涼み

に遠く及ばぬ。遙かに自身の齢（よわい）からネガティブな響きを隠せない本句は、却って妙に作り物臭く感じられる。」

＊

本日二〇一四年九月二十七日（当年の陰暦では九月四日）

元禄二年八月　十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十七日

【その五】この日、芭蕉は敦賀に到着、待宵の月を気比神宮に見た。

氣比（けひ）の海

國々の八景更に氣比の月

國々や八景さらに氣比の月

［やぶちゃん注：第一句目は「荊口句帳」の、第二句目は「芭蕉翁句解参考」の句形。

――既にこの頃には諸国に八景の名数が作られてあったが、ここ越前の国でも私はそうした私の中の名勝歌枕を八景と成して数えつつ、この敦賀まで辿りついた。その「気比秋月」をここに八景の一として、待宵の名月を眺めている――という謂いであろう。駄句である。

しかも待宵の月を名月として八景に数えてしまえば、翌くる十五夜の名月は臍を曲げて出ぬに決まっている。事実を文飾のために枉げて何ら恥じない芭蕉にして、そうした当たり前の言霊の様態を信じなかったというのは如何にも奇異だ。特にこの一連の如何にもな月の駄句の羅列はどうか？　月読命（つくよみのみこと）も鼻白んでしまうと私なら思う。

以下、「奥の細道」敦賀の段。本句はないが、次の「月清し」が出る（次の当句の評釈で再掲する）。

＊

其夜月殊晴たりあすの夜もかく

あるへきにやといへは越路のならひ

明夜の陰晴はかり難しとあるしに

酒すゝめられてけいの明神に夜參ス

仲哀天皇の御廟也社頭神さひて
松の木間に月のもり入たるおまへの
白砂霜を敷るかことし徃昔
遊行二世の上人大願發起の事
ありてみつから葦を刈土石を荷
泥渟をかはかせて參詣徃來の煩
なし古例今にたえす神前に
眞砂を荷ひ玉ふこれを遊行砂持
と申侍ると亭主のかたりける

月清し遊行のもてる砂の上

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○明夜の陰晴はかり難し　→　●猶明夜の陰晴はかりがたし

○葦　→　●草

○遊行砂持　→　●遊行の砂持

■やぶちゃんの呟き

「其夜」八月十四日。待宵。

「けいの明神」現在の福井県敦賀市曙町にある北陸道総鎮守とされた氣比神宮。参照したウィキの「氣比神宮」によれば、記紀では早い時期に神宮についての記事が見えるが、特に第十四代仲哀天皇・神功皇后・第十五代応神天皇との関連が深く、『古代史において重要な役割を担う。また、中世には越前国の一宮に位置づけられており、福井県から遠くは新潟県まで及ぶ諸所に多くの社領を有していた』とある。

「夜參」「やさん」と読む。

「神さひて」「かんさびて」と読む。古びて如何にも神々しく見えて。

「徃昔」「そのかみ」と読む。

「遊行二世の上人」時宗開祖の一遍（遊行上人）の高弟で二世遊行上人となった他阿弥陀仏上人（他阿上人）。

「大願」新潮古典集成の富山奏氏の注に、当神宮の近くの『池沼に住む龍が明神を悩ませたのを、上人が埋立てて神慮を安んじたとの古事』を指すとある。

「荷」「になひ」と訓じている。

「泥渟」「でいてい」で、泥水の溜まった泥濘（ぬかるみ）・泥沼の謂い。

「煩」「わづらひ」と訓じている。

「古例」時宗では遊行上人を継ぐ歴代の者は、この気比神宮の神前に敦賀の浜砂を荷い来、敷きつめることを仕来りとし、それを「遊行の砂持」と称した。」

＊

本日二〇一四年九月二十七日（当年の陰暦では九月四日）

元禄二年八月　十四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十七日

【その六】この夜、芭蕉は気比神宮に参って、待宵の月を賞した。

元禄二年つるがの湊（みなと）に月を見て、氣比の明神に詣（まうで）、遊行上人の古例をきく

月清し遊行（ゆぎやう）の持てる砂の上

氣比のみや

なみだしくや遊行のもてる砂の露

氣比の宮べは遊行上人の白砂を敷ける古例ありてこの比（ころ）もさる事有（あり）しといへば

月清し遊行の持てる砂の露

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」「猿蓑」の句形。これと同形を載せる「俳諧四幅対」（東恕編・享保四年刊）には以下の長い前書が附されてある。

元祿二年

八月十四日敦賀の津（つ）に宿をもとめて、氣比の宮に夜參す。むかし二世の遊行上人この道の泥土（でいど）をきよめんとて、みづから砂をはこび玉ふより、砂持（すなもち）の神事とて今の代にもつたへ侍るとかや。社頭神さびたうありさま、松の木の間の月の影もりて、信心やゝ骨に入（しむ）べし

月清し遊行の持てる砂の露

第二句目は真蹟短冊でこれが初案、第三句目は「其袋」（嵐雪編・元禄三年自序）の句形で再案らしい。改作過程の抑制はよく分かる。光景もこれまでの月光のそれに比して格段に鮮やかである。であるがしかし、まさにこの長々しい前書なしには本句の荘厳さは味わえず、従ってこの句はやはり必ずしも優れた句とは私には思われないのである。

以下、ここでは一つ、福井の等栽宅訪問からここまでの「奥の細道」自筆本を読み易く、整序補足して示しておくこととする。

＊

福井は三里計なれば夕飯したためて出るに、たそかれの道たどたどし。爰に等栽と云ふ古き隠士有り。いづれの年にや、江戸に來りて、予を尋ぬ。遙か十とせ餘り也。いかに老いさらぼひて有るにや、將死にけるにや、と人に尋ね侍れば、いまだ存命して、

「そこそこ。」

とをしゆ。市中ひそかに引き入りて、あやしの小家に、夕顔・へちまのはかゝり、繩弸・帚木に戸ぼそをかくす。扨は此うちにこそと門を扣けば、侘しげなる女の出でて、

「いづくよりわたり玉ふ道心の御坊にや。あるじは、このあたり何某と云ふものゝ方に行きぬ。もし用あらは尋ね玉へ。」

と云ふ。かれが妻なるべしとしらる。

『むかし物かたりにこそ、かゝる風情は侍れ。』

と、やがて尋ねあひて、其家に二夜とまりて、名月はつるがの湊に、と旅立つ。等栽も共に送らんと、裾おかしうからげて、道の枝折とうかれ立つ。

漸白根が嶽かくれて、比那が嵩あらはる。あさむつの橋をわたりて、玉江の芦は穂に出でけり。鶯の關を過ぎて、湯尾峠を越れば、火打が城、かへる山に初鴈を聞きて、十四日の夕暮、つるがの津に宿をもとむ。

其夜、月、殊に晴れたり。

「あすの夜もかくあるべきにや。」

といへば、

「越路のならひ、明夜の陰晴、はかり難し。」

とあるじに酒すゝめられて、けいの明神に夜參ス。仲哀天皇の御廟也。社頭、神さびて松の木間に月のもり入りたる、おまへの白砂、霜を敷けるがごとし。

「徃昔、遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから、葦を刈り、土石を荷ひ、泥渟をかはかせて、參詣徃來の煩ひなし。古例、今にたえず、神前に眞砂を荷ひ玉ふ。これを『遊行砂持』と申し侍る。」

と、亭主のかたりける。

月清し遊行のもてる砂の上

＊

■やぶちゃんの呟き

明らかに芭蕉は文章を書く面白さに没頭しており、句作への専心度は急激に低下している（採用しなかった句群の拙劣さを見よ）。

これは曾良と別れたことに端を発していると見てよい。ある意味で芭蕉自身の確信犯、半ばは意識的仕向けたとも言える曾良との留別の仕儀であったが、やはり芭蕉にはそれに対して微かな呵責と悔悟の念を持っていたのではなかったか？

そうした対人心理的焦燥感の中では、芭蕉は会心の句が作れなくなる。

作れても妙に投げ出したような、或いは「崩る」「裂く」といった棘のある語彙を選んで、それがどこか仄かに芭蕉独り門弟たちの中で浮いたような印象を残すものとなる（これは若き日の芭蕉から死に至る迄、一貫した特性であると私は考えている）。

「月清し遊行のもてる砂の上」の句が辛うじて静謐さを保っているのは、「なみだしくや」と「露」という如何にもな主情性を完全に殺ぎ落として、遂には芭蕉自身を滅却して（それが大袈裟なら他阿上人に擬えて）擬時代詠化したからに他ならない。

「奥の細道」の句は残りたった四句、文章も自筆本の行で二十三行足らずである。――」

＊

本日二〇一四年九月二十八日（当年の陰暦では九月五日）

元禄二年八月　十五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十八日

【その一】この日は仲秋の名月であったが、雨で月見は出来なかった。以下、「奥の細道」通行本より、句前の前書風の章句を前書として一部読み易く直して示す。

十五日、亭主の詞（ことば）にたがはず、雨、降る

名月や北國（ほっこく）日和定（びよりさだめ）なき

［やぶちゃん注：「荊口句帳」では、

うミ

名月や北國日和定なき

と不思議な前書がある。「荊口句帳」ではこの句の前にある二句（私は時系列に従って後に掲げる）を見ると、

はま

月のミか雨に相撲もなかりけり

ミなと

ふるき名の角鹿や戀し秋の月

とあることに気づく。これは芭蕉が敦賀の景を「浜」「湊」「海」の三景に分けて詠んだも

のであることがここから分かる。とすれば、本句を詠じている芭蕉は雨の降って、荒れて（だから浜での相撲も中止となった）波のほの白く立つ夜の敦賀の湾の全景を前にこの句を詠んでいるのだ。……そうして……そのような景として読む時、初めて、この句が「奥の細道」に採られた意味が、私には腑に落ちるのである。……これは恐らく、裏日本の海浜に住んだことがない方々には分からぬ——私の青春の記憶に基づく——感懐ではある。

……

自筆本は以下の通りで異同はない。

＊

十五日亭主の詞にたがはす雨降

名月や北國日和定なき

＊

■やぶちゃんの呟き

この日、曾良は大垣を午前八時に長島に向けて船出しているが、日記（最早、随行日記ではない）には（大垣の天候ではあるが）、

未ノ刻、雨降出ス。

とある。

……そら、やっぱり雨でしたでしょう、芭蕉さま。だから言ったんです、殊更に芋名月の月見月見と拘っちゃだめですって。……「雨」と言挙げしてはだめですよってね。……芭蕉さま、いやさ、光殿……これは、もしや……曾良、いやさ、かの六条御息所の……その生霊の、成せる業（わざ）にては……これ、御座いますまいか？……」

＊

本日二〇一四年九月二十八日（当年の陰暦では九月五日）

元禄二年八月　十五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十八日

【その二】仲秋の名月の見えぬ雨夜の今一つの句。伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の本句解説頁及びネット上の情報によれば、この晩方、廻船問屋天屋（てんや）五郎右衛門（俳号は玄流子）の案内で金ヶ崎城（後注参照）の麓にある誓法山金前寺（こんぜんじ）（真言宗。福井県敦賀市金ヶ崎町にある。宝暦一一（一七六一）年十月に建立された福井県最古の芭蕉句碑である芭蕉翁鐘塚（後注参照）が建つ）に参詣して詠んだ句とされる。「奥の細道」には採られていない。

中秋の夜は敦賀にとまりぬ。雨降（ふり）ければ

月いづく鐘はしづめる海の底

おなじ夜あるじの物語に、此海に釣鐘のしづみて侍るを、

國守（ノカミ）の海士（アマ）を入（いれ）てたづねさせ給へど、

龍頭（りやうづ）のさかさまに落入（おちいり）て、引きあぐべき便（たより）もなしと聞（きき）て

月いづく鐘はしづみて海の底

［やぶちゃん注：第一句目は「俳諧草庵集」（句空編・元禄十三年自序）の、第二句目は「俳諧四幅対」の句形。

「俳諧草庵集」には、

敦賀の驛の屏風に侍り、北國行脚の時の吟なるべし

という注記があるとする。この句を認めた（真蹟でなくてはこうは書くまい）屏風が敦賀

宿にあるのを句空は実見したということであろう。「荊口句帳」には、

金が崎雨
月いつく鐘ハ沈める海の底

という前書が附されてある。「金が崎」は「かながさき」とも「かねがさき」とも読み、古跡金ヶ崎城で知られる、敦賀市北東部の金ヶ崎町。この城は別名、敦賀城とも呼ばれ、敦賀湾に突き出した海抜八十六メートルの小高い丘（金ヶ崎山）に築かれた山塞であった。源平合戦の折り、平通盛が南下する木曾義仲を防戦するため、ここに城を築いたのが最初と伝えられる。また同城跡の麓には足利氏と新田義貞の戦いで城の陥落とともに捕縛された恒良親王と、新田義顕とともに自害した尊良親王を祀った金崎宮（かねがさきぐう）がある。その後も戦国史上有名な織田信長の撤退戦である金ヶ崎の戦い（元亀元（一五七〇）年に起きた織田信長と朝倉義景との戦闘の一つ）でも知られる戦跡である（ここはウイキの「金ヶ崎城」とそのリンク先に拠った）。

ここに示された沈鐘伝説とここの句碑が「芭蕉翁鐘塚」と呼ばれる所以は、先に示した通り、南北朝の延元元（一三三六）年に新田義貞らの南朝軍が後醍醐天皇皇子恒良親王・尊良親王を奉じて北陸路を下って金ヶ崎城に入ったものの、ここで足利軍との戦いに破れたため、義貞は義顕にその場を任せて脱出、杣山城から彼らの救出を試みたが失敗、遂に兵糧尽き、弱冠二十歳の若大将義顕は城に火を放って、尊良親王及び三百余人の兵とともに自害した（恒良親王は捕縛されて足利直義によって幽閉され、翌年に没した（毒殺されたとも言われる。この辺りはウイキの「新田義顕」に拠る）。この最期に際し、義顕は陣鐘を海に沈めたとされ、「俳諧四幅対」の前書にあるように、後に当国の国守が海に海士を入れて探らせてみたが、陣鐘は逆さまになって沈んでおり、龍頭が海底にすっかり埋まって、しまっていて引き上げることが出来なかったという伝承に基づくもの。

見えない沈鐘の海の底からの妖しい響きの夢幻音と、中秋雨夜の隠れて見えない月の光

りの眩暈景とが無限遠で共鳴する。

鬼趣好きの私としては、これ、もう少し、きゅっと来る慄然の締りがあったなら、佳句となると感ずる句である。」

＊

本日二〇一四年九月二十八日（当年の陰暦では九月五日）

元禄二年八月　十五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十八日

【その三】同じく同夜、雨の敦賀の気比の浜での吟。時間的には前の二句よりも前、昼間の景であろうが、つまらぬ句なので後に回した。

濱

月のみか雨に相撲もなかりけり

［やぶちゃん注：「ひるねの種」。「奥の細道菅菰抄附録」には『近江國長濱にて、此時觀進相撲有けるよし』と編者前書があるが、これでは琵琶湖畔の景となるので採らない（長浜には敦賀の次辺りに泊まってはいるが、この句、「芭蕉翁月一夜十五句」の中にあってのみ辛うじて生存し得る句である）。

「相撲」現代の歳時記では相撲は初秋の季語とされる。奈良・平安時代には毎年七月に宮中で相撲節会（すまいのせちえ）が行われたことによる。江戸時代は奉納相撲や地方巡業の相撲興行が盛んに行われたが、地方各地の素人衆のそれは秋祭りの頃に開催されることが多く、草相撲・宮相撲（神社の「宮」の意）などと呼ばれた。相撲のルーツである力競べは、記紀の遙か昔から、豊作祈願の祭祀や、政（まつりごと）に於ける重要な裁定に際して神前で行われた吉凶占の場などで、盛んに催された、祝祭としての神事であった。

■やぶちゃんの呟き

……芭蕉さま……我儘なあなたへの罰は……月を隠した雨だけではありませんでしたね……神々の祝祭も……なくなったのですよ。……あなたは結局、自ら、精神の孤独を選んでしまったのです……」

＊

本日二〇一四年九月二十八日（当年の陰暦では九月五日）

元禄二年八月　十五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十八日

【その三】同じく雨の敦賀の湊での仲秋無月の一句。

みなと

ふるき名の角鹿（つぬが）や戀し秋の月

［やぶちゃん注：「荊口句帳」。

「角鹿」は敦賀の古名（和銅年間（七〇八年～七一五年）に敦賀と改名された）。敦賀の湊は北陸の海路の、主に海産物の陸揚げ港としてはもとより、大陸交通の要港としても古代より栄え、北陸路陸路最初の拠点となる古い宿駅でもあった。

■やぶちゃんの呟き

正直、この「芭蕉翁月一夜十五句」の痙攣的連作をこの句まで読んでくると、芭蕉のマニアックな未練がましさが、流石に鼻について厭になってくる。これら、少なくとも敦賀に至るまでの月見待望と無月の句は研究者以外の一般の芭蕉好きの方は、知らない方がましな部類に属する、という気が強くしてくる。］

＊

本日二〇一四年九月二十九日（当年の陰暦では九月六日）

元禄二年八月　十六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十九日

【その一】この日は、前夜とうって変わって天気晴朗（伊勢長島の天候ではあるが、当時そこにいた曾良の日記にも快晴とある）となり、例の敦賀の廻船問屋天屋五郎右衛門の接待で、敦賀湾北西岸にある種（いろ）の浜に舟を走らせ、一日（いちじつ）、遊んだ（この事実は以下に出すように「奥の細道」に出る）。

いろの濱に誘引（いざなは）れて

小萩ちれますほの小貝小盃（さかづき）

［やぶちゃん注：「薦獅子集（こもじししゅう）」（巴水編・元禄六年自序）。「俳諧四幅対」には、

色濱泛舟（うかぶ）

（色の濱に舟を泛ぶと前書する。

「ますほの小貝」貝類収集家の間では斧足綱マルスダレガイ目チドリマスオガイ科チドリマスオガイ *Donacilla picta* に同定されている。殻長は約一・一センチメートル、殻高七ミリ、殻幅四ミリメートル。殻は小さく卵型三角形で殻は大きさに対して比較的厚く硬い。前背縁は後背縁より長く，殻頂は後方に寄り、個体によっては殻頂部周辺がかなり明るい桃色を帯びている。腹縁はゆるやかに彎曲する。殻頂下内面には大きな弾体受けを有し、それを挟んで強い歯がある。外套線は弯入する。潮下帯の砂地に棲息する。いろの浜に打ち上がっているか？　我々収集家を侮ってはいけない。**Shellsfukui** 氏のブログ「福井の打上げ貝」の「チドリマスオガイ」をご覧あれ。太平洋側は相模湾、日本海側は福井が北限

であるから、芭蕉は「奥の細道」の旅では、ここで初めてこの貝を目にした。グーグル画像検索「*Donacilla picta*」。

詠まれたのは本文に出るいろの浜近在の本隆寺（現在の敦賀市色浜（いろがはま）にある法華宗の寺院）での茶席と後座の酒食の宴であるが、句のイメージは小貝散る浜の野点（のだて）のそれである（本隆寺は現在の海岸線である色浜海水浴場からは凡そ九十メートル近く離れている）。一句のもとは西行の「山家集」に載る当地で詠んだとされる（但し、西行が越前に来たという事実は知られていない）知られた、

潮染むるますほの小貝拾ふとて色の濱とは言ふにはあるらん

で、本歌は続く二句の本歌でもある。なお、本歌のロケーションを事実に即して浜から離れた本隆寺に馬鹿正直に設定すると、句のイメージが著しく委縮するので注意されたい。有意に海から離れた寺の庭に散った萩の花に小貝が混じるはずがないことをいちいち注意しなくてはならないような評釈、がっちがちの国土地理院みたいな評釈（ここまでで大分お世話になっているので誰とは敢えて言わない）は、真正の俳句の鑑賞とは言えないと私は思っている。

この句、当初（土芳自筆「赤冊子草稿」・宝永五～六（一七〇八～〇九）年稿等）から後に出す「奥の細道」に載る「浪の間や小貝にまじる萩の塵」という句の初案かとされているが（山本健吉氏の「芭蕉全句」には同行していた等栽が寺に残した句文にこの句が認められてあるとある。これは以下に見るように「奥の細道」に載る事実である）、山本氏も述べておられる通り、私も別案と採る。山本氏は『小萩・小貝・小盃と可憐なものを並べ立てて、「こ」の頭韻とi音の脚韻とを重ねて、すこぶるリズミカルである。その句のリズムに乗るかのように「小萩ちれ」と、小萩へ言いかけるような発想をもっている。小貝はまた、小盃をも連想させる。小貝は浜、小萩は庭、小盃は床の上ながら、離れ離れ三つの景物が作者の脳裏で一つになり、種の浜の秋景色を描き出す』と優れた評釈をなされておら

れる。私は軽みの句ながら、このいろの浜で作られた本句を含む以下四句は「奥の細道」の最後の旅のぼろぼろの駝鳥みたような句の中にあって、流れ着いた小貝、散った小萩のごとき、可憐な佳句であると思う。

本句のみ、「奥の細道」には採られていない。可哀そうなので、ここで最後に「奥の細道」のいろの浜の段を引いて、本句を賞したい。

＊

十六日空晴たれはますほの小貝ひろ
はんと種の濱に舟を走ス海上七
里あり天屋何某と云もの破籠さゝ
へなとこまやかにしたゝめさせ僕あ
また舟にとりのせて追風時の間に
吹付ぬ濱はわつかなる蜑の小家
にて侘しき法華寺有爰にちや
をのみ酒をあたゝめて夕暮のさひしさ
感に堪たり

さひしさやすまに勝たる濱の秋
波の間や小貝にましる萩の塵

其日の日記等栽に筆をとらせて
寺に殘ス

＊

「走ス」従来、「はす」と読みならわしている。

「海上七里あり」「海上」は「かいしやう（かいしょう）」と読む。二七・四九キロメートル。実際は海上三里（約一一・七八キロメートル）という、と伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の「奥の細道」「敦賀」の段の注にはある。地図上でシュミレーションしてみると、十キロメートル強ある。同注に『現在は敦賀原発建設時に工事用の陸路が建設されている』とある。

現代のいろの浜の彼方には、チェレンコフの業火の蒼白い色が見えるのである。

「天屋何某」「てんやなにがし」と読む。既に示した敦賀の廻船問屋主人天屋五郎右衛門。

「破籠」「わりご」と読む。薄い檜の白木を曲げ物に作った弁当箱。

「小竹筒」「ささえ」と読む。竹筒を利用した携帯用の酒入れ。

「僕」「しもべ」と読む。

「追風時の間に吹き付きぬ」「源氏物語」の「須磨」へ辿りつく場面、『道すがら、面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗りたまひぬ。日長きころなれば、追風さへ添ひて、まだ申の時ばかりに、かの浦に着きたまひぬ。かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもをかしさもめづらかなり』をインスパイアして、後の「寂しさや」の句への匂いつけとする。

「わづかなる」一叢（ひとむら）の貧しげな。

「侘しき」「わづかなる海士の小家」の対句であるからと言って「もの寂しい」とか「貧素な」などと訳している見かけるが、デリカシーを欠く。「もの寂びた」ぐらいにして欲しいものだ。

「法華寺」「ほつけでら」と読んで、法華宗（ここでは日蓮宗を指している）の寺院という一般名詞。既に説明した本隆寺。」

＊

本日二〇一四年九月二十九日（当年の陰暦では九月六日）

元禄二年八月　十六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十九日

【その二】同じく、いろの浜本隆寺での句。

種（いろ）の濱

衣着（ころも）て小貝拾はんいろの月

［やぶちゃん注：「荊口句帳」。衣は僧衣、墨染の衣でまさに西行の面影である。「月」は十六夜（いざよい）の月。前日は雨に祟られて、無念の思い――というより私は慙愧の念と言いたいのだが――をした芭蕉は、このいろの浜で十六夜の名月を賞翫し得たのであった。そうしたある種の魂の爽快感が、これら四句の名吟を生んだとも言えよう。これが「奥の細道」のコーダであったと私は思っている。……因みにかの曾良もまさにこの七日前の八月九日に、この本隆寺に泊まっていたのである。……］

＊

本日二〇一四年九月二十九日（当年の陰暦では九月六日）

元禄二年八月　十六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十九日

【その三】同じく、いろの浜本隆寺での句。「奥の細道」の同段に次の「寂しさや」句の後に収録された。

ますほの小貝ひろはんと、種（いろ）の島に舟のり出（いで）たり。法花寺（ほっけでら）にあがりて酒のむ

浪の間（ま）や小貝にまじる萩の塵

［やぶちゃん注：「類柑子」（其角著・宝永四（一七〇七）年跋）から。「種の島」の「島」はママ。

私は「塵」は芭蕉自身だと思う。誰もそうは言っていないけれども、それは老残の彼である……されど……花は残るべし……だ。……」

＊

本日二〇一四年九月二十九日（当年の陰暦では九月六日）

元禄二年八月　十六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年九月二十九日

【その四】同じく、いろの浜本隆寺での句。「奥の細道」の同段に第一に収録された。この句順は実に計算されていて素晴らしい。

寂しさや須磨にかちたる濱の秋

越前いろの濱にて

寂しさや須磨にかちたるうらの秋

［やぶちゃん注：第一句目は「奥の細道」の、第二句目は「初蟬」（風国編・元禄九年刊）の句形。

言わずもがな、「源氏物語」「須磨」の、

須磨には、いとど心盡くしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平中納言の、「關吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目を覺まして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴をすこしかき鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、彈きさしたまひて、

戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は

思ふ方より風や吹くらむ

と歌ひたまへるに、人びとおどろきて、めでたうおぼゆるに、忍ばれで、あいなう起きゐつつ、鼻を忍びやかにかみわたす。

のシークエンスを受けはする。しかし彼の「寂しさ」は光などよりも、もっと多層的で神経症的である。ここにあるのは芭蕉という、彼自身にとっても不可解な孤独者の悲哀と寂寥を孕んだ「寂しさ」である。これは正常なる人間の、魂の平穏をかろうじて保っているところの極北の精神――孤高の蕊（ずい）そのものである、と私は思うのである。そこを読み解けない者は――遂に――芭蕉を捉え損なうであろう――」

＊

本日二〇一四年十月　三日（当年の陰暦では九月十日）

元禄二年八月二十日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月　三日

あまり理解されているとは思われないので最初に述べおくが、芭蕉が「奥の細道」の旅の終点である大垣に到着した確かな日時は、現在でも特定されておらず、八月下旬という如何にも大まかな推定がなされているに過ぎない（諸家の研究では八月二十八日（一六八九年十月十一日）までには大垣入りしたとされるのみ）。なお、ここからは大垣から迎えに来ていた門人忌部（八十村）路通が案内役となっおり、やはり独り旅ではない（因みに路通は曾良決定以前の「奥の細道」の有力な同行候補であったと考えられている）。優れた「奥の細道」追体験サイトである尺取虫氏の「奥の細道歩き旅」の「敦賀～木之本」では、芭蕉は敦賀を十八日か十九日に旅立ったものと考えられるとあり（私もそれを支持する。芭蕉が「奥の細道」の旅の最後の感懐を、だらだらと二十七、八日くんだりまで延ばしたとは到底、考えられぬからである）、また、敦賀―大垣間は凡そ八十キロメートルの距離で、従来の芭蕉のペースならば一泊二日の行程ではあるが、『芭蕉は「駒にたすけられて」と書いているように、旅も終わりに近づき疲れもたまっていたのだろう。木之本、春照で宿泊する』二泊三日の『ゆったりとした行程にしたようだ』と記しておられることから、今回、私は尺取虫氏に全面的に賛同し、芭蕉の敦賀発を十八日とし、本日二十日を芭蕉大垣入りと特定することとした。なお、この間に現存する句作はない。というよりも現在知られる発句は実は、ずっと後の八月二十八日（公開予定十月十一日）の前書クレジットを持つ「鳩の聲身に入（しみ）わたる岩戸哉」まで、ない（当然、私の「奥の細道」シンクロニティの発句も、そこまで永くお預けとなる）。

以下、通行本の「奥の細道」の最終段すべてを示す（最後の一文と最終句「蛤の蛤のふたみにわかれ行秋（ゆく）ぞ」は当該日たる九月六日（公開予定十月十八日）で再度示して注を附す）。

露通も此みなとまで出むかひて、みのゝ國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より來り合、越人も馬をとばせて、如行が家に入集る。前川子・荊口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び、且いたはる。

［やぶちゃん注：「此みなと」敦賀の湊。

「越人も馬をとばせて」蕉門の越智越人は名古屋の染物業を営む商人であった。

「如行」近藤氏。通称は源大夫。元大垣藩士。大垣の最初の蕉門門人として当地では重きを成した。芭蕉は先行する「野ざらし紀行」の旅の際にも彼の元に立ち寄っている。伊藤洋氏の「芭蕉ＤＢ」の「近藤如行」によれば、『如行は早くに武士を捨て、僧になって師匠同様旅をした』とある。

「前川子」津田前川。大垣藩士。大垣蕉門の一人。

「荊口父子」「荊口父」とは宮崎太左衛門のことで、荊口は彼の俳号。大垣藩御広間番の百石扶持藩士であった。「子」は太左衛門の此筋・千川・文鳥と号した三人の息子たちを指し、一家で蕉門に入っていた。

ここより後の語注は後日再掲の際に注する。

以下、自筆本を示す。

＊

露通もこのみなと迄出むかひてみのゝ
国へと伴ふ駒をはやめて大垣の
庄に入は曽良も伊勢よりかけ合
越人も馬をとはせて如行か家に
入集る前川子荊口父子其外
したしき人々日夜とふらひてふた
たひ蘇生のものにあふかことく且

の

よろこひ且なけきて旅ものうさ

も

いまたやまさるに長月六日になれは

伊勢の遷宮おかまんと又ふねに

乗て

蛤のふたみに別行　秋　そ

＊

■異同

（異同は○が本文、●が現在人口に膾炙する一般的な本文）

○駒をはやめて　→　●駒に助けられて

○かけ合　　→　●來たり合ひ

○ふたたひ蘇生のものにあふかことく

　←

●蘇生の者に會ふがごとく

○且よろこひ且なけきて旅のものうさもいまたやまさるに

　←

●且悦び、且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに

■やぶちゃんの呟き

通行本は見ての通り、クライマックスを演出して、ブレイクしてあるのだが、私は実はこの自筆本の方が遙かに優れた演出であると思う。

現在知られるそれは演劇的であるのに対し、文を区切らずに連続した自筆本はある意味、映像芸術的な余韻を与えて余りあると強く感じるからである。

今回のシンクロニティで私は、芭蕉にとっての「奥の細道」の旅は、文学的虚構的であ

る以前に能楽的戯曲的でありし、しかもそれ以上に音楽的でなくてはならないと感じているからである。

交響詩「奥の細道」のコーダは、ぶつぶつと切れたり、ざっと幕が引かれたりしては、実は興を殺ぐのだ。

スラーの音符と、ゆっくりとしたフェイド・アウトで、その幕は閉じられねばならぬ――」

＊

本日二〇一四年十月　四日（当年の陰暦では九月十一日）

元禄二年八月二十一日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月　四日

実質上の「奥の細道」の旅を大垣で終えた芭蕉は同地の大垣藩士近藤如行（貞享元（一六八四）年に蕉門に入った）の邸に滞在していた。本句はそこでの休養中、この二十一日頃に作られたとされる（ここの同定は新潮日本古典集成「芭蕉句集」の今栄蔵氏注に拠った）。

胡蝶（こてふ）にもならで秋ふる菜虫哉

［やぶちゃん注：「己が光」（車庸編・元禄五年自序）より。如行はこの句に、

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉
　たえは淋しき茄子（なすび）一もと

と付け、さらに、

　かくからびたる吟聲ありて、我下（しも）の句を次（つぐ）

と附記している。一種の『自己謙退』（今栄蔵）、『自身の境涯への感慨』（山本健吉）であると同時に、私にはまた一方、この「胡蝶」は「荘子」の荘周夢に胡蝶となるのそれと読むように仕組まれており、芭蕉の俳諧への執心を示す自己韜晦の句のように読めるのであるが、如何？］

＊

本日二〇一四年十月　十一日（当年の陰暦では九月十八日）

　元禄二年八月二十八日

はグレゴリオ暦では

　一六八九年十月　十一日

この日、芭蕉は中山道の宿駅とし知られた美濃國不破郡赤坂町（現在の大垣市赤坂町）にある金生山（きんしょうざん）山頂の真言宗金生山明星輪寺宝光院を訪ねている。同寺は明暦三（一六五七）年に大垣藩藩主戸田氏信によって戸田氏祈禱所とされて大いに賑わっていた。境内には奇岩怪石多く、本堂である奥ノ院は洞窟を内陣に取り込んだ造りとなっていて、そこに役行者作と伝える虚空蔵菩薩を本尊として祀っている。

　　赤坂の虚空蔵にて

　　八月廿八日　奥の院

鳩の聲身に入（しみ）わたる岩戸哉

［やぶちゃん注：「漆嶋」（白川編・宝永三（一七〇六）年自序）に載る。幽邃寂寞の山寺の鳩の「しみわたる／岩戸」に芭蕉が山寺の〓の静寂をフラッシュ・バックさせていることは間違いない。山本健吉氏は本句を藤原俊成の名歌「夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」のインスパイアとされ、『身に沁む鶉の声は、俊成の名歌で一般化した。芭蕉がここで鶉を鳩に変えたところが新しみといえば新しみであろう』と評しておられるが、果たしてそんなもんか？　じゃあ、何故、「閑かさや」の評釈で鶉を〓に変えたと評されないのであろうか？　凡愚な私には訳がわからないね。］

＊

本日二〇一四年十月十六日（当年の陰暦では九月二十三日）

元禄二年九月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月十六日

【その一】大垣蕉門の重鎮であった大垣藩家老格戸田権大夫戸田恕水の「恕水（如水）日記」（元禄二年九月四日と五日の日記）の四日の条に『頃日伊吹眺望といふ題にて』という前書で第二句目が載る。大垣藩士高岡三郎兵衛斜嶺（しゃれい）邸での句である。

戸を開けば西の山有（あり）、いぶきといふ。

花にもよらず、雪にもよらず、只これ孤山の徳あり

其（その）まゝよ月もたのまじ伊吹山

其のまゝに月もたのまじ伊吹山

［やぶちゃん注：第一句目は真蹟詠草の句形。第二句目は「笈日記」のもの（そこには斜嶺亭と前書の前に角書する。これが初案と思われる。

土地と主人への挨拶句の中に孤高の芭蕉自身をも秘かに含ませている感じがする。］

＊

本日二〇一四年十月十六日（当年の陰暦では九月二十三日）

元禄二年九月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月十六日

【その二】同日の前句に示した大垣藩家老格戸田権大夫戸田恕水の大垣室町の別荘に招かれての句。「恕水（如水）日記」四日の条にも載る。

恕水亭別墅（じょすいべつしょ）にて即興

こもり居て木の實草のみひろはゞや

［やぶちゃん注：「後の旅」（如行編・元禄八年刊）。そこではこれに恕水が、

こもり居て木の實草のみひろはゞや

御影（みかげ）たづねん松の戸の月

と付けており、表六句まで続けているが、『家中士中に先約有レ之故、暮時より歸申候』とあって、ここまでで止めたことが分かる（山本健吉「芭蕉全句」に拠る）。「家中士中に先約有レ之」は次の句を参照。芭蕉の側の都合である。

恕水の下屋敷の閑静なさまを言祝いだ一見、外連味のない句柄であるが、私はこの「木の實草のみ」を「ひろ」うて食い、「こもり居」たいという芭蕉は、やはり遁世の伯夷・叔斉への自身の憧憬を孕ませていると見る。どこかこの前後、芭蕉の漠然とした他者に対する――のみならず自己存在に対してすら――何か曰く言い難い幽かな忌避感覚が、彼の身体から匂い出ているように思われてならないのだが。……」

＊

本日二〇一四年十月十六日（当年の陰暦では九月二十三日）

元禄二年九月　四日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月十六日

【その三】同日、恕水亭を辞した後、大垣藩士浅井左柳（さりゅう）亭に十二名が会合、歌仙が巻かれた、その発句。前日の三日に伊勢長島から戻って久々に師弟再会を果たした曾良の日記の四日の条にも『源兵へ會ニテ行』とあり、この「源兵」は浅井左柳のことであることからも日が確定する。

左柳亭

はやはやさけ九日（くにち）もちかし菊の花

はやう咲（さけ）九日も近し宿の菊

有人の方にて

はやくさけ九日も近し菊の花

［やぶちゃん注：第一句は「笈日記」の句形であるが、基準底本とする岩波版「芭蕉俳句集」では「九日」に「ここのか」のルビを振る。採らない。第二句目は「桃の白実」（車蓋編・天明八（一七八八）年刊）の、第三句目は「蕉翁句集」（土芳編・宝永六（一七〇九）年成立）の句形。

言わずもがなであるが、五日後の重陽の節句をいう。左柳は（山本健吉氏は二句目を初案とするのでそれを採る）、

はやう咲九日も近し宿の菊

心うきたつ宵月の露

とあり、山本氏はこの脇の「宵月」がこの歌仙の巻かれたおよその時刻を示していると記しておられる。因みにこの日はまさに宵の始まりである午後六時過ぎに月が沈んでいるから、まさにその「露」余光ということになろうか。

しかしこの菊花への命令形は、芭蕉自身への新たな旅立ちの指嗾（しそう）に他ならない。事実、芭蕉はこの二日後の九月六日、伊勢へ向けて旅立つのであった。

私は第一句の「はやはやさけ」を断然、押す。」

＊

本日二〇一四年十月十七日（当年の陰暦では九月二十四日）

元禄二年九月　五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月十七日

【その一】この日辺りに、芭蕉の旅宿に前年夏の「笈の小文」の旅で入門したばかりの美濃は関（現在の岐阜県関市）在の広瀬素牛（そぎゅう）が訪ねてきた。素牛は後の独歩奇人の維然坊（いねんぼう）である（広瀬源之丞。武田信玄家臣広瀬郷左衛門子孫で関の酒造家岩本屋の三男であった）。その彼に特に託した一句がこれである。

關の住、素牛何がし、大垣の旅店を訪（と）はれ侍りしに、

かの藤代御坂（ふじしろみさか）と言ひけん花は宗祇の昔に匂ひて

藤の實（み）は俳諧にせん花の跡

［やぶちゃん注：「藤の実」（素牛編・元禄七年跋）より。

「藤代御坂と言ひけん花は」とは宗祇の連歌の発句、

關越えて爰（ここ）も藤しろみさか哉

を指す。「藤代御坂」は「万葉集」の歌枕の紀州（現在の和歌山県海南市）の藤代御坂で、宗祇のこの句は芭蕉の「曠野」に『美濃國關といふ所の山寺に藤の咲（さき）たるを見て吟じ給ふとや』とある通り、素牛の故郷でもある。

……美しく高貴な藤の花は華麗に師宗祇さまが古えに連歌になされた――役立たずの私はそれに相応しく役立たずの無粋なる和歌から見捨てられたところの、藤の実をこそ、俳諧の花――老いの花――としよう……

というのである。

無論、これは師芭蕉からの素牛への俳諧の核心を遠心的に示唆したところの、一種の教外別伝の句であった。」

＊

本日二〇一四年十月十七日（当年の陰暦では九月二十四日）

元禄二年九月　五日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月十七日

【その二】翌日の伊勢参宮に出発に旅立つに当たって舟が用意されたが、これを世話したのは大垣の俳人谷木因（たにぼくいん）であった。木因は大垣杭瀬川畔で船問屋を生業（なりわい）とする裕福な商人で、北村季吟の門に入って芭蕉とは同門、岐阜蕉門の隆盛にも功あった古馴染みである。以下はその彼の邸宅での一句。出立前夜――「奥の細道」掉尾の前――として、ここに配しておくこととする。

木因亭

かくれ家（が）や月と菊とに田三反（さんたん）

［やぶちゃん注：「笈日記」。

無論、船問屋の木因が田を耕していた訳ではない。富裕乍らも質素倹約を旨とする商人として閑静なる屋敷域を保っている主人の風雅の生きざまを比喩し讃した挨拶句である。

大島蓼太は「芭蕉句解」（宝暦九（一七五九）年刊）に本句を取り上げ、

「山居せハ上田三反味噌八斗小者ひとりに水の能所」と一休禪師詠し給へり。木因ハ美濃大垣の住なり。季吟師の門人にして、芭蕉と友としよし

と記している。山本健吉氏は「芭蕉全句」でこれを引いた後、『顕原退蔵は、昔は上田三反あれば簡素な暮しいは充分としたものだろうと言う』と引き、最後に『一休の歌ではないが水もよく隠棲には格好の住居だという含みがある』と評されてある。菊花にまさにかの陶淵明をも通わせて、木因も受くるに嬉しい句であったに違いない。」

＊

本日二〇一四年十月十八日（当年の陰暦では九月二十五日）

元禄二年九月　六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月十八日

この日、芭蕉は伊勢参宮へと大垣を発った（午前八時頃のことであった）――それと同時に凡そ百五十日になんなんとする「奥の細道」の旅が――終わった――

蛤のふたみへわかれ行秋ぞ

露通も此みなとまで出むかひて、みのゝ國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より來り合、越人も馬をとばせて、如行が家に入集る。前川子・荊口父子、其外したしき人々日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び、且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

［やぶちゃん注：第一句目は九月二十二日附杉山杉風宛書簡の句形で、これが初案と思われる（これは安東次男「古典を読む　おくの細道」に基づく）。第二句目は「奥の細道」（本文とも）。

このルートは揖斐川を下って河口の、蛤を名産とする桑名に出る。蛤はまずそこでしっくりとくる。

しかも、これは遠く旅立ちの、かの、

行春や鳥啼魚の目は泪

と響き合っていることにも容易に気づく。――行く春の日に、『千住と云ふ所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ』という幕開きに対して、行く秋の大垣の湊から『又舟にのりて』漂泊の新たな旅路を辿る――という連続性を演出するとともに、「奥の細道」という壮大華麗な絵巻の美しい額縁をも成しているのである。

本句の下敷きは、西行の「夫木和歌抄」（藤原長清撰になる私撰和歌集）の続国歌大観番号八三八二番歌で、「山家集」にも所収する（底本は岩波日本古典文学大系を用いた）、

伊勢の二見の浦に、さる様なる女の童どもの集まりて、
わざとのこととおぼしく、蛤をとり集めけるを、
いふ甲斐なき蜑人こそあらめ、うたてきことなりと申しければ、
貝合に京より人の申させ給ひたれば、選りつつ採るなりと申しけるに
今ぞ知る二見の浦のはまぐりを貝合せとて覆ふなりけり

である。通釈する。

――今こそ私は知った……侘しい二見の浦のがんぜない卑賤の少女たちが懸命に拾い集めているはまぐりを……我らは貝合わせしょと言ふて覆っては遊び暮らしていたのであったのだなあ……

この歌に現われたものは、単純な女児の貝合わせとしての遊び道具ではなく、中に彩色画を描いた本格的な婚姻儀礼用に作製された貝覆いと考えてよい。

さればこそ、この一句は大垣連衆への留別吟であると同時に、彼らへの愛惜の恋句でもあるという仕掛けに気づく。

一時の別れは何時か必ず貝合わせの貝のように、いやさ、蓋と身のように本来あるべき

自然として堅く結ばれるのだ――という謂わば――離別即邂逅――という禅問答のようなものなのだと私は思うのである……

以下、自筆本を示す。

＊

露通もこのみなと迄出むかひてみのゝ
国へと伴ふ駒をはやめて大垣の
庄に入は曽良も伊勢よりかけ合
越人も馬をとはせて如行か家に
入集る前川子荊口父子其外
したしき人々日夜とふらひてふた
たひ蘇生のものにあふかことく且
の
よろこひ且なけきて旅ものうさ
も
いまたやまさるに長月六日になれは
伊勢の遷宮おかまんと又ふねに
乗て

蛤のふたみに別行　秋　そ

＊

■やぶちゃんの呟き

私とともにこの「奥の細道」を今年、一緒に辿って呉れた奇特なあなた――あなたは永遠に――私の人生の道連れである――」

＊　＊　＊

本日二〇一四年十月十八日（当年の陰暦では九月二十五日）

元禄二年九月　六日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月十八日

以下、「奥の細道」の**旅のおまけ**である。この日、芭蕉は曾良らとともに伊勢神宮遷宮参拝の旅に登ったのであるが、この日から三泊、曾良の伯父深泉良成が第四世住持をしていた、三重県長島（現在の桑名市長島町西外面）にある真言宗大智院（時の長島藩主松平良尚の祈願寺）に投宿している。

伊勢の國長島大智院に信宿ス

うきわれをさびしがらせよ秋の寺

［やぶちゃん注：真蹟色紙。この句、後に推敲されて詠み変えられて、元禄三年、あたかも幻住庵で詠じられたかのように伝えて、

憂きわれを寂しがらせよ閑古鳥

と元禄四年四月の「嵯峨日記」に載って人口に膾炙するが、実は原句はあくまで「奥の細道」の余韻の中で詠まれた本句であったことを知る人はあまり多いとは思われない。ただ、芭蕉自身、そこに『ある寺に獨り居て云ひし句』と由来を記しており、また「幻住庵記」の初稿と推定されるものの中にも『かつこどりわれをさびしがらせよなどそゞろに興じて』とあって（この二箇所の引用は山本健吉氏の「芭蕉全句」の「うきわれを淋しがらせよかんこどり（猿蓑）」の評釈からの孫引き）、芭蕉が初期形のあくまで静寂な「秋の寺」に「うきわれをさびしがらせよ」という事大主義的な命令形をぶつけた失敗を気にして改案を重ねた様子がつぶさに見てとれると言えよう。山本氏によれば「うきわれをさびしがらせよ」

とは、『芭蕉がしばしば、孤独の境涯を嚙みしめるたびに口頭に乗せた愛誦句で』、これは西行の、

とふ人も思ひたえたる山里の淋しさなくば住み憂からまし

に拠ったものであるとし、改作の下の句「かんこどり」（閑古鳥）の方は、やはり西行の、

山里にたれをまたこは呼子鳥（よぶこどり）ひとりのみこそ住まんと思ふに

に導かれたものであるとある。そうして『世を憂しと観ずることが、芭蕉を孤独の境涯に住せしめているのだが、独りでありながらなお憂しと観ずる自分に、その憂さを脱却するきっかけとして、本当の淋しさを与えてくれというのである』と評されておられる。至言と言えよう。」

＊

本日二〇一四年十月二十五日（当年の陰暦では閏九月二日）

元禄二年九月　十三日

はグレゴリオ暦では

一六八九年十月二十五日

この日、芭蕉は伊勢神宮遷宮式を拝んだ。

内宮はことおさまりて、下宮のせんぐうおがみ侍り

たふとさにみなおしあひぬ御遷宮

［やぶちゃん注：「泊船集」。前書の「おさまりて」「おがみ」はママ。元禄二年は二十一年目毎に木曽の檜で新殿を建てて神座（かみくら）を遷す式年遷宮の年に当たっており、この九月十日に内宮の、この十三日に外宮の遷宮式が行われた。芭蕉は内宮のそれには間に合わず、この十三日に内宮を参拝した後、午後二時頃に外宮の遷宮式を参拝している。この何事も語らぬ句は実は西行が伊勢神宮を参拝した折りの、

何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる

という神聖感を遠くインスパイアしたものであることは言を俟たない。］

二〇一四年「奥の細道」シンクロニティの記録　　注　●藪野唯至　　完